

---

# ユトレア年代記

秋山らあれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユトレア年代記

### 【Nコード】

N4934E

### 【作者名】

秋山らあれ

### 【あらすじ】

「来世では、きつと添い遂げよう……」敵対する男女の間で交わされる、身を切られる様な悲しい約束。唯一人の女の為に、故国を裏切り大罪人にまで身を落とす王子の半生記。

## 序

少女はハーグシュの王女であつた。

少年はユトレアの皇太子であつた。

初めて顔を会わせたのは、まだ二人の婚約が正式に整う前の非公式の席での事であつた。

この時、少女は十二、少年は十五であつた。

その後間もなく婚約は結ばれ、それより四年の後に華々しく婚儀が執り行われる予定となつていた。

そう、四年後に婚儀が執り行われる筈であつたのだ。

## 第一章 終焉と苦悩、そして……（１）

五年に渡る戦<sup>いくさ</sup>が、その日終わった。

ユトレア王国とハーグシュ王国、隣接する両国間の戦いであった。ハーグシュはユトレアに敗れ、国王と皇太子は元より、その他の王族男子達に主立った有力貴族達も悉く処刑された。王家の女達は当然の如く囚われの身となった。

ユトレア王国民達は一様に終戦を祝った。心身共に疲弊していたが、戦が終わった以上これ以上状況の悪くなる事は無いと貧しい者達は考えた。

ハーグシュ王国の民達も又、命と生活が保障されると取りあえず胸を撫で下ろした。これ以上戦の為に飢えるのは沢山だと、誰もが思ったのだ。

ハーグシュ王妃は囚われの身となつて後ユトレアへ護送され、宮殿の一室に監禁されたその日の晩に敷布を引き裂き縊<sup>よ</sup>つて綱を作ると、それを寝台の天蓋と自らの首に絡めて縊れて死んだ。その事実は、まだ他の囚われの女達へは報されていない。

セレーディラは窓辺に佇んでいた。外を見下ろすと相変わらず衛兵達がこちらを見上げている。彼女はもう長い事、そうして窓辺に佇んでいた。昨日も一昨日も、そうして恐ろしく進みの遅い時をやり過ごした。

父である国王も五人の兄達も皆、首を落とされた。今ではセレーディラがハーグシュウ王の唯一残された子であった。セレーディラは思い悩む。己は生きるべきなのか、死を選ぶべきなのか……。誇りを捨て戦利品としての立場に甘んじるべきか、誇り高きハーグシュウ王女として自害すべきか……。ユトレアの侍女達かしずきに始終監視されてはいたが、死のうと思えば出来ない事も無い筈である。

誰かが部屋に入って来た様だったが、セレーディラは振り返りもしなかった。大方監視の交代に訪れた侍女であろうと思ったのだ。しかし床を打つ靴音と剣鞘の鳴る音に、それがどうやら男であるらしい事をセレーディラは覚るさと。硬質な靴音がセレーディラの背後で止んだ。

「ご機嫌は如何か？ セレーディラ姫」

非常に素っ気無い口振りで機嫌を尋ねられ、セレーディラはゆっくりとその声の主を振り返った。そこには漆黒の髪に漆黒の双眸の青年が立っていた。見るからに剣を扱う者らしい締った体付きをしている。セレーディラに対し貴婦人への礼を見せるでも無く、にこりもしない表情は、整っていただけに酷く冷たく見えた。セレーディラは再び視線を窗外へと移す。

「わたくしの機嫌が良いと思われませんか？ 黒將軍様」

「思わぬ」

即座に率直な答えいらいが返された。暫しの沈黙を置いて黒將軍と呼ばれた青年は再び口を開いた。

「報告があつて来た。ユトレアはそなたを正式に皇太子妃として迎える事を決定した」

「七年前に交わされた婚約を違えずに、わたくしを娶って下さるのですか？ ラドキース様」

セレーディアの低く澄み渡った静かな声が、痛烈な皮肉を言葉にした。

「今となつてはわたくしが唯一のハーグシュ王の子ですものね．．．。それが一番王国民を刺激せずにハーグシュを手に入れる方法なのでしょうね、貴方方にとっては．．．．」

「如何にも．．．．」

皇太子の声も低く抑えられたものであった。突如、背を向けていたセレーディアの緩やかに波打つ金褐色の髪が揺れ、押し殺したかの様な笑い声が起こった。

「覚えておられますか？ ラドキース様、七年前のあの日、貴方がわたくしに仰った事」

「そなたを迎えた暁には、必ず大切にすると言った」

考える間も無くラドキースは答えた。

「その言葉、今一度そなたに贈ろう」

セレーディアが再び小さな笑い声を立てた。

「大切にして下さいのですか？ 優しいお言葉です事．．．．。でも愛しては下さいますまい？」

ゆるりと振り返るセレーディアの澄んだ青空の瞳がユトレア皇太子を捉える。

「貴方は、貴方とこのユトレアを、死ぬ程に憎む女を愛する事など出来ますまい」

「分からぬ．．、可能かもしれぬし無理かもしれぬ、努力はしよう」

ラドキースは寸分も表情を違えずに答えた。

「貴方はわたくしにとって初恋でした。幼い頃に恋した貴方が今は死ぬ程憎い．．．．。何の因果でしょう．．．．。わたくしは前の生で余程の悪行を行ったのでしょうか．．．．。その酬いがこれでしょうか．．．．。」

セレーディラの頬に涙が一筋流れた。それを隠すかの様に囚われの姫は、再びラドキースに背を向けた。

ラドキースは、初めてこのハーグシュの王女に会った日の事を想った。屈託の無い生き生きとしていた少女を想った。澄んだ空色の大きな瞳を自分へと向け、物怖じする事も無く微笑みかけて来た愛らしい少女を想った。その少女に自分は惹かれた。少女が成人した暁には、自分の元に嫁いで来るものと信じて疑わなかった。それなのに……、何が何処でどの様に壊れたのか……。些細な事から両国間の修復は効かなくなり、戦の末がこれだ。自ら率いた軍が攻め滅ぼした国の王女を、自らが娶らねばならないとは。かつて嫁いで来る日を心待ちにした少女を。今はこの自分をこれ程に憎んでいる娘を……。

「母の最後をお聞かせ願えませんか？ 殿下」  
力無い小さな声にラドキースは顔を上げた。王妃の死は、未だ王女には報されていない筈である。

「母君は健やかだ、セレーディラ姫」  
偽るラドキースに、亡国の姫は又小さく笑った。

「隠されずとも良いのです。あの誇り高き母が、父と兄達を殺され囚われの身となりながら、おめおめと生きていられる筈がありません。母の死に様をお聞かせ下さいませ、ラドキース様」

一瞬、真実を話してやるべきかとラドキースは考えた。しかし口をついたのは偽りであった。

「母君はご健在だ」  
死に様を話したりしたら、この姫も同じ死に方を選ぶのではと怖れた。

「信じません」  
セレーディラは肩を震わせた。震えを押さえようとでもしているのか、両腕で己の二の腕を掴んでいた。ラドキースは歩み寄り彼女

の腕に手を掛けた。セレーディアは幾筋もの涙を流していた。それを隠そうとラドキースの手を振り払い背を向ける。

「涙など、もうとつくに枯れ果てたと思いましたが．．．」

「そなたは食事を摂ってはあらぬそうだな？ 飢えて果てようという魂胆か？」

責めるでも案ずるでも無い淡々とした口調に、姫は首を横に振った。

「まだ分かりません。生きるが得か死ぬるが得か、まだ迷っております。わたくしは母程誇り高くはありません故．．．」

「なれば取りあえず生きる。ハーグシュの残党が決起せぬともかぎらぬ。死ぬ事はいつでも出来る」

その言葉にセレーディアは振り返り、敵国の皇太子を見上げた。涙に濡れた瞳を驚いた様に見開いて．．．．．。

「食事を．．．、届けさせよう」

そう言い残すと、皇太子は去った。

セレーディアは部屋にぽつりと取り残された。監視役の侍女の姿かしずきが無い事に初めて気付いた。数瞬の後に侍女が姿を現した。皇太子は人払いをしていたのだろう。セレーディアは張り詰めていた気が急に緩んだのか、身体から力の抜けるのを感じた。そして視界は暗転した。



## 第一章 終焉と苦悩、そして……（2）

「ユトレア王国の皇太子殿下がお越しになられます。粗相の無き様に、お持て成して差し上げるのですよ、セレーディア」

「はい、お母様」

セレーディアは母の言い付けに素直に頷いた。

すぐ上の兄と同じ歳だというユトレアの皇太子は、兄よりも幾分大人びて見えた。堅くなっていたセレーディアに、皇太子は控えめな笑顔を見せた。そして跪き貴婦人に対する最上の礼をとった。セレーディアはどきどきしながら仕来りに従って右手を皇太子へと差し伸べた。

父も五人の兄達も皆、自分を子供扱いしかなかったというのに、皇太子はセレーディアをきちんと貴婦人として扱ってくれた。

皇太子に手を引かれて庭園を散策した時、セレーディアは様々な事をこの皇太子に話して聞かせた。父と母の事、五人の兄達の事、可愛がつている真つ白な仔猫の事、他にも様々な事。そして又、様々な事を皇太子に尋ねた。皇太子は笑顔でそれらの問いに答えてくれた。

何て綺麗な顔の王子様だろうと夢見がちであった少女は思った。皇太子の黒い瞳は、まるで星の様だと思った。黒い星などあろう筈も無かるうちに、その時のセレーディアには皇太子の瞳がきらきらと輝いて見えたのである。

その皇太子が少し照れた様な表情をして、優しく囁く様に少女に

言った。

「私の妃になってくれぬか？」．．．と。

「そなたを迎えた暁には必ず大切にするから」．．．と。

セレーディラは笑顔で答えた。

「いいわ、お嫁に行つて差し上げます」．．．と。

少女はいつぺんにこの少年に恋をした。

視界がはつきりすると、そこはユトレア王城の自分に宛がわれている寝室であつた。

(．．．．夢．．．．)

セレーディラは深々と溜息を吐いた。

「気付いたか？」

深みのある低い声にセレーディラははつとする。少し離れた場所に置かれた椅子に皇太子は腰掛けていた。日は暮れかけており室内は薄暗い。夢の中の少年は微笑んでいた。そう七年前にセレーディラが出会つた少年は、あの優しい微笑みが強烈に印象に残っているというのに、再会してからまだこの皇太子の笑顔を見ていない。笑つたらどんな顔になるのだろうか．．．。セレーディラはぼんやりと考え、そして哀しくなった。

「私がそなたの寝間にいる事は許して欲しい。あの後すぐ、そなたは倒れたのではな」

(倒れた．．．)

もう幾日も水以外のものを殆ど口にしていなかったのだ、倒れたとしても不思議ではないだろう。セレーディラはのろりと起き上が

った。ラドキースは立ち上がると、寝台の脇のテーブルから杯を取り上げセレーディラに差し出した。

「滋養の薬湯だ、飲んでおくが良い」

セレーディラはラドキースを見上げ、そして目を背けた。

「結構です」

ラドキースはハーグシュの姫を暫し見詰め、やがて小さな溜息を漏らすや手にしていた薬湯の杯を徐に呷った。そして杯を脇へ置くや両手でセレーディラの両頬を捕らえ、有無を言わさぬ力で持つて彼女の唇を己のそれで塞いだ。

あまりの事にセレーディラは暴れ、幾度も拳を振り上げてラドキースを殴った。口の中に苦い液体が流れ込み、あまりの苦しさにととう彼女はそれを飲み下した。

唇を解放されるやセレーディラは激しく咳き込んだ。

「許せ」

言ってラドキースはセレーディラの背を擦ってやる。

「触らないでっ!」

叫び声と共に肌を張る音が鳴った。セレーディラの右手がラドキースの頬を打っていた。唇を震わせ、目には涙を浮かべながらラドキースを睨みつけているセレーディラに、彼は再度溜息を吐いた。

「食事を摂らぬと申すのなら、今の様に口移しで食わせてやっても良い。それを厭うなら自ら食う事だ。良いな、姫」

ラドキースは静かに言うと言と寝室から出て行った。セレーディラの口から嗚咽が漏れた。

「王女のご様子は如何でしたか? 殿下」  
皇太子ラドキースの私室を訪れるなり、ファランギスはそう尋ねた。

「良いわけが無い」

布張りの長椅子に座りテーブルの上に長い足を投げ出していたラドキースは、入室して来た乳兄弟の姿に目を向けもせずには答えた。

「まあ、そりゃあそうでしょうが……。お倒れになられたと伺ったので」

そう言いながらフランギスは、許しも待たずにさっさとラドキースの向かい側に座る。

「薬湯だけは無理矢理飲ませて来た。食事の方は摂る気になったかどうか分からぬ。自害しなければ摂るかもしれない……」

それだけ答えると、ラドキースは深々と憂鬱気な溜息を吐く。

「殿下」

「ん？」

ラドキースが顔を上げると、フランギスが何とも言えない心配そうな瞳を彼に向けていた。そして何か言おうとして俯いた。

「いや……、何でもありません」

ラドキースは、フツと小さく笑った。

「そんな顔をするな、お前らしくないぞ。気晴らしに剣でも合わせるか？」

フランギスは両眉を上げると、にこりと微笑んだ。

「そうですね、良い考えだ、殿下」

二人は立ち上がると練武室へと向かった。

既に日が落ちていたので、練武室内にも灯りを焚かせた。それでもやはり日中の明るさとは比べ物にもならないその薄暗がりの中で、二人の青年は真剣に剣を合わせていた。この二人は練武の際も決して刃先を潰した訓練用の剣は握らない。この暗がりの中でも真剣での勝負であり、平気で寸止めをしてのける。この王国内でもかなりの腕の持ち主達であった。広い練武室に鋼のぶつかる音が鳴り響く。真剣を合わせている間は憂い事など考えずにすむ。否、考える隙など無い。首下に鋭く突きつけられた剣に、フランギスは息を飲んだ。

「六本」

ラドキースがにやりと笑う。ファランギスは悔し気に表情を顰め、後ろに飛び退くと剣を構え直す。

「何のまだまだっ！」

叫ぶやラドキースに襲いかかる。もうどれ程、そうして二人は剣を合わせていた事か。夕餉の刻など、とうに過ぎている。ここまで来て既に二人の息も上がっていた。更に数合、金属音が響いた後、ファランギスは片手で額の汗を拭った。

「殿下？ 腹、減りませんか？」

「減ったな、これ位にするか？」

「ええ、そうしましょう。腹が減っては何とやらです」

ファランギスの顰め面にラドキースは苦笑しながら、華麗な身ごなしで剣を納めた。

「殿下が六つで、私が四つか．．．。もうちょっとで五分五分だったのになあ」

ファランギスは大仰に溜息を吐いた。

「まあ、殿下から四つ取れただけ良いか．．．」

言いながら、皇太子の又従兄弟にして乳兄弟である彼は汗に濡れた榛色はしほみの髪を掻き揚げると、ちらりとラドキースの様子を盗み見た。そして皇太子の微笑む様子に少しだけ安堵した。

皇太子は言葉で言い表した事は一度も無かったものの、幼い頃から誰よりも傍近く仕えて来たファランギスは知っていた。皇太子がハーグシュの姫君にほのかな恋心を抱いていた事を．．．。その姫君に、この様な形で再会し、攻め滅ぼした国の戦利品としてその姫を娶らなければならないとは何と皮肉な運命であろうか。

翌日の昼下がり、ラドキースがセレーディラを訪れると、彼女はやはり窓辺に佇んでいた。人払いをすると彼は亡国の姫君へと歩み

寄った。

「食事は摂られたか？ セレーディラ姫」

皇太子の問いに、セレーディラは外に目を向けたまま微かに頷いた。幾日も胃に物を入れていなかった為に重い物は入らず、水溶状の粥をほんの少し食べたただけであつたが、食べた事にはかわり無い。

「そうか．．．」

溜息混じりの呟きであつた。

「他の姫御方の件だが、皆、神殿に預けられる事となつた。近々移されるだろう」

「左様ですか」

王妃とセレーディラの他に、セレーディラの従姉妹にあたる姫君が三人囚われとなつていた。まだ年端も行かぬ幼い姫達であつた。神殿に移されるとはいえ、やはり監禁されるのである。男の兵士はいないと聞いていたが、神殿は霊力を持つ女戦士達に守られていると聞く。

「三人と同じ神殿に移されるのですか？」

「ああ、取りあえずは。幼いうちは、ある程度の当人達の接触も許される筈だ」

セレーディラは少なからず安堵した。幾分ましであろう。

「それと婚礼の日取りが決まつた」

「．．．．左様ですか」

セレーディラは一瞬おいて相槌を打った。

「大々的には行わぬ。内輪だけの物だ。そなたをなるべく見せ物にはしたくない」

セレーディラは振り返つてラドキースを見上げる。何かを言おうとして思い留まつた。いや、実際には何を言おうとしたのかなど分からなかつた。少女の頃、この黒い瞳を見て星の様だと思つた事を思い出す。何故そんな事を思つたのだろうかとセレーディラは思う。こんなに哀し気な星など無いであろうに．．．。ふと、昨晚無理矢理唇を奪われた事を思い出し、セレーディラは見詰めていた黒の

双眸から目を逸らした。

「今でも、神話は好きなのか？」

「え．．．？」

顔を上げたセレーディアにラドキースは手にしていた本を差し出した。

「昔、神話が好きだと言っていたであろう？」

セレーディアは本を受け取り見詰める。

「そんな．．．、昔の事を．．．．．」

少女の頃に話したそんな他愛も無い事を、この皇太子は覚えていたのかとセレーディアは哀しくなる。

「北方神話集だ。慰みになるかもしれぬ。他に欲しい者があれば侍女<sup>かしずき</sup>にでも言うが良い。凶器になる物以外は届けさせよう」

静かな声音を残し皇太子が去った後、セレーディアは布ばりの椅子に背を預けながら、その神話集を開いた。北方言語がウトレア王国語で記された物かと思いきや、驚いた事にハーグシュ語で記された物であった。わざわざ取り寄せてくれた物なのか．．．．．。

それから毎日セレーディアはその本を開いて過ごした。北方神話は少女の頃に読んだ事があった。だが、今改めて読んでみると、あの頃心惹かれた説話よりも少女の頃は全く興味を覚えなかった話の方に心惹かれた。北方神話の神々は非常に人間臭い。中でもセレーディアが強く心惹かれたのはエルディアラの話。神の娘エルディアラは人間の青年に恋をして、永遠の命も若さも美しさも人間の羨むであろう総てのものを捨てるのである。神である父の逆鱗に触れ捕らえられ殺されそうになる愛する青年を、エルディアラは神である父を裏切ってまで助け出す。二人は人間界へと逃れ、永遠の命を失ったエルディアラは人間となり、青年と共に限られた生を全うするのである。

少女の頃は総てを捨てるなど考えられなかった事なのに、今こんな立場に落とされて、その事に強く憧れる自分に気付く。この身分を捨てる事が出来たら、と。総てを捨てて、総てから逃げて、村娘

になつて羊を追つたり畑を耕して暮らせたら．．．．と。

婚礼の儀は確かに内輪のみで執り行われた。他国からの賓客は無く、列席したのはユトレア国王始め王妃、王家の面々に重臣達、そして儀式を執り行つ神官と巫女達のみであつた。すでに神殿に送られた幼い従姉妹達の姿など無論無く、ラドキースが健在だと偽り続けるハーグシュ王妃の姿も無論無い。

ユトレア風の裾を長く惹く婚礼衣装を着せられた亡国の王女は、数人の未婚の侍女達に介添されながら城内の礼拝堂を進み、正装姿の皇太子の横に並ぶ。

正装姿の皇太子の額には、ユトレア王国皇太子の身分を示す金の冠があつた。その中央に嵌め込まれた宝石の、その透明感のある紺碧の色をセレーディアは覚えていた。あの時の少年も付けていた。あの時自分は無邪気にも、その石の美しさを褒めた事をセレーディアは覚えていた。でも鬱陶しいので冠を付けるのはあまり好きでは無いのだと、あの時の少年は言っていた。

皇太子は少ない観衆の見守る中、誓いの口付けをセレーディアの唇に落とした。花嫁の顔には、幸福も希望も恥じらいも歓喜も無く、唯、絶望の色だけがあつた。



## 第一章 終焉と苦悩、そして……（3）

ラドキースは花嫁を訪れる為に回廊を渡っていた。ゆったりとした室内着を身に纏った皇太子の後には数名の神官と重臣達が重々しく従っていた。部屋の前まで来ると皇太子はにこりともせず振り返った。

「さあ、もうここまでで良いであろう？ 私は間違いなく花嫁をおとなう故、下がって良い」

「そうは参りませぬ、殿下。慣例でございます故」

重臣の一人がきっぱりと言った。

「立ち会いは無用だと言いついた筈だ」

「慣例を曲げるわけには……」

「譲歩せよ」

ラドキースは重臣達の言葉を遮った。

「私は、そもそもハーグシュ攻略に賛成などした覚えは無い。それを譲歩して軍を率いハーグシュ王都を陥落せしめた。そして譲歩して亡国の王女を娶った。そなたらも譲歩せよ。陛下には、そなた等の口からよしなに取り繕っておけ」

「しかし」

ラドキースの瞳に怒りの色が滲む。

「斬られたく無くば去れ。私の堪忍袋の緒が近頃頓に短くなっている事をそなた等も知っておろう？」

皇太子は手にしていた長剣の柄に右手を掛けた。その怒りを含んだ不機嫌な眼光に、怖れ戦いた重臣達もそれ以上の事は何も言えず

深々と頭を下げると退いた。

ラドキースは出迎えた侍女等にも朝まで戻らぬ様に命じると、花嫁の寝室へと足を踏み入れた。ほの暗い室内に純白のガウンを纏った亡国の王女の姿が浮かび上がる。香の焚かれた室内の良い香りの漂う中、ラドキースはセレーディラへと歩み寄り、充分な距離を置いて歩を止めた。室内に灯された幾つかの灯りが彼女の容貌に微かな陰影を付けている。

「立ち会いの者はいない。侍女等かしづきも朝までは戻らぬ」

セレーディラはラドキースを見詰め、やがて言葉も無く瞳を俯けた。そこには唯一つを除いて何の感情も見られなかった。拒絶も嫌悪も無い变わりに、歓喜も恥じらいも無い。唯有るのは……。ラドキースは物言わ強いて言えば諦めにも似た感情か……。ラドキースは物言わぬ花嫁との距離を縮めると、その表情の無い頬にそつと手を伸ばし触れた。ラドキースの手は何の反応も示さない王女の頬を撫で、その親指は彼女の唇をそつとなぞる。突如、憂えも屈託も無い輝く様な少女の笑顔が過った。

『いいわ、お嫁に行つて差し上げます』

輝く優しい光の中で交わされた七年前の約束……。確かに国と国との契約ではあった。しかし、己は確かにあの時少女に恋をした。そして少女も、あの約束をくれたのだ。

七年という歳月の下で美しく成長した初恋の少女が今、目の前にいた。輝くあの笑顔とは無縁の表情をして……。つきんとした鋭い痛みを胸にラドキースは身を屈めセレーディラの唇をそつと塞いだ。拒む事も答える事もしないセレーディラの背を抱き、ラドキースは幾度も優しく唇を重ね、やがて深く重ねた。練り絹のガウンをその細い肩から床に落とすと、薄い夜着一枚の彼女を抱き上げ寝台へそつと下ろした。再び彼女の唇を深く味わいながら、そ

の細い身体を抱き締めた。豊かで柔らかな髪を撫で、指を絡め梳き、首筋に口付けを落とした。彼女を心から欲しいと思った。

やがて夜着の釦の一つ一つに手をかけながら、その華奢な肩に唇を寄せると、それまで何の反応も示さなかったセレーディアの両手がそれを拒絶しようとした。開け<sup>はだ</sup>られた夜着の前を握り締めるその両手は微かに震え、見開かれた瞳は見る見る内に涙に被われた。

「お許し．．．．．下さいませ．．．．．」

小刻みに震える唇は、それだけを言うのが精一杯の態であった。

「．．．．．分かった。無理強いはせぬ。そなたの心が定まるまで気長に待つ事にしよう」

ラドキースは静かに答え、それ以上の事に及ぶ事もせずに、唯、セレーディアの髪を一撫ですると寝室から出て行った。

独り寝台に残されたセレーディアは、夜着の胸元を布が裂ける程にきつく握り締め身体を震わせながら涙を流し続けた。敵国の王子に口付けられ抱き締められ髪を撫でられた事が、全く厭わしいと思わなかった自身にセレーディアは混乱<sup>おの</sup>し戦<sup>おの</sup>いた。故国を滅ぼした敵国の皇太子だというのに．．．．．、敵軍を率いた名高き将だというのに．．．．．。

セレーディアの目からは涙が流れ続け、一睡もしないままに夜が明けていた。燭台の灯りはとくに尽きていた。表から爽やかな小鳥のさえずりが聞こえて来る。セレーディアは立ち上がり、ふらふらとおぼつかない足取りで化粧台へと近付いた。目の前の泣き腫らした空色の瞳が自分を見詰めた。ふらついた拍子に台に手を付くと何かにあたってカタリと音をたてた。銀製の背のブラシが転がっていた。セレーディアはブラシを取り上げ、その背の銀の意匠を撫で、そして顔を上げた。蒼白な表情の惨めな亡国の王女がこちらを見ていた。セレーディアは手にしたブラシを渾身の力でもって目の前に立つ自身へと叩き付けた。

皇太子妃となったハーグシュ王女付きの侍女等<sup>かしずき</sup>は、新婚初夜を慮って通常よりも心持ち遅い時刻に寢室の扉を叩いた。室内からの応えは無かったが侍女達は構わずに扉を開くと、膝を折り頭を下げながら機械的に挨拶の口上を口に上せる。そして面を上げた瞬間、異常を目にした侍女達はそれぞれに息を呑み硬直した。床に横たわる王女の純白の夜着に深紅が散っていた。初夜の祝福すべき深紅である筈も無かった。純白の夜着を染める毒々しい血の色と、割られた鏡に走る禍々しい罅の形状。死人の様な王女の周りに散る鏡の破片と、王女の血に濡れた手元に落ちている血まみれの破片。

侍女達は悲鳴を上げた。

ファランギスは深刻な面持ちで皇太子の私室へと足を運んでいた。ひよっとしてまだ寝ているであろうか．．．．．と思い、すぐに考えを改める。あの王子の事だ、婚儀の翌日とて常と変わらぬ時刻に起床しているであろう。そんな事を思いつつ案内を乞うと、果たして皇太子は既に身支度を整えていた。朝の挨拶もそこそこに、ファランギスはハーグシュ王女が自害を試みた件を皇太子に耳打ちした。

ラドキースは、瞳に浮かんだ哀しみを隠そうとするかの様に瞳を閉じ息を吐いた。

「侍医が傷口を接合しました。幸い発見が早かったですので命に別状は無いと．．．．．」

「そうか．．．．．」

ラドキースは長椅子に腰を下ろすと肘掛けに肘を付いて額を支え、もう一度溜息を吐いた。ファランギスもそれに倣い向かい側に座る

と、ぽつりと呟いた。

「今になって手首を切るとは、初夜を苦にされたのか……」  
「……抱かなかった」

ラドキースは乳兄弟に目を向けぬままに呟く。ファランギスは顔を上げ、然程驚いてもいない眼差しを主君に向ける。

「……そう、だったんですか……？　だって立会人達は？」

「部屋には入れなかった」

やはりか……と、皇太子の乳兄弟は心の内で思った。

「実は……、殿下はそうなさるのではと思いました。が本当にそうなさったんですね……」

「あれ以上傷付けたくは無かった……」

その告白にファランギスは、皇太子を労るかの様に小さく数度頷いた。

ラドキースは優しい。その優しさが彼の短所であり長所であるのだとファランギスは考えていた。愛想の無い率直さで誤解されがちではあったが、その心の奥底に優しさを秘めている事をファランギスは良く理解していた。

一体何時から、こんなに翳りを帯びた人物になってしまったのであったか……。ファランギスは考える。きっかけの一つは、前の王妃――つまりは皇太子の実母が毒殺された件にあってただ

ろう。前王妃は、皇太子の為に用意された瑠璃の杯を口に含んで息絶えた。狙われたのが皇太子であった事は疑いようも無い。杯が瑠璃では無く毒に反応する銀杯であったならば、前王妃は命を落とさずにすんだであろうに……。その時の騒動では、例の杯を運んだ侍女と、さる下級貴族の出の妾妃が首を刎ねられ一件は片付けられたのだが、真実は謎に満ちている。それ以前も、それ以降も皇太子の暗殺騒動は度々あったが、首謀者を特定するのは困難であった。何せ国王には現王妃の他にも数多くの妾妃があり、その幾人かが男子を儲けているのだ。ラドキースの同腹の兄王子も、ごく幼少の頃

に暗殺されていた。

少年の頃、皇太子は侍医の下で数種の毒に身体を慣らす訓練をした事があった。死と紙一重の所業に、ファランギスは幾度彼に止める様に懇願したか知れない。剣の腕とて自己防衛の為、必然的にそうならざるを得なかったのである。

ハーグシュ王国との五年戦争が始まってからは、軍師が舌を巻く程の知略の才と恐ろしいまでに肝の座った冷静さが広く知れ渡るところとなった。戦が勃発した時、彼はまだ顔立ちに幼さの残る十七の少年でしか無かったというのに。総大将として軍を率い、それが名ばかりの飾りでは無かった事を間もなく証明して見せた。

彼は、その漆黒の髪と身に纏った黒鎧に因み、いつしか黒將軍の名で呼ばれる事となった。王国には無くてはならない将と認められた為か、幸い近頃では暗殺騒ぎも無い。

## 第一章 終焉と苦悩、そして……（４）

セレーディラが目を醒すと、傍らにラドキースの姿があった。寝台のすぐ傍らに椅子を寄せ、肘掛けに凭れる様にして頬杖を付いていた。セレーディラと目を合わせても何も言わなかった。唯無言のまま、哀し気にセレーディラを見詰めるのみであった。

「死ねなかつたんですね……、わたくしは……」  
声が掠れた。その独り言とも取れる問いを、ラドキースは低く肯定した。

喉が痛む。目の奥も頭も左手首も右の掌も、何処もじんと痛んだ。セレーディラは左腕を翳して見た。手首にきつく包帯が巻いてあり、うつすらと血が滲んでいた。

「動かさぬ方が良い。傷を縫い合わせたばかりだ」

ラドキースは立ち上がり、そっとセレーディラを抱え起こした。

セレーディラは大人しく、されるがままに任せた。皇太子は寝台に腰掛けセレーディラの背を支えながら、傍らのテーブルに手を伸ばし杯を取った。

「薬湯だ」

セレーディラは虚ろな瞳でラドキースを見上げた。拒もうかどうかどうしようか迷っているのか何も答えなかった。

「又いつぞやの様に口移しで飲ませて欲しいのか？」

ラドキースの静かな声にセレーディラは小さく首を横に振る。そして震える右手で杯を取ろうとした。その掌の白い包帯が痛々しい。ラドキースが杯をセレーディラの口元に近付けてやると彼女は素直

にそれに口を付けたので、杯を少し傾けてやる。こくりと一口飲んでセレーデイラは微かに顔を顰める。苦いのであろう。そして又一口一口、ゆっくりと薬湯を飲み干した。ラドキースは空の杯を脇へと置くと再びセレーデイラの身を横たえてやり、傍らの椅子に戻った。そして右肘を付いて掌で両目を被った。

「頼む．．．。もう．．．、こんな事はしないでくれ．．．。」

力無い声であった。

「そなたがこのユトレアを、この私を憎む気持ちは当然の物だと理解している。だが死に急ぐな。望むならば．．．。私が死ぬ．．．。」

囁く様に低いその声は痛切な懇願であった。この王女が生きるならば、ラドキースは本心からこの命を自ら終わらせる価値もある様な気がしたのだ。どちらにしろこの自分の死を望む者は、この城内においてさえも少なくとも無い筈であった。二十二のこの年まで幾度暗殺されかかったか知れない。

「何故その様な事を．．．。」  
なにゆえ

セレーデイラは力無く呟いた。これがハーグシュの怖れたあの黒將軍の姿なのか．．．。？ そうだ、これが幼かったあの日、自分が恋したユトレア皇太子の姿であったのだ．．．と、セレーデイラは思った。

「そなたは言ったな？ 私はそなたの初恋であったと．．．。私とて同じだ。あの日、生き生きとして明るかったそなたに私は惹かれた。そなたの生誕日を心待ちにしていた。そなたが十六になる日を．．．。そなたに送った書状に記した事、あれは社交辞令や政治的思惑などでは無く、私の本心であった．．．。」

セレーデイラの瞳が揺れた。戦が起こるまでの間、セレーデイラの生誕日にはユトレア皇太子から贈り物と書状が届けられたものであったが、それがどれ程夢見る少女を幸せにしたか皇太子は知っていたであろうかとセレーデイラは切ない思いで彼を見詰める。



「そなたに再会して笑わぬそなたを目にしても、私を憎むそなたの気持ちを思つても、やはり私はそなたに惹かれる．．．．．。昨晚、義務からでは無く私は．．．、心からそなたを抱きたいと思つた」

淡々と紡がれるその言葉にセレーデイラは運命を呪つた。運命の女神を呪う者は、女神からも呪われるという。だが自分はもうすでに運命に呪われているではないか。ならば自分が呪つたところで変わりはいまい。涙で曇るラドキースの姿を見詰めながらセレーデイラはそう思つた。

「そなたが望まぬ限り二度と触れぬ。だからもう死のうなどとは考えてくれるな」

目を伏せるラドキースの肘に何かが触れた。

「その様な話．．．．、聴きたく無かつ．．．．．」

語尾は嗚咽の為に掻き消えた。まるで血を吐く様な苦し気な言葉にラドキースは顔を上げる。セレーデイラは皇太子の肘に触れていた包帯の巻かれた右手を引っ込め、己の口元を押さえた。

「違うのです．．．．．。わたくしが死んでしまいましたかつたのは、そんな理由からでは無いのです．．．．．。貴方が．．．．．。わたくしに触れようとなさつたからでは．．．．．。無いのです。あの日から．．．、貴方に嫁ぐ事を夢見ていました．．．．．。戦さえ起こらなかつたなら、わたくしは今頃、貴方の許で幸福だったのであるうにと思つたら．．．．．、悲しくて．．．．．。貴方に口付けられて嫌では無かつた。貴方に抱き締められて嫌では無かつた。一瞬でも．．．．．、一瞬でもわたくしは、貴方のものになりたいと願ってしまったのです．．．．．。それを罪と呼ばずに何と呼べましょう．．．．．。憎むべき貴方なのに．．．．．」

セレーデイラはまるで懺悔でもするかの様に訴えると、ラドキースに背を向けて苦し気に声を殺して泣いた。

「．．．．．お願いです。出て行って．．．．．」

そのか細い声にラドキースは成す術も無く、重く痛む胸を抱えて

部屋を後にした。

ラドキースが自身の執務室へ赴くと、案の定ファランギスがそこにいた。足を踏み入れるなり乳兄弟は眉を曇らせた。

「死にそんな顔してますよ、殿下……………」

ファランギスの心配そうな声音にラドキースは軽く目を見張る。

「何を大袈裟な……………」

一笑に付そうとするも、乳兄弟の心配そうな榛色の瞳に言葉は空虚に流れた。死にそんな顔……………、そんなのかもしれないとラドキースは漠然と思う。胸の奥が痛む。セレーデイラの歎く様を見るのがこんなに辛い事だとは……………。ラドキースは執務の椅子に座り背を預けた。

「身を引き千切られる思いというのは、ひょっとしてこういうのを言うのだろうか……………」

「殿下……………」

ラドキースの呟きに、ファランギスは驚愕を隠せずに目を見開いた。しかしすぐに気を取直すと、彼は椅子を一つ掴んで皇太子の座る執務机の傍らに置いて座った。

「さあ殿下、心の内を吐き出さないっ。剣に誓って他言はしませんから」

己の腰の剣をポンと叩くファランギスに、ラドキースは物憂げな目を向けた。

「貴方は昔から御自分の事となると多くを語りたがらない。悩みや心配事を自分一人で抱え込む癖がある。悪い癖ですよ。話して御覧なさい。多少は楽になる筈です」

ファランギスに目を向けていたラドキースは、溜息を吐く。

「溜息じゃなくて言葉を吐きなさい、言葉を！ 殿下」

優しく諭すというよりも、ファランギスのそれは強制に近い。このユトレアにあって天下の黒將軍にこんな口を利けたのは彼の実父である国王と、この乳兄弟位なものであっただろう。尤も、これくらい強く言わなければ、この皇太子は己の憂い事など口にはしない事をファランギスは長年の付き合いから知っているのである。

今回など自分の方から気弱な事をぼろりと洩らした位である。余程に辛いのであろうとファランギスは考えた。この乳兄弟の眼差しを浴び、ラドキースはやがて渋々と口を開く。

「彼女は、私に口付けられた事が嫌では無かったと．．．、一瞬でも私のものになりたいと願ってしまったと言ったのだ。それは罪以外の何ものでも無いと．．．。私は憎むべき者だからと．．．」

ラドキースは宙に目を据えていたが、その実何をも見てはいないようであった。

「それで死のうとなされたんですね．．．．？」

「戦さえ無かったら、今頃は私の許で幸福であつたろうにと．．．、泣いたんだ．．．、苦し気に．．．．」

ラドキース自身も眉根を微かに寄せ苦し気であつた。

「セレーデイラ姫に心を寄せておられるんですね？　じゃなきゃ、そんなに苦しい筈は無い、殿下」

ラドキースは突如笑つた。自嘲的な低い声であつた。

「何の因果か．．．」

「思えば殿下は、昔からあの愛らしい姫君に恋心を抱いておられたものなあ．．．．」

しみじみと言うファランギスに、ラドキースは驚き振り返る。

「何ですか？　私が知らぬともお思いだったのか？　殿下」

「お前．．．．」

「見てりや分かりますって。私を誰だと思つてるんです？」  
心外とばかりの口調であつた。

「殿下、ユトレアがハーグシュを滅ぼした事実を変えられません。

妃殿下の苦しいお気持ちも変わらぬかもしれない。けれど、時がそれを和らげてくれるかもしれない。貴方次第だと私は思いますよ。惚れているなら根気よく妃殿下を慰めて差し上げなさいって。辛いでしょがめげずに」

ファランギスは微笑んだ。

「成る程な．．．、お前の言う通りだ、ファランギス。少しは楽になった」

ラドキースも俯き加減に微笑んだ。

侍医からの許可が下り、セレーディラが床から出て通常の生活に戻らんとするまでには暫しかかった。ろくに食事も摂らずにいた為、体力も落ちていたのだらう。その間、皇太子からはしばしば見舞いの品が届けられたが、彼本人が訪れる事は無かった。

床を払ったその日の事であった。セレーディラが長椅子に座り、膝の上に北方神話の本を載せて静かに繙ひもといていると、ラドキースが訪れた。何やらみーみーと細い鳴き声があるのでセレーディラが顔を上げると、ラドキースは片手に小さな純白の仔猫を抱えていた。セレーディラは本を傍らに置き、ゆっくりと立ち上がった。空色の瞳は仔猫に奪われている。

ラドキースがセレーディラの前に立つと、彼女は顔を上げ彼を見上げた。目が合うとラドキースは自然と微笑んだ。セレーディラは少し驚く。皇太子が笑顔を見せたからだ。まるで冬の終りの雪解けを感じさせる。暫し見詰めていると、皇太子は照れたのかすつと目を逸らして口を開いた。

「まだ名は無い。そなたが付けてやると良い」

セレーディラは再び仔猫に目を向け、おずおずと手を伸ばし撫でる。仔猫は小さなふわふわの前足でセレーディラの細い指に戯

れ付いた。セレーディラは自身では気付いていなかったたのであろうが口元に笑みを浮かべていた。

「手首はどうだ？ 痛むか？」

セレーディラは皇太子を見上げ、すぐに仔猫に視線を戻す。

「はい、少し……、我慢出来ぬ程ではありません」

「そうか、ならばこの仔を抱いてみるか？」

セレーディラはラドキースを見上げると、口元を微かに綻ばせ頷いた。仔猫はセレーディラの腕の中に移ると、彼女の胸元に垂れる金褐色の巻き毛に魅力を感じたらしくすぐに戯れ始めた。セレーディラは小さな笑い声をたてた。ハーグシュ王都陥落から実に初めての事であった。

それから、ゆるりとではあったが徐々にセレーディラは笑みを見せる様になり、状況は良くなるものと思われたのだが、その後、皇太子ラドキースは不穏な話を耳にする事となる。

## 第一章 終焉と苦悩、そして……（5）

ユトレア、ハーグシュ間の五年戦争は、別名スキーレンド継承戦争とも呼ばれる。大陸中部に位置するスキーレンド。ユトレア、ハーグシュ共に婚姻による関係を持つ王国であった。

事は今から七年前、スキーレンド王レファン二世が世継ぎを残さぬままに二十の若さで急逝した事に始まった。スキーレンドの不幸は、直系の男子が殆ど残されていなかった事である。後継として白羽の矢が立てられるかに見えたのは、レファン二世の長兄にあたる前王の未だ二歳にしかならぬ孫であった。その祖母というのがハーグシュ王の従妹にあたる姫であったが、しかし前王の正妻として嫁いだわけでは無かった。何故ならその姫は、ハーグシュ王の叔父が身分低い市井の出の侍女に生ませた子であった事から、生まれて暫くの間は王家の一員として認められていなかったのである。しかし成長するにつれその美貌が際立ち、政の道具とされる為に王家の一員として迎えられるに至った。その姫は類い稀なるその美貌から、外交手段としてスキーレンドの前王へ側室として献上されたのである。

その姫の孫息子に白羽の矢が立てられようとする一方で、ユトレアは現王妃の子である第三王子の王位継承を主張した。何故なら第三王子の生母、つまりはユトレア王の現王妃がスキーレンドの王女であったからである。ユトレアは、レファン二世の実姉である王妃を通じて王位継承権を主張したのである。当初この話は上手く纏まるかに見えた。スキーレンド側としても、市井の女の血を引く二歳

の幼児よりも、血筋正しい七歳の子供の方を新王として迎えようという気風になつていたのである。しかしハーグシュ側も前王の孫王子の王位継承を負けじと主張した為に話は見る見る拗れて行つた。そしてスキーレンド王崩御の凡そ一年の後、戦が勃発するに至つたのであつた。

ユトレアが総大将に立てたのは、当時十七になつたばかりの皇太子、ラドキース・アレクセル・イルスⅡフォルタイン．．．、後に黒將軍の異名を取る事となる王子であつた。その補佐として傍らに控えたのが、名将ウルゲイル・ワイズⅡトーランと名軍師エヴェレット・リノンⅡフォンデルギーズであつた。

対するハーグシュの総大将は、ハーグシュの獅子との異名で知られる名将クウインダン・サダガルドを従えた二十五になる第二王子であつた。

元はと言えばスキーレンドの王位争いであつたものが、何時しか戦は激化し、ついにはユトレアがハーグシュ王都を陥落せしめた。そこにハーグシュ王国は滅ぼされ、王家の男子達は幼子おとなしに至るまで首を落とされるに至つた。

スキーレンド新王にはユトレア第三王子が据えられ、ハーグシュの血を引く前王の孫王子は何とも都合の良い事に原因不明の死を遂げた。それがユトレア側による暗殺であろう事は疑いようも無い。そして．．．、それから早一年が過ぎ去つていた。

終戦から早一年、王国から完全に戦の痛手が消えたわけでは無かつたものの、王都はすっかり活気を取り戻したかに見えた。市場の食材の種類も豊富になり、市井の民達の表情も明るく朗らかに見えた。

その王都の目立たぬ一角にひっそりと佇む長身の人影が二つ。一

人はマントのフードを深々と被り、顔立ちと言えば口元しか見て取れず、もう片方はいくとうと深く被ったフードに加えて顔に布を巻き付けているらしく、顔立ちなど全く見ては取れなかった。二人共その身に剣を帯びているであろう事は、薄汚れ擦り切れたマントの上からでも見る者が見れば分かったであろう。

「あれを……」

一人が低く囁いた。促された男がそちらへ目を向けると、商人らしき風体の男達が視界に入る。何やら言葉を交わしている様子だが声までは無論届かない。しかしその商人達の唇の動きに注視する。

「ハーグシュ人と見えるな……」

「恐らくそうでしょうね」

「あの身の熟こなしからして、剣を使う者等か……」

「ああいった者達を、近頃とみ頃に見かけます」

商人達は短い会話を交わすと、それぞれ別々の方角へと足早に去って行った。それを見届けるとその二人もやがて人知れずその場を去った。

近頃セレーディラは、侍女達と共に刺繡を刺して時を過かすごす事が多かった。

皇太子妃が刺繡の為の一揃いを所望した時、侍女達は彼女が針を飲み込みやせぬかと案じて皇太子に伺いを立てたものであったが、それも杞憂であった。

その日、ラドキースが訪れた時も彼女は侍女達と共に刺繡を刺していた。

「大分出来上がってきたのだな」

ラドキースがセレーディラの手元を覗き込みながら言うと、彼女



はラドキースを見上げて静かに微笑んだ。二人の侍女達が頭を下げると、微かな衣擦れの音と共に姿を消して行く。ラドキースは、セレーディアの傍らで丸くなっていた白猫をひよいと抱き上げ、彼女の隣に腰を下ろした。

「器用なものだな、そんな細かい手仕事を．．．」

ラドキースが最早仔猫では無くなった白猫の毛並みを撫でながら、感心した様に言う。

「わたくしの趣味ですよ」

「あの時は教えてくれなかったな？ その様な事」

あの時とは、初めて二人が顔を合わせた時の事である。セレーディアは手を休め遠い瞳をする。

「あの頃は、まだ刺繍の楽しさを知りませんでしたわ。まだまだ子供で、大人しく刺繍など刺すよりも兄達を追いかけて走り回っている方が楽しかった頃ですよ．．．」

セレーディアは、ラドキースに淋し気な笑みを見せると再び手を動かす。

この亡国の王女が自害に失敗してから一年。その後セレーディアが再度命を終わらせようと試みた事は無かったものの、警戒するユトレアは依然皇太子妃となったセレーディアの監視を緩める事はしていなかった。

ラドキースは、白猫をあやしながらセレーディアの横顔を見詰めた。白い頬に、その柔らかな髪に触れたくなった。色付いた唇を塞ぎ、細い肩を抱き締めたくなった。

あの日．．．、セレーディアが鏡の破片で手首を斬り裂いたあの日から、ラドキースは一度も彼女に触れていない。ファランギス以外の者達は皆、幸いな事にハーグシュ王女の自害未遂は初夜を苦にしての事と考えたのだが、実際の処、初夜など迎えられなかった為、婚儀は行われたとはいえ結婚は未だ成立していなかったのである。

あれからセレーディラは、徐々にではあったがラドキースに対して笑みを見せる様になった。しかし翳りある微笑みがラドキースの胸を突く。

他の女を抱いてみても心を占めるのはセレーディラの姿ばかり。後味の悪さに、とうとう他の女と寝屋を共にする気も起きなくなつた。

「近頃．．．、城下で良くハーグシュ人を見かける」

恋心を押さえつけ、ラドキースは口を開く。出し抜けに切り出されたその言葉にセレーディラは顔を上げた。

「町人や商人の風体をしているが、身熟みじなしからして剣を使う者が多い。ハーグシュの残党が動き出しているのだろ．．．．．。そなたにとって、良い知らせであろうか？」

ラドキースに向けていたセレーディラの空色の瞳が微かに揺れた。

「ハーグシュの名将、クウィンダン・サダガルドの亡骸は未だ見付かっていない。もしや生きているのではと私は考えている。そうになるとユトレアにとっては厄介だ」

白猫は今やラドキースの膝の上で平和そうに目を閉じていた。時々たま耳を動かすところを見ると眠っているわけでは無いのだろ．．．。セレーディラは無言のまま手を伸ばして、そのふさふさの毛並みを撫でた。すると白猫は顔を上げ、立ち上がると一つ伸びをしてラドキースの膝から音も無く飛び降りた。そして近くにあった鞆に戯れ付き、それを追って駆け回り始めた。セレーディラの目がその姿を追った。

「わたくしも、猫になりたい．．．．．」

亡国の王女はぼつりとそう呟いた。

カリナは裕福な商人の家の出であつた。歳は十七。美人では無かつたかもしれないが、鼻の頭に乗つたそばかすが何とも言えない愛嬌を醸し出している生き生きとした娘であつた。十六の歳に城に召し抱えられ、半年の見習い期間を経て皇太子妃付きの侍女かしずきに取り立てられた。カリナはそれをとて誇りに思っている。行儀見習いの為に城に上がる事を許される平民の娘は、決して多くは無かつたものの皆無では無い。だが皇太子妃付きにまで取り立てられる平民出の娘は、今の処カリナだけであつたのだ。とはいえ皇太子妃付きの侍女達の中では一番の下っ端であつた。下手な下級騎士や下級貴族の家よりもカリナの実家の方が余程に裕福であつたが、城内ではどうしても階級がものを言う。カリナの平民出という事実が彼女の立場を弱くしている事は確かであつたが、彼女は別段そんな事を気にしてはいなかつた。周りの侍女達には確かに気位の高い者もあり蔑まれる事もあつたが、カリナは元来が大らかな性質らしく、くよくよと悩む様な事も無かつた。それに良く城下へと使い走りに出されたので、適度に羽を伸ばす事も度々出来た。

今日も彼女の仕える皇太子妃の為に、刺繍糸を買いに城下へ出掛けていた。城出入りの商人に頼む事も出来るのだが、そうなるとうしても皇太子妃の手元に届くまでには数日かかる。

カリナは活気ある城下町を歩きながら、先日会つた老人の事を思い起こしていた。つい四、五日前、やはり今日の様に城下へと用足しに出された折、杖をついた薄汚れた老人に声をかけられた。神殿の長老の様な灰色のヒゲを伸ばしており、修道士おほつかの様な焦げ茶色の長衣姿でフードを被っていた。足取りは覚束ぬ模様であつたが、杖を付き背を丸めたその姿は決して小柄では無かつた。

『宮廷にお勤めのお方とお見受け致しますが……』

と、老人は柔和に切り出した。自分が城務めの侍女である事を見抜いた老人を、カリナは警戒した。老人は亡国ハーグシュの僧であり、敬愛する王女が今どのようなに過あやまちしているのかを案じていると言つた。差し支えなければ皇太子妃となつた王女の様子を聴かせて

欲しいと、カリナに懇願した。しかしカリナはハーグシュ人と言葉を交わす事に恐れをなし、その場を逃げ出した。だがその後、多少良心が咎めた。あの老僧は、ひよとして自分が身に着けていた侍女のお仕着せから、この自分を城務めの侍女だと知ったのではないか。．．．。その日は天候も良く暖かであった為、カリナはマントを纏ってはいなかったのだ。きつとそうに違いないと思うと更に胸が痛んだ。害の無さそうな老いた僧に、せめて皇太子妃は健やかである事を教えてやっても良かったであろうかと．．．．．。そんな事を考えながら歩いていると誰かに声をかけられた。カリナは息を呑む。あの老僧であった。

「頼みますじゃ、お城の侍女殿。一言でも良いんですのじゃ。拙僧は、あの姫様がご無事でおらるるか心が痛くてのう．．．。」

老僧はカリナのマントをしつかりと掴んで、今にも泣き出しそうな顔で頭を下げる。情の深い質のカリナは、その老人が哀れになった。

「分かったわ。仕方が無いわね」

カリナが溜息混じりに観念すると、老僧は嬉しそうに頭を下げて礼を言う。しかし、こんな人通りの多い処で怪し気な僧と話し込んでいる姿を誰かに見られては都合も良く無い。カリナは老僧の腕を取ると、細い横道へ導いた。

## 第一章 終焉と苦悩、そして……（6）

人が二人も辛うじて通れるかどうかという程の細道で、カリナが老僧に皇太子妃であるハーグシュの姫君の近頃の穏やかな様子と、皇太子が亡国の姫君をいかに大切に礼節を持って足繁くおとなっているかという事を、ほんの心持ちの誇張と共に語ってやっているといふに長身の男がその細道に足を踏み入れて来た。

老僧に勝るとも劣らぬ様な古びたマントを纏い、これ又老僧同様にフードを深々と被り顔を隠している男は、淀み無く足を進めて来る。カリナは何気なく小道の反対側へと視線を走らせ、そこで俄に緊張する。反対側からも似た様な風体の長身の男が、早くも無く遅くも無い足取りで歩み寄って来ていたのだ。その小道にカリナと老僧は、とても思わしいとは言いがたい風体の男達に袋の鼠にされる形となった。二人の男達が腕を伸ばせば届く様な距離で足を止めた時カリナの胸の内にはほんの少しの後悔の気持ち<sup>かしずき</sup>が沸き上がる。同情心など起こしたばかりに、こんなチンピラに絡まれる事になろうとは……。

「なつ、何か、御用ですか？」

声を上擦らせながらもカリナは気丈に尋ねた。

「ああ、そちらのご仁にな」

答えた男の口調は思いのほか低く落ち着いていた。カリナの傍らで老僧が怯えた様に益々背を丸めたのが分かった。

「そこもとはハーグシュ人だな？ 王城付きの侍女<sup>かしずき</sup>に何用だ？」

男の口調はその風体に似合わず一端の騎士のそれであつた。しかもカリナを城付きの侍女と知るこの男は．．．．．。その聞き覚えのある声にカリナははっと息を飲んだ。

「あ、あの．．．、もしか．．．．．、フアランギス様．．．．．？

否定も肯定もしない男は、ただひよいとフードを軽く上げて見せた。そこから覗いた榛色の髪と瞳にカリナはホッと安堵の息を吐き、次の瞬間には慌てて膝を折って頭を下げた。

「あの、そのお坊様を責めないで差し上げて下さいませ。皇太子妃様の事を案じて私にご様子を尋ねて来られただけなんです」

「それでお前は妃殿下の近況を話して聞かせてやった訳か？」

「はい．．．。申し訳ございません．．．．．」

カリナは本当に申し訳無さそうに項垂れた。しかし項垂れながらも彼女の言葉は続いた。

「そのお坊様が少し気の毒で．．．．．。皇太子妃様がお健やかだという事くらい教えて差し上げてても良いのではと思ひました．．．．．。だって、もしも立場が反対だったら、私もきっと同じ事をしていましたもの」

「．．．．．」

言葉を返さないフアランギスを、カリナは見上げた。

「もしこのユトレアが亡国となっていたら、私もこのお坊様の様に陛下やお妃様や、皇太子様やその他の王子様方妹姫様方の安否を敵国の人々に尋ねていたかもしれませぬ。フアランギス様なら尚更でいらつしやいますでしょう？ 皇太子様の乳兄弟であらせられるんですもの」

カリナの老僧へと向ける哀れみの眼差しを一瞥したフアランギスは、小さな溜息を洩らした。

「分かった、行つていいぞ」

「あ、あの．．．」

「案ずるな、お前の言い分は理解した、カリナ」

静かにカリナを促すフアランギスの榛色の瞳は、再び杖に凭れる老僧を見据えていた。それ以上何を言うのも憚られ、カリナはフアランギスとその連れの男に深々と頭を下げると足早にその場から去った。小道から抜け出して大通りに出てからも、カリナは暫く足を止めようとはしなかった。そして、大分離れた所で足を止め大きく息を吐いた。

「フアランギス様、あんな恰好で……」

カリナはフアランギスの従兄弟の口利きで城に上がった。その縁から皇太子の乳兄弟であるフアランギスとも顔見知りであったのだが、本来ならば平民出のカリナが気易く言葉を交わせる様な人物では無かったであろう。王家とは縁戚関係にある程の大貴族であるエトラ・ファーガス家の当主である。その大貴族である彼が、まるで傭兵がごろつきの様な薄汚れたマント姿で顔を隠して城下を歩くなど……。

「あそこまですれば確かに誰もフアランギス様だなんて気付かないでしょうけど……」

カリナは改めて驚きに独りごちた。

二人の長身の男に挟まれた老僧は、杖に頼りながら覚束ない足取りで逃げ道を求める様に幾度か左右を見渡した。

「目的は何だ？」

「さっきの侍女殿が言った通りですじゃ。おいたわしい姫様がお元氣かどうかを知りたかっただけじゃ」

フアランギスの厳しい問いかけに老いた僧はおどと答えた。

「姫様はハーグシュの宝珠と謳われたお方。わしらの誇りじゃ。

その姫様の身を案じて何が悪いと言いなさるんじゃ、お前さんは？

そこを通して下され。後生ですじゃ」

被ったフードから覗く灰色の纏れた髪と伸び放題の髭に被われた老僧の顔立ちは、はつきりとは見て取れなかったものの、その声は

弱々しく泣き出しそうな程であつた。

「別に悪いとは言わない。ただそこもが真まことの僧に見えなかっただけだ」

「俗世を離れたは、お前さん方に国を滅ぼされてからじゃからなあ。そんな事を言われてものう．．．。もう堪忍して下され」

老僧はよぼよぼと杖を付きつつフアランギスの脇を通り抜けようとした。と、その時であつた。一言も言葉を発する事の無かつたもう一人の男のマントが突然翻つた。剣が鞘走つた。剣の煌めきが老僧を斬り裂くかに見えた。しかし次の瞬間には神速の早さで繰り出された杖がその剣をがっちり受け止めていた。

もはやそれは歩く事もおぼつかぬ老いた僧の姿などでは無かつた。その伸びた髭と髪の間から覗く眼光は鋭く、その身熟みじなしはどう見ても長年剣に慣れ親しんだ者のそれであつた。

「思つた通りであつた。やはりそなたは生きていたのだな、ハーグシュの獅子よ」

男は穏やかに呟くと用心深く剣をひき、深々と被つていたフードを下ろした。その二つ名の元ともなつた艶やかな黒髪と黒い瞳の端正な顔立ちが露となる。

「お主．．．．．、黒將軍かつ．．．．．!？」

老僧に身をやつした亡国ハーグシュの名将は驚きに眼を見張つた。

「久しいな、サダガルド」

厳しい表情ではあつたものの、微かな喜びさえ感じさせ得る様な声音であつた。

「皇太子自ら王都の見回りとは、ご苦勞な事だ」

先程までの弱々しい老人の声とは打って変わった、太くて低い武人の声であつた。

「さて如何にする？ この場で某それがしを斬るか？ それとも捕えて拷



問にでもかけた後に公開処刑にでも処すか？　これ如何に？　黒將軍殿下」

ピンと伸びた背筋のその大柄な姿と炯眼は、仮令みすばらしい乞食僧の姿であろうとも名將の風格を損なつてなどいなかった。捕らえるべき人物である事はラドキースも無論承知していたが、しかし  
．．．．．。

「そうだな．．．、その前にそなたと話をしてみたい」

敵国の皇太子の予想外の望みにサダガルド將軍は言葉を失う。

「殿下．．、何を仰います！？」

ファランギスも半ば呆れる。

「あれ程に我らを悩ませた名將だ、どんな人物が興味がある」

ラドキースはサダガルドの鋭い双眸を見据えたまま言った。

ほんのわずかな刻の後、ラドキースと　“　ハーグシュの獅子”  
クウインダン・サダガルドはさる宿屋の一室に向かい合つて座つていた。表を見張る様に言いつけられたファランギスは初めは難色を示したものの、皇太子の　『私の腕は信ずるに足らぬか？』　との言葉に渋々と部屋の外に立つた。

「ハーグシュは決起する心積もりの様だな？」

「そうだと申したら、如何される？」

「ユトレアは受けて立たざるを得ないであろう。正直な処、思つたよりも動きが早いので感心している。しかしそなたが存命していたのなら、それも無理からぬ事であつたか？」

ラドキースは微塵もその表情を動かさずに言葉を続ける。

「戦には金がかかる。今のそなた等には事を起こすだけの財も人員も無いと見ている。という事は、余程突飛な作戦に出るか他国からの救いを得るか、又はその両方であろう？」

ハーグシュの名將は無言であつた。

「決起に先立つて王女を取り返したいであろうな？」

「決起致そうがどう致そうが、姫を取り返したいは臣として至極当然の事」

「返してやつても良い」

流水の如く返されたユトレア皇太子の言葉に、サダガルドは己が耳を疑い一瞬言葉を失う。

「何．．．だと．．．．．？」

「セレーディア姫を返して欲しくば、明日の夜更けに城の裏手の森にそなた独りで来い」

ラドキースは低く言った。

「それを信ぜよと仰せか？」

「私はユトレア皇太子として言っているわけでは無い。姫の夫として言っている。信じようが信ずるまいがそなたの勝手だ。信ずるならば姫の逃亡を手助けしてやる。私にとっては国を裏切る行為となる」

「何故．．．？」  
なにゆえ

サダガルドは驚きを隠さず疑惑も露に低く尋ねる。だがラドキースは黒の双眸を敵将にひたと据えたままそれには答えずに立ち上がった。

「王女を取り返したくば必ず独りで来い。合図を聞いたら灯りを灯せ。良いな」

そう言い残すと皇太子は去った。残されたサダガルドは信じ難い敵国の王子の言葉に思い惑っていた。

セレーディアはラドキースのあまりに予想外であった問いに、咄嗟に言葉を口にする事が出来なかった。

「ハーグシュの残党の許へ行きたいか？」

ラドキースは押さえた声音でセレーディラにそう尋ねたのだ。

「サダガルドが今王都にいる」

セレーディラは息を呑んだ。

「彼は生きて．．．？」

ラドキースは頷いた。

「今宵そなたを迎えに来るであろう。望むならば私がそなたを逃がそう」

セレーディラは空色の瞳でラドキースを見詰め、やがて頷いた。

深夜、セレーディラはラドキースの指示通り手渡された小姓の仕着せに着替え、髪を一つに括り、寝台の中でじっと待っていた。皇太子は何故この自分を逃そうなど考えたのだろう．．．。セレーディラは切ない思いで考えていた。万が一失敗すれば、いかな皇太子といえど罪は免れ得ぬであろうに。否、失敗せずとも事が明るみに出た時には、皇太子は捕われ廃嫡され、最悪の場合は命の保障も無いのではないか．．．。セレーディラは暗闇の中、葛藤に苦しんだ。

ラドキースは物陰から、鼻と口を布で被いながらセレーディラの部屋の扉を伺い見た。先程焚いた眠り薬が効いたらしく、扉の前の衛兵達は床で眠り込んでくれている。ラドキースは足早にセレーディラの部屋へと滑り込んだ。そこで鉢合わせした不寝の役<sup>ねず</sup>の侍女達<sup>かしずき</sup>に当て身をくらわせた。その内の一人に顔を見られた。それが昨日町中でサダガルドに声をかけられていた侍女である事に気が付いたが、そんな事は気にしてはいられなかった。ラドキースは気絶した侍女等を長椅子に横たえてやると、寝室の扉を叩くやそつと開いてセレーディラの名を呼んだ。するとすぐ様、小姓姿のセレーディラが姿を見せた。

「準備は良いな？」

セレーディラはそれには答えずに緊張の面持ちでラドキースを見上げた。

「．．．何故、貴方<sup>なにゆえ</sup>にとってこの様な危険な事をなさるのですか、ラドキース様？」

「．．．そなたが望んだからだ、姫。私はそなたに生きて欲しい。そなたが生きてくれればそれで良い」

精彩を欠いたラドキースの瞳に見詰められ、セレーディラの瞳は揺れた。敵国の皇太子の言葉にセレーディラの心は酷く惑った。その彼女の胸の内を知る由も無く、ラドキースはセレーディラの羽織った小姓用マントのフードを被せてやると彼女の手を取った。

「行こう」

二人は密かに回廊へと出た。ラドキースは上手く夜勤の衛兵達の目を避けながらセレーディラを自室まで連れて来た。そして、その扉前の光景にラドキースは表情を険しくした。口止めをしていた衛兵が二人、床に正体もなく転がっていたのだ。ラドキースは素早く衛兵達の無事を確かめる。斬られた様子は無かった。何があったかなど、ラドキースには訝しむまでも無かった。倒れ臥す衛兵達をそのままに、ラドキースは立ちすくむセレーディラを抱える様にして自室へと足を踏み入れた。既に人を避けてあった筈の自室の居間には、果たして人影があつた。

「勝手に失礼しましたよ、殿下。取り次ぎを頼もうにも、貴方は既に就寝されたからと衛兵等は頑として取り次ごとしませんでしたので」

「そう命じておいた」

「ええ、そうでしょうとも。剣を突き付けてさえ、実に忠実に貴方の命を守り通してましたよ、あの者等は」

「それであんな暴挙に出たのか？」

「已むを得ませんでした故。お陰で拳が酷く痛みます。おまけに室内には不寝の番はおるか、就寝された筈の貴方さえもおられぬときた……」

厳しい表情の乳兄弟の言葉は、暗に皇太子を責めていた。

## 第一章 終焉と苦悩、そして……（7）

「何用だ？ ファランギス」  
珍しくも睨む様な厳しい眼差しを向けて来る乳兄弟へ、ラドキースも同様の眼差しを返す。だがそんな事でこの乳兄弟が怯む筈も無い事はラドキースも良く知っていた。

「妃殿下を逃すおつもりですね？」

なにゆえ

「何故そう思う？」

「だってサダガルド將軍とそんな話をなさってたじゃありませんか」

ラドキースは一瞬目を見開いたが、次の瞬間にはその黒い瞳を鋭く細める。

「聞き耳を立てていたのか？」

「はい。表を見張れとは仰ったが話を聞くなどは仰らなかったでしょう？ 殿下は」

ファランギスは悪びれもせずと言った。

「嫌な奴だ」

ラドキースは不機嫌に返した。

「で？ お前は邪魔だてするつもりか？」

「私に、これを見逃せと？」

詰る様な声で逆に問い返すファランギスの厳しい瞳は、微塵も揺るがずに皇太子を見据えている。

「妃殿下逃亡に手をお貸しになる事が後にどれ程の危険性を呼ぶ

事になるか、貴方に分からねえ筈が無い。それでも貴方は妃殿下を逃して後悔なさらないのですか？」

「ここで逃してやらねば後悔するだろう」

ラドキースの苦悩を滲ませた瞳と、その静かな言葉に、ファランギスは言葉を失った。

暫しの沈黙が流れた。

やがてファランギスの表情は緩む。やれやれ．．．という諦めの呟きと共に彼は首を軽く横に振る。

「十七にしてあの名軍師フォンデルギーズを唸らせた程の殿下が、よもやこんな愚行に走ろうなどとは誰も思いますまいよ．．．．．」

「ファランギスは力無く呟くと再度盛大な溜息を吐き、次にはきりつと顔を上げて手近な燭台に手を伸ばしていた。

「分かりました。では行きましょう、殿下。妃殿下も」

燭台を手にこちらを一瞥すると、寝室の扉を勝手に開けてさっさと入って行くとする乳兄弟の変わり身の早さに、ラドキースも微かに戸惑った。

「ファランギス？」

「何ですか？ ご不満ですか？ 邪魔立てすれば乳兄弟のこの私を斬っても殿下は行くおつもりでしょう？ 殿下に斬られるなんてまっぴらですよ、私は」

ファランギスは肩を竦めた。

「見逃すだけで良い。お前は来るな」

ラドキースは、セレーディラの手を取って進みながら厳しい表情で言う。

「ご冗談を」

「来るな。これは命令だ」

「従いかねます。貴方が危ない橋を渡るおつもりなら、私も共に渡ります。どうせ貴方は、事が明るみに出た時の私の身を案じておられるのでしょうか？」

ラドキースの表情がふと緩む。

「他の誰にも分からずとも私には貴方の考えておられる事位分かりますよ、殿下。何年の付き合いだと思ってるんです？ 生まれた時からなんですよ。今、私がお伴せずに事が明るみに出て貴方が処刑されるような事にでもなったら、私は間違い無く後を追って自害しますからね。ですからここで私を止めても無駄な事です」

その乳兄弟の脅迫まがいの言葉と頑として譲ろうとはしない態度に、ラドキースは溜息を零す。

「・・・馬鹿な奴だな、お前は」

「殿下に似たんですよ」

フアランギスは不満そうに口をへの字に曲げて寝室に入って行き、大きなタペストリーの掛かった壁に直行するとそれを剥ぐって壁の一所を強く押した。ぎっという低いきしみと共に小さな扉が開いた。

「さあ妃殿下、足元にお気を付けて、急ぎましょう」

今しがたのやり取りにいたたまれぬ思いをしていたセレーディラに、フアランギスは優しい笑みを見せた。

「行こう」

ラドキースは困惑の表情で自分を見上げたセレーディラの肩を抱き、王族しか知らぬ内部通路へと導いた。表向きは王族しか知らぬという事になっていたが、子供の頃ラドキースと共にこの秘密の通路を遊び場に使っていたフアランギスは、ラドキース同様それを熟知していた。

「森の方へ出れば良いんですね？ 殿下」

「ああ」

灯りを片手に先頭を進むフアランギスは、よどみなく通路を選んで行く。そしてひたすら螺旋状の細い石段を降りて行った。これでもかという程降りると、やがて石段は水の中に消えていた。横も前も石壁に囲まれている。

「泳げるか？」



ラドキースの問いにセレーディラは首を横に振った。もつと明るければ、彼女の顔から血の気が引いていた事が見て取れたであろう。「なれば思い切り息を吸い込んで、私に捕まっていれば良い。マントは脱いだ方が良からう」

セレーディラは言われた通りにマントを脱ぎ捨てた。フアランギスが灯りを石段に置くと、先に水中へと躍り込んだ。続いてラドキースがセレーディラの腰を抱えると、彼女が大きく息を吸い込んだのを確認するや水の中に静かに飛び込んだ。セレーディラは水の冷たさと恐ろしさに目をきつく瞑ってラドキースにしがみついた。身体が強い力で下へ下へと引っ張られて行くかと思ったら、途中から上へ上へと上昇した。苦しくて肺が潰れるかと思った。もう駄目かと思った時、水面に到達した。セレーディラはラドキースに抱え上げられ、その首に強くしがみつきながら、ぜえぜえと荒い息をついた。肺が必死で空気を求めていた。

「大丈夫か？ 姫」

ラドキースは苦し気に震えるセレーディラの背を撫でてやった。

「殿下っ！ こっちです」

フアランギスの叫ぶ様な囁き声と、微かな水音が聞こえた。ラドキースは苦しい気なセレーディラを抱えたまま、そちらへと泳いだ。フアランギスは堀の側面に目立たない様に穿たれたくぼみへ手足をかけながら、あっという間に地面に這い上がった。次にセレーディラがラドキースに背を押さえられながら手探りで側面を登る。

「お許しを、妃殿下」

上からの囁き声と共にフアランギスの両手が伸びて来たかと思うと、セレーディラを軽々と引っ張り上げた。その後からラドキースが身軽に地面上がって来た。

ラドキースは無言のままセレーディラの手を握り、城壁を背にすると森へ向かって駆け出した。夜中とはいえ月明かりがある。衛兵に見付からないとも限らなかった。ラドキースは森の中へ駆け込んでから漸く足を緩めた。少し歩いてから足を止め、セレーディラを

言葉少なに氣遣った。そして彼は親指と人差し指を唇にあて短い口笛を鳴らすと、暫くの間辺りを伺った。ファランギスも無言のまま辺りを注意深く見回していた。

やがて遠くの方に紅い揺らめきが浮かぶ。

「あそこだ．．．．．」

セレーディラも赤い灯りを見付けた。

「サダガルド將軍の迎えだ。あの灯に向かって行け。独りで行けるな？」

ラドキースの声は劣る様に優しかった。

「忝く、かたじけなラドキース様。ファランギス卿も、誠、忝く．．．．．」

「どうかお達者で、妃殿下」

ファランギスの声も優しかった。

ラドキースはセレーディラの濡れた髪に触れた。恐らく、もう会えないのだろう．．．．。二人とも相手の姿を目の奥に焼き付けようとでもするかの様に、暗がりの中を必死に目を凝らして見詰めあった。セレーディラの頬を涙が濡らした。

「これを持って行くが良い」

ラドキースは、懷から小振りな守り刀を取り出しセレーディラの手握らせた。セレーディラはそれを胸に抱き肩を震わせた。

「そなたの無事を祈っている」

「ラドキース様も．．．．、どうか、ご無事で．．．．」

嗚咽混じりに言葉を紡ぐセレーディラは、しかし最後まで紡げずに震えながらラドキースの胸に飛び込んだ。ラドキースの腕は彼女を受け止めきつく抱き締めていた。彼女を愛していた。酷く愛していた。それでも手放さなければならぬ。

「愛している、姫」

「殿下．．．．」

押し殺した様な声で今初めて愛を囁くと、己の腕の中で顔を上げるセレーディラの涙に濡れた唇に、ラドキースはそっと別れの口付

けを落とした。

「．．．来世では、きつと添い遂げよう．．．セレーディラ．．．」

「はい．．．、きつと．．．、ラドキース様．．．」

身を切られる様な切なく悲しい約束であった。

「さあ、行け」

ラドキースはセレーディラの額に口付けると、その身を優しく引きはがした。

「さあ．．．」

セレーディラは泣きじゃくりながら背を向け歩き出した。幾度も幾度もラドキースを振り返り、やがて見えなくなった。間も無くして遠くの灯りが幾度にも揺れるのが見て取れた。恐らくセレーディラとサダガルドが落ち合ったのであろう。そして、灯りは闇に飲まれて見えなくなった。

## 第一章 終焉と苦悩、そして……（8）

翌朝、皇太子妃の私室は騒然となった。早朝、勤務の交代に現れた兵等は、皇太子妃の私室の前で眠り込んでいる二人の同僚の姿に驚き急ぎ揺さぶり起こした。何故二人して眠り込んでいたのか……。不審に思い俄に不安にかられた衛兵達は、皇太子妃の部屋の扉を叩いた。誰も出て来ない。再度叩くも、やはり何の反応もない。尋常では無かった。皇太子妃の部屋には常に幾人かの侍女が詰めている。誰も応答しないのは奇異であった。衛兵達は尚も扉を叩き、応答が無いと見るや恐る恐る扉を開け室内へと踏み込んだ。緞帳で隠された控えの間を覗き、続いて皇太子妃の居間への扉を叩いてそつと開き覗き込むと、不寝の番の侍女達が揃って長椅子に臥している姿があつた。衛兵達の顔に緊張が走る。

たちまち騒ぎとなるも直ちに箝口令が敷かれると共に城内の搜索が行われ、城外へも秘密裏に搜索隊が出された。

その晩勤務に就いていた衛兵達と侍女達は厳しい取り調べを受ける事となった。カリナは血の気の引いた表情で昨晚の事を思い起こしていた。夜更けに皇太子が部屋を訪れた事をカリナははっきりと覚えていた。皇太子が突如現れ、目が合ったところでカリナの記憶は途絶えていた。思い起こそうとしても、それ以上の事は何も分らない。ただ胃の腑の辺りに鈍い痛みが残っているばかりであつた。カリナは痛む腹部を手で押さえ取り調べに答える。共に不寝の役目に就いていた侍女は皇太子の姿を見てはいなかったらしい。ただ何

者かに襲われたという事しか知らない。カリナも、ただ何者かの侵入を得た事のみを報告した。何故か皇太子の名を出す事が憚られたのだ。

三日が過ぎてもセレーディラの行方は杳として知れず、その日の会議の席でラドキースは、セレーディラ付きであつたあの年若い侍女カリナが、あの晩の自分の訪れを口にしていない事を知つた。ラドキースとしては咎めを受ける覚悟など疾うに出来ていた。だが即座に自ら名乗り出る愚行に走る事も無い。

臣達の大半が内通者を疑うそんな中、ラドキースは腕組みをして静かに周りの意見に耳を傾けていた。

「兄上は如何思われるのだ？」

一つ下の腹違いの弟が皮肉氣に口を開いた。ラドキースとは対照的な明るい色の髪をしている。

「先程から黙<sup>だんま</sup>りを決め込んでおられるが。まさか戦利品を失つて意氣消沈しておられるのではなからうな？ 黒將軍ともあるう兄上が」

その言葉には嘲りの音<sup>ね</sup>が混じる。ラドキースはふつと口元を歪めた。今の言葉には恐らく、自分よりも背後に控える乳兄弟の方が腹を立てているであろう事を思つたら可笑しかった。

「私の思う事か？ 私の思うは殺戮は憎しみと悲しみしか産まぬと言う事よ。そなたの申す通り私は妻を失つて意氣消沈している。そなたと違って私は、妻の身を案ずる事が恥すべき事だとは思つておらぬ故な」

静かな物言いであつたにも拘らず、周囲の者達に言葉を失わせる様な何かがあつた。

その宵、ラドキースは主を失った部屋に独り足を運んでみた。すると何処からか鈴の音を鳴らしつつセレーディアの白猫が駆け寄って来た。足元にすり寄る白猫をラドキースは抱き上げた。

「お前も寂しいのか？」

ラドキースが話しかけると、白猫は一声鳴いてラドキースの手に頭を擦り寄せた。目を閉じれば何時でもセレーディアの悲し気な青空色の瞳が鮮明に浮かんた。無事に生き延びて欲しかった。もしもハーグシュの残党がユトレアに対し旗揚げすれば、間違い無く己はセレーディアの首を取らなければなくなる立場となるう。そしてセレーディアも……。そんな事は痛い程に分かっていた。

「殿下」

ふいに声をかけられ我に返る。無人だとばかり思っていた部屋には、まだセレーディアの侍女が残っていたらしい。

「こちらを……」

侍女が何やら差し出して来たので、ラドキースは無言のまま受け取った。

「寝台のテーブルに置いてございました」

それだけ言々と侍女は膝を折って密やかに立ち去った。ラドキースは片腕に白猫を抱いたまま、もう片方の手にした物に目を落とす。それは繊細な刺繍の入ったごく薄い木綿の手巾であった。緑の蔦模様の縁取りがなされ、四隅の一所に冠と蔦の絡んだ長剣の刺繍が入っていた。皇太子ラドキースの紋章であった。ふいに刺繍を刺すセレーディアの横顔が通り、猫になりたいと呟いた時の泣き出しそうな表情が通り、抱き締めた時の細い肩の震えが、最後の口付けの感触が甦る。

ラドキースは暫しその手巾を見詰め、やがてその紋章にそっと唇

で触れた。

皇太子妃失踪の失態の責を問われ、城内に監禁されていたカリナは眠れぬ日々を送っていた。共に監禁されている年長の同僚のすすり泣きが絶えず聞こえて来ていた。

「私だつて泣きたいわ……」

思わず小さく呟いた。カリナとて心底から泣きたい気分であつた。失踪した皇太子妃が見付かるまで、恐らく解放される事は無いのだと感じ始めていたからだ。ならばあの晩の真実を話せば良いのだ。

あの晩、一体誰が皇太子妃の部屋を訪れたのかを……。カリナはずつと考え続けていた。やはり皇太子があゝのハーグシュの姫君を連れ出したのだろうか……。そうとしか考えられない。では、何故……？

カリナには考えても考えても、皇太子があゝの姫君に到底害をなすとは思えなかつた。ちよくちよく盗み見た皇太子の姫君へと向けていた瞳。それが憐憫の色であつたのか同情の色であつたのか、はたまた疾しさや後ろめたさであつたのか、カリナには分からなかつた。仮令<sup>たとえ</sup>それらを総てひつくるめた色であつたのだとしても、そこには少なくとも恋慕の色があつたとカリナは信じていた。その信念の為にカリナは考えていたのだ。皇太子は亡国の姫君を逃してやったのだらうと。

今日もそんな事に思いを馳せていると慌ただしい足音が近付いて来た。あつという間にカリナの独房の前まで来るとそこでぴたりと止まつた。それと同時に扉の錠前が開けられるけたたましい音が響いたかと思うと、カリナは有無を言わずに荒々しく両腕を掴まれた。

足早に回廊を進んで行くラドキースを、フアランギスは必死の態で押しとどめようとしていた。無実の侍女が繋がれ拷問にかけられた。侍女だけでは無く、その家族までもが捕らえられた。それを知ったこの乳兄弟である皇太子が、これから何をしようとするかなどフアランギスに分からぬわけも無かった。

皇太子妃付きの侍女であつたカリナがかつて、老僧に身をやつしたハーグシュ人と言葉を交わす処を目撃した者がいたらしい。その旨が上に進言されたのである。皇太子妃付きの侍女がハーグシュ人と接触した事実と、皇太子妃が失踪した晩もその侍女が夜通しの番を務めていた事実。直ちにカリナは疑われ拷問にかけられるに至った。

「余計な事は仰いますな、殿下」

フアランギスはラドキースの腕を掴みながら、声を落として必死の形相で説得を試みる。

「貴方は王国にとつて無くてはならない存在なんですよっ！ 浅はかな真似はなさいますな、後生ですから、殿下っ！」

ラドキースは歩を止めて、フアランギスを振り返った。

「かの侍女はあかしずきの晩、セレーデイラの部屋で私の姿を目にしているがら未だその事を一言も口にせぬらしい。拷問にかけられながらも口にせぬのだぞ。はなから告げておればあの様な目にあう事も無かつたであらうに……。このままでは死罪は免れぬ。無実の娘を死なせるわけにはゆくまい。咎めを受けるは私一人で充分だ。お前の方こそ余計な事は言うな。さもなければもう、お前を乳兄弟とは思わぬ」



静かに言い放つとラドキースは、最早フアランギスの必死の懇願に答える事もせぬままに目的の部屋まで来る。その扉を前にしてさえ、ほんのわずかな躊躇いも見せず衛兵が扉を開こうと手を伸ばすよりも前に自ら扉を開け放っていた。

一身に注目を浴びながら、血族上の父である王の前に進み出るや片膝を付いて頭を垂れた。会議の間であつた。腹違いの弟王子達始め、主な重臣達が王の周りに座を占めていた。王の座に次ぐ上座のみが空席となっていた。

遅いではないか……。王がそう口にする前に、皇太子が口を開いていた。

「捕らえられた侍女を直ちに釈放して頂きたく、平にお願い申し上げます、陛下。あの侍女に何ら罪はございません」

室内に沈黙が流れた。その永遠にも思える重苦しく張りつめた空気を破り、王が身じろぎをした。

「かの侍女の無実を断言する、その根拠は？」

王は重々しく問うた。

「ハーグシュ王女を城外へ逃亡させたは、この私だからです」

何の躊躇いも見せずに、皇太子は常日頃の静かな抑揚の無い口調で進言した。俄に場がざわめいた。フアランギスは部屋の片隅で崩れる様に膝を付き頭を抱えた。絶望的であつた。

「何……。だと？」

王の顔がみるみる怒りの色に染まる。

「いかな手引きがあつたにせよ、夜更けにあの城門の外へ出るは至難の業だという事は周知の知る処。それにも拘らず、何故あの力無き侍女に疑いをかけられたのか……。？ 王女は私が内部通路から脱出させた。総て私独りが行った事にて……。いかな咎めも受ける覚悟は出来ています」

淀み無く語られる皇太子の言葉の衝撃に、声を立てる者はおるか、

身動きする者さえいなかった。

第一章 終焉と苦悩、そして……（9）

その恐ろしい程の静寂を破ったのは王であつた。実の息子である皇太子の俄には信じ難い言葉を咀嚼し、その顔を怒りの色に染め上げた王の鋭い眼光が、跪くラドキースを射抜いた。

「何故だ！？」<sup>なにゆえ</sup> 何故その様な真似に走つた？<sup>なにゆえ</sup> 理由を申せ！ 皇太子ともあるうそなたがつ、これがどれ程の裏切り行為であるか分からなかつたわけでもあるまい！ ラドキースよっ！！」

王は拳を握りしめて激怒した。対する皇太子は静かな瞳のまま答えようともしなかつた。髪の色も瞳の色も異なつてはいたが、相對している王と皇太子の顔立ちはどこなく似ていた。並んで立てば、父子であるという事を疑う者などいなかったであらう。

答えぬ息子に王は痺れを切らし、どつしりとした机を忌々しげに叩いた。

「何故黙つておるのだ？ 理由を言えぬというか？」<sup>わけ</sup>

「理由を申し上げたからとて、私の罪が許されるわけでもありませんまい」<sup>わけ</sup>

「何っ！？」

「御処分、如何様にも。覚悟は出来ております故」

たまりかねた臣達の囁く声が、あつという間に室内を騒がしくする。

「陛下っ！」

フアランギスが立ち上がり、ラドキースの傍らに駆け寄り跪いた。しかし、彼が王に進言しようと口を開く前にラドキースの声がそれ

を遮っていた。

「恐れながら、一つ案じられるはこのファランギスの身の上です。この件についてファランギスは全く与り知らなかったこと故、どうか御咎め無きよう平にご容赦を賜りたく、陛下」

ラドキースは再度頭を垂れた。

「戯け者めが．．．、今この場で斬り殺されない事を幸いと思えっ！」

王は奥歯を噛み締め、怒りの形相を息子から背けた。

「連れて行けっ！」

王の命に、衛兵等は戸惑いの表情で皇太子を取り囲んだ。ラドキースは自ら腰の長剣と懷の短剣を衛兵へと差し出す。

「殿下．．．．．」

今にも泣き出しそうな顔をして見上げてくる乳兄弟に、ラドキースは微笑んで見せた。

黒將軍の異名で名高きユトレア皇太子ラドキースは、大罪人として捕われ、その後間も無く廃嫡される事となった。

ラドキースは、その昔、罪を犯したさる王族の為に建てられたという北の塔に幽閉された。牢とはいえ、そこはやはり王族の為の物であつた為、最低限の調度品が置かれ小綺麗にされている。地下牢に比べれば天国であつただろう。

皇太子の処遇に対しての重臣達の意見は真つ二つに割れた。王妃派の臣達は、彼の処刑を主張した。謀反は大罪。敵に与した者は、仮令王族に連なる者であろうともというのが彼等の主張であつた。残りの臣達は、皇太子の将としてのずば抜けた才覚を口々に、処刑

に難色を示した。唯でさえハーグシュの残党の動きがこちらで見られる今日こんにちである。だからと言って内通者に大軍を任せられようかと、王妃派の臣達は口角に沫を飛ばした。

散々悩んだ挙げ句、王は決断を下した。

「殺しはせぬ。だがラドキースは生涯をあの北の塔で終えるのだ」  
それが、王が息子に下した判決であった。

ラドキースが陽のあたらぬその北の塔に幽閉されてから、早半年程が過ぎようとしていた。今では皇太子乱心で囚われの身となった事を知らぬ者は、王国内にはいないであろう。

彼は、その日も粗末なテーブルに本を開きながらぼんやりとしていた。大罪人として捕われた以上、王妃や異母弟、そしてその一派達がこの自分の処刑を主張するであろう事は火を見るよりも明らか  
な事は分かっていた。そしてその覚悟も出来ていたというのに、思  
いの外、死を免れる事となった。

セレーディラは無事に逃げ仰せたらしかった。ハーグシュが王女  
の名において兵を募っているという報を、ラドキースはフアランギ  
スから聞かされていた。今頃どうしているのか……。本当に無  
事であるのか……。ラドキースは敵の王女の身を案じる。  
そして自嘲気味な笑いを漏らした。己はまさに祖国を裏切った大罪  
人なのだと……。改めて自嘲した。

ここへ来てから時間が余りあるせいか、ぼんやりと考え事をする  
事が多くなった。気が付けば放心している自分が愚かしく可笑しく  
て、独り苦笑する事もしばしばあった。それまでは忙しさと命の危  
険に常に付き纏われていた事もあり、ぼんやりしている暇などそう  
そう無かったというのに……。だが失脚した今、この自分を

眼中に入れている者など最早いないであろう。そう考えたら身体からも心からも、張りつめていた物がずっと消えた。

扉の叩かれる音に、ラドキースは現実には立ち返った。錠の外される音に続いて、小さくも頑丈そうな扉は軋みながら開いた。

「読書に熱中してらしたんですか？ それとも又、安心してただけですか？ 殿下」

フアランギスであった。からかいを含んだその言葉に、ラドキースは苦笑する。

「安心していただけた」

「復帰なさった時に立ち直れない程ボケないで下さいよ、殿下。宮廷には貴方を信じ、復帰を願う者も少なく無いんですから」

「私は、この生活が結構気に入っているのだがな……」  
そう言いながらラドキースは微笑む。

フアランギスは、縦長の細い窓の鉄格子を見て今日もやはり胸を痛めた。嫌でもこの王子が罪人である事実を痛感させられる。

「まあ、暫くは骨休めも良いですけど……」

「又、袖の下を使ったのか？」

「ええ、まあ……」

フアランギスがこの塔を訪れる事は、無論許されている事では無い。だがフアランギスは、そんな事にはおかまい無しな様子で衛兵達と塔の守役に賄賂を渡しては、ちよくちよくラドキースの前に姿を見せた。王や王妃派の臣達の耳にでも入れば又厄介事になるうかと、ラドキースはこの乳兄弟を諷めるのだが、てんで聞き入れやしない。それどころか、『私が命を惜しむ様な人間だと思っただけですか！？』と言って、本気で怒り出す始末。

この事が明るみに出た時、咎めの及ぶのがフアランギス一人で済むとは考えられなかった。恐らくは、エトラ・ファীগス一族に及ぶ筈である。下手をすれば、その郎党にまで及ぶであろう。ラドキースはそれを思い、物憂い溜息を洩らした。

「その内、破産するぞ」

「破産する前に、殿下にはここを出て頂きますよ」

ラドキースがからかい半分に言えば、大真面目な表情のファランギスからはそんな答えが返って来た。

ラドキースがこの塔に幽閉されてから間も無く、このファランギスは塔の守役になりたいと言って王に直訴したらしい。あまりの事にラドキースも呆れたものであった。貴族が牢獄の番人になった例など、未だかつて聞いた事も無かった。恐らくは、すげ無く却下されたのであろう、健気にもファランギスは袖の下を使ってラドキースに会いにやって来る。

「殿下、実は．．．．」

「ん？」

ラドキースの静かな微笑にファランギスはふと思う。まるで悟りきってしまったような顔だと．．．．。

「どうした？」

人の顔を凝視したまま口を開こうとしないファランギスに、ラドキースは片眉を上げて見せる。ファランギスは一つ呼吸し、ラドキースの向かい側の椅子を引いて腰を下ろした。そして、酷く真剣な表情で口を開いた。

「ハーグシュが決起しました．．．．」

ラドキースは一瞬目を見張ると、静かに目を瞑った。

「．．．．．早かったな」

あのクウインダン・サダガルドが存命していたのだ、必ず決起するとは思っていた。しかし、こんなに早く事を進めて来るとは．．．．。

「殿下のお考え通り、スラグがハーグシュに付きました。それにエドミナも．．．」

ラドキースは厳しい表情でファランギスを見た。

エドミナはユトレアの東に接し、又その北部をハーグシュに接する王国であり、前の戦では長らく中立の立場を貫いて来た王国であった。

「やはりか．．．．．」

ラドキースは呟いた。少なからず予想はしていた事であった。

「前の戦ではどちらにも加担せずに中立を守ったというのに．．．」

「．．．」

ファランギスの瞳には悔しげな色が浮かんで消えた。

「殿下の予想通り、スラグはエドミナに脅迫紛いな持ちかけでもしたのでしょう．．．それに貴方の失脚も大きかったのでしょうか。トーラン將軍の言葉を借りれば、“ハーグシュには獅子がいる、しかしユトレアは黒將軍を失った”ですよ。」

「戯言を．．．．．」

「実際そうですよ。貴方程兵達を惹き付ける将は他にいないし、あのエヴェレット卿を唸らせる程の軍略家も他にはいない」

沈黙が流れた。

「殿下の一番目の弟君を総大将に頂いて、近々王国軍が出陣します。私も、エトラ・ファールガス騎士団の派遣を命じられましたので近々．．．．．」

「そうか．．．、行くのか．．．．．」

「ハーグシュ決起前に貴方には復帰して頂くつもりだったのですが、後回しになりました。よもや、殿下無しで戦場に赴く事になるうとは．．．．．、不安ですよ、正直言って．．．．．」

「何を弱気な、お前らしく無いな」

「未だ嘗て無かった事ですからね。貴方抜きで戦に行くなんて事は．．．。案じているのは、私だけじゃありませんよ。あのトーラン將軍でさえ案じておられる。そもそも戦を何かの遊戯事と勘違いしている、あの第二王子が総大将というのからして既に危うい。能無しは能無しらしく、大人しくお飾りに甘んじてくれれば良いのですが、何かに付けて貴方を目の敵にして来たあの王子が、大人し



くしてくれるとは思えません。貴方以上の勇名を得ようと先走る事など目に見えている。既に貴方を支持していた者達を悉く遠ざけていますしね。トールン將軍までも遠ざけました。まあ、さすがにエヴェレット・フォンデルギーズ卿を手元に置かれるだけの理性はお持ちのようですね」

苦々し気に第二王子をこき下ろすファランギスに、ラドキースは小さく息を吐く。彼がラドキースの異腹の弟達をこき下ろすのは今に始まった事では無かったが、しかし今回ばかりは、ファランギスも心から怒っているらしい事がラドキースにも伝わる。確かに第二王子は私の強い気質をしており先走る傾向がある。あの異腹の弟が、ユトレアーの名参謀を傍らに置いたとして、その言を常に素直に聞き入れるかが案じられた。仮令将が王族であろうとも、愚かであれば臣も兵も簡単に背を向けるであろう。戦は遊びでは無いのだ。

「スキーレンドはどうなのだ？」

対ハーグシュの五年戦争の末、現王妃の血を引く第三王子が国王に祭り上げられたスキーレンド王国は、当然の如くユトレアーの属国としての扱いを受けている。

「思ったより期待は出来ません」

「そうか．．．、確かにそれ程の軍事力を持った国では無かったが．．．．．」

さもありなんである。強力な軍事力を持った王国であつたなら、そもそもあの様な他国同士による継承戦など起きなかつたのだ。

「さぞ、やり辛かろうな．．．．．」

「他人事（ひとごと）の様におっしゃいますね、殿下」

ファランギスは深い溜息を吐くと、額がテーブルに付く程にがっくりと肩を落とした。その姿にラドキースは目を伏せた。

「すまぬ．．．．．」

ファランギスが緩慢に顔を上げた。

「すまぬ．．．．．」

瞳を伏せ再度詫びる主君の姿に、ファランギスは何とも言えぬ気

持ちのまま首を横に振った。

「いいえ．．．．．。いいえ．．．、私にも責任がありますから．．．．．。あの時、私には殿下を止める事が出来なかったんですから」

ラドキースの姿があまりに痛々しく、ファランギス是不覚にも泣きたくなる。

「生きて、戻れよ、ファランギス」

「勿論です。貴方をここから解放する仕事が残ってますからね、兄弟殿」

ファランギスは無理に戯けた笑顔を作った。それがその時の彼には精一杯であった。

乳兄弟が去った後、ラドキースは窓辺に立った。鉄格子の嵌まった縦長の細長い小さな窓から表を覗くと、暗がりの中去って行く乳兄弟の姿がぼんやりと見て取れた。

ラドキースは懷から折り置まれた布を取り出した。漂白された木綿に美しく刺繍が施されている。金の冠と緑の鳶の絡む剣。

ラドキースはその紋を親指で撫でた。そしてセレーディラを想った。

## 第一章 終焉と苦悩、そして……（10）

ファランギスが出陣してしまうと、ラドキースは表の世界から完全に遮断されてしまった。塔の守役に戦況を尋ねたりしてみたが、平民出身のその守役はラドキースとあまり口を利きたがらず、あまり詳しい事は分からなかった。

毎日が単調に、何も分からぬままに過ぎ去って行った。

季節は移り変わって行き、どれ程の月日が過ぎ去った頃であったか、ある日を境に守役が姿を現さなくなり、年若い衛兵が食事を運び込みラドキースの身の世話をする様になった。不思議に思い尋ねてみると、守役は姿を晦ましたのだという。

「戦況は完全にユトレアが不利となりました。あの守役は、己の身を案じて城から姿を消したのだと思われます」

黒將軍に心酔するその年若い衛兵は、率直且つ礼儀正しくそう答えた。

ハーグシュの国土の大半が既に奪還された事を、ラドキースはその衛兵から知らされた。ハーグシュ、スラグ、エドミナの連合軍に加え、今ではハーグシュの民達も参戦しているのだという。男達は無論の事、女子供達から老いた者達までもが王国奪還の為に立ち上がったのだという。

「知らぬ間にハーグシュは正統な持ち主達の手に戻ったわけか。」

随分と早かった物だ……。国を奪われた者達の心意気には、やはり敵わぬものなのだ、そうは思わぬか？ ハイデル」

テーブルに頬杖をつき、細長い窓から見える空を眺めつつラドキースは衛兵に話しかける。しかしその実、彼の黒い双眸は何も映してはいなかった。その傍で衛兵が痛まし気な瞳を向けていた事に、ラドキースが気付く事は無かった。

ある日、すっかり顔見知りになった衛兵ハイデルが、年若い娘を一人伴って来た。見覚えのあるその娘の顔に、ラドキースは口を開く。

「そなたは……、確かカリナ……」

ラドキースに名を覚えられていた事が嬉しかったのか、カリナははにかみながらも、にこりと微笑み膝を折って頭を下げた。

「やはり女手があつた方が何かと行き届くかと思ひまして……本日からこのカリナが殿下の御身の周りの世話をさせて頂く事になりました。その……、彼女は私の幼馴染みでして」

衛兵はほんの少し頬を染め、カリナにちらりと目を向ければ、カリナも又控えめにハイデルへと瞳を向ける。

「そうなのか」

きつと相思相愛の仲なのであろう二人の様子に、ラドキースは静かに微笑む。

「すまぬな、カリナ。そなたは私の所為で、あの様な酷い目にあつたというのに……」

王子のその実直な表情と言葉にカリナは首を横に振って答えた。

「殿下は私を助けて下さいました」

「始めに私を助けたのは、そなたの方だつたであらうに……」  
カリナは微笑み、もう一度首を横に振った。

ハイデルとカリナは何くれと無くラドキースを気遣い、実に良く世話をした。ハイデルから報告される戦況は決して思わしい物では

無く、ラドキースは案じながらも何も出来ない己にもどかしさを感じ、そして罪人である事を理由に総てを諦めようとする。

己はここで何をしているのであろつか．．．．．ああ、生き恥をさらす為であったかと思ひ至る度に滑稽で、ラドキースは独り自嘲の笑いを零す。そして乳兄弟の身を案じ、親しかった者達の身を案じ、セレーディラの身を案じた。

「殿下、又、考え事をしておられるのですか？」

明るく唄う様な声に突然思考を遮られ顔を上げると、いつの間にかカリナが扉口に立っていた。

「．．．．ああ、すまぬ．．．」

カリナは愛嬌のある笑みを浮かべながら、手にしていた茶の道具を壁際の台の上に置く。

「そなたの訪れにも気付かぬ程、私は惚けてしまったようだ。武人としては失格だな」

苦笑するラドキースに、カリナもクスッと小さな笑い声をたてる。

「殿下が武人失格でいらしたら、世の武人は皆失格だとハイデルならきつとそう申しますわ、殿下」

「褒め過ぎだ」

「そんな事ございませんわ。殿下は総てにおいて優秀過ぎますもの、たまには惚けて下さった方が嬉しいですね。何だかほっと出来ますもの」

カリナの意外な言葉に、ラドキースは目を丸くする。

「そういうものなのか？」

「はい、それはもう！ 私の様なおつちよこちよいで出来ない者にとっては」

瞳を見開いて大仰に頷いて見せるカリナの姿に、ラドキースも思わず笑い声をたてる。ともすれば塞ぎがちであったラドキースの心は、大らかで明るい気質のカリナに随分と癒された。

「殿下、只今お茶を御入れ致しますわ。とっても美味しい焼き菓子をお持ち致しましたから」

「ほう？　どうりで良い香りがすると思った」

「でございますよう？　私が焼いたんですの。ハイデルもお菓子だけは褒めてくれますのよ、殿下」

カリナは答えながらてきぱきと動く。

「ハイデルはいるのか？　いるなら呼んでくれ。せっかくだから三人でそなた自慢の焼き菓子を楽しまう、カリナ」

ラドキースの望みに、カリナは実に嬉しそうに頷いた。

近頃では、こうしてハイデルとカリナがラドキースの話し相手を務める事も少なく無かった。話題は専ら思わしく無い戦況へと傾くのだが、沈んだ空気を振り払ってくれるのは決まってカリナの朗らかさであつた。

「そなた等、祝言は上げぬのか？　カリナももう、この秋で十九であろう？」

ハイデルとカリナの微笑ましい様子にラドキースが尋ねれば、二人揃って頬を赤らめた。

「そつ、その・・・」

急に口ごもるハイデルと俄に憂いを帯びた表情を見せたカリナに、ラドキースはおやと思う。

「何か問題でもあるのか？　そなた等、想いあっているのであらうに？」

「それが・・・、色々と・・・」

ハイデルまでもが暗い表情を見せ溜息を洩らす。

「カリナの両親も、私の両親も、私達の仲を認めてくれないものですから・・・」

ハイデルは騎士階級の出であり、カリナは裕福な商家の娘とはいえ一般市民であつた。ハイデルの両親は、跡取り息子であるハイデルの嫁には同じ階級の娘を望み、カリナの両親は貧乏騎士などに

娘はやれないと突っぱねているのだと言う。

「階級．．、貧富．．．か．．．．．。その様な物の無い世を造れたら良いのにな．．．。」

ラドキースの呟きに、ハイデルとカリナは諦めに似た微笑みを浮かべていた。

それから大して日も経たぬ内の午後の出来事であった。ラドキースは狭い窓から外を眺めていた。先程から本城の大きな窓の内側へと目を凝らしているのだが、今日はやたらに人が慌ただしく行き来している。

「気のせいかな、城内が騒がしく見えるな、カリナ」

「えっ？」

せつせと牢内の掃除に精を出していたカリナは、ラドキースの言葉に顔を上げた。その時、塔の階段を駆け上がって来る軍靴の音が聞こえて来た。余程に急いでいるのか、あっという間に階上まで来ると、扉外を守る衛兵と二三言葉を交わしてから扉を叩く音を響かせた。鍵は掛かっていなかったらしく直ぐさま扉が開くと、血相を変えたハイデルが駆け込みラドキースの前に跪いた。

「どうしたのだ？」

「総大將が討ち取られ、我がユトレア軍は壊滅状態だとの報がもたらされました」

カリナが息を吞んで両手で口を覆った。それと同時に、彼女の手を離れた筈が石畳の床に落ちて音をたてた。それが酷く大きな音に感じられた。

「誠か？」

ラドキースは衝撃に双眸を細める。

「はい。北と東の砦も既に落とされ、敵軍はもう王都のすぐ傍まで迫っているとの事です。こうなつては、もうどうにもなりませんま

い」

ハイデルは苦悶と焦燥の表情で拳を握りしめた。

討ち取られた総大将はユトレアの第二王子、ラドキースの異腹の弟であった。それにも拘らず、ラドキースは血を分けた弟の死に悲しみを覚える事が出来なかった。幼い頃から縁の無い間柄であった。他人以上に他人であり、隙あらばこちらの失脚を狙う敵でもあった。その異母弟が、ユトレア北部の守りの要の一つであった砦で討ち取られた。恐らくは付き従っていた名軍師フォンデルギーズも命を落としたのであろうかと思うと、ラドキースはいたたまれない思いがし、溜息を吐いた。フォンデルギーズには少なからずの縁があったと共に、良き師であったのだ。また、ウルゲイル・トーランは．．．？ フランギスは．．．．．？ 案じてみても、最早詮無い事の様に思われた。

「このユトレアの歴史もいよいよ幕を閉じる時が訪れるのか。思えば、結構長い歴史であったのにな．．．．．」

ラドキースは、感慨深気にそんな言葉を口に上せる。

「落ち延びて下さい！ 殿下！」

ハイデルは必死の面持ちで訴えた。

「殿下さえ生き延びて下されば、このユトレアの希望は途絶えません、どうかっ！」

しかし、ラドキースは悲し気な目をして首を横に振った。

「すまぬが、それは出来ぬよ、ハイデル」

「殿下．．．、このままでは貴方のお命が．．．．．」

しかしラドキースは無言のままハイデルの腕を取って立たせると、顔色を失い立ち尽くしているカリナの元へ歩み、その手を取ってハイデルの傍らへ導き二人の手を重ねる。

「ここで、そなた等の祝言を行おう」

「えっ？」

ラドキースはうら若い男女の重ねられた手を包み込み微笑む。



「ハイドルよ、そなたはこのカリナを生涯に渡り愛し、守り、慈しみ、いかなる時も苦楽を共にする事を、その剣にかけて誓うか？」

ハイドルは焦燥に加え困惑の表情を顔に貼付けたまま、言葉を失っていた。そんなハイドルにラドキースは再度尋ねる。

「誓うか？ ハイドル」

穏やかな王子の問いに押され、ハイドルはやがて頷く。

「はい、誓います、殿下」

ラドキースは微笑み、カリナへと穏やかな瞳を向ける。

「カリナよ、そなたはこのハイドルを生涯の伴侶として、愛し、尽し、助ける事をそなたの名にかけて誓うか？」

「はい、誓います、殿下」

カリナは瞳を潤ませながら答える。

「では、誓いの口付けを」

ラドキースが二人の手を放し後ろへ下がると、二人は戸惑いながらも見詰めあい、ハイドルは身を屈めてカリナの唇をそつと塞いだ。「これでそなた等は晴れて夫婦だ。ハイドル、カリナを連れて逃げろ。誓い通り彼女を守ってやれ」

「でつ、殿下っ！？」

思いの他の言葉に、ハイドルは激しく動揺する。

「王都が陥落した時、女達の身がどうなるかなど想像に難く無からう。今のうちに落ち延びろ」

「ならば、殿下も」

「私がいてはそなた等に危険も及ぼう」

「しっ、しかし！」

尚も引こうとしないハイドルに、ラドキースはその表情に研ぎ澄まされた刃の鋭さを垣間見せる。

「これは命令だ。落ち延びよ」

ラドキースの厳しい声音に、ハイドルはとうとう項垂れた。その様子にはラドキースも表情を和らげる。

「今の内に礼を言っておこう。そなた等には誠に感謝している。」

思わしくは無かった戦況に、私は王国を案じていた一方で敵国の王女の身をも案じていた。その様な愚かな私を、いつも慰めてくれたそなた達に私は…………、罪悪感を抱きながらも縋っていた」

「殿下…………」

ハイデルは言葉を詰まらせ、カリナは悲しみの色を瞳に上せる。その瞳からは見る間にぼろぼろと涙が落ちてくる。

「一つだけ、最後の頼みを聞いてはくれぬか？」

「な、何なりと、殿下」

ハイデルは悲痛な面持ちで答えた。

「もしも私の乳兄弟が生き延びていたら、これを渡して欲しい」  
言いながらラドキースは左手から指輪を抜き取った。冠に蔦の絡んだ剣の紋章。ラドキースの紋の入った指輪であった。

「分かりました、殿下、仰せのままに」

ハイデルは涙を流しながらその指輪を受け取ると、懐の物入れに大切に仕舞った。

「そなた等の息災を祈っている。さあ、行け」

しゃくり上げながら泣くカリナを抱える様にして、ハイデルも又泣きながらやがて塔を後にした。

二人が去った後、扉の鍵も塔への入り口の鍵も閉められる事は無かった。他の衛兵達にしても逃げ出した者も少なくは無かったであろう。もはや塔の鍵をかける者はいなかったにも拘らず、ラドキースは牢獄から外へ出ようとはしなかった。

そしてほんの数日の後に王都は陥落し、ユトレアの歴史は終わりを告げた。あまりに呆気無末期であった。

テーブルに肘を付きながらラドキースは階下からの複数の靴音を聞いていた。片手には、セレーディラが残して行った刺繍入りの手

巾があつた。国が滅びたというのに、不思議な程動じてはいない自分をラドキースは訝しむ。父である王と異腹の末の弟が自害した事は、先程敵の兵から聞き知った。肉親が命を落としたというのに、やはり悲しみという感情は湧いてはこなかった。元から縁の薄い肉親達ではあつたが、これ程に何も感じないとは……………。

扉が開き軍装の大柄な人物が入つて来る。“ハーグシュの獅子”クウインダン・サダガルドであつた。そしてその後ろから現れたのは、ラドキースが片時も忘れた事の無かつた敵の王女セレーデイラであつた。ラドキースは静かに微笑んだ。

「久方ぶりでごさつた、皇太子殿下」

サダガルド將軍は、武人らしい素振りですらラドキースに頭を下げた。

「私はもう皇太子ではないよ、將軍」

ラドキースは短く笑つた。

「ユトレアも滅びた故、ただの捕虜という処かな。それにしても早かつたな、さすがは名將と名高いだけはある」

「貴殿が参戦されなかつたからだ。黒將軍が相手であつたなら、こうはいかなかつたであらう。それに貴殿があつた時、身を以て我らの元にお返し下された姫の存在があつたからこそ、味方も集まり申した。他国を味方につける事も出来申した。改めて礼を申し上げます」

「敵に礼を申すのか？ あれは別にそなた等ハーグシュの為にした事ではない。私自身の為にした事ゆえ、気にするな」

セレーデイラは一言も口を開かず、ラドキースを見詰めていた。

鎧こそ着けていなかったものの、鎖帷子を着込んだ略軍装であつた。

「我が主君の名において、エドミナとスラグには貴殿の助命を願うつもりだ。ラドキース殿下」

サダガルドが声を落として打ち明けた。

「それがハーグシュの貴殿へのせめてもの感謝の意だ」

「心遣い、忝く。だが私にはとうに定めを受け入れる覚悟は出来

ている故、そうして頂く必要は無い」

ラドキースの穏やかな拒絶に、サダガルドは沈黙する。やがて隣のセレーディラと何やら言葉を交わすと、一礼し部屋から出て行った。

耳が痛む程の静寂が流れ、二人は暫くの間言葉も無く見詰めあっていた。セレーディラの瞳から涙が零れ、やがてゆつくりと歩を踏み出すと、ラドキースも引き寄せられる様に立ち上がった。そしてはじかれた様に駆け寄るセレーディラを抱きとめ、両腕の中におさめた。

「セレーディラ．．．．」

ラドキースの腕はセレーディラの細い背をきつく抱き締めた。

「そなたが無事で．．．、良かった．．．」

ラドキースの溜息の様な安堵の声に、セレーディラは堪えきれずに泣き声を漏らし肩を震わせる。

「あの時、貴方の元を離れた事を、どれ程後悔したか知れませんが、貴方が恋しくて恋しくて、幾度ハーグシュを捨てて貴方の元へ戻ろうと考えた事か．．．」

ラドキースの胸に顔を埋めながら、セレーディラは泣きながら囁いた。

「スラグがユトレア王都に刺客を放つたと聞いた時、貴方にもしもの事があつたらと、身の引き裂かれる思いを致しました。もしか貴方が自害などなされやしないかと、夜も眠れませんでした。貴方がご無事で．．．、本当に良かった．．．」

ラドキースはセレーディラをかき抱きながら胸を痛めた。やがて彼はその愛しい頬に触れ、その泣き顔を覗き込み、そしてその唇を塞いだ。幾度も幾度も唇を重ねた。

「そなたに、もう一度会えて良かった．．．」

それはまるで、今度こそ誠の今生の別れの言葉の様であった。

又来ると言つて去ろうとしたセレーディラに、ラドキースは異を

唱えた。もう来るなと……。後が辛くなるだけだと優しく諭した。セレーデイラは悲し気に涙を流したまま、何も言わずに出て行った。

その夜、眠れぬままに窓辺に立ち、外の暗闇に目を向けていると密やかな足音が聞こえて来た、まるで人目を憚るかの様に、扉の錠の外される音が密やかに響く。

たった一つの蜜蝋の灯りに、やがてセレーデイラの姿が浮かび上がった。

「もう……、来るなと申したであらうに……。」

ラドキースの力無い呟きにセレーデイラは答えず、何の戸惑いも後ろめたさも見せずに彼女はラドキースの前に駆け寄ると、己の腰から剣帯を外してラドキースへと差し出した。長らく目にしていなかったラドキースの愛剣であった。懐かしさに思わず手を伸ばす。

なにゆえ  
「何故？」

ラドキースが尋ねても、セレーデイラは答えずに彼の背後から手にしていたマントを広げ着せかける。そしてすかさず前に回ると、そのマントの留め金を留めラドキースを見上げた。

「わたくしと逃げて下さいませ、ラドキース様」

低く口早に囁かれたセレーデイラの言葉に、ラドキースは瞠目した。セレーデイラは泣いてはいなかった。

「……………ハーグシュを取り戻したというのに、そなたが逃げて何とする？ 私はそなたの将来を奪う様な事は望んでいない」  
ラドキースは己のマントの留め金を掴んだままでいたセレーデイラの手を、やんわりと包み込み引き離れた。

「嫌です……、嫌です……！ラドキース様……………！」

鬼気迫る表情でセレーデイラはラドキースに縋り付いた。

「わたくしの役目は終わったのです。ハーグシュは戻ったのです。治める人間は、わたくしでなくとも良い筈です。貴方は仰って下さいましたね？ わたくしが生きれば他の事はどうでも良いと．．．．。わたくしとて同じです。貴方さえ生きて傍にいて下さったら、他の事などどうでも良い．．．．。わたくしには貴方さえいらして下さったなら．．．．。」

「祖国を裏切るのか．．．．？」

ラドキースの残酷な問いにセレーディラは苦渋の色をその表情に浮かべながら、尚も強い瞳でラドキースを見上げる。

「ハーグシュは取り戻しました。わたくしのすべき事は成したつもりです。だから．．．、もう総てを捨てたい。祖国を裏切ろうとも貴方のお傍にいたいのです、ラドキース様。共に逃げて下さいませ。急がねばスラグ軍がじきに到着致します。逃げるのはこの慌ただしさに乗じた今しか無いのです。貴方が定めを受け入れてお命を終わらせると仰るならば、わたくしは貴方の後を追う所存です」

ラドキースは身動きもせず、唯々哀し気にセレーディラを見詰めた。決意を固めた女は強い。セレーディラの空色の瞳の一步も引かぬ気迫を見て取り、ラドキースはやがて彼女を荒々しく抱き締めた。その黒い瞳にも今や気迫が宿っていた。そしてラドキースは己の剣を身に帯びた。

その夜、ラドキースとセレーディラの姿は、城内から忽然と消えたのであった。

## 第一章 終

## 第二章 幸福の灯々トラジエクにて（1）

\* 神の娘エルディアラは、人間の青年に恋をして、父を裏切り総てを捨てた。

北方神話「神の娘」より

季節は夏の始め、森の木々はどれも葉を重たそうに繁らせている。陽は既に翳っている。夕暮れ時の事であった。

腕に女を横抱きに抱えた男が森の中を急いでいた。その後ろからは、一頭の馬が従順に付いて来る。女は身重であり、吐く息が荒い。どうやらこの森の中で産気づいてしまったのであろう。

「地面に轍の跡がある。民家があるやもしれぬ。いざとなれば私が赤子を取り上げてやる故、しっかりしろセレーディアラ」

黒髪の青年――ラドキースは、産気づき苦し気なセレーディアを励ましながら足早に進んでいた。

つい十日程前まで、二人は大陸中原のウォーデン王国のルト州の州都であるルトの町に暮らしていた。一年半前にユトレアから脱出してより二人は各地を転々とし、ひよんな事からルトの領主に拾われ、ラドキースは領主ルモンド・フェビアンに使える事となったのであった。

ルモンド卿はラドキースの才智と剣の腕を甚く気に入り、ルトの騎士団に雇い入れ、随分と彼を重用した。それ故小さなルトの町中に二人は居を構え、領主の加護の許、ひっそりとささやかな生活を送る事が出来たのだ。

ルトに落ち着いた当初のセレーディアは随分と苦労をしたものであった。何せそれまで、食事を作った事はおろか、洗濯も掃除も市場で買い物をした事すらも無かったわけである。食事の仕度にしても、初めは竈にどうやって火を起こして良いかも分からず、刃物を持てば野菜の代わりに己の指を切ってはラドキースをはらはらせる始末であった。

その点、ラドキースの方は従軍経験があったせい、一通りの事はこなせた。落ち込むセレーディアに、ラドキースは笑いながら言ったものであった。

「少しずつ学んで行けば良いではないか。共に学んで行こう」  
そうしてラドキースは優しくセレーディアを抱き締めてやった。  
やがてセレーディアは、ラドキースの手付きを見ながら刃物の使い方を覚え、火を起こす事を覚え、味は別としても食事らしい物を作る様になった。どんなに酷い物でも、ラドキースはセレーディアの作った物を嬉しそうに食べた。

「全然美味しく無いのに……、ラディったら……」



セレーディアはちよくちよくラドキースに申し訳なく思いながら、少しずつ料理を覚えていった。洗濯などは、井戸端の女達の手付きをこっそり盗み見ながら覚えた。食事の仕度も洗濯も、何と大変な仕事だろうとセレーディアは思ったが、それがラドキースの為だと思うと楽しくなった。

又ある時、ラドキースはセレーディアの荒れた指先に気付き心を痛め、翌日手荒れに効くという軟膏を買い求めて帰って来た。セレーディアは無邪気に喜び、ラドキースを幸せな気分にしたものであった。又ある日、ラドキースが刺繍の道具を買ってやると、セレーディアは大喜びで刺繍を刺した。出来上がった物を市場へ持って行ったら中々の額で売れたので、セレーディアもラドキースも目を見開いて驚いたものであった。

そして、そんなささやかな幸福の中、やがてセレーディアは身籠ったのであった。

ウォーデン王国のルトの領主ルモンド・フェビアン卿は、“ラディ”のその理知的な物言いと、ひよんな時に垣間見える教養、そして剣の腕とその身に纏う雰囲気から、この自分の息子程の歳の青年は、かつては一角の人物であったのではと考えた。

歳を尋ねれば、まだ随分と若い。それにも拘らず、物事に動じない老成した落ち着きを持っていた。又、そうした己の美点を鼻にかけないあたりは、何やら総てのものを超越している様にさえ見えた。ルモンド卿は、この青年を雇ってから程無くして騎士小隊を任せてみる様団長に口添えをした。

「あの青年は素人じゃありませんね、ルモンド卿」

騎士団の団長がルモンドに耳打ちした。成る程、命令しなれた様

子に隊を扱い慣れた様子は確かに素人では無い。その後団長がルモンドに、ラデイに大隊を任せたいと伺いを立てて来た。既にラデイの実直さに信頼を置いていたルモンドは、それに異を唱えはしなかった。

そもその出会いは、ルモンドが公務で王都に向いたその帰り道、盗賊に襲われた処を、このラデイに助けられたのだ。

ルモンドはラデイの剣さばきに見張った。しかも一瞬の内に倒された盗賊達は、足を斬り下げられたか、もしくは平打ちされて気を失ったかのどちらかで、驚く事に彼は一人として殺しはしなかったのである。これ程の腕を持つ者は王都にさえないのでは無いかと、ルモンドは感心したものであった。

青年は美しい娘を伴っており、旅の途中らしく宿は定まっていなと言うので、ルモンドは二人をルトの領主館へと連れて来たのであった。青年はラデイと名乗り、連れの娘はセリーと名乗った。身の上を語りたがらない様子であったが、ラデイが短く語った処によれば、結婚を反対されたので故郷を出て来たのだと言う。要は駆け落ちか……と、ルモンドは納得した。

青年が時折娘を気遣う様子が微笑ましかった。品の良さからして騎士階級では無く、貴族の息子と子女かもしれないとルモンドは考えた。そして親心を隠せずに、ルモンドはこのルトに留まる様二人に薦めたのであった。

そして二人は、このルトに居を構え、セリーには子も出来た。ルモンドは己の息子がとんだ放蕩者で家に殆ど寄り付かなかった事もあってか、出会ってから間も無くして既に、この二人に親心に近い感情を持つに至った。そして二人の子が生まれる日を、指折り数えて楽しみにしていたのである。

だが臨月<sup>うみづき</sup>に入った頃、突然西のハーグシュ王国からの使者だという者が訪れた。その使者の用向きに、ルモンドは内心衝撃を受けたが顔には出さず、にこやかにその使者の要請に頷いた。そして使者

が去った後、領主館の敷地内にある練兵場にいたラデイを呼び寄せた。

「お前は、西のユトレアの皇太子とハーグシュ王女が逃亡しているという話を知っておるか？」

「ちらと耳にした事がありますが．．．」

ラデイは顔色も変えずに答えた。

「そうか．．．。いや何、先程、ハーグシュの搜索人がここを訪れたのでな．．．。まあ、そんな事はどうでも良いのだが。お前に渡しておきたい物があるのだ、ラデイ」

そう言つて、ルモンドはラデイが姿を見せる前に認めておいた書類を差し出した。

「これは？」

ラデイは折り畳まれた二部の書類を受け取りながら尋ねた。

「ウォーデンと近隣諸国で通用する通行手形だ。お前の分とお前の妻さいの分と．．．。ひよつとしてあると便利かもしれないと思つてな。必要無いかも知れないが、まあ、持っておいても損はせんだろう」

ラデイは手形を開いて目を通すと、ルモンドへ目を向けた。

「忝く、頂戴致します、ルモンド卿」

ルモンドは頷いた。

「セリーによしなにな。臨月うみつぎであろう？ 体を労る様、伝えてくれ」

そしてそれがルモンドの、ラデイの姿を見た最後となった。

「成る程、あれが．．．、名高きユトレアの黒將軍であつたか．．．。」

ラデイとセリーが人知れずルトを去った後、ルモンドは独りごちた。死なせるには、あまりにも惜しい。無事に逃げおおせれば良い

が……。ルモンドは人知れず、そう願ったのである。

「セリー、民家だ」

ラドキースの心做しか弾んだ声に、その腕の中で苦し気な息をしていたセレーデイラは、顔を上げ前方に一軒の田舎家を認めると、ほっとした様に微かに微笑んだ。

家の前まで来ると、ラドキースは横抱きに抱えていたセレーデイラを下ろして扉を叩いた。ほどなくして扉が開き、髪に随分と白い物の混じった、老年に差し掛かるうかというがたいの良い男が顔を出した。そしてラドキースが物を言うより先に、膨らんだ腹部を押さえて苦し気に喘いでいるセレーデイラの姿を見るや、家の奥へ向かって吠える様に叫んだ。

「ナスカっ！ おいつ！ ナスカっ！！」

「何ですよっ！ 怒鳴らなくなっただって聞こえるよっ」

威勢良く言い返ししながら、妻らしき女が戸口から顔を覗かせると、これ又叫んだ。

「何だいっ！？ 産気づいてるのかいつ！？ 早くお入りっ！！」  
ナスカと呼ばれた初老の女は、セレーデイラの細腕を取って支えながら中へと入れた。

「お前さん、湯を沸かしな！ 沢山だよっ！」

「うおっ！」と叫んで、男は湯を沸かしに走った。

「忝い」

ラドキースが礼を言いながらセレーデイラを抱え上げようとする  
と、ナスカがそれを止めた。

「いいんだよ。少し歩かせた方が、いいんだ。この森の中で産気づいちゃったのかい？ 心細い思いをしただろうさね。もう大丈夫だよ。あたしが立派に子を取り上げてやるからね。気をしっかりお

持ちよ」

ナスカはセレーデイラに優しい言葉をかけながら、その身を支え寝台のある奥の部屋まで連れて行った。

「お前さんは、この娘の旦那だろう？」

「ああ」

「服を脱がしておやり。下着だけにしてやんな」

ナスカはラドキースにそんな言いつけをしつつ、戸棚から敷布を引っ張り出して、てきぱきと寝台の上に重ねて敷き始めた。面食らったのはラドキースである。

「ちよつと！ なあゝに恥ずかしがつてんだい？ いい若いもんが。生まれて来る子は待つちゃくれなんだよ！ 早く脱がしてやんなつ！」

ナスカの容赦無い叱咤に内心戸惑いながらもラドキースは、セレーデイラが衣服を脱ぐのを手伝つてやる。

「ちよつとバレンつ！ 洗濯桶を煮え湯で洗って持って来とくれ！ あと清潔な布だよ！ 何でもいいから持って来なつ！！」

ナスカは腕まくりしながら怒鳴る。

「ほれつ、布だ！」

男が部屋に入ってきて来ると、ナスカが叱り飛ばした。

「お前さんは入っちゃ駄目だろうが！ 何考えてんだい！」

ナスカは布を引つたくと、夫を追い出し戸を勢い良く閉めた。

そして白の木綿の下着姿になったセレーデイラに手を貸して寝台に座らせた。

「ほら、あんたもさつさとマントを脱いで。あんたも手伝うんだよ、この娘の旦那ならね」

「私もか・・・？」

「当たり前だろう。あたし一人じゃ無理だよ」

「それもそうだな」

男子が産屋に入り、子の出産に立ち会う事などありえない事であったが、ラドキースは即座に腹を決めマントを脱ぎ捨てた。そもそ

も一度は己が子を取り出そうと腹を括ったくらいである。産屋が一般的に男子禁制であろうと、そんな事にかまってはいらなかった。

「名前は何てんだい？」

ナスカが丸っこい身体を屈めて、物入れをがちゃがちゃとかき回しながら唐突に尋ねた。

「彼女はセリー、私はラディだ」

ラドキースは息の荒いセレーディアの肩を抱き抱えながら答えた。  
「そうかい。あたしはナスカだ。亭主はバレンていうんだ。ああ、あつた、あつた！」

ナスカは大振りの鋏を手にしていた。

「ありやりや、駄目だこりや。見事に錆びてるよ。あんた、ラディ、切れる短剣が何か持つてるかい？」

「ああ」

ラドキースは腰から短剣を鞘ごと抜いてナスカに差し出した。

「こりやいいや。借りるよ」

「おーい！ 桶と湯だぞう！」

バレンが戸の向こう側で叫ぶと、ナスカは戸口へ駆け寄り、湯を沸かし続ける様に夫に言いつけながら、たくましい腕でそれらを受け取り床に置いた。そして両手を打ち鳴らすとセレーディアに向き直った。

「さあ、セリー。準備はいいよ。いつでも産んでいいからね！」

荒い息を吐きながら、セレーディアは頷いた。

「私は、何をすれば良いのだ？」

馬の出産ならまだしも女の出産の事など、いかなラドキースといえど知る筈も無い。

「セリーの背を支えて、手を握って、汗を拭いて、励ましてやりやあいんだよ」

ナスカは豪快に笑いながら、ラドキースにそう教えた。



## 第二章 幸福の灯々トラジエクにて（2）

断末魔かと思ひ紛う程の苦し気に尾を引く叫びが、もうどれ程の間ひつきりなしに続いていた事であろうか．．．。

セレーディアのあまりの苦しみ様に、ラドキースは気が気では無かった。

「彼女は誠に大事無いか？　こんなに苦しんでいるというのに」  
セレーディアの手を握り締めるラドキース手の甲には、彼女の爪が食い込み血が滲んでいる。

「女はね、男より強いんだよ。男共に耐えられない痛みも、女には耐えられるんだ。何せ子を産む様に出来てるからね」

ナスカは、ラドキースを安心させる様に笑顔を見せた。

「ほら、もう頭が見えてるよ、セリー！　もう一息だよっ！」

セレーディアの肌着の中を覗き込み、ナスカが励ましの声を上げる。

汗と涙に塗れたセレーディアの苦悶の表情に、ラドキースは唯、励ましの声をかけ続ける事しか出来ず、それが如何ともし難い程に腹立たしく且つ情け無く思えた。これ程の遣る瀬ない思いは初めての事であった。セレーディアの苦しむ姿を見るくらいなら、己の胸を抉られた方がまだましであろうにとラドキースは思う。

「せめてその痛み、私が代わってやれたなら．．．セリー．．．」  
ラドキースは思わず呻いていた。



バレンはというと、隣室から聞こえて来る苦し気な叫び声にいたたまれず、そわそわ、うろろと歩き回っていた。時折、思い出した様にテーブルの上の錫の杯を掴んで酒を煽る。もうどれ程の間、そうして広くも無い部屋の中をうろろと歩き回っていた事が．．．窓の外に目を馳せてみれば、とつぷりと暗い闇が辺りを包んでいる。季節は初夏。一年で一番、太陽の神が長らく輝く時期であった為に日没も遅い。その日没からどれ程の刻が過ぎたのか．．．森の木々も重た気に葉を茂らせている為、月の娘の麗しい姿も拝めはしない。しかし優に夜半は過ぎていただろう。いつものバレンならば、とつくに夢の中の住人になっっている頃合いであったが、昂奮の為に目は冴えに冴えてしまっていた。

「まだか？ 何だか、かかあの初産よりも時間がかかつたらんかあ？」

バレンは、いらいらと落ち着き無く歩き回り続ける。

「うゝつ、まだか？？」

バレンが痺れを切らしたその時、寝間から元気な赤子の泣き声が聞こえて来た。

「やったかあーっ！！」

バレンが大声で叫べば、打てば響く様に「やったよーっ！！」というナスカの声が返って来た。

「どっちだっ！？」

バレンは扉にへばりついて尋ねる。

「器量良しの女の子だよ！」

ナスカは、セレーディラの後産の世話をしやりながら夫に大声で答えてやった。バレンは大声で笑い出した。

ラドキースはナスカに命じられて、生まれ落ちたばかりの我が子

に恐々と湯を使わせていた。壊れ物でも扱つかのような手付きで綺麗に洗ってやると、ナスカに指示された通りに清潔な布に包んでそつと抱き上げ、ぐつたりと半ば意識の無いかの様な体のセレーディラの傍らにそつと寝かせた。

赤子の泣き声に、セレーディラは薄らと目を開いて微笑んだ。ラドキースはその髪を優しく撫で、口付けを落とした。

「良く耐えてくれたな、セリー。元気な子だ」

嬉しそくに破顔するセレーディラの額に、ラドキースは再度口付けを落とした。

「ラディの言う通りだ。本当に良く頑張ったねえ、セリー。偉いよ、一人前の女だよ、お前さんは」

ナスカも優しく声をかける。

「いい子じゃないか。この泣き方を見て御覧よ、元気一杯だ」

ラドキースの横からナスカも赤子の泣き顔を覗き込んだ。

「何やら、猿のようだな．．．」

ラドキースの正直な感想に、ナスカが大笑いする。

「お前さんだって、生まれたての時はこんなだった筈さ。安心おし。こりゃあ大層な器量良しだよ。このナスカが断言してやるとも！」

セレーディラは幸福そうな微笑みを受かべて、赤子をじつと見詰め、そつと頭を撫でたり、頬を撫でたりしている。子を産んだばかりの女は美しいと、そう耳にした事があつたが、確かに美しいとラドキースは思う。あれ程に苦しんだ後だというのに．．．、何故それ程までに美しく見えるのか．．．。

「さてラディ、お前さんはちよつと外に出といで。内の人が痺れを切らしてるだろうから、ちよいと父親になった感想でも述べてやつとくれ。セリーは、ちよいと起き上がれるかい？ この子に乳をやらないとね。それに着替えもしなきゃね。汗だくだろう？」

ナスカは辺りをてきぱきと片付けながら、ついでにラドキースを

寝間から追い出した。

追い出されたラドキースを、今度はバレンの豪快な笑い声が迎えた。

「やったなあっ！ やったなあっ！！」

上機嫌なバレンがラドキースの両腕を己が手でバンバンと叩くと、ラドキースは、彼にしては珍しくも照れた笑みを見せた。

「ほれっ」

いきなり突き出された錫製の質素な杯をラドキースが受け取ると、バレンは上機嫌で酒を注いだ。

「祝杯だ」

言うやバレンは、ラドキースの杯に己の杯を勢い良くぶつけて煽る。ラドキースも笑いながらそれに倣った。

「誠、忝い。誠に助かった。最悪、私の子を取り上げる覚悟だったが、子の取り上げ方など知らなかったし……」

「わっはっはっはっ！ そりゃ、そうだろ。良かったなあ、無事に生まれて。本当に良かったなあ。時間がかかるからやきもきしたが、元氣な泣き声じゃないか。あんたのかみさん、細っこいから時間がかっちまったんだな、きっと。かみさんに感謝しろよ。大変な思いして産んでくれたんだからなあ。女っちゅうんは、本当にすごいよ。男にゃ、逆立ちしても出来ん事をしてくれるんだ」

「誠だ……」

ラドキースはしみじみと頷いた。

「はははっ。良く飲んでるねえ」

「はい……。何だか不思議な気分です。」

「そうかい？」

「心がとても安らぐ様な……、何だか上手く言えませんが……」

「セレーディラは、ナスカの指示を受けながら、赤子に初めての乳を与えていた。一所懸命に乳に吸い付く赤子が、言葉に出来ない程に愛しく思えた。」

「これで．．．、大切なものが二つになりました」

「一つはこの子で、一つは、あの男前の旦那さんかい？」

セレーディラは少し頬を染めて頷いた。

「お前さん、良い顔してるよ、セリー。幸せそうだ」

ナスカは目を細めて言った。

## 第二章 幸福の灯々トラジエクにて（3）

赤子はエルディアラと名付けられた。セレーディアラの希望により、北方神話の全能の神の娘の名から取られた。

「この子が将来エルディアラのように、総てを捨てても愛する人と幸せになれます様に。今のわたくしのように……」

夢見る様な表情でセレーディアラは囁いた。

「父を裏切つてでもか？」

ラドキースは忍びやかな低い声で笑った。小さなエルディアラは俄造りの干し草の寝床ですやすやと眠っている。ラドキースとセレーディアラは小さな寝台に身を寄せ合い、獣脂の蠟燭のささやかな灯りの中、傍らの小さな寝床で安らかに眠る娘の顔を眺めていた。やがてセレーディアラが眠りに落ちてても、ラドキースは暫くの間、妻の甘く静かな寝息を聴いていた。

「エルや、これを見る、ベロベロバァ」

ナスカの腕の中でむずかる赤子を、バレンが戯けた顔を作つてあやしていた。

「馬鹿だねえ、お前さん。まだ目なんか見えやしないよう」

「あ、そうか……。弱るのう、エルがご機嫌ななめだと……。腹が減つてゐるんじゃないか？」

「そんな事はないさね。さっきお乳をちゃんと飲んだばかりだよ。ねえ、エルや。お腹がくちくなって眠いのさねえ？」

ナスカの予想通り、間もなくして小さなエルは小さな寝息を立て始めた。

「手慣れた物だな。泣き声で分かるものなのか？」

ラドキースもセレーディアも感心の眼差しをナスカへと向けていた。

「赤ん坊つてのはね、口がきけない代わりに泣いて物事を訴えるんだよ。大丈夫、セリー。お前さんにはすぐに分かる様になるよ」

「そうでしょうか．．．．」

「そうさね。母親なんだから。自身をお持ち」

寝台で半身を起こしていたセレーディアが、その傍らに腰掛けていたラドキースに目を向けると、彼は微笑み妻の肩を抱いた。

「ところでお前さん方は、何処から来たんだい？ 見たところ、トラジエクのもんじゃ無いんだろう？ 言葉は達者だけど」

「北から来た」

ラドキースは短く答える。無論偽りであつたが、気の良い初老の夫婦は何の疑いも持たずにすなりと信じる。

「ああ、そうか。それでエルの名前を北方神話から取ったのか」  
バレンが大仰に納得した。

「旅の途中なのかい？」

「ああ」

「セリーが身重だつたつてのに、急ぎだつたのかい？ 一体何処へ行く途中なんだい？」

ナスカが顔をしかめて尋ねた。

「．．．急ぎと言えば急いではいたが．．．。目的があつたわけでは無いのだ」

「何だそりゃあ？」

バレンが分けが分からんといった顔をすれば、ナスカが「ああ

「！」　　と声を上げて対照的なしたり顔を見せる。

「お前さん達、駆け落ちでもして来たんだろ？」

ラドキースとセレーディラは目を見交わし、少し哀し気にも見える笑みを浮かべた。

「おや？　当たりかい？　やれやれ．．．。急いでたつて事は、家族に追われてでもいたのかい？」

「ああ」

「どっちの家族にだい？　お前さん達、両方の家族からかい？」  
ナスカが気の毒そうな表情を浮かべて更に尋ねる。

「．．．．．セリーのだ」

「そうかい．．．。そんで北からこんなトラジエくんたりまで逃げて来たのかい」

バレンとナスカが二人そろって物憂気な溜息を吐いた。

「あんたラディ、大方いいとこのお嬢さんだったセリーを、その顔で誑し込んで、言いくるめて連れ出して来ちまったんだろ？」  
ナスカの言葉にラドキースは啞然とし、咄嗟に返す言葉も出て来なかった。

「それともあれかい？　美しいお嬢様を垣間見て惚れ込んだじまつて、攫い出して来ちまったとか？」

「何やら、私は悪人の様だな．．．．．」

セレーディラがくすりつと笑い声を立ててラドキースの困惑顔を見上げる。

「じゃあ、こうだ。ラディはセリーの家に仕える騎士様で、箱入り娘のセリーは、男前の騎士様に一目惚れして．．」

「お前は想像力豊かななあ、全く」

バレンが呆れてナスカの話の遮ると、セレーディラはとうとう声を上げて笑い出した。その横でラドキースも苦笑を見せている。

「まあ、そういう事情ならゆっくりしていったらいい。好きなだけここにいたらいいさ。なあ、母ちゃん？」

「そうだよ。あばら屋が嫌じゃなかったら、ずっといてもいいん

だよ。こんな赤ん坊を連れて旅するなんざ、大変だよ」

大陸中原に位置するトラジエク。ほんの十日程前まで二人が滞在していたウォーデンの、その北東に隣接する王国であった。ウォーデン王国よりも広い国土を有するトラジエクの、ここは王都から大分離れた片田舎の森の中である。人目はそう多くは無いであろう。確かに乳飲み子連れての旅が楽ではない事は容易に知れた。

二人は、バレンとナスカの親身な言葉に、暫くの間甘える事にしたのであった。

バレンは樵であった。この森で斧を揮って木を切り倒し、週に幾度か町へと売りに行き生活をしていた。

「あんた、細く見えるがいい肩しとるなあ、ラディ。さすが騎士様だな」

ラディ——ラドキースが初めてバレンの仕事を手伝った時、バレンは感心して言った。ラドキースはこの樵の夫婦に、自分は騎士であるなどとは一言も言っていないのだが、彼等はラドキースの腰の長剣を見て勝手にそう思い込んでいるらしかった。

「わしにや息子が二人いたんだがなあ、一人はガキの頃に死んじまったし、もう一人も嫁さん貰う前にやっぱり死んじまった。娘は二人いるんだが、よその町に嫁いじまってな、もう何年も会ってねえや。女は嫁に行くと自由が無くなるからなあ。しょうがねえなあ。……」

森の中で弁当を使いながら、バレンが少し淋し気に語った。

「あの家で子が生まれたのは、一番下の娘が生まれて以来だ。カアのあの嬉しそうな顔ったら無かったなあ」

そう言って笑うバレンの隣で、ラドキースも自然と口元に笑みを浮かべる。



「お前さん、親兄弟は？」

「両親は死んだ。兄も私が生まれる前に死んだ。腹違いの弟達があったが、それらも皆死んだ。腹違いの妹が二人いるが、あまり顔を合わせた事の無い縁の薄い妹達であつたから、今頃はどうしているのか……」

「そうだったのか……、気の毒になあ……」

思えば本当に縁の薄い弟妹達であつた。ラドキースは思い起こす。実の父でさえ縁が濃かつたとは言い難い。父子らしい事をした記憶も無ければ、父子らしい会話を交わした記憶も無い。実の母は、ほんの子供の頃に暗殺されたし、自分に一番近い者といつたら乳兄弟のフランギス以外にはいない。フランギスの両親には随分と可愛がられたが、父親は対ハーグシュの五年戦争で戦死を遂げ、乳母も病でとうに身罷つていた。フランギスは無事であるうか……

。ラドキースにとつての兄弟は、やはりあの飄々として自分に言いたい事を言いたい放題言い放つフランギス以外にありえない。

## 第二章 幸福の灯々トラジエクにて（４）

セレーディラは、エルに乳を与えて寝かしつけると台所のナスカの元に顔を出した。

「まあ木瓜が沢山・・・」

テーブルの上に山の様に盛られた瑞々しい木瓜に、セレーディラの青空色の瞳は丸くなった。

「酢漬けにするんだよ。冬の為の保存食さ」

「保存食？」

「そうさ。作り方を知ってるかい？」

「いいえ・・・」

「じゃあ、教えてやろう」

セレーディラは嬉しそうに頷いた。

この様にセレーディラは、ラドキースがバレンと共に木を切り倒しに出掛けている日中、ナスカと共にエルをあやししながら家事をして過ごし、夕食後は皆と楽しく語らいながら繕い物をしたり刺繍を刺したりして過ごした。

三ヶ月が過ぎ、エルの顔立ちもはつきりとして来た。もはや小猿のようにくしゃくしゃな赤ら顔ではなく、セレーディラのような色白で滑らかな肌が変わっていた。そしてラドキースとセレーディラの愛情は元より、バレンとナスカからも実の孫の如く猫可愛がりに可愛がられていた。小さな赤子は正に皆の愛情を一身に浴びていたのである。

「目元がラディ似だねえ、この子は」

「そうか？」

「だが笑うとセリーに似てめんこいぞ」

「そうでしょうか．．．」

バレン手製のゆりかごの中のエルを、四人が頭を寄せて覗き込んでいた。エルは機嫌良く両手を伸ばしながら、しきりに言葉にならない声を上げている。

「ご機嫌だねえ、今日のエルは」

ナスカがエルの小さな手に指を絡めながら声音を高くして話しかけると、エルはきゃっきやと笑い声を上げた。

「子供がいるってのはいいいねえ、お前さん」

「そうだなあ。退屈しないもんだなあ。ずうつと眺めてても飽きないもんなあ」

「ずっとここにいておくれよ、二人とも」

「うん、そうだそうだ」

俄にしんみりと訴えて来る樵の夫婦に、ラドキースとセレーディラの表情は微かに翳る。

「そうさせて貰えたらと正直に思う。だが、いつ追っ手が来るかわからない。せめてそれまでは、有り難く．．．」

「匿つてやるとも。どんな事したってなあ。お前さん方はわしらの子供みたいなものだ」

バレンの言葉にナスカも大きく頷いた。

ユトレアを脱出してからこの方、ラドキースが祖国を憶い憂えなかつたかといえは無論嘘になる。セレーディラの前では努めて祖国の話題を上げる事は避けていたが、心が痛まぬ筈は無く罪悪感を感じぬわけも無い。

滅ぼされて後のユトレアは三分割され、現在ではそれぞれハーグ

シュ、スラグ、エドミナの三国の支配下に置かれている。ウォーデン王国のルトに暮らした間は、時折分割後の祖国の噂を耳にする機会もあり、西部諸国の情勢を伝え聞く機会もあった。終戦時、ユトレアの属国であったスキーレンドが、三国の要求に従いユトレアの血を引く国王の身柄を差し出したという事も耳に入っていた。だが、このトラジエク王国の辺鄙な森の中の樵夫婦の家に厄介になつてからは、そんな話を耳にする折りも無い。

人里から離れた単調な日々、約つましい生活。こんな生活もあったのだな……。と、ラドキースはそんな事をふと思う。素朴で善良な樵の夫婦は、貧しくとも幸福そうだった。事あるごとに笑っている。そして物思ふ処もあるであろうに、エルをあやすセレーディラも又、実に幸せそうであった。

「何を作ってるんですの？ 二人共」

バレンとラディが木片を削っている様子に、何やら興味を惹かれたらしいセリーがエルを抱きながら彼等の手元を覗き込んだ。

「おお、セリーか。靴を作つとるんだよ」

バレンが顔を上げて答えた。

「靴？ バレンとナスカが履いている様な靴ですか？」

「うむ、そうだ。こいつあなあ、丈夫でいいんだ。特にわしの様な生業にはなあ。仮令、足の上に木が倒れて来ても壊れねえ程に丈夫なんだ」

「まあ、そんなに？」

驚くセリーに、バレンは笑いながら肯定する。

その日は、朝から雨であった。随分派手な降り様であった。

「やれやれ、よく降つとるなあ．．．」

質素な朝食を摂りながらバレンがばやいた。

「どうするのだ？ バレン」

ラデイの問いに、バレンは肩を竦める。

「こんなざあざあ降りじゃあ、仕事にはならんて」

「そうさ、今日はゆつくりすりゃあいいのさ」

「ゆつくりどこじゃ無いぞ、ラデイ。うちの母ちゃんは人使いが荒いからな」

バレンがラデイに身を寄せて小声で耳打ちすれば、ナスカがわざとらしい咳払いをする。

「何か言ったかい？」

「うんにゃ？」

すつとぼけるバレンに、セリーがくすつと可憐な笑い声を零した。続いてラデイが笑い、つられた様にバレンとナスカも一頻り笑った。

昼を過ぎても雨音が途切れる事は無かった。

バレンと向かい合い、真剣な顔つきで木靴を削っていたラデイは、それをトントンと床で叩いて中の木屑を綺麗に払うとセリーの足元に置いた。

「履いてごらん」

「まあ．．、私に．．？」

ラデイは微笑み頷くと、衣服の木屑を払いながら立ち上がり、セリーの腕の中の娘に両手を伸ばした。初めの頃こそ、おっかなびつくりな手付きで小さな赤子を抱いたラデイであったが、三ヶ月も過ぎれば、その手付きも堂に入ったものである。セリーはエルを委ねると、靴を脱いで素足をその木靴に差し入れ、数歩歩いた。

「思ったよりも軽いわ」

「乾かしや、もつと軽くなるぞ。この木は軽い上に、うんとこさ丈夫なんだ」

まあ．．と、しきりに感心し、物珍し気にカタカタと歩き回る

セリーが可笑しかったのか、バレンも、そしていつの間にか台所から顔を覗かせたナスカも楽しそうに笑う。ラデイもエルを抱き抱え、時折器用にあやしながらそんなセリーに優しい眼差しを向けている。

「でも、ちょっと大きいみたいですわ」

「いいんだよ、それで。足にぴったりだと足が擦れて痛くなっちまうからね」

テーブルに縫い物を広げながらナスカが言った。

「ああ、成る程．．．」

素直に納得したセリーは、嬉しそうに尚もカタカタと音を立てつつ歩き回ってから、漸く木靴を脱いだ。

「気に入ったか？」

「はい、とても。カタカタと鳴る音がとても素敵ですわ」

セリーがエルを受け取りながら感想を述べると、傍らの樵の夫婦は再びやんやと笑い声を上げる。

「そういうもんかい？ そりゃ良かったよ。でも木靴がそんなに珍しいのかい？ セリー」

「ええ。木で靴を作るだなんて、吃驚しました」

「庶民の知恵さ。捨てたもんじゃないだろう？」

ナスカが茶目つ気たつぷりに片目をつぶって見せた。

「それにしても中々上手く出来とるなあ。お前さん器用だな、ラデイ」

「刃物なら使い慣れているさ」

ラデイの削った木靴を手に、バレンは感心する。

「私にはとても出来そうにありませんわ．．．」

ラデイが小刀を器用に動かし靴の表面を整えてゆく様子に、セリーは溜息混じりにぼやいた。

「そうだな。お前は止めておいた方が良いな、セリー。指が十本あっても足りなさそうだ」

ラデイがセリーをからかった。

「もう、ラデイったら」

おつとりと膨れっ面を見せる妻に、ラディは嘗て彼女がナイフを持つ度に指を切っては自分をらはらさせた事を思い出し、顔を背けて肩を震わせ始めた。

「失礼ね。貴方が何故笑っているのか分かりますわよ」

セリーは頬を膨らませたままナスカの傍らに座った。

「何が可笑しいんだい？ ラディは？」

ナスカも面白そうに尋ねて来る。

「私が以前、食事の仕度の度に指を切っていた事を思い出しているのですわ、きつと」

セリーの言葉にナスカもバレンも笑い出した。

「終いには指を切り落としはしないかと、気が気では無かった。

あの頃は……」

「大袈裟なんだから、ラディは……」

「大丈夫だよ、ラディ。今じゃこの娘はきちんと野菜を切ってるよ。自分の指の代わりにね」

「もう、ナスカまで……」

セリーは、頬を赤らめながら抗議の声をあげれば、回りも楽し気に笑う。

樵の老夫婦は本当に良く笑った。それにつられてラディとセリーも笑う。笑いの絶えない家であった。二人がこんなに良く笑う事が出来たのは、後にも先にもバレンとナスカの元に滞在したこのひととき以外には無い。

真夜中、エルが泣き出すと、セリーは眠い目をこすりながら暗闇の中を起き上がった。灯りを灯す事もせず、セリーは手探りで小さなベッドからむずかるエルを抱き上げると、共に目を覚ましたらしいラディの手を借りながら寝台に戻って乳を含ませる。

「夜もゆつくり眠らせてくれないなんて、この子は小さな怪獣みたい．．．」

ラディは低く笑って、「そうだな」と答えた。

「この子はやっぱり貴方似かしら．．．。瞳も貴方と同じ色ですし．．．。」

「髪はそなた似であろう?」

ラディの指が暗がりの中、臍へそげに見て取れる娘の頬を撫でる。

「エルは、どのような子に育つでしょうね」

セリーはラディの肩に頭を預けながら囁く。

「そなたの様な娘に育つて欲しいな．．．。」

「誠にそう思われるのですか?」

「心より．．．。」

「私は貴方の様に育つて欲しいのに．．．。」

「女の子なのか?」

ラディは密やかな声で笑う。

小さなエルは、二人の会話の内容など何処吹く風の体で己の食事に熱中している。

「幸せ．．．。」

ラディの耳にセリーの小さな声が辛うじて届いた。エルは満足したらしく、セリーの乳房から顔を離して機嫌良さそうな声を上げた。

「セリー?」

ラディの肩に頭を乗せたまま、どうやら眠ってしまったらしい。だが腕はしっかりとエルを抱えている。ラディは、開けたままの妻の胸元をそっと閉じてやった。

後ろめたい思いを、罪の意識を胸の内に秘めながらそれでも、この幸せが続く事を願った。

出来る事ならば．．．．．、常しえに．．．と．．．．．。





## 第二章 幸福の灯々トラジエクにて（5）

その日、バレンは町の材木商に木材を卸しに出掛けた。

仕事を終えて後、材木商に馬車を預け、ナスカからの頼まれ物を買い求めるべく市場へと出向く。片田舎の町とはいえ、庶民の生活の場にはやはり活気がある。バレンは顔見知り達と世間話などを交わしながら買い物を終えると、折角なので一杯やつてから家路につこうと考え、行きつけの酒場へと足を向ける。その道すがら、庁舎前の広場に人垣が出来ている事に気付いた。

「はて、何だろなあ？」

気になり、バレンの足は自然とそちらへ向かう。

「どうしたんだね？　なんかあつたんかね？」

近くにいた若者を捕まえて尋ねてみる。

「何か、西の国のお役人が人探しをしてるんだとよ」

「人探し？」

「ああ。あそこに尋ね人の特徴が書かれてるよ。情報を領主様んとこに持ってけば報酬が出るらしい」

「ほう」

バレンは若者の指差す先の小さな立て札に目を向ける。

「何でも一人は黒目黒髪の長身のユトレア人の男で、歳は二十六。もう一人は金褐色の髪に空色の瞳のハーグシュ人の女。歳は二十三だつてさ」

若者の話を聞いたバレンの脳裡に、ラディとセリーの姿が過る。

バレンは若者に礼を言うと、踵を返して足早に馬車へと戻った。

バレンが馬車を急がせて戻った時、ラドキースは家の傍らで鋸を引いて木を切り分けていた。バレンの緊張した面持ちに気付いても、ラドキースは平静だった。ただ、来るべき時<sup>きた</sup>が来たのだろうか、漠然とそう思ったのみであった。

西の国の役人が、黒目黒髪のユトレア人の男と金褐色に空色の瞳のハーグシュ人の女を搜索しており、賞金までかけられているという。ラドキースは悲し気なセレーディラの肩を抱き寄せると、バレンとナスカに向き直った。

「それは私達の事だ」

「やつぱり．．．、そうか．．．」

バレンは力無く呟いた。

「北から来たなどと嘘を言って悪かった」

「そんな事は、いいんだよ」

「この上は暇<sup>いとま</sup>を告げねばなるまい、バレン、ナスカ」

目元を押さえるセレーディラを抱き抱えながら、ラドキースが表情を変える事無く別れを告げた。樵の夫婦は、その一瞬の内に表情を悲痛に変えた。

「ここに隠れ住んでりやいいじゃないか!? こんな森の中だよ！　そうそう尋ねて来る人もいないよ！」

ナスカの親身な言葉に、だがラドキースは静かな笑みと共に首を横に振る。

「万が一見付かった時、二人に迷惑がかかろう」

「迷惑なんて思うもんかつ！　なあ母ちゃん」

「そうだよ、何言つてんだい！」

「二人の命にかかわるやもしれない事だ。だから、もうこれ以上

厄介になるわけにはゆかない」

「ラディ．．．、セリー．．．」

初老の夫婦は淋し気な表情で、それ以上の言葉も無く肩を落として頂垂れた。

「ほとぼりが冷めたら、又戻っておいで」

大急ぎで旅支度をした赤子連れの若い夫婦を前にして、ナスカは目に涙を浮かべながら言った。バレンがラドキースの馬を引っ張って来た。

「これ、もう少しで出来上がるところだったのですが．．．。せめてものお礼に．．．」

セレーディアは見事な刺繍のされた布をナスカに差し出した。それは森の中の田舎屋を背景に四人の男女が草むらに座っている図であった。女の一人は手に赤子を抱いていた。その絵柄を眺めるナスカの瞳から涙が零れた。

「ありがとよ．．．、ありがとよ．．．」

ナスカは泣きながらセレーディアを抱き締め、小さなエルの額に口付けし、そして伸び上がってラドキースを抱き締めた。

「気を付けて行くだぞ、二人とも」

バレンも鼻を赤くしてこの若夫婦を抱き締め、実の孫とも思っていたエルの頬をそつと撫でた。

「この恩は生涯忘れない。二人とも達者で」

ラドキースは馬に跨がり、エルを抱えているセレーディアに手を貸し抱き上げる様にして前に乗せると、バレンとナスカに頭を下げてそう言った。

「幸せにおなり、分かったね！」

ナスカの言葉に、セレーディアも泣きながら頷いた。遠ざかって行く樵の夫婦を、幾度も幾度も身を乗り出しては涙を流しながら振

り返った。

バレンとナスカも又、いつまでも手を振った。森の木々が彼等の姿を隠しても尚、肩を落としたまま長い事その場に佇んでいた。

翌々日、朝早くに樵の家の扉を叩く者があつた。二人きりで寂しく朝食を摂っていた初老の夫婦は、まさかラディとセリーが戻つて来たのではと、一片の期待を抱いた。しかしそれもナスカが扉を開くまでの事であつた。扉の外には数名の見知らぬ男達が立っていた。騎士団のお仕着せを身に着けた騎士が三名と、その他に二人のよそ者と思しき男達がいた。その男達も腰に長剣を下げているところを見れば、騎士か何かなのであろう。

「こちらのご仁方がお前達に暫し物を尋ねたいそうだ。神妙にお答える様に」

お仕着せ姿の騎士が唐突に切り出した。バレンは俄に緊張しながら席を立て、扉口のナスカの傍らに立った。

「我らは人探しをしておるのだが、この男に似た男がお宅にいると聞いて出向いて参つた」

よそ者の男は、懷から巻物を出しながら異国語訛のあるトラジエク語で口を切つた。恐らくは材木商の親爺辺りが告げ口したのだらう。ほんの数回ではあつたが、バレンは材木商へ木材を卸しに行くのにラディを伴つた事があつたのだ。

「この姿絵の人物に見覚えは？」

男は巻物を開いて見せた。開かれた羊皮紙に描かれていた胸元までの男女の姿絵は、見紛う事無きラディとセリーであつた。実に良く描かれたものであつた。二人とも、まるで王侯貴族の様な服装を

している。ラディは額に宝石の付いた細い冠をつけ、セリーも結い上げた髪に無数の飾りを付けていた。

「はて……？　どっかの王子さんとお姫さんか何かですかいな？」

「お前のところにいるという男は、この人物か？」

「はあ？　うちにやあ、わしとかみさんしかいないですがなあ」

「嘘は身の為にならんぞ」

「嘘じゃあないですよ、旦那。まあ、前にちよつとの間だけ旅人を泊めてやつとった事はあつたがなあ。でも、こんな人じゃあなかつたですよ。ちよつと似とるかもしれんが顔が違う。こんなに良い顔じゃあなかつたよなあ、母ちゃん？」

「そうだねえ、違うねえ、お前さん」

バレンに合わせてナスカもシラを切る。男は難しい表情で樵の夫婦を見据えていたが、やがて、傍らの連れの男にちらと目配せを送った。

「念の為屋内を調べさせてもらう」

「はあ、どうぞ」

五人の男達が小さな屋内を調べ始めた。

「これは何だ？」

「へ？」

「お前達に赤子がいるとも思えぬが？」

エルを寝かせていたゆりかごを指差して男が樵の夫婦を詰問した。

「それは娘夫婦が時たま孫をつれて来るんでね、そんな時に使うんでさあ」

「ふむ」

男は、その答えに納得したらしい。

「その男だが、髪は何色であつた？」

「髪？　焦げ茶でしたよ」

「材木屋の主人は黒髪の男だつたと言っていたが？」

「黒ねえ．．．。真つ黒じゃあなかったよねえ、お前さん」

「そうだよなあ。」

「泊めたのは男一人だけか？ それとも他にもいたのか？」

「男一人でしたよ、旦那」

「で、その男はいつ出て行つたのだ？」

「もう一月近く前になりますなあ。南へ行くとか言つとつたかなあ．．．。」

騎士達と、もう一人のよそ者の男が戻つて来た。よそ者の男達が何やらバレンとナスカの知らない言葉でやり取りをする。恐らくは何の証拠も見付けられなかったのだらう。ラディとセリーが去つた後、ラディの指示通り、二人の滞在を匂わす物は総て片しておいた。うっかりエルのゆりかごのみを隠し忘れたが、難無くごまかせた様であつた。

よそ者の男は溜息を吐いた。落胆している様子であつた。

「すまなかつたな、お前達」

「いやあ、かまいません。お役に立てなかつたようで申し訳ないですな、旦那」

「いや、期待はしていなかつた故、気にするな」

「そのお二方は誰なんですかい？」

「ハーグシュの姫君、我らが主君であられるセレーディラ様と、亡国ユトレアの元皇太子、ラドキース殿下だ。黒將軍だよ」

「黒將軍？」

「何だ、知らんのか？」

バレンとナスカが首を横に振ると、よそ者の男は少し呆れ顔をした。

「何と、西の諸国じゃ黒將軍の名など、三つの幼子でも知つておるといふのに．．．」

「すまんな、無知で．．．。で、その將軍さんとお姫さんは何だつて行方不明なんですかい？ 駆け落ちでもしなさつたんですかい？」

バレンの素朴な問いに、ハーグシュの騎士は短いうなり声を立てた。

「真相は不明だ。邪魔をしたな」

それ以上を語る事無く、ハーグシュの騎士は背を向けた。

「厄介な事だ」

樵夫婦の粗末な家を後にしてのち、騎士は傍らに従う従者に自国語で呟いた。

「主君が駆け落ちなどと．．．」

「黒將軍が無理に連れ去ったのやもしれません」

「本気でそう思うのか？」

「．．．．．」

従者は口ごもる。

「あのお二人が子を成す前に見つけ出さねば。ハーグシュ、ユトレア両王家直系の子など、万が一ユトレアの残党などに押さえられてみよ、新たな厄介事の種になるうぞ」

ハーグシュの騎士は苦々し気に眉間に皺を寄せたまま、後は口を閉ざした。

不意の客人が去った後、バレンとナスカは無言のまま席に着いた。

「あの二人は大層な人達だったんだねえ、お前さん」

ナスカが放心した様に呟くと、バレンも「たまげたなあ」と、相槌を打った。

「ラデイが、あの黒將軍だったなんてなあ．．．」

「何だい、お前さん？ 黒將軍なんて知らないって言ったくせに、知ってたのかい？」

「当たり前だ。わしだって、黒將軍の名前位は知ってたさ。し



かしたまげたなあ．．．」

「無事に、逃げてくれるといいんだけどねえ．．．」  
バレンとナスカには、ただ祈る事しか出来はしなかった。

## 第二章 終

### 第三章 泡沫（1）

王子は言った。

「そなたが生きてくれるなら、他の事などどうでも良い」  
そして王子は国を裏切った。

王女は言った。

「貴方がお命を終えると仰るならば、わたくしも後を追う所存です」

そして王女は国を捨てた。

男は宿屋の狭い一室で、己の首にかけていた鎖を埃に塗れた服の奥から引っ張り出した。その鎖に下がる指輪を手に、男は遣る瀬ない思いを深い溜息に代えて吐き出した。

男は先程、階下の酒場である中年の騎士と知り合った。その騎士は、このルトの騎士団の団長を務める者であった。何やら意気投合して酒を酌み交わすうちに、その団長が亡国ユトレアの黒將軍の話を持ち出し、その噂話を始めた。男の熱心に話を聞く態度に気を良くしたのか、団長はさも重要な秘密でも打ち明けるかの様に肩を寄せ、自分ばかりの黒將軍とその細君さいくんに会った事があるのだと男に耳打ちした。男は大いに驚いて見せ、詳しい話をせがんだ。

「あれは、かれこれ六年程前の事だったかなあ。領主様がある日突然、よそ者を拾って傭い入れたんだ。まだ若い男だった。領主様はその男を俺に預けたわけなんだが、どこにでも新人歓迎会つてのがあるもんだろう？　うちの騎士団にもあつてなあ、新人は倒れるまで打ち合いせにやあいかなのだよ。勿論真剣は使わんのが規則だな。いやあ、あの時は皆驚いたもんだった。一体何人の団員が打ち負かされたのか、多過ぎて分からん位だった。腕に覚えのある者は皆負けたよ。しかも剣を合わせて五分以内に負ける者ばかりでな、十分持ちやあ良い方だったんだ。そうしたら、ついにまわりが俺の尻を叩き始めてなあ、まあ俺もああいうのは好きなんで見物はするんだが、一応団の責任者だしな、いつもなら自制するんだ。だがあの時はさすがに興味が湧いてな、彼と剣を合わせてみたくなった。．．．いやあ、強かったな。俺がそれまで剣を合わせたどんな奴よりも彼は強かった。完敗だったよ。さすがに十分で負けるような真似はしなかったが．．．。俺はもう歳だろうかって落ち込んだもんだよ。でもな、本人はそんな剣の腕前を鼻にかけるところも無くてな、物静かな男だったな。若いくせにやたら落ち着いていた。勤務が終わると、いつもさつさと家に帰ったなあ。同僚達が遊びに誘っても、かみさんが案じられると言つてなあ、随分とつれなかったらしい。かみさんてのが、これ又美人でなあ．．．。よくからかわれつつたが、かわし方も上手かった。間もなく小隊を持たせただが、随分と兵を動かし慣れつつたんでな、すぐに大隊を任せ

た。この分じゃあ行く末は俺の後釜だと思つとつたら、ある日突然姿を晦ましちまった。その日の夜だ、俺が彼の正体を知ったのは．．．。それから細君のな．．．。何となく納得したよ。彼があゝの黒將軍でもおかしくは無いってな．．．。今頃、どうしとるかなあ．．．。無事だと良いのだがなあ．．．。

「

ウォーデン王国の一州であるルトの領主、ルモンド・フェビアンは公務の最中であつた。近頃はあの不良息子もいい加減心を入れ替えたのか、真面目に父を手伝う様になつた。やっと自分の跡目を継ぐ氣になつたかと、少し安堵しているルモンド卿である。

聞いたところによると、息子は町のさる商人の娘に懸想しているらしい。娘の方も満更では無いらしく、そこでルモンドは考える。ひよつとしてあの不良息子が心を入れ替えたのは、その娘の存在があつてこそであろうかと．．．。ならば、ゆくゆくはその娘を息子の嫁に迎えても良いかもしれない。所詮はしがない地方領主。息子の嫁に平民の娘を迎えたところで、大した問題にはなるまい。ルモンドが公務の最中にそんな事を考えていると、家令が困惑顔でやつて来た。

「ルモンド様、ユトレアの黒將軍の件でどうしてもお目通りしたいという者が参つておりまして．．．。」

「黒將軍？ ハーグシュ王国の者か？」

「いいえ、違つと申しております。卿は約束の無い者にはお会いにならぬと申したのですが、これが又とんだ頑固者でして、今目通りが適わぬなら約束を取り付けて来いと、さもなくばその場を動かぬと申しまして．．．。」

「ほう、何者であろう．．．？」

「名をフアランギス・デーズと名乗っております。一介の旅人の様な風情ですが、剣を下げております処を見ますれば……」

「ふむ……、黒將軍の件とな……」

ルモンドは考える。ハーグシュの者で無いならユトレア人か……？ もしくはスラグかエドミナか……？

ユトレア王国は前の戦に敗退して後、三分割された。エドミナ領ユトレア、スラグ領ユトレア、そしてハーグシュ領ユトレア。黒將軍ラドキースの首を追っているのは、ハーグシュだけでは無い。

「会ってみよう。武装を解かせて連れて来るが良い」

俄に興味を覚えたルモンドは、家令にそう命じた。

ルモンドの執務室に通された訪問者は、その薄汚れた風体には似合わず、礼儀正しく且つ一分の隙も無い挨拶と、この不躰な訪問に對する詫びの言葉を口にした。

「フアランギス・デーズ殿と申されるそうだな？ フアランギス・デーズ……何と申される？ ひょっとして、他に氏族名をお持ちなのではないのかな？」

ルモンドは執務机の上に手指を組んで、試す様な瞳を目の前の訪問者へと向けながら尋ねた。

「フアランギス・デーズ」エトラ・ファーガスと申します」

訪問者は躊躇う様子も見せずに氏名を告げた。歳の頃は三十そこそこといった処であろうか……。ルモンドは内心考える。

「エトラ・ファーガス……。ユトレア南部にファーガスという地名があつたな？ そこもとはユトレア人であられるのか？ フアランギス殿？」

「いかにも」

そしてルモンドの思いのほか、訪問者は己がユトレア人である事を認めた。

「ユトレアの方が何用であろうか？」

「今から六年程前、こちらに黒將軍ご夫妻が滞在されたと耳にし、慮外ながら罷り越しました。その折りの事を是非ともお聞かせ願いたく」

「これはこれは、異な事を申される」

「お願いです、フェビアン卿。どんなに小さな事でも結構です。

我が主君がこちらの騎士団に席を置いた折りの事をお教え下さい」

「そこもとは、ユトレア皇太子の臣と申されるか？」

「いかにも。祖国滅亡よりこの方、我が主君の行方を追っております」

「ふむ．．．」

ルモンドは、短く刈られた白いあご髭を撫でつつ相手を観察する。ラデイと同じ年格好だなど、ルモンドは思った。そしてそのすらりとした背格好も、ルモンドの記憶するラデイに良く似ていた。伸び放題の榛色の髪は無造作に束ねられ、その破れ薄汚れた身なりも相俟<sup>いま</sup>つて、まるで傭兵風情が無法者の様であったが、その榛色の瞳には理知的な色があり纏う雰囲気にはそこはかと無い気品が感じられた。

「だが、それを信じて良いものかな．．．？　口で言うは容易かるうからな。そもそも、そこもとがハーグシュやスラグ、エドミナの間では無いと言う証も無かるう？」

「フェビアン卿は、私がハーグシュかスラグ、エドミナの回し者であれば殿下の話はなさらぬおつもりですか？」

その真摯な言葉にルモンドは笑い声を立てた。

「話すも何も、かの黒將軍殿下がこのルトに滞在したという話があるようだが、あれは単なる噂であろうに．．．．．」

「．．．．．分かりました。では．．．．．、卿が嘗て拾い騎士団に傭い入れたという者の事をお聞かせ頂けませんか？　私が誠、ユトレアの者であるという証は．．．．．」

ファランギスは服の中から銀の鎖を引っ張り出してそれを外すと進み出てルモンドの執務机の上に置いた。銀鎖には指輪が一つ通さ

れていた。ルモンドはその指輪に手を伸ばした。冠に蔦の絡む剣の紋の入った男物の指輪であった。

「証になるかどうかは分かりませんが、私が殿下からお預かりしている物です」

ルモンドは、傍らの小さなレンズの二つ連なったメガネを己の鼻の頭に乗せると、その造りの良さを確かめ、裏側に記された持ち主の名を確かめた。

（あの二人の子も、無事に生まれておれば五つになろうか．．．

）  
ルモンドは指輪を手にしたまま懐かし気に瞳を細めた。暫しの沈黙の後にルモンド・フェビアンは口を開いた。

「お二人のその後の消息は全く存じ上げぬが．．．．．、それでもよろしいか？ フランギス殿」

切実であつたフランギスの表情に光が射した。

「はい、フェビアン卿」

力強く頷く黒將軍の臣に、ルモンド・フェビアンはやがて語り始めた。

### 第三章 泡沫（2）

シユナは野菜の詰まった籠を両手に抱え、小さな足を懸命に動かしていた。

『大丈夫かい？ 重たくないかい？ シユナ』  
農婦である母親が氣遣うのにも、『だいじょうぶっ！』 と元気に答えて家を飛び出して来た。

『先生達によろしくね。あんまり遅くなるんじゃないよっ！』  
シユナの母親は苦笑しながら小さな息子の痩せた背を見送ると、畑仕事へと戻った。

「もうちよつと．．．、もうちよつと．．．」  
六歳のシユナには身に余る重さである籠を時々地面に下ろしては、ぶつぶつと自分を励ましながら仲の良い少女の家に向かっていた。ほんの十分程の道のりである。

こじんまりとした目的の家が見えてくると、金褐色の柔らかさうなくせつ毛を二つのお下げにした小さな少女が、丸太に腰掛け木切れで地面に何やら一所懸命に書いている姿が目にとまった。

「エルーっ！」  
シユナが叫ぶと、小さなエルはぱつと顔を上げにつこり笑い、転びそうになりながらもシユナのもとへと一目散に駆けて来た。

「これみて、エル！」  
シユナが籠を下ろすと、エルは座り込んで中を覗く。



「はっぱがいっぱいだあ」

「ほうれんそうだよ。さっきかあちゃんが、はたけでとったばかりのやつなんだよ」

「すごい！」

幼い少女は無邪気に喜ぶ。

「おもいからはこぶのてつだつて、エル」

「うん、いいよ、シュナ」

幼い二人は籠の両側をそれぞれ持つと、エルの家へと向かう。扉の前で籠を一旦下ろすと、エルは背伸びをして扉の把手に小さな手をかけた。

「かあさまはねてるかもしれないから、だから、しーいだよ、シュナ」

口元到人差し指を立てるエルに、シュナは従順に頷く。

家に入りシュナが扉をそつと閉めると、家の奥からエルの名を呼ぶ細い声が聞こえて来た。

「かあさま、おきてたの？」

エルがととと奥の部屋へと入って行くので、シュナも籠を抱えたままつられて入って行く。

「あらシュナ、こんにちは」

寝台の中に、もの柔らかに微笑むエルの母親がいた。

「こんにちは、セリーおばちゃん。ぐあいどう？」

「とつても良いわ。ありがとう、シュナ」

につこりと青空色の瞳を細めるエルの母親に、シュナは少しほつとして籠の中身を少し得意げに見せた。

「ほうれんそうだよ。はたけでとれたばかりなんだよ。ぼくもとったんだよ。かあちゃんがもってけつて。えーよーがいっぱいあるんだつて。びーきときは、えーよーをいっぱいいたべなくつちやいけないんだよ、セリーおばちゃん。かあちゃんがいつてた」

「まあ、ありがとう。とても美味しそうなほうれん草ね。お母さんにお礼を伝えてね」

「うん！」

シユナは頷くと、籠を床に置いて仲良しのエルの隣に並んで床に膝を付き、セリーおばちゃんの寝台にエルの様に両肘を付いてあごを支えた。

今日のセリーおばちゃんは少し元気そうだとシユナは思った。相変わらず顔は真っ白だけでも……母ちゃんは日に焼けていつも真っ黒なのに、セリーおばちゃんはいつも真っ白だ。きつと病気のせいなのだとシユナは思う。

去年は家の前の小さな畑を耕したりしていた筈なのに、今年に入ってからセリーおばちゃんは、ずっと寝台に横になってばかりだった。シユナの母親は時々、「気の毒にねえ……」と呟いて涙を浮かべる。すると、小さなシユナはとてつも無く怖くなった。

「ラディせんせいは？」

「きょうは、けんのおけいこのひだよ」

エルが母親に甘えながらシユナに答える。

「でも、もうそろそろ戻らと思うわ、シユナ。そうしたら今度はあなたの方のお勉強の時間なのね」

「ぼくね、まちのいじわるなやつらより、いっぱいことばをかけるんだよ、セリーおばちゃん」

シユナが意気込んで言えば、隣のエルも、「あたしも！　あたしも！」と、舌足らずな声を上げる。

「まあ、二人共えらいのねえ。すごいわねえ」

セリーはクスクスと静かに笑いながら小さな頭を二つ撫でてやる。

「ぼく、おつきなったらラディせんせいみたくなるんだっ！」

「あたしもーっ！」

「エルはおんなのこだよ」

シユナが目を丸くすると、エルは「いいのっ！」と叫ぶ。シユナの言葉など聞き入れやしない。

「ぼく、エルにはおひめさまになってほしいのに……」

「おひめさまは、けんがつかえないからいやっ！」

「ふう〜ん……」

シユナは少しがっかりした。

エルの父親は、この付近では“先生”と呼ばれている。町中の小さな学校で、子供達に読み書きや算術を教えているのだ。又、週に幾度かは、町の裕福な子息達に剣の稽古をつけていた。シユナには父親が無く家も貧しかった為、町の学校へは通っていないかったが、ラデイ先生はちよくちよくシユナに読み書きや算術や剣を教えしてくれる。シユナとエルは文字を覚えるのが楽しい年頃なのか、学校に通う町の子供達よりも余程多くの単語を書けた。昨日習った単語の綴り方をシユナとエルが競う様にセリーに話していると、扉が開く音に続き家に人の入って来る気配がした。

「とうさまだっ！」

エルが素早く立ち上がって駆け出した。大好きな先生の帰宅にシユナも立ち上がる。セリーの寝室に姿を見せた背高なラデイ先生は、幼い少女を軽々と受け止め抱き上げると、一瞬天井にぶつかるかと思う程に放り上げてから片手で娘を抱えた。奇声を上げてはしゃぐエルのほっぺたに、ラデイ先生はちゅつと口付けした。少し羨ましく思いながらシユナが挨拶をすると、ラデイ先生はシユナの胡桃色の頭を大きな手で撫でた。

「来ていたか、シユナ。昨日教えた単語は全部覚えたか？」

「うんっ！ ぜんぶかけるよ、ラデイせんせいっ！」

「そうか、えらいな。お前は賢い子だ、シユナ」

ラデイ先生は微笑みながら再度シユナの頭を撫でた。

シユナにとって、このラデイ先生に褒められる事は何よりも嬉しい事であった。先生に褒められたくて、教わった単語を一所懸命に覚えるのだ。夕食の後、約<sup>つま</sup>しい灯りの元で手仕事をする母親の傍ら、指で机の上に習った単語を書いてみると、読み書きの出来ない母親もシユナを褒めた。だからシユナは読み書きを覚えるのが大好きだ

った。

シユナは農婦の母親と二人暮らし。だがシユナが生まれるわずか前までは、父親もきちんといたし三歳上の兄もいた。それだけでは無い。祖父も祖母も叔父も叔母も従姉もいた。シユナの家は、シユナが生まれるわずか前までは大家族であつたのだ。それが流行病はやりやまいの為に皆がばたばたと死んでいった。幸運であつたのか、もしくは不運であつたのか、臨月も近かつたシユナの母親だけが生き残つた。大きな田舎屋で、残されたシユナの母親は独りで子を産み、独りで畑仕事に精を出しながらシユナを育てて来たのである。そんな母がシユナに時折言う。読み書きや算術はねえ、出来ないよりは出来た方がいいに決まつてるさ。先生に感謝するんだよ、シユナ……と……。

「とうさま、あたしもかけるよ。きのうならつたの、ぜんぶかけるよっ！」

父親の首にしがみついていたエルが、シユナに負けじと父に報告していた。

「そうか、お前も偉いな。私の姫君」

先生は静かな笑い声を立てながら、もう一度娘の額にちゅつと口付けた。ラデイ先生はエルの事をよく“小さな姫君”とか、“私の姫君”と呼ぶのだが、シユナにはそれが不思議でたまらない。「ラデイせんせい、どうしてエルのことを“わたしのひめぎみ”っていうの？ せんせいのおひめさまはセリーおばちゃんでしょう？ エルはぼくのおひめさまだよ、せんせい」

シユナのあまりの無邪気さに、エルの両親は目を見合わせた。二人の堪える様な笑い声が続く。

「それは悪かつた、シユナ」

「ちがうよ、シユナっ！ あたしはおっきくなつたらとうさまのおよめさんになるんだもんっ！」

エルが頬を膨らませて抗議し出した。

「ダメだよ。だってラデイせんせいは、もうセリーおばちゃんとけっこんしてるもん！」

シュナもむきになって言い返す。

「尤もだな、シュナ。エルは大きくなったらシュナのお嫁さんになつてやるといい」

笑いながら言う父の言葉にエルは不満そうに考え込んでいたが、やがて渋々と「いいよ」と答えた。

「なんかいやそ〜」

シュナも口を尖らせる。

「べつにいやじゃないけど・・・」

エルも少し口を尖らせている。

「さあ、二人とも表へ行つて覚えた単語を総て地面に書き出しておいで。私もすぐに行くから」

ラデイは言いながらエルを下ろした。幼い二人は元気良く返事を返しながら外へと駆け出して行つた。

ボタンと扉が閉まり静けさがやって来る。ラデイは寝台の傍らへ行き、身を屈めて妻の唇に口付けを落とした。ほのかな薬の香りがある。

「気分はどうだ？」

「ごらの通りですわ。今日はとても良いの」

「薬湯はきちんと飲んだか？」

良人の低く優しい声音に、セレーディラは微笑みながらおつとりと頷く。ラドキースはそんな妻のすぐ隣に腰掛けて、その薄い肩を抱き寄せる。

「お薬を飲む度に思い出しますわ」

「ん？」

「貴方に無理矢理薬湯を飲まされた事」

セレーディラは悪戯つけない瞳でラドキースに笑いかけた。今、己の肩に頭を預けるこの姫君の唇を、初めて塞いだときの感触と苦い

薬湯の味が甦りラドキースは苦笑を漏らす。

「そんな事があつたな．．．」

「まるで昨日の事の様．．．」

遠い瞳をする妻に、ふと不安を感じ、ラドキースはセレーディアの白い手を取って口付ける。そして彼女の後れ毛を愛し気に整え、その金褐色の髪を撫で、その額に唇を寄せる。

「明日、髪を洗ってやろう．．．」

セレーディアは嬉しそうに頷いた。

### 第三章 泡沫（3）

ラドキースが外へ出ると、子供達の姿が見えなかった。数歩歩いて地面を見れば、つたない文字で綴られた単語が沢山書き連ねてあった。あちらこちらに小さな掌の跡もある。ラドキースはそれらに目を止め思わず微笑む。それにしても子供達は．．？　と思い、辺りを見渡すと、向こうの茂みの方に踞っている小さな姿が二つ見えた。

「どうしたのだ？　二人とも」

「あ、とうさま」

ラドキースが大股に近付くと、子供達は二人揃って立ち上がった。シュナが何やら両手に抱えていた。

「せんせい、うさぎがけがしてるんだ」

「ちがでてるの、どうしよう．．．」

幼い子供達は、まるで自分たちが怪我を負ったかの様な顔でラドキースに訴えた。見ればシュナは灰色の仔兎を大事そうに抱えている。その足は裂け、赤い血で染まっている。

「ふむ、狐にでも襲われたのだろっ」

ラドキースは仔兎の傷を見ながら言った。

「骨も折れているな．．。手当てしてやるっ」

添え木になる様な木切れを拾うと、ラドキースは子供達を促した。

「どうぶつにも、いじわるなやつはいるんだね、ラディせんせい」

ラドキースが手当をする仔兎が動かない様に押さえながらシユナは尋ねた。

「意地悪というのとは違うかもしれないな……。動物が他の動物を襲うのは本能的なものだからな」

ラドキースは兎の足に傷薬を付け布を巻くと、添え木に括り付けた。

「ほんのーてきつて、なあに？」

エルが首を傾げた。

「生まれながらにそういう風に出来ているって事だ。生きる為にな。強い者は弱い者を喰らい、弱い者はより弱い者を喰らい、そしてさらに弱い者は植物を喰らう。そして動物達は死ぬとその屍を地に返し、植物はその養分を摂って育つ。自然は回っているんだ。動物が他の動物を襲い殺すのは、仕方の無い事だ。だが人間は違う。強い者が弱い者を傷付けるのは許される事ではない。剣は力無い者を守る為にある。分かるな？ 二人とも」

「「はいっ！」」

幼い二人は声を揃えて返事を返した。

その日二人は、ラドキースから“うさぎ”と“きつね”の文字を習った。明日は、仔兎の餌になる草を沢山摘んでエルの家へ行こう。シユナは帰り道、そんな事を考えた。

シユナが仔兎にやろうと、タンポポやハコベラの葉を摘みながらやって来ると、家の前にエルがしょんぼりと座っていた。いつもの丸太にちょこんと座り足をぶらつかせているエルの前には、籠の中で大人しく草を食んでいる仔兎がいる。まだ足に添え木を当てているが、あれから随分と元気そうになった。



「どうしたの？ エル？」

シユナが隣に座ってもエルは俯いたままである。

「いまね、おいしやさまがきてるの」

エルは泣きそうな声で言った。

エルの家には、時々医者がやって来る事をシユナは知っていた。

そして医者があるとエルは決まって泣きそうな顔をする。そんな時シユナは、エルの頭を何度も撫でてやる。一年と少ししか歳は離れていなかったが、それでもシユナには自分の方がエルよりも年上だという気負いがあるのだ。

「セリーおばちゃんのびょうきは、きつとなおるよ、エル」

そう言って慰めると、シユナは握っていたタンポポとハコベラの葉をエルに持たせた。エルが泣きそうな顔のまま葉を仔兎の口元に翳すと、兎はしゃくしゃくと小さな口を動かした。

「ねえ、エル。セリーおばちゃんがげんきになったらやりたいことをかんがえようよ」

「かあさまがげんきになったらやりたいこと？」

シユナの務めて明るい声にエルが興味を示して顔を上げた。

「そうだよ。いちばんさいしよにするのは、やっぱりおいわいだよね」

エルは途端ににっこりと笑って頷いた。

「こーんな、おつきいおかしをつくるの！」

エルは無邪気に両手を一杯一杯に広げて見せた。

「きのみがいつぱいのったやつがいいね」

「うんっ！ ごちそうもいつぱいつくるの」

「うちのかあちゃんがつくってくれるよっ！」

「それからねえ、かあさまとうさまと、シユナとおばちゃんと、おさんぽにいつてみずうみのおこでおべんとをたべるの」

「みずうみって、どこにあんのさ？」

「ん？ わかんない」

「かわじゃダメなの？　かわならちかくにあるよ」

「じゃあ、かわでもいいよ。あとねえ、まちにもいって、あとがあさまにししゅーをならうの」

「ししゅーってなんだ？」

「ん」と、ぬのにきれいなとでえをつくるやつ」

「ああっ、あれか。ずっとまえに、おばちゃんがかあちやんにくれたやつだろ？」

「うん、それっ」

「あれ、かあちゃん、すっげえだいじにしてたよ。ぼくがさわるとおこるんだ」

シユナが顔を顰めると、それが可笑しかったのかエルはきやつきやと笑い始めた。そこに家の扉が開いて、大きな革靴を下げた初老の医者とラドキースが出て来た。二言三言言葉を交わすと、ラドキースは頭を下げた。

医者が去るとエルは駆けて行き、父親の足にしがみついた。

「せんせい、セリーおばちゃんだいじょうぶ？」

シユナの声も心細気であった。

「ああ、大丈夫だ。少し熱を出したただけだ」

「ほんとうに？　とうさま？」

エルの顔は、また泣き出しそうになっていた。

「ああ、本当だ」

ラドキースはいつもの様に微笑んでいる。父の笑顔を見て安心したのか、エルもほっとしたように身体力を抜いて笑った。

「今日は剣のけいこは休みだ。二人とも遊んでおいで」

「「はあいっ！」」

二人は、返事と共に仔兎へと駆け戻った。その様子を暫し眺めると、ラドキースは家の中へと消えた。

セレーディラは眠っている、そのセレーディラの手を握りながら、ラドキースは彼女の透ける様な蒼白い顔を悲し気な瞳で見守っていた。

九年前、ユトレアで彼女が鏡の欠片で手首を切った時も、やはりこんな気持ちで彼女の眠る顔を見詰めた事が脳裏に甦った。セレーディラ無しで生きて行く自身など無いと思った。彼女のいない人生など、ラドキースには考えられなかった。

「神よ．．．．。私から彼女を奪わないでくれ．．．．。」

知らぬうちに呟いていた。何かが頬を伝った。手で触れると濡れていた。いつの間にか涙が零れていた。暫くの間、己の濡れた指先に驚き呆然とする。自分は泣かぬ人間だと思っていた。涙など無いのだと思っていた。子供の頃に実母が暗殺された時でさえ涙など出なかった。涙の零れる感触などつくに忘れていた。それなのに．

．．．．．。

### 第三章 泡沫（4）

「綺麗な髪だ事．．．．」

フフフと、少女の様に可憐な笑い声を零しながら、セレーディラはエルの少し癖のある金褐色の髪を梳いてやっていた。愛おしいな眼差しで、愛おしい優しい手付きで、丁寧に丁寧に幼い娘の己と同じ色をした柔らかな髪を梳いてやっていた。寝台の上に座って母に髪を梳いてもらうエルは嬉しくて仕方が無い。

エルの母が寝台を離れられなくなってから、もう一年にもなる。エルの物心付いた頃から、線の細かった母は時たま気分が優れずにうずくまる事があった。そんな時の母の顔色は決まって真っ白で、エルはとてつも無く恐ろしくなり母に縋って泣き出したものであった。

『泣かないで、エル。母様はちよつと目眩がするだけなのよ』

母は目を閉じ俯いたまま手探りでエルを抱き寄せると、決まって弱々しい声でそう言ったものであった。父は市場で鳥の肝などを買い求めて来ては母に食べさせ、シユナの母親も心配し、その頃から畑で取れたほうれん草やチシャや蕪などをちよくちよく持って来てくれるようになった。だがエルの母が目眩を起こしてうずくまる頻度は増してゆき、気を失う事さえも起こって来た。父は幾度か母を医者へと連れて行ったが、ほんの数度の事であった。何故なら、そ

の後は医者在家まで呼ばなければならなくなったからであった。ある日突然、母は鼻から夥しい量の血を流し倒れ、そして寝込む様になったのだ。

父はある朝、長剣を鞘ごと腰から外すと、その柄にきつく巻き付けてあつた布を外し始めた。エルは、父のする事を大人しく見ていた。父の手が剣の柄の布をするすると解いて行くその様が、幼いエルには何やら魔法めいて見えた。

『とうしゃま、なにしてるの?』

今よりもさらに拙く舌つ足らずであつた口調でエルが父に尋ねると、父は微笑んだ。

『さて、何をしているのだろうか・・・?』

『なあに?　なあに?　おしえて、とうしゃま!』

せがむエルに、父はただ微笑みながら作業を続けた。そして、やがて布が取り払われると、その下からまるで空の星の様な石が現れた。

『わあ、おほししゃまだあ!』

エルの感嘆の声に、父は喉の奥から短い笑い声を洩らした。

『みしえて、みしえて、とうしゃま!』

エルが父の膝に駆け寄ると、父は露になった剣の柄に嵌め込まれていたきらきらと輝く大きな石を見せてくれた。

『わあ、おほししゃま、きれい!』

『これは金剛石という石でな、とても堅くて強い石なのだ』

『どうして、こんなにきれいなおほししゃま、かくしてたの?』

『とうしゃま?』

『人に見せるべき物では無かつた故だ』

『どうして?　とうしゃま?』

『この石はとても貴重な物でな』

『“キチヨ”　ってなあに?』

『とても珍しく、なかなか手に入らない品という事だ。それ故、

金に換えればなかなかの額になるう。そういった品は、むやみやたらに人目に曝すものでは無いのだ』

『ふう〜ん』

小さなエルには今一つ良く分からない点もあったが、父の言う事である。それは正しい事なのだ。と小さなエルは納得した。

『この石を売って母様の薬代にしようと思うのだ』

『かあしゃまの、おくしゅりだい？』

『ああ。お前の母は毎日薬を飲まねばならぬ。それに、滋養のあるものを食べねばならぬのだ。母様に早く元気になって欲しかろう？ エル？』

『うん！』

『これを売れば、当分の間は母様の薬代に困る事も無かるうし、滋養のある物を沢山食べさせてやれば病もきつと良くなるう』

『うんっ！ とうしゃま！』

エルは瞳を輝かせて大きく頷いた。

そして．．．、ほんの数ヶ月前に、父は馬をも売った。エルとシュナの大好きな栗毛の馬であった。父は馬を売りに行く前に、エルとシュナの小さな身体を抱き抱えながら馬に乘せてくれた。そしてその後、二人の小さな肩を両手に抱きながら静かに詫びた。もう彼とはお別れなのだ。と告げて．．．。エルもシュナも、ぐつと我慢した。幼いながらに、その別れの理由を悟ったからであった。込み上げて来るものを必死で堪え、曇る瞳を幾度も幾度も拳で拭い、エルとシュナは小さな手と手を繋ぎながら、父に連れられて行く大好きだった馬を見送った。だが病に伏せる母にはその事は一切告げなかった。

病に伏せる母も身体の調子の良い時は、半身を起こしてエルの髪を梳いたり綺麗に編んだりしてくれた。そして今日も気分が良かった。

たらしく、エルを寝台の上に引っ張り上げると丁寧に髪を梳かし綺麗に編み下げにし、そして粗末ながらも可愛らしい刺繍の入ったりボンで結んでくれた。

「ほうら出来上がり。とても可愛らしいわ、エル」

「ありがとう、かあさま。こんどは、あたしがかあさまのかみをすいてあげる」

「まあ、嬉しい」

母は静かに微笑みながら、一つにまとめていた髪をほどいた。エルは櫛を握り、母の背に回り込んだ。エルは、母の緩やかに波打つ長い髪に触るのが大好きであった。

「かあさまのかみ、ながい」

母の腰の辺りまである髪に、エルははしゃぎ声を上げる。

「そうね、少し切った方が良いかしら？」

「ううん！ きつちゃだめえ」

「そう？」

「うん。だって、とってもきれいなんだもん」

フフフと、母がまた笑い声を零した。エルは一所懸命に母の長い髪を梳かした。母にしてもらった様に、幾度も幾度も梳かした。そして小さな手でエルは母の髪を編み始める。編んではほどき、ほどいては編み、小さな手でそれを幾度も幾度も繰り返した。母は娘が飽きるまで、嬉しそうな表情のままじっとしていた。娘の好きな様にさせてやりながら、母は他愛も無い言葉を娘にかけた。

「かあさま、やつぱりじょうずにあめない・・・」

やがてエルは、いつもの様に音をあげた。

「もう少し大きくなったら、きつと上手に編める様になりますよ、エル」

母は身を捻って、少ししょんぼりと肩を落としている娘を抱き寄せた。

「エルは優しい子ね。ありがとう。大好きよ」

「あたしも、かあさまだあゝいきつ！ とうさまもっ！」

エルは、ころつと顔を輝かせて母に抱きつく。母の胸は今日も薬湯の香りがした。

「次の生でもエルと父様に会いたいわ．．．」

母はエルの額に頬ずりしながら、うつとりと言った。

「“つぎのせい”　って、なあに？　かあさま？」

「次に生まれて来る時をもって事よ、エル」

「ふうん。エルも　“つぎのせい”　でも、かあさまとうさまにあいたい」

「じゃあ約束しましょうか、エル」

「うん、かあさま」

母は幸せそうな微笑と共にエルをぎゅっと抱き締めた。

その日の夜、エルが寝た後にセレーデイラは自分の首から下げていた鎖を外してラドキースに手渡した。

「これをいつか、エルに渡してあげて下さいませんか？」

鎖には小振りな指輪が下がっていた。ハーグシュの星に羽と百合の交差する紋。ハーグシュ王女の紋であった。指輪の内側にはセレーデイラの本名が刻まれていた。

「そなたが渡してやった方が、エルも喜ぶであろうに．．．」

セレーデイラは答えずに、ただ微笑む。それがあまりにも儚く見え、ラドキースの胸を締め付ける。

「貴方にお会い出来て、本当に良かった、ラドキース様」

「私もだ、セレーデイラ」

ラドキースは横たわる妻の髪をそつと撫でながら、その血の気の無い唇に口付けを落とすと、優しく囁く様に答えた。

「国を後にして後のわたくしは、とても幸せでした。とても、とても．．．。貴方のお陰です、ラドキース様．．．。来世でも、貴方にお会いしたい．．．」

「探すとも、そなたを。必ず」



「約束して下さいますか？」

セレーディラもまた囁く様な声で言葉を紡ぎ微笑んでいた。まるで少女の様な無邪気な微笑であった。

「ああ、剣に誓って」

ラドキースは微笑みながら答える。すつと涙が零れた。セレーディラの折れそうな程に細い腕が伸び、夫の頬に触れた。

「愛しているわ．．．心より．．．これからもずっと．．．  
．．．、ラドキース様．．．」

消え入りそうな甘い声音であった。

「私もだ、セレーディラ．．．。未来永劫、そなたを想っている」

ラドキースの囁きに、セレーディラは幸福そうにゆっくりと青空色の瞳を閉じた。そして静かに息を吐き出したかと思うと、ラドキースの頬から力無くその細い手を落とした。

「セリー？ セレーディラ？」

ラドキースは力尽きた妻の手を握る。

「眠ったのか？ セレーディラ？」

だがしかし、セレーディラからの息の音は最早聞こえては来なかった。

「もう暫し、声を聞かせてはくれぬのか？ セレーディラ？」

ラドキースは瞳を隠したままの妻の身体を抱え、口付けを落としながらその名を幾度も呼ぶ。動かなくなつた蒼白い頬を優しく撫で、髪を撫で、話かけ名を呼び続ける。妻の頬に音も無く落ちる透明な水滴を、幾度も幾度も優しい手付きで拭ってやりながら、震える声で名を呼び続けた。

「私達を．．．、置いて逝くのか．．．？ セレーディラ？」

幾度呼んでも、鮮やかに美しかったあの青空色の瞳を見せてはくれぬ妻の首筋に、やがて顔を埋めてラドキースは声を殺して泣いた。

「置いて逝くな．．．、セレーディラ．．．」

掛替えの無いものが一つ、指をすり抜け奪われてしまった。

「置いて逝くな．．．．私達を．．．．」

ラドキースはセレーディラの亡骸を夜通し抱き締め、その豊かな髪を涙で濡らし続けた。神などいないのだと思った。

### 第三章 泡沫（5）

翌日、目を覚ましてからの幼いエルは、父親の腕の中でずっと泣き続けていた。泣いて泣き疲れて眠り、そして目覚めては又泣いた。ラドキースは逝ってしまった妻の傍らで、ずっと幼い娘を腕の中に抱いていた。これ以上の絶望があるであろうか。祖国を裏切る事を厭わぬ程に愛していたというのに、己が命を投げ出しても良いと思う程に愛していたというのに、こんなに早く彼女は逝ってしまった。奪われてしまった。失われてしまった……。

今日もシユナは午前中に母の畑仕事を手伝うと、大急ぎで昼食のパンを呑み込んでエルの家へと駆け出した。いつもの様に家の前の丸太の上にエルの姿は無かったので、シユナは扉の前まで駆けて来ると小さな拳で叩いた。暫く待ったが誰も出て来ない。シユナは、エルの名を呼びながらも一度扉を叩いた。すると、暫くしてからエルを抱き抱えたラディ先生が姿を現した。

「こんにちは、せんせい。きょうははやくかえってきたんだね」いつもならまだ帰宅していないはずの先生の姿に、シユナは嬉しくて元気な声を上げたのだが、すぐに違和感に気付く。エルが先生の首にしがみついたまま顔を上げようとしないのである。そして時々しゃくり上げている事に気付く。

「エル？ どうしたの？ ないてるの？」

シユナはびつくりして仲良しの少女に声をかけ始める。

「シユナ、おいで」

先生は扉を閉めるとシユナに片手を差し出した。

「うん、ラディせんせい」

シユナは素直に手を伸ばし、ラディ先生の大きな手を取った。先生は言葉少なにシユナをセリーおぼちゃんの寝室へと連れて来た。

「おぼちゃん、ねてるね、ラディせんせい」

「ああ……」

蒼白い顔で静かに眠るセリーに、シユナは幼いながらも気を使つて声音を落とす。

「シユナ」

先生がシユナの手を放すと、胡桃色の頭の上にそつと手を置いた。

「セリーは、永遠の眠りに就いてしまった」

「えっ!？」

「もう、目覚める事は無いのだ。だから別れを告げてやってくれ」  
先生の言った事がシユナには分からなかった。

「おぼちゃん、おきないの？」

ラディー先生は答えず、唯小さく頷いた。それがどういう事なのかシユナには分かりたくなかった。良い事ではないと思つたのだ。分かりたくなくて寝台のセリーに手を伸ばした。

「セリーおぼちゃん? 起きて、セリーおぼちゃん?」

シユナは動かぬセリーの肩を揺さぶった。揺さぶり続けた。

ラドキースとエルは、セレーディラを家の傍らの丘の上に葬った。身を清め清潔な服を着せてやり長い金褐色の髪を梳り整えてやると、ラドキースは彼女の手を守り刀を握らせた。嘗てラドキースがセレーディラに与えた一振りであった。そして沢山の野の花と共に

大地に還した。シュナとシュナの母親、そして墓堀人達だけの寂しい葬儀であつた。

「こんなに早く逝つちまうなんてねえ．．．、セリー．．．」  
セレーディラと仲の良かったシュナの母親は、涙を零しながら野の花で編んだ花輪を真新しい墓に供えた。

やがて墓堀人達も去り、シュナとシュナの母も氣を使いその場を去つた。人のいなくなつた墓の前に、ラドキースは幼い娘を抱えたままいつまでも跪いて頂垂れていた。彼女を失つた今、生きる氣力さえ失いそうであつた。エルも涙が涸れてしまったのである。無表情のまま父の肩に凭れたまま動かなかつた。日が暮れた頃になつて漸くラドキースは娘を抱き上げて丘を降りた。

シュナの母親は、父娘の為に夕食の仕度をしておいでくれたらしく、台所の鍋には煮込んだ野菜のスープがあつた。それを器によそつてみたが、とても食べる氣にはなれなかつた。幼いエルも同様で全く食べようとはしなかつた。父娘は互いにスープには全く手を付けぬままにテーブルに座つていた。

「エル、おいで」

ラドキースは頂垂れたままだった娘を抱き上げると、自分の膝の上に座らせた。そして娘の首に指輪の下がつた銀の鎖をかけてやつた。

「お前の母の形見の品だ」

「かあさまの？」

「ああ。母様がお前にとつて残した。これを母様だと思つがよい。だが決して人に見せてはいけない、エル。誰にも見せてはいけないし、誰にも話してはいけない。良いな」

「はい、とうさま」

エルは泣き腫らした目で父を見上げた。

「お前の母は逝ってしまったが、いつでもお前の事を見守つてい

るであろつ。姿は見えなくとも、いつでも近くに

ル。だから元気を出そう」

エルは素直に頷いた。ラドキースは微笑み指輪を娘の服の中にしまつてやると、抱き締めた。娘に言い聞かせた言葉は、そのまま己に言い聞かせた言葉であつた。セレーディラが逝つてしまった今、彼女の残してくれたこの幼い娘だけがラドキースの総てとなつた。

それから、日に一度は丘の上のセレーディラの墓へと足を運ぶのが父娘の日課となつた。そしてまた、その墓の前がエルとシュナの遊び場となつたのだ。

### 第三章 泡沫（6）

妻亡き後、ラドキースは何処へ行くにも幼い娘を連れ歩く様になった。

父に連らって学校へ行く様になったエルは、相変わらず昼下がりになるとやって来るシュナとも共に読み書きを学んでいたので、教室の中では一番年下であつたにも拘らず一番出来が良かった。また、父が大きな屋敷の子息達につけてやる剣の稽古を見てエルは、木剣で素振りばかりさせられるのは何もシュナと自分ばかりでは無い事も知つた。どんな事をしている父もエルは大好きであつたが、取り分け剣の稽古中の父の姿がエルは一番好きであつた。

そして年が変わり春が廻り来て、シュナが先に七つになった。その二ヶ月後にエルは六つになった。父は二人の背丈に合わせて、古い物よりもほんの少しだけ長い木剣を新しく作ってくれた。二人とも大喜びであつたが、剣の稽古は相変わらず素振りばかりであつた。

「嫌なら止めるか？」

そう問われると、エルもシュナも強くなりたかつたので慌てて首を横に振り、二人競うかの様に素振りの練習をした。

「ラディせんせいの家は、“きしさま”の家だったの？」

ある日、シュナがラディに尋ねた。

「何故だ？<sup>なにゆえ</sup>シュナ」

「せんせいはどうしてけんが使えるのかと思って」

エルも俄に興味を示した。父や母の家の話など殆ど聞いた事が無かったのだ。祖父や祖母は皆、とうに身罷っているという事くらいしか知らなかった。

「そうだな、騎士の家といえば、まあそんな物だったかな。私は保身の為、お前達よりも小さな頃から稽古をさせられたよ」

丘の上の柔らかな草の上に寝そべりながらラドキースが懐かしそうにそう答えると、子供達は驚きの声を上げた。

「とうさまのいえって、どこにあるの？」

「ずっと遠くにあつたが、もう随分と前に無くなってしまったのだ」

「もうないの！？　とうさま？」

エルの氣遣う様な表情にラドキースは目を細め笑いながら起き上がる、その頭を撫でてやる。

「私のいる処がお前の家であり、お前のいる処が私の家だ。エル」  
「でも、どうしてとおくの家から、ここまで来たの？　せんせい」  
シユナが不思議そうに尋ねた。

「それはな、セリーの家と私の家の仲が悪かったので、二人で逃げて来たのだ。私はセリーが好きで仕方が無かったし、セリーも私と共にいたいと言ってくれたのでな。それ故だ」

母の墓へと目を向けながら笑顔でそう語る父の姿が、エルには気のせいにか酷く哀しそうに見えた。その為、エルはその後長らく家の事を尋ねる事が出来なかった。尋ねてはいけない様な気がしたのだ。

ある日、いつもよりも少し遅い時刻にシユナがエルとラドキースの家を尋ねると、灰色兎が家の前で草を食んでいた。いつだったかラドキースが助けた仔兎は、そのままこの家に居着き、すっかり大



きくなっていた。エルとシユナは、この兎に “灰色” という名を付けて可愛がっていた。

シユナは、“灰色” をひと撫ですると家の扉を叩いた。だが答えが返って来ない。

「あれ？ おかしいな。まだ帰って来てないのかな．．．」

シユナは首を傾げる。

「今日って、せんせい、だれかにけんをおしえに行く日だったっけ？」

いや違う。今日は、先生は町の学校の後すぐに帰って来る日だ。

シユナはそう思い直しもう一度扉を叩く。やはり誰も出て来ない。

もうとつくに帰って来ている筈の時刻だというのに．．．。シ

ユナは扉を開けて中を覗いてみた。

「エルっ！？ ラディせんせいっ！？」

戸に鍵が掛かっていなかったで、二人ともいるのだと思いシユナは二人の名を呼んだ。だがやはり答えは返らず屋内はしんと静まり返る。

「おかしいなあ．．．。あ、そうだ、きっとおかの上にいるんだ！」

シユナは、家から飛び出して一目散に丘の上へと駆けて行つた。しかし予想に反しそこにも二人の姿は無かった。沢山の素朴な野の花が供えられたセリーの墓の前で、期待を裏切られたシユナはがっかりと肩を落とした。

とぼとぼと丘から降りると、再びエルと先生の家の扉を押し開けてみる。名を呼んでみても、返って来るのは沈黙ばかり。シユナはとぼとぼとテーブルの前まで来ると溜息を吐いた。

「つまんないの．．．」

何気なくテーブルを撫でたところで、シユナは「あっ！」と大きな声を上げた。テーブルの上に文字が記されていたのだ。拙いエルの子．．．。紙が無かった為に、このテーブルに書き記したのだろう。

「シュ・ナ・へ・あ・り・が・と・う・さ・よ・う・な・ら」

シュナはその文字を指で辿りながら、たどたどしく声に出して読み、そして呆然と立ち尽くした。何故さようならと書いてあるのだろう．．．？ シュナは混乱した。エルとラディ先生の姿を求め家中を探してみた。家の中はいつもと変わらない。ただ、エルとラディ先生だけがいなかった。

それからというものの、今日こそはエルと先生は帰って来ている筈だと期待しながら、シュナは彼等の家を訪れ、丘の上のセリーの墓を訪れ、そしてがつくりと肩を落とし涙を拭いながら母の元へと帰る。そんな日が続いた。

やがて母が哀しそうに言った。

「ラディ先生とエルは、もう戻っちゃ来ないんだよ、シュナ」

「うそだよ。もどつて来るよつ！ 母ちゃん」

「先生とエルはね、本当はこんな処にいる人達じゃ無かつたんだよ」

「どうしてだよつ！？」

シュナは齒を食いしばった。そうしないと泣き出しそうだったのだ。

「悪い人達が、先生とエルを追いかけて来たんだそうだよ。だからきつと、先生とエルはどこか安全なところへ逃げたんだよ」

「わるい人たち？」

母は頷くと、言葉が続けた。

「先生とエルは、逃げないといけなかつたんだよ。じゃないと悪い人達に殺されちゃう。だからいなくなつたんだよ。仕方が無いんだよ、シュナ、諦めて元気をお出し。先生とエルが、殺されちゃうよりはいいじゃないか？ そうだろう？」

優しい母の声に、シュナの鳩羽色の瞳から涙が吹き出した。

「でも、でも、きつとかえって来るよ！　だってセリーおばちゃんのおはかは、おかの上にあるんだよ！　だから、かえってくるよ！」

ぐずぐずと鼻をすすりながらもシユナは叫んだ。

母の言葉に胸を痛めながら、それでも尚、シユナは毎日の様にラドキースとエルの家へと駆け、丘の上のセレーディアの墓に摘んだ花を手向けに通った。そんな幼い息子にシユナの母も心を痛め、時折シユナと共にラドキースの家を掃除したり、セレーディアの墓の回りの草をむしり花輪を編んで手向けたりした。

ある日シユナがエルの家の前まで来ると、町の子供達がそこにたむろしていた。

「なにしてんの？」

身体のかなんな町のガキ大将がシユナの前に進み出た。

「おれたちはラディ先生んちを、たんけんに来たんだ」

「せんせいの家に、かつてに入んのか？」

「だったら何だよ？」

シユナは、むっとして相手を睨みつけた。

「やめろよ。せんせいとエルがかえって来たら、言いつけてやるかな？」

「おめえ、ラディ先生とエルのいばしょ、知ってんのか？」

シユナは口を噤んだまま首を横に振った。

「ほんとうか？」

「ほんとうだよ」

シユナは力無く答えた。ガキ大将は、ちえつと舌を鳴らし、その後ろの子供達の表情には落胆の色が浮かぶ。

「ところでおめえ、さいっしょっから知ってたのか？」

「なにが？」

「ラディ先生のしょうたいにきまってるんだろ」

「しょうたいつて？ わっけ分かんねえの！」

シユナは目をぱくりさせた。

「何だ、やっぱ知らねえの」

「なんだよ、しょうたいつて？」

いじめっ子にはやりと笑って見せる。

「知りてえの？」

シユナは即座に頷いた。ラディとエル的事なら、どんな小さな事だつて知れたかった。

「ラディ先生は、“くろしよーぐん” だつたんだぞ」

「“くろしよーぐん”？」

得意げな相手に、シユナは思わず聞き返した。

「おめえ、知らねえのか？ ゆうめいな “くろしよーぐん” を」

そう言うガキ大将も大人達の話聞くまでは知らなかったのだが、そんな事は無論おくびにも出さずに反つくり返つて話を続ける。

「“くろしよーぐん” ってのは、“ゆとれあ” って西の

くにの “こーたいし” の事だ」

「“こーたいし” って、なあに？」

「おめえ、ばかだなあ。そんな事もしらねえのか？ “こーたいし” ってのは、王さまのあとつぎの事だ」

「えっ!？」

ガキ大将の言葉に、シユナは必死で頭を整理する。

「おうさまのあとつぎつて、おうさまの子どもつてこと？ おうじさまのこと？」

「そーゆー事。やつと分かったのか、あつたまわりいな。でもつて、エルの母ちゃんは、“はーぐしゅ” って国のおひめさまだったんだぜ」

シユナには、ユトレアという国もハーグシュという国も、初めて耳にする名であった。ただ、ラディ先生がその国の王子様で黒將軍

で、セリーおばちゃんは本物のお姫様だったんだという事だけは、幼いながらに理解した。

### 第三章 泡沫（6）（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。

子供達の会話、読みづらくてすみません。たどたどしさを表したくてひらがなにしております。シュナは七歳になって、少し言葉も達者になりました。という事で、漢字を少し入れてみました。

秋山あれ

### 第三章 泡沫（7）

それから数ヶ月が過ぎた頃、沢山の兵隊達が丘の上によって来た。シユナは恐る恐る丘へと登り、そこで行われていた事に愕然とした。沢山の兵隊達がセリーのお墓を掘っていたのだ。シユナは恐ろしさも忘れて飛び出して叫んでいた。

「何すんだよっ！！　ここはセリーおばちゃんのおはかなんだぞっ！　やめろーっ！！」

年端もいかない子供の剣幕に、墓を掘り返していた兵達の手が止まった。その場にいた誰もが小さな肩を精一杯に怒らせた子供に注目した。間も無くして、墓を掘り起こす兵達とは異なった、幾分立派な服を来た大きな騎士がシユナの前に歩み寄り片膝を付いた。シユナは怯まなかった。ラディ先生の代わりに、そしてエルのために、セリーおばちゃんを守らなければならないと思ったのだ。

「お前は、ここに眠るお方を知っているのか？」

騎士は思いの外、優しい口調でシユナに問いかけた。

「セリーおばちゃんだ！」

「セリーおばちゃん．．．？」

「そうだっ。何でおばちゃんのおはかをこわすんだよっ！？」

騎士はやや困惑気味に小さな咳払いを零した。

「お前の言う処のセリーおばちゃんの誠の名は、セレーディア様と仰るのだから．．．。我々はセレーディア様の家臣だ、家来だ、分かるか？　西のハーグシュという国からセレーディア様をお迎えに上がったのだ。故国にお戻り頂く為にな。セレーディア様の

霊廟．．．御墓は、きちんとハーグシュにお建て申し上げる故、案ずるな」

「でも．．．．」

でも先生とエルが戻って来た時に、おばちゃんがいなくなっていたら、きつと悲しむじゃないか．．．．。シュナはそう思ったが言い出せなかった。

「セレーデイラ様を知っているお前は、当然エル様とラドキース様の事も知っておるな？」

「らどきーすさま？」

「ラデイと名乗っておられた」

シュナは急に泣きたくなった。悔しさに遣る瀬なくなった。この大人達のせいで仲良しのエルと大好きなラデイ先生は、いなくなってしまったのだと悟った所為であった。

「おまえたちはラデイせんせいとエルを見つけたら、ころすつもりだろうつ！？」

「そんな事はせぬ」

「うそだつ！ かあちゃんが言ってたぞつ！ わるい人たちが、せんせいとエルを見つけてころすつもりなんだつて！」

シュナは泣きながら叫んだ。騎士は溜息を吐いた。

「ラデイ様はな、我らハーグシュのみならず、スラグとエドミナという国からも追われておる。お二人がスラグかエドミナに捕われれば、エル様はハーグシュの正統な王位を継ぐべきお方故、お命を奪われる事は無かるうが、ラデイ様は間違いなく首を刎ねられよう。だが我らハーグシュは少なからずラデイ様に恩があるのでな、お命を奪う事はせぬつもりだ」

噛んで含める様な騎士の言葉にも、激したシュナの感情が収まる事は無かった。

「うそだつ！ しんじるもんかつ！ おまえたちがおいかけるか、セリーおばちゃんはきつとびょうきになつてしんじやつたんだつ！ おまえたちがおいかけるから、エルもラデイ先生もどつかへ



いなくなっちゃったんだっ！ ぜんぶおまえたちのせいだっ！」  
シュナは一気に叫ぶと声を上げて泣き出した。

シュナに別れを告げる間も無く慌ただしくレワルデンのあの家を出て来てから、ラドキースとエルはずっと旅を続けていた。もうとつくにレワルデンを離れていた。

「ねえ、とうさま。どこへいくの？」

父に手を引かれながらエルは今日も尋ねた。

「何処へ行こうか、エル？ 取りあえず北へ向かっているのだが」  
「きた？」

「うむ。お前の名……エルディアラというのは、お前の母が北国の神話から付けたのだ。だから……、北の国の何処かへ行こう、エル」

「はい、とうさま」

父娘は来る日も来る日も旅を続けた。ラドキースはしばしば歩けなくなつた娘を背負い歩き続けた。そして宿を取る余裕もそうそう無かつたので毎晩野宿をした。

レワルデンを去ってから幾日目の事であつたか、ある日の夕暮れ時の事であつた。ラドキースはエルを背負いながら人気の無い寂しい街道を歩いていて、日の神がその姿の大半を隠した頃、ラドキースはふと何かを感じ取って立ち止まった。

「どうしたの？ とうさま？」

「ちょっと降りておいで、エル。どうも招かれざる客人がいる様だ」

そう言つてラドキースは娘を背から降ろした。と、その時突然、街道脇の藪の中から複数の人影が躍り出た。全部で六人。皆、抜き身の剣を手にしていた。前方に二人、左右に二人、後方に二人。ぐるりと取り囲まれた。

「命が惜しかったら有り金全部置いてきな」

一人がニヤニヤ笑いながら威嚇する。

「有り金と言われても、殆ど文無しなのだがな、我々は」

ラドキースは肩を竦めた。

「んなら、その嬢ちゃん置いてきな。売りやあ金んなるさ」

ラドキースはフツと鼻で笑つ。微かに笑いながら六人との間合いを計っていた。

「それは出来ぬ相談だ」

「んなら、しょーがねえ。痛い目にあつてもらうしかねえな」

追いはぎは言い様、剣を振りかぶりラドキースに襲いかかった。それと同時に他の仲間も一斉に襲いかかつて来る。

ラドキースは左手に娘を抱えると、剣を抜き様一人の剣を躲し、その肩を切り下げ素早く場を動く。斬られた男は地面に転がり惨めな呻き声を上げた。

「けっ！ いきなり斬られんなよ、こん、ボケっ！」

金髪の追いはぎが仲間を罵った。ラドキースはエルを藪の中に押し込むと、それを背に前方左右の五人の出方を待った。じりじりと間合いを詰めると神速の速さで一人の剣を跳ね上げ、また一人の剣を躲し様にもう一人の二の腕を斬る。そして振り返り様に襲いかかつて来た剣を受け止めてほんの数合打ち合った末、容赦無く横様に足を斬り払った。

そして……勝負はあつという間についていた。五人は情けない程に呆気無く何処かしらに手を負い、そして追いはぎ達の中で

一番腕の確かであつた六人目のその手にも最早剣は無く、無様に尻餅をついたまま硬直していた。喉元にはラドキースの剣が一分の隙も無くぴつたりと突きつけられていた。他の手を負った追いはぎ達は適わぬ相手と見たのであろう、なり振りかまわずに逃げ出した。中には己の剣を拾いもせず、に逃げて行く者もあり、ラドキースの剣に囚われた六人目の仲間を助けようなどという殊勝な者は一人として無かつた。

「大した仲間だな。お前を見捨てて逃げ出したぞ」

ラドキースが呆れ、溜息混じりの言葉を零せば、六人目の男はその碧眼に少しいじけた様な色を漂わせながら鼻を鳴らした。

「けっ！ あんな奴ら、別に仲間なんかじゃねえやい！」

男は額から汗を垂らしながらも強がりと言う。

「斬るなら早く斬りやがれっ！」

「まさか……。お前を斬つた処で何の得にもならぬ」

ラドキースはすんなりと剣先から男を解放してやる。男は呆気にとられながら、ラドキースが剣を振って血糊を払い佳麗な身ごなしで剣を納める様を眺めた。

「お前……」

再びラドキースに黒い瞳を向けられて、男は息を嚙り込み身を堅くする。

「基本を学んだ剣遣いをするな。折角の腕を何故こんな生業なにゆえに使うのだ？ 勿体も無い事とは思わぬのか？」

ラドキースは穏やかに言う。後には最早興味を失い、座り込んで動かぬ男に背を向け、藪の中で小さく縮こまっていた幼い娘を抱き上げると歩き始めた。

男は呆然としたまま父娘を見送っていたが、やがて目元にかかる金髪を鬱陶し気に掻き揚げながら立ち上がると、己の剣を拾い上げて毒突いた。

「何が折角の腕だよ……。簡単にやられちゃったじゃねえかよ、俺はよっ……」

その言葉を聴くのは緩やかにそよぐ風のみであった。

### 第三章 泡沫（8）

ラドキースは、エルを抱き抱えながら大分歩いた処で野宿の仕度を始めた。もう日もすっかり落ちてしまっていた。だが幸いな事に今宵の月は完全に丸く、その柔らかな光の恵みを父娘に降り注いでくれている。それを頼りに父娘は木切れを拾い集め、野宿にはちょうど良い木立の間に火を起こした。

「疲れたであろう、エル？ 今日夕飯もすっかり遅くなつてしまつたな」

傍らにちよこんと座る娘に話しかけながら、ラドキースは乏しい荷からパンと干し肉を取り出すと娘に切つて渡してやった。こんな貧しい食事でも、小さなエルは文句一つ言わずに食べる。そんな娘がラドキースは時たま不憫になつた。

「とうさま、たべないの？ たべなくちゃダメですよ」

ラドキースが堅い干し肉を挟んだパンを一所懸命に咀嚼する幼い娘の様子を見詰めていると、その娘は咀嚼した物をようやく呑み込み、父を見上げてそんなこまつしやくれた事を言う。ラドキースは低い笑い声をたて、己も干し肉を挟んだパンを口にする。だが、すぐに食べる手を止めた。

「とうさま？ どうしたの？」

「やれやれ・・・、また現れた様だ」

「まねかれざるきやく？」

「ああ」

ラドキースは呆れ顔で笑っている。エルはきょとんと首を傾げた。

「何用だ？」

ラドキースは振り向きもせず、声を大きくして、こちらを伺っているらしき何者かに問いかけた。

「あ．．．、何だ、バレてたか？」

招かれざる客は、悪びれもせず、にのこのこと木陰から姿を現した。見ればやはり先程の追いはぎの一人である。ラドキースはあからさまに溜息を吐く。

「しつこいな。金は無いし、娘はやれぬと言った筈だが？」

「違う違うっ！ さっきの事を謝りに来たんだよ。詫びのしるしに食いもん持って来たんだ。ほらっ！」

そう言つて男は、枝で串刺しにした川魚を数匹差し出して見せると、そそくさと火の側へ座つて、それらの魚を火にかざして焼き始めた。

「盗んだのか？」

「違うよっ！ さっき川で掬つて来たんだ。毒なんて仕込んでねえから、安心して食つていいぜ」

そう言つて男は存外人なつこい笑みを見せた。見ればまだ若い男である。恐らくは二十を幾許か越した程度であろうか。

だがラドキースは男を無視したまま娘を促し食事を再開させると、己も食事を続けた。

「何だよ何だよ。本当に悪かつたと思つてんだよ。反省してんだよ。信じてくれつて、悪かつたよ」

ラドキースは詫びる男に目も向けず、取りつく島も無い体である。エルは食事を続けながら、じつとこの闖入者を上目遣いに見ている。

「嬢ちゃんも悪かつたな。怖い思いさせちまつてさ」  
若者はへらつとエルに笑いかけた。

「あたしのこと、うりとはそうとおもつたんでしょ？ おじちゃん」

エルが舌つたらずに言うと、若者は鮮やかな金髪頭と片手を交互に横に振つた。

「まさか、あれはウソウソ！ ああ言う子連れの奴は大抵金を置いてくんだよ。本当に売り飛ばす気なんか無かったよ、嬢ちゃん。もうしないから許してくれっ！ この通りっ！」

「おじちゃんはわるいひとだからゆるしてあげないっ」

地面に頭を擦り付けて謝る若者に、エルは無情な言葉を投げると、つんとそっぽを向いた。

「嬢ちゃあーん」

若者は情けない声を上げる。

「あんな事はもう二度としないよ。きっぱり足を洗うよ。俺、この剣に誓うって」

「エル、食べたらもう寝ろ。父が不寝ねずの番をするから安心して良いぞ」

ラドキースが若者を無視してエルに話しかけると、エルは父の膝にちょこんと頭を乗せてもぞもぞと横になった。ラドキースは己のマントで娘を包んでやると、娘の頭を撫でてやった。

「子連れの旅なんて、大変そうだな」

父娘の様子を暫し大人しく眺めていた若者は、ぽつりと呟いた。だがラドキースはそれに対して答えを返す事も無く、娘の母親譲りの金褐色の頭を撫でながら静かに口を開いた。

「先程の言葉は誠か？」

今の言葉が自分に向けられた物だと気付くまでに暫くかったが、ラドキースから静かな漆黒の瞳を向けられると、若者は慌てて頷いた。

「本当だ、誓う。あんたに言われて目が覚めた。真面目な仕事を探す」

「そうか」

ラドキースは微笑んだ。若者はほっとしたのか、へへっと笑って金髪頭を少し照れくさそうに掻いた。

「俺、ユールスってんだ。あんたは？」

「ラディだ。娘はエル」

「ふーん。何処へ行く途中なんだ？」

「定かに決まっていはいない」

「子連れの根無し草か？」

「そういう事だ」

ラドキースは、規則正しい寝息を零し始めた娘の肩に手を置いたまま、そう答えた。

「お前は？ 何故追いはぎなどしていた？ きちつとした剣遣いをするところを見れば、元は真つ当な者であつたのではないのか？」

「真つ当だつたかどうかどうか分かんねえけど、元々追いはぎじゃあなかつたよ．．．．．。魚、焼けてるぜ」

「私はいらぬ」

「何だよ。毒なんか仕込んでねえのに．．．．．」  
ぶつくさ言いながら、ユールスは焼き魚に手を伸ばした。

「俺はさ、西のスラグで生まれたんだ。騎士階級の家に生まれたからさ、だからガキの頃から剣を学んだんだ。親父は近衛騎士団の騎士だつたんだけどな、ある日、国王の逆鱗に触れた同僚を庇つたら捕われて殺されちまつた。王に楯突いたってかどでな。家も取り潰しにあつて、お陰でおふくろは首括つちまうし．．．．．。俺はそんな時十四でさ、王城で小姓なんかやりながら親父みたいな王国騎士団の騎士になる事を夢見てた頃だよ。それが全くつ、一晩で罪人の子だぜ。王都にもいられなくなつて、十歳だつた弟を連れて片田舎の親戚を頼ろうと思つたんだ。でもよ、その旅の道すがら悪い奴らに出会つちまつてよ、弟は殺されちまつた．．．．．。俺も追いはぎなんかやってたけど一度も面白がつて殺しなんかしてねえ。でもあいつ等は、まだ十歳だつた弟を女みたいに可愛い顔してるからつて、面白がつて追い回して俺の目の前で鬨つて、少しずつ斬り刻みながら殺しやがつたんだ。くそつ．．．」

ユールスは悔しそうに唇を噛みながら目元を拭つた。ラドキースは無言のまま聞いていた。

「俺も危つく殺されるところだつたんだけど、通りがかりの傭兵に



助けられたんだ。で、その傭兵につられて俺も傭兵になった。ちょうどその頃ハーグシュとユトレアの五年戦争の真っ最中でさ、俺も十五んなってそうそう、その戦に行ったよ」

「どちらに付いたのだ？」

ラドキースは焚き火に木切れを焼べながら尋ねた。

「そらあ黒將軍の側に決まってるさ。わざわざ負ける方に付くもんか」

「だが、お前はスラグの人間だろう？ スラグとユトレアは昔から仲が思わしく無かったではないか？」

「関係ねえつての。スラグが何だつての。俺はあの国で家族全員殺されたんだ。おふくろは自分でおっ死んだけど、親父が殺されなきゃ、おふくろだつて首括る事もなかったわけだし、弟だつてあんな風に殺される事も無かつたんだ」

「そうか・・・」

「でもな、その後のユトレア、ハーグシュ戦はな、ハーグシュに付いたんだ。ほら二度目の戦は、ハーグシュには“獅子”がいんだけど、ユトレアには“黒將軍”がいなかっただろ。黒將軍がいたら俺は絶対にユトレアに付いてた。他の傭兵仲間も一緒だよ。皆ハーグシュに付いた。ユトレア王は馬鹿だ。あの黒將軍を牢屋なんかに放り込みまつたつてさ。謀反を企てた廉だつて話だったけど、実際には五年戦争の際の戦利の証だったハーグシュ王女を逃がしてやつただけの事だつたつて噂だぜ。そんだけの事で黒將軍は廃嫡されて牢屋送り。挙げ句の果てにユトレアは滅びやがった。全く馬鹿な王だぜ、そう思わねえ？ あんただつてさ」

「さあ・・・」

「ちえーっ、気の無い返事」

「戦利の証の姫を逃がすなど大罪であろう。本来なら死罪とされて然るべき罪だと思ふがな。実際ハーグシュの残党は、その姫を得、一致団結して恐るべき速さでユトレアを落としたではないか？」

「まあ、そうだけどさ・・・でも黒將軍が軍を率いてたらユト

レアも滅びる事は無かった筈だ、絶対」

「どうか．．．？」

「まあいいけどさあ。でよつ、俺はその戦の後、金もたんまり手に入つたし、暫くぶらぶら旅してたんだ。で、十八の時に南で起きた戦に加わつて二十の頃まで戦つたんだけど、何かさ、戦だからつて人斬るの嫌なつてさ。で、足洗つて中原に行つたんだ。真つ当で平和な職に就こうと思つてさ。でもなあ、傭兵上がりのよそ者になんて、そうそう割の良い仕事なんてねえんだよな。それでも暫くは腹黒い奴の用心棒なんかやつたりしてた。でもそのじじい、人買いだつたんだ。影で女子供を攫つては売り飛ばしてやがつたんだ。だから俺はそいつの事を役所に垂れ込んで逃げてやつた。目出たくトツ捕まつたぜ、あのすけべじじい。で、また処變えて一から職探ししたけど、やっぱなかなかなあ．．．。で、氣付いたら追いはぎになつてた．．．」

「成る程な．．．」

「なあ、あんたは？ どうなんだよ？」

「私か？ 追いはぎはした事無いぞ」

ラドキースは低く笑う。

「そんな事分かつてるよ」

「私もあちこちを転々として来た。職を求めながらな」

「へえ、あんたなんか、俺みたく野蛮臭くねえし、傭兵臭くねえし、それに強いしさ、いくらでも職に就けそうだけど」

ラドキースは微かな苦笑を口元に浮かべたのみで、答える事はしなかった。

### 第三章 泡沫（9）

翌日、ユールスが目を覚ました時に真つ先に視界に入ったのは、こちらをじつと見下ろす漆黒のつぶらな瞳であった。

「お、嬢ちゃん、おはよ」

ユールスを覗き込む様にしてじつと睨みつけていたエルは、眠た気な声をかけられるとぷいっとそっぽを向いて父の元に駆け寄った。まだ怒っているらしい。消えた焚き火の燃えかすの向こう側でラドキースが立ち上がった。既に旅支度を終えている。

「ではな、ユールス。達者で」

ラドキースは短く別れを告げるとエルの手を取って歩き出した。

「うわあ！ ちょっと待ってくれ！」

ユールスは飛び起きた。

「一緒に行つていいだろ？ 俺も職探しの旅に出る事にしたんだ  
っ」

「断る」

取りつく島も無い返事が返つて来た。

「何で？ 冷たい事言うなよ」

だが、ラドキースは振り返りもせずは無言のまま歩いて行く。

「ちえっ。冷てえの……でも俺もこっちへ行くつもりなんだよなあ……。行く方角がおんなじじゃあ、どうしても一緒になっちゃうかなあ……」

ユールスが聞こえよがしの独り言を言ってみても、前に行くラドキースは無言のままであった。ユールスは、それでもめげずに父娘

の後ろを歩いて行く。

ラドキースは完全に無視を決め込んでいる様子であったが、エルの方はどうもこの金髪頭の若者が気になるらしく、時たま後ろをちらりと振り返る。その度にユールスは、にへらつと笑い軽薄に手を振った。

途中、父娘が休息を取れば、ユールスも少し離れた処に座って休息を取った。そして父娘が立ち上がれば、ユールスもまた立ち上がる。

歩き出してから暫くして、またもやエルが後ろをちらと見たので、ユールスはにかつと笑いかけた。

「なんで、おじちゃんはついてくるの？　とうさまは、ダメっていったでしょ？」

エルが口を開けば、ユールスは何やら嬉しそうに破顔する。

「いいじゃんか、行く方向が一緒なんだからさあ。旅は道連れって言葉があんだよ、知らねえか？　嬢ちゃん？」

「しらないっ！」

父に倣っているつもりなのか、エルの口調も冷たい。

「それに、あたしは“じょーちゃん”てなまえじゃないのっ！　エルっていうのっ！　きのう、とうさまにきいたでしょ？　おじちゃん、ものおぼえわるいねっ」

「けっ、可愛くねえなあ。可愛いのは見てくれだけかよ。それ言うならなあ、俺は“おじちゃん”じゃなくってユールスってんだっつうの。嬢ちゃんにおっさん呼ばわりされる程、年喰ってねえってえの、俺は」

「いいのっ！　おじちゃんはおじちゃんなのっ！」

エルは言い捨てると、ぷいとそっぽを向く。

「何だよ、それえ。俺、何か分が悪くねえか？」

ユールスが弱りきった声を出すと、ラドキースはふつと笑いを零した。

「エル、そろそろ許してやれ。もうあんな事は二度とせぬと、ユ

「ールスは昨夜剣に誓ったのだ」

父の言葉にエルは口を尖らせ、「ん」と愛らしい唸り声を上げた。

「とうさまがそういうなら、ゆるしてあげてもいいけど……」

「

「何か嫌そうだな、嬢ちゃん」

「ールスが言うと、エルはくりつと顔だけを後ろに向ける。

「エ・ル！」

「はいはい、エルね、エル」

「こんど、“じょーちゃん”ってよんでも、おへんじしてあげないからねっ。おじちゃん」

「何だよ、エルって呼んだらちゃんと返事してくれんのかよ？」

おじちゃんと呼ばれる事に一抹の不満を覚えながらも、エルが自分に話しかけてくれた事がールスには嬉しく、にかつと笑って見せた。

「なあ、エルは幾つなんだ？」

「むっつ」

「ふうん、六つか……。の割に、こまつしゃくれてんなあ」

「“こまつしゃくれてんなあ”って、なあに？　とうさま？」

エルが父を見上げて尋ねた。

「大人びているという事だ」

父が答えてやると、ふうんという声と共に娘は瞳を丸くした。

「まあ、小生意気って意味もあるわなあ」

ールスが言わなくても良い事を口にする、耳聡いエルは途端に口を尖らせて、後ろを振り向く。

「おじちゃんは、こどもみたいっ！」

「そりゃ、どーも。そう思うなら、俺の事おじちゃんて呼ばないでね。俺様にはールスって、れっきとした名前があんのよ。ねえ、エルちゃん」

「やだよっ！」

エルは喧嘩を売っているとは思えない。

「嫌われたな、ユールス」

ついに笑い出したラドキースが後ろに目を向けた。

「ちえっ、どうしたら機嫌とれるかなあ．．．」

ユールスはこれ見よがしな深い溜息を吐いた。

やがてエルの口数が少なくなり無言になると、ラドキースは娘の前に屈んだ。するとエルはその背にくにやりと身体を預けた。

「何だ？ おんぶか？ 俺がおんぶしてやるぞ、エル」

「やだっ！」

エルは一瞬だけ元気な声で金髪頭の異邦人を容赦無く切り捨てるも、すぐにくてつと小さな頭を父の背に預けた。

「なあ、いつもエルをおぶりながら旅を続けてんのか？」

「ああ」

「大変だな．．．」

「別に．．．．．」

素っ気無い返事が返って来た。

「なあ、あんた、かみさんは？」

「先立たれた」

「．．．そつか。可哀想になあ、エル。まだ、こんなにちゅちゅえのに．．．」

眉間を曇らせながら、ユールスはラドキースの背で眠りに落ちた少女に目を向けた。

「川が近い様だな．．．」

「あ？ ああ、もう少し行ったら川沿いに出るよ」

「そうか、ならば今宵はそこで休もう」

「おうっ！」

ユールスがぱつと顔を輝かせて返事をした。

父の背から降ろされると、エルはぱつちりと目を開けた。どうや

ら眠気は覚めたらしい。そしてユールスの姿に気付くと口を尖らせた。

「おじちゃんも、ここでねるの？」

「そつ、俺様も一緒に寝るの」

エルが父を見上げると、苦笑を浮かべた父は眉を上げて肩を竦めた。

「じゃあおじちゃん。いっしょにねてもいいけど、おさかなとつてきてっ」

ユールスは、年端もいかぬ少女に頭ごなしな命令を受けるも、嬉しそうに拳で己の胸を叩いて見せた。

「おうよつ、いいともよつ！ 俺、魚摺んの上手いんだぜえ！

見に来るか？ エル」

「うんと」

エルが再び父を見上げれば、父は頷いて見せた。

「川に落ちぬ様、気を付けるのだぞ、エル」

「はい、とうさまっ！」

「おしつ、来いっ、エル！」

ユールスが大喜びで川へと駆け出すと、エルも嬉しそうにとてと追いかけて行った。ラドキースが木々の下で薪を拾い集めながら遠目に様子を見守っていると、川沿いでユールスが足から皮長靴を引っぱり脱いでは地面に放り、腕まくり足捲りしながら背を屈めて、エルにしきりと何か話している様子が見て取れた。するとやがて小さなエルはその場にしゃがみ込んだ。

「いいか、あんまり動いちゃダメだぞ。静か〴〵に見てるんだぞ。騒ぐとお魚さんはびつくらこいて逃げちまうからな」

ユールスが声を落として、口元に人差し指を立てて見せると、エルはしゃがんで素直に頷いた。そしてユールスは腰の剣を静かに引き抜くと、水音も殆ど立てずに川へと入って行った。中程まで来る

と剣を逆さまにかまえたままぴたりと静止した。エルは真剣な顔をしてユールスを見詰めている。ユールスはエルににこりと笑顔を向けた後、じつと水底に目を向けていた。と、その刹那、ユールスがさつと水底に剣を突き刺した。エルは吃驚する。そしてユールスが引き上げた剣先で、魚がぴちぴちと勢い良く尾を動かしているのを見て黒い瞳を見開き、あわや声を上げそうになった口を小さな両手で押さえ込んだ。ユールスは撰った魚を剣先から引き抜いて川岸へと放り投げた。エルは立ち上がると魚へと走り寄る。魚はエルの前でぴちぴちと刎ねている。エルが物珍し気にその魚に気を取られていると、また魚が飛んで来て地面で跳ね出した。エルが新しい魚に気を取られていると、また新たに魚が飛んで来る。

あつという間にエルは回りを、ぴちぴちと刎ねる魚達に取り囲まれた。

「こん位ありやあ充分だろ？ どうだ、エル？」

ユールスが川から上がって来た。

「うん、じゅーぶん！ おじちゃんすごいね。おさかなとるの、じょーずだね」

エルが素直に驚きながら感想を述べる様子に、ユールスは気を良くする。

「ありがとうよ。何か初めて褒められた気がするな」

「うん、はじめてほめてあげたんだよ、おじちゃん」

「そっか、へへへっ」

「でも、なんだかおさかなかわいそうだね」

「それを言っちゃあなあ、エル、生きてけねえぞお。人間は生きる為に色んな動物を殺して食ってるわけだからなあ。まあ、お魚さんもな、撰っちまったのはエルがちゃんと残さず食ってやりやあいんだ。お魚さんもそれで幸せなのよ」

「ほんとう？ おじちゃん」

「ホント、ホント」



辺りが暗くなる頃には、焚き火に焙られた魚が良い香りを漂わせていた。空には秋の星が瞬いている。

「いいにおいだね、おじちゃん」

「だろ、腹減ったか？ エル」

「うん、すつごくへった」

「そつか、そつか。良い子だから、もうちょっと待ってるな」

ユールスはエルを相手に上機嫌で魚を焼いている。

「あのね、とうさま、おじちゃんはおさかなをとるのが、とってもしようずだったよ」

「そつか」

ラドキースは近くの木に寄りかかりながら、娘の話に相槌を打ってやる。

「でね、おさかなはのこさないでちゃんとたべたら、可愛いそうじゃないんだって。おじちゃんがいったの」

「そつか」

「ほんとう？　とうさま」

「そうだな・・・、答えは一つでは無かるうよ、エル。それが正しいかどうかは、お前がこれから考えてゆくのだな」

エルは少し首を傾げるも、素直に返事を返した。

「ほれ、食おうぜ」

ユールスは「ほいつ」と、真っ先にエルに香ばしく焼き上がった魚を渡してやった。

「熱いから気を付けろよ、エル」

「はい」

「お、初めて“はい”なんて、俺に可愛い返事をくれたなあ、嬢ちゃんよう」

ユールスは目尻を下げて感動している。

「お前の株は上がった様だな、ユールス」

「御陰さまでよう。女王様は俺の魚握りの腕を気に入ってくなすつたみてえだし」

「あたしは “じょおーさま” じゃなくって、エ・ル・っ！」  
「分かってらあ。エルは女王様みたいに可愛いつて褒めたんだろ  
うが。褒め言葉だよ」

「あたし “じょおーさま” より “おひめさま” のほうが  
いいもん」

「分かった、分かった。お姫様。つたく、あー言えばこー言うな  
あ、もう」

ラドキースは、静かな笑いを零しながら、二人の何やら微笑まし  
いやり取りを聞いていた。

「ねえ、おじちゃん」

「何だ？ お姫ちゃん」

ユールスが焼き魚を齧りながら、蒼い瞳をエルへと落とす。

「おしごと、さがすんでしょう？」

「おうよ」

「おさかなとるひとになれば？」

「漁師か？」

ユールスは思わず食べる手を止める。

「うん、それっ。りょーし！ ねっ、とうさま」

エルは隣の父を見上げた。

「ふむ、良いかもしれぬな」

ラドキースも食べる手を休めると娘に微笑みかけ、ユールスへと  
目を向ける。

「そうだな、俺、魚摂るの下手じゃねえもんな」

「うん、おじちゃん、すぐくじょーず」

ユールスは目を輝かせた。

「そうか、漁師か……。どつかの小さな村で魚摂って、そ  
の内、嫁さんなんか貰って、エルみたいな女の子なんか作って、戦  
とか血なまぐさいのとかとは無縁な生活送ってさ……。何かそ  
れって、いいかもなあ。って事は、やっぱ海のある国へいなくなっ

「ちやな．．．。うんつ、よしつ、決めたつ！ エルの言う通り、俺は漁師になるぞっ！」

その夜、追いはぎから足を洗ったユールスは、漁師になる一大決心をしたのである。

その数日後、一行は分岐点に立っていた。

「俺は、この先のズウォルデへ行ってみる。あんた等は？」

「私達は、もう暫く旅を続けるさ」

「そつか．．．。」

ユールスは少し残念そうな表情をした。

「がんばってね、おじちゃん」

「おおつ、頑張つて立派な漁師になつてみせるよ。ありがとな、エル。お陰で目的が出来たよ。あんたにもすげえ感謝してるよ、ラデイ。あんたに会わなかったら、俺、一生追いはぎだったかもしれないねえ」

「最終的には、お前が自ら決めた事だ」

「へへつ、そうかもしれないけどさ。あんた等に会えて、俺、良かったなあ．．．。何か別れんのが、寂しいや．．．。」

ユールスはそんな柄にも無くしんみりした事を言つて照れたのか、金髪頭をかりかりと搔いた。

「達者でな、ユールス。良い漁師になれ」

「ラドキースは笑顔であつた。」

「ああ、あんた等も気を付けてな。無事を祈ってるよ」

「じゃあね、おじちゃん」

「ああ、俺のお姫ちゃん。元気だな」

ユールスは、その場に足を止めたまま二人を見送る。エルは父に手を引かれながら、幾度もユールスを振り返つては小さな手を振っていた。ユールスは、それが嬉しくもあり寂しくもあり、二人の姿が見えなくなるまでその場に立ち尽くし、手を振り続けた。そして

やがて若者は、父娘の進んだ道とは別の道を歩み始めた。海洋国ズ  
ウォルデへ、漁師になるという夢を胸に抱いて。

### 第三章 終

## 第四章 風の盟約（１）

\* 王子は、その名を偽り、その身を偽り、風の如く大陸を流れ  
ゆきた。

### ユトレア年代記

#### 第五十五章其の四より抜粋

北国アルメーレは、アルメーレ公が国を治める公国であつた。その然程大きくも無い公国の外れに、エデワという小さな町があつた。エデワは片田舎の小さな目立たぬ町ながら、そこで長らく剣の指南所を構えている者がある。何故その人物が、貴族や騎士達の多く暮らす様な公都やその他の大きな町では無く、この様に辺鄙なエデワなどに指南所を開いたかといえ、それはその道場主の変わり者たる所以であらう。本人曰く、“鼻持ちならぬ貴族のぼんぼんなんぞに指南してやる剣は無い”のだそうである。かく言う本人も、元々は貴族の出自であつたのだが……。

彼の望みは、平民達に自己防衛の爲の剣技を授ける事であつた。しかしその道場主も近頃ではめつきり年を取つた。変わり者であつたせいか妻も娶らずに、よつて跡を継がせる子もない。

その父娘がエデワにやつて来たのは、かれこれ三、四年程前の事であつたか．．、町の者達が、あの変わり者で天の邪鬼で、しかし愛すべき道場主の跡継ぎの心配を深刻にし始めてから間もない頃の事であつた。

市場の喧噪の中を、真つ白なひげを携えた痩せた老人が、両手を後ろに組みながらゆつくりと歩いてゐた。頭には殆ど髪は残つていなかったが、その真つ白なひげは中々に立派であつた。その皺深い顔は、老人がかなりの高齢である事を伺わせたが、背筋はぴんと伸び、その足取りは何ら危ういところも無くしつかりしたものであつた。騎士の様な身なりをしていたが、剣は下げていない。これが町の中では知らぬ者の無い変わり者の道場主、ウイスカード老人であつた。

「おつ、じいさん。何だい？ 女物の髪飾りなんぞに興味示したりして」

ウイスカードがふと足を止めて覗いた屋台の主人が気さくな声をかける。

「じいさんとは何じゃつ、失敬な」

「隠居したんだから、じいさんでいいだろうがよ？」

機嫌を損ねる老人に、銀細工屋の主人は平気で軽口を叩く。

「うるさいわいっ！ つべこべ言わず、ちよつとそいつを見せてみる」

口をへの字に曲げたまま、老人は髪飾りの一つを指差した。

「へっ？　これ？　はいよ。またエルちゃんの機嫌取りかい？

ったく、エルちゃんには甘いんだからなあ、じいさんは」

「それが師匠に向かって言う物言いか？　この馬鹿者がっ」

毒突きながら老人は髪飾りを手に「うゝむ」とうなり、他の髪飾りへと目を移してみる。

「どうも分からのう……。エルにはどんなのが良いのかのう？」

「そうだなあ、じいさんの趣味はちよつと年寄り臭いよなあ。エルみたいな年頃はなあ、こういうのを喜ぶんだよ」

そう言つて、店主はリボンに小花をあしらった細工の髪飾りをつまみ上げた。

「うむ、悪く無いのう。エルに似合いそうじゃ。それにするぞ。綺麗に包んで、リボンもかけてくれ。エルの誕生日の贈り物なんじやからな」

「え？　何っ？　エルちゃんの誕生日なのか？　止めた、これ売らねっ。俺からプレゼントしよつと」

「何を言つか、お前は！」

「何だ、うるさいと思つたら先生か。何揉めてるんですかい、今日は何？」

隣の店の主人が顔を覗かせた。

「おお、今日はエルちゃんの誕生日なんだつてさ」

細工屋の主人は答えにならない言葉を返す。

「え、そうなんかい？　祝い事なんですかい？　先生」

「うむ、わしの家でな」

老人は重々しく頷いた。

「へえ、俺も行っていいですかい、先生？」

「おつ、俺も俺も」

「俺も行ってえ！」

「何だ何だ、俺もっ！」

耳聡い者達が回りから口々に叫んだ。

「やれやれ」

老ウイスカードは呆れ顔で溜息を零した。

日が傾いた頃合いに数人の人影が、思わず胸一杯に吸い込みたくなる程の良い香りを漂わせながら、この小さなエデワの唯一の道場へとやって来た。

「おや？ 何だか騒がしいね」

道場の中から洩れ来る喧噪に、豪奢に渦巻く赤毛を背に垂らした婀娜っぽい女が呟いた。

「まだ練習してるのかしらね？ ロジェリン姐さん」

可愛らしい口調で、傍らのうら若い娘もまた呟いた。

「そんな筈は無いんだけどねえ。今日は早くに切り上げるって師匠も言っていたし……」

ロジェリンと呼ばれた艶やかな長身の女は、柳眉を不審気にひそめて、鎧戸の開け放たれた窓越しから道場を覗き込んだ。

「ありやりやつ！？」

美しい顔立ちには何やらそぐわない間の抜けた声が、その整った赤い唇から発せられた。付き従って来たうら若い娘と、もう一人の寡黙な青年が、両手で鍋やら大皿やらを大事に抱えたままロジェリンの後から道場を覗き込んだ。

「わあゝ？ 何だか、皆さん勢揃いね。子供達まで……」

うら若い娘の弾んだ声に、背後の寡黙な青年も頷いた。

「何をそんな処から不審者みたく覗いとるのじゃ、お前達は？」

窓に並ぶ三つの雁首に真っ先に気付いたのは、道場主のウイスカード老であつた。

「何だい？ 今年は随分と人を呼んだんだね、師匠」

窓から入り口に回り道場に足を踏み入れたロジェリンは、両手に



バスケットを抱えたまま、出迎えた老人に呆れ顔を見せた。

「呼んだ覚えはないわいつ。あやつらが勝手に押し掛けて来たんじゃないわい」

わいわいと賑やかにテーブルを出したり何だりしている男達や、パイをつまみ食いしようとした子供達の手を、片端からぴしやりと叩いている女達や、叱られ逃げ回る子供達の様子を横目に、老人は眉間に皺を寄せた。

「はははっ！ 今年は賑やかでいいや。エルもきつと喜ぶよ、師匠」

大柄な美女は朗らかに笑うと、連れ達とともに町人達が用意したテーブルに持参した料理を並べ始めた。

父娘はその宵、ウイスカード老から招待を受けていた。ラドキースが師範代を務める指南所の主は、毎年エルの誕生日をささやかながら祝ってくれた。エルは今年も楽しみにしながら父と手を繋いで道場へと向かった。だが父娘が老師を尋ねると、今年は随分と賑やかな歓待を受ける事となった。今年は老師の住居の方では無く、道場へと招き入れられた。そしてそこには老師とロジェリン達だけでは無く、顔見知りの町の人々や、エルの友達も集まっており、そろって父娘を出迎えてくれたのである。エルはびっくりしてしまった。あちこちから “おめでとう” という声が飛び交って来る。こんなに大勢の人々に誕生日を祝われるなど、エルには生まれて初めての経験であった為、頬を染めすっかり照れてしまったが、それでもエルは総ての人々の頬に可愛い口付けを降らせて回った。

「忝い、老師、娘の為に」

ラドキースがウイスカードに礼を述べると、老人は何の何のと手を振った。

「わしは何もしておらん。こやつ等が勝手に押し掛けて来よったのじゃ。全く呆れた連中じゃ。内緒事もおちおち出来やせんぞ、ラ

「デイよ」

そんな憎まれ口を叩きながらも、ウイスカードの機嫌は上々である。

「老師様っ！　どうもありがとうっ！」

エルが駆けて来て両手を広げたので、ウイスカードは身を屈めて少女をぎゅっと抱き締めた。普段は怒ってばかりの偏屈な老人も、このエルを前にすると途端に目尻を下げる。

「誕生日おめでとう、エルや。これはわしからの心尽しじゃ」

そう言つて老人は懷から小さな包みを取り出すと少女に手渡した。

「老師様……」

「早う開けてみる、エル」

老人に急かされ少女は父を見上げた。父は微笑みながら頷いたので、エルは嬉しそうに包みを開けた。

「わあ……、きれい……」

つるりと輝く銀細工の髪飾りに、エルは溜息混じりの眩きを洩らした。

「気に入ってくれたかのう？」

エルは、父譲りの艶やかな黒い瞳を輝かせて大きく頷くと、老師の首に抱きついた。

「ありがとう、老師様！　大切にします！」

「はっはっはっ！　そうか、良かった良かった」

老師は上機嫌に笑い声を上げた。

「へえ、可愛いじゃないか、エル」

婀娜っぽい女がエルの手元を覗き込んでいた。

「師匠にしては趣味が良いじゃないか」

「わしにしてはつてのは、余計じゃ」

「ちよいと、付けてごらんよ」

言うやロジェリンは、エルの肩よりも心持ち長い金褐色の髪を手櫛ですいすい梳かすと、エルの額と左右の髪だけを後ろに纏めて、真新しい髪飾りでささっと留めてやった。

「いいよ、可愛いよ、エル」

「ありがとう、ロジェリン」

回りの者達も、しきりに可愛い可愛いと褒めちぎる。

「父様、どう？」

エルは父の前でぐるりと一回転して見せる。嬉しそうに顔を輝かせる娘に、初めて会った日の妻の面影が重なりラドキースは目を細めた。

「若先生ったら、何か言っておあげよう」

ロジェリンに突つかれて、ラドキースは低い笑い声を零しながら

「すまぬ」と呟く。

「出会った頃の、お前の母を思い出した」

「母様を？」

「ああ……。そうしていると良く似ている。その飾りはお前の髪によく映えるな、エル」

「そうじゃろう、そうじゃろう？ わしもそう思ったのじゃよ」  
そう言って老師が笑い声を上げれば、回りの面々から様々な突っ込み声と笑いが沸き起こった。

「父様、今日は本当にびっくりしました」

「そうだな、私もびっくりした」

父娘は楽しい時を終え、暗闇の中を手を繋ぎながら家路についていた。灯りといえば、ラドキースの手にしている松明のみである。

「お前にとつて、あんなに賑やかな誕生祝いは初めてであったな、エル」

「はい」

「楽しかったか？」

「はい、とつても！ 父様は？」

「私もだ。楽しかったよ、エル」

二人は町外れの林の中の、小さな煉瓦造りの家に住んでいた。廃屋になっていた物を、ウィスカードのツルの一声で町の人々が綺麗に直してくれたものであった。

家に帰ると、父は粗末な獣脂の蠟燭を灯し娘の名を呼んだ。

「なあに、父様？」

父は布に包んだ細長い品を取り出して来ると、首を傾げている娘の前のテーブルの上に置いた。

「父からの贈り物だ、エル」

エルはたちまち嬉しそうな笑顔になり、その布を剥ぐった。それは小振りな長剣であった。

「そろそろ、剣を持っても良いであろう。鋼の重さに慣れる意味でもな」

エルはうつとりと剣を取って、そうつと鞘から抜いてみた。練習用の刃先を潰した剣などでは無かった。乏しい炎の灯りを受けた鋭い刃先に、エルは感動の眼差しを落とした。そして、そうつと剣を鞘に戻すと父へと駆け寄りジャンプした。

「父様、ありがとう！」

ラドキースは笑いながら娘を受け止めて抱え上げると、頬にちゅつと口付ける。

エルはこの日、十歳になった。

## 第四章 風の盟約（2）

弟子達への稽古はほぼ総てラドキースに任せ、悠々自適に近い毎日を送る老ウイスカードは、指南所の片隅で独り優雅に東国渡りの植木の手入れなどをしていた。植木鋏をぱちんぱちんいわせては数歩下がって植木の枝振りを確かめ、又ぱちんぱちんと鋏を鳴らす。

「我ながら見事じゃ。うむ」

独りご満悦の体で老人は雪の如く白いヒゲを撫でた。と．．．ふと老ウイスカードの眉間が不機嫌に曇った。右手にしていた植木鋏をさりげなく左手に持ったかと思えば、次の瞬間には老人とは思えぬ俊敏な身ごなしで、腰の剣を抜き放ち様に振り返っていた。続いて鳴り響く鋭い金属音。一歩間違えれば斬られていたであろう。

老ウイスカードの剣は、背後から襲いかかって来た剣を見事に受け止めていた。老人の青灰色の鋭い眼光と、目も覚める様な鮮やかな翠緑の瞳とが睨み合った。

「まだまだじゃな。愚か者がっ」

老人の言葉に襲撃者の口から舌打ちが洩れる。

「隠居したんだから、一度位弟子に自信を付けさせる為と思って負けてくれたって良いだろうが」

相手は不満げに剣をひいた。後頭部でひとまとめに括った豪華な巻き毛は鮮やかな赤。美の女神から余程の恵みを与えられたのである。その豊かな胸に、細く縊れた腰。そして引き締まった臀部から伸びるすらりとした長い足。そのなりは艶やかさの欠片も無い男装であったにも拘らず、彼女の美しさを微塵も損なってははいない。

「そんな戯けた事を言つとる内は、わしには勝てんな、馬鹿者が」  
そう叱りつけながら老師は剣を納める。今日はきちんと剣士らしく腰に剣を下げていた。外に出る時は剣を下げない変わり者の剣士が、自宅の指南所ではきちんと剣を帯びる。それはひとえに、この様な不測の事態の為である。

「早う鍛錬して参れ、ロジェリンよ」

「はいはい」

「返事は一度で良いっ」

「はい」

昨日とは打って変わった剣士姿のロジェリンは、素直にくるりと踵を返して去るかと思いきや、一瞬後には再びその剣を振り被っていた。そして再び鳴り響く金属音。老師の左手で逆手に抜き放った剣がロジェリンの剣を受け止めていた。

「しつこいのう。しつこい女子は好かれぬぞ」

「ついでにデカい女も好かれぬと言いたいんだろぅが？ 師匠はっ！」

ロジェリンは無然たる表情で、今度こそ剣を納めた。

「分かつとるなら、直したらどうじゃ？」

老師も辟易しながら剣を納める。

「デカいのをどう直せつてんだい！？」

ロジェリンは女にしては大分背が高い。目の前の老師よりも拳一つ程は高いのである。

「お前のデカいのは、背じゃなくて態度じゃな」

老師に軽くないなされたロジェリンは、ふっくらと厚みのある唇を尖らせながら「むうっ！」と唸った。

「ほれ、さつさとしてラディにその性根を叩き直して貰つて来い」

老師は、あっち行けとばかりに片手をひらひらと振った。

かなり肉感的で蠱惑的な美女でありながら、このロジェリンは未だ独り身であつた。婚期はとくに過ぎていたが、それを本人が気にしていたかどうかは町人等の知る処では無い。このエデワ唯一の居酒屋の女主人は、夜はかなり婀娜っぽい姿をしているのだが、今は打って変わって化粧つ氣すら無い男装姿であつた。

ロジェリンの居酒屋にはうら若く魅力的な娘達が数人働いていたが、男達が悪さをしようにも、この剣豪が怖くて誰も手出しは出来ない。何せこのロジェリンは女ながらに、嘗ては公国でも名を馳せたウイスカード老の一番弟子なのである。そして……、まだ若い時分に前のアルメーレ公の元での華々しい生活を切り捨てて、この片田舎のエデワに隠り、ほとんど金にもならぬ家業を始めて今に至る師匠が変わり者なら、この一番弟子のロジェリンも多分に変わり者であつた。

ロジェリンの元々の生まれは、隣町の騎士階級の家であつた。それ故、子供の頃からウイスカードの元に通つて来た。そして十七の時に難関を突破し公国騎士団に入団した。

公都に旅立つ時、師はうら若かつた弟子に諫めの言葉を送つたものであつた。

『あまり喧嘩はするで無いぞ』

ロジェリンは師の諫めに元氣な返事を返すと旅立つて行つた。しかし騎士団に正式な入団を果たしたその日の内に、彼女は派手な喧嘩を一発かましていた。騎士団の上司であつた父と兄に大目玉を食らつた事は言うまでも無い。その後は心を入れ替え品行方正に務めたかというロジェリンにそんな事が可能な筈も無く、騒ぎが起こればその中心にいるのは十中八九はロジェリンであつた。ロジェリンは姿も派手なら喧嘩も派手であつたのだ。

休暇で里帰りした彼女は、晴れ晴れと師匠に言った物であった。

『師匠があまり喧嘩するなって言ったから、あまり喧嘩はしていないよ』

言外に喧嘩をしていると言った様な物であった。

公国騎士団の問題児と呼ばれたロジェリンは、どう言う訳か二十  
二の時に突然騎士団を辞めて、何を考えたのかエデワで居酒屋など  
を始めた。当然の如く激怒した父親は、彼女を勘当した。これには  
ウイスカードも呆れ果て、この弟子に尋ねた物であった。何故誰も  
が懂れるという華々しい公国騎士団を辞めたのかと……。それ  
に対してロジェリンはけろつと答えたものであった。

『金が貯まったから辞めたんだよ』

あまりに予想外の答えであった。

『まさかとは思うが、飲み屋なんぞをやる為にか？』

『ああ、そうだよ、師匠！ その為にあたしは、あのけったくそ  
悪い騎士団で五年も我慢したんだ！』

拳を握りしめて力説する弟子に、ウイスカードはそれ以上何も言  
う気は起こらなかった。

剣を弾かれたとほぼ同時であった。ロジェリンはその場に固まっ  
た。喉元の急所すれすれの処に禍々しく光る剣先があった。

「ま、参ったよ、若先生」

ラドキースが目元を和らげ剣をひくと、ロジェリンは大きく息を  
吐き額の汗を拭った。



「又、負けちまった。これで幾度目だろうね」

「まだ無駄な動きが多いな」

「そうかい？ 努力するよ、若先生」

ロジェリンはからつと言うと、姿勢を正した。

「お相手、ありがとうございます！」

礼儀正しく、きびつと頭を下げるロジェリンのその身ごなしと口調は、彼女が確かに元公国騎士であった事を伺わせる。

「でもさ、若先生」

しかし口調は又ころりと元に戻る。

「あの食えないじいさんに負けるとやたらと腹立つんだけどさ、若先生に負けても全く腹が立たないのは不思議だねえ、何でだろ」

「誰がじいさんじゃ？」

「あつ！ 立ち聞きなんて汚いじゃないか、師匠！」

「お前程じゃないわいつ」

ラドキースは手巾で汗を拭きつつ、思わず笑いを零す。

「ラデイよ、この馬鹿者の腐れた根性を叩き直してやれい。手加減は無用じゃ」

「腐れた根性は師匠に似たんだよっ」

「何を言っかつ、このっ」

拳を振り上げる短気な師匠からロジェリンはからからと笑いながら身を躲し、素早く己の剣を拾い上げて腰に納めた。

「じゃあね、あたしは帰るよっ。今晚あたりメシでも食いに来なよ若先生、エルと一緒にさ。良い魚が入ったんだ。師匠はどっちでもいいけどね。じゃあね」

ロジェリンはひらひらと手を振る。そして道場の端の方で他の子供達に交じり、張りぼてに向かって練習用の剣を振るっていたエルに大声で声をかけると、足取りも軽くさっさと出て行った。

「全く。年々無礼に磨きのかかる奴じゃ。腹立たしいから今宵はただメシでも食らいに行つてやるかっ」

ふんつと、鼻息を荒くして老人は言う。

「老師とロジェリンの言い合いは、いつも絶妙ですね」

ラドキースが笑いながら思った事を口に出せば、老人は憤慨する。「なあーにが絶妙じゃあ。一番どっかへ行って欲しかった問題児が、一番ここに長く居座つとる。あれが公国騎士団に片付いた時のわしの喜びがどれ程のもんだったか分かるか、ラデイよ？ ああ、これでやつとあの問題児から解放されて平穩な日々を送れると思つてなあ、それはそれは天にも昇る程の喜びであつたよ。でもって、あれが騎士団を飛び出して舞い戻つて来おつた時のわしの落胆……。分かるか、ラデイよ？ 地獄に落とされた様な心持ちじゃつたよ……。あれだけが未だわしの頭痛の種じゃ……。」「はあ……。」「

終いには泣き出しそうな程の情けない声音になる老師に、ラドキースも返す言葉が見付からなかった。

#### 第四章 風の盟約（3）

ラドキースがエデワへ来て初めてロジェリンと顔を合わせたのは、彼女の店での事であった。

高い熱を出して意識も無くぐったりとした娘を抱き抱え、医者を探し求めていた時であった。辺りは既に暗く静まっていたその小さな町に、一カ所だけ賑やかな場があった。見ればどうやら酒場の特徴である。ラドキースはその店に足を踏み入れ、医者の家を尋ねたのであった。

その時対応に出たのは胸元の開いた服を着て唇を赤く染めた、派手な顔立ちの背の高い女であったが、それがエデワ唯一の居酒屋の女主人、ロジェリンであった。

女主人はラドキースに抱えられたエルの様子を見ると、即座に店内に向かって声を張り上げた。

『ちよいと！ 先生っ！』

『何じゃ？』

どこかで声が答えた。

『師匠じゃないよっ！ 医者の方だよっ！』

『ああ？ 俺か？』

『そうっ！ あんただよ、先生っ！ 病人だよっ！』

大きな杯を片手に立ち上がった初老の男は、のそのそとラドキース達の元にやって来た。そして徐にエルの額に手をあて様子を観察しながら手首の脈を取ると、いつの間にか背後に立っていた若者に

診察道具とその他必要な薬などを取りに行かせた。

『誰か、冷たい水を汲んで持って来い』

医者とは、誰にともなく指示するとラドキースを手招きし、ロジェリンの後について二階へと上がって行った。

『こりゃあ、麻疹だな』

寝台に寝かされたエルの目を調べ、息づかいを調べてから医者は軽く言った。

『お前さん、麻疹はやったかい？』

『ああ』

『ふむ、なら良い。あいつあ、大人がかかると厄介だからなあ。

まあ、暫くは安静にしとかにやいかな。今、熱冷ましを煎じてやるう』

医者言葉にラドキースは頷き礼を言う。

『だが、こんなとこじゃあ、うるさくって休まるもんも休まらんなあ……』

『悪かったね、こんなところで』

端からロジェリンが口を挟んだ。

『宿屋を教えてくれ』

ラドキースが尋ねると、女主人は手を振った。

『そんなの隣町まで行かなくや無いよ。ここはちんけな町だからね。でもまあ、泊まる処はあるから心配しなさんなうて』

そう言つてロジェリンは部屋を出て行ったかと思うと、間もなく一人の老人を伴つて戻つて来た。

『師匠の処に泊まつたらいいよ』

『わしや、かまわんぞ』

『師匠は独りもんだから、好きなだけ泊まつたらいい』

『何でお前が決めるんじや？ 馬鹿者』

『こら、病人の前で騒ぐな』

二人のやり取りが激化する前に医者が割つて入った。

その晩から暫くの間、父娘はその“師匠”たる人物の元に厄

介となるに至ったのである。

艶やかな女が“師匠”と呼ぶ老人を、ラドキースは一体何の師匠なのであるかと訝しんだのだが、指南所を営む剣の師匠であった。居酒屋の女主人は、毎日食事を作っては寝込んでいた幼いエルの様子を見に来てくれていたが、そのエルの病も癒えた頃、ひよんな事でラドキースがウイスカード師匠の代稽古を務めた日、剣を下げた勇ましい男装姿で道場を訪れた。

軽く目を見張るラドキースに、彼女はいつもと違った騎士の様な口振りで『一手お願いしたい』と願って来たのである。

ラドキースが練習用の刃先を潰した剣を差し出そうとすると、ロジェリンはにやりと笑って腰の剣をすらりと抜いた。

『あたしはいつも真剣勝負だよ』

いつもの口振りでそう言い放った。その彼女の言葉に、ラドキースは乳兄弟の顔を思い出した。

ロジェリンの店は、まだ開けたばかりの時刻だというのに既に随分と客が入っていた。町人達のたまり場なのである。まだ時間が早いせいかな食事を摂りに来た客の方が多い。

「ああっ！ 来たね、待ってたよ！」

招待を受けた三人が店内に踏み込むと、昼間とは打って変わった扇情的な赤毛の大柄美女が飛ぶ様に駆けて来た。

「ロジェリンっ！」

エルがはしゃいで両手を振れば、女主人も戯れに少女を抱き締める。

「エル、その服似合うじゃないか。中々良い趣味じゃないか？  
ねえ、若先生？」

「ああ、そうだな」

服装を褒められて照れる娘の後ろでラドキースが苦笑しながら肯定すれば、隣の老師が鼻を鳴らした。

「お前が作ってやったんじゃろ？ 自分で作つて何言つてる」

「あれ、師匠も来たの？」

「当然じゃ、お前に腹がたつたから “ 良い魚 ” とやらを、タダで食いに来たんじゃ」

「やれやれだね、師匠は」

「それはこつちの台詞じゃ。さあ、エルや、座ろう」

己の一番弟子に対するのとは全く違った優しい声で老人が促すと、少女は無邪気に老人の手を取って気に入りのテーブルへと引っ張って行く。柔らかな菜の花色の少女らしいスカート姿が何とも愛らしい。ロジェリンが誕生日の贈り物として縫ってやった物であった。頭にはきちんと老師からの贈り物も付けている。他の客達が皆、エルに声をかけてはその服装を褒めていた。普段は父に連らつての道場通いなので、男の子の様な服装の方が多かったのだが、エルもやはり女の子である。ロジェリンから新しいスカートと同色の袖無し胴衣、そして袖の膨らんだブラウスを贈られると、瞳を黒曜石の様に輝かせて喜んだ。

「エル、何を飲む？ いつもの果実水かい？ 酒はダメだよ」

「当たり前じゃい」

ふざけるロジェリンにウィースカードが絶妙のタイミングで横やりを入れれば、エルは楽しそうにくすくすと笑う。そんな娘の様子を、傍らの父親が目を細めて眺めやりながら微笑んでいる。

「果実水がいい」

「はいよっ！ お姫様<sup>ひい</sup>には果実水！」

かがんでエルに目線を合わせていたロジェリンは、少女の頬をつんと軽く突つくと老師とラドキースの好みも聞いて傍らの給仕の娘

に声をかけた。勿論己の飲み物も持って来させる事も忘れない。

「ねえ、ロジェリン」

「何だい？ エル」

「夜は別の人みたいだね」

エルの隣の椅子に横座りに座ったロジェリンは豪快に笑った。

「でも中身はおんなじだね」

少女の素直な感想に、今度は老師が口を開けて豪快に笑った。ラドキースも微笑んでいる。

「ありがとよ、エル」

「何じゃい、今のは揉め言葉とは違うだろが」

「褒め言葉だよねえ？ エル」

「うん」

ほーれ見ろ、などと言いつつべーつと舌を出して見せるロジェリンに、ウィスカードはこれ見よがしの溜息を吐き出した。

「お前はそのなりで、せめて口を閉じておれば嫁に行けるだろうにのう……」

「そんな事出来るもんかつ。冗談は顔だけにしとくれよ、師匠。大体このあたしに嫁の仕事なんか務まると思うのかい？」

「料理は上手いではないか？」

ラドキースが微笑みつつ口を挟めば、傍らのエルも大きく頷く。

「この服も上手だよ。ねっ、父様」

身に着けた菜の花色の胴衣を両手でつまみながら、エルは父に同意を求める。

ふむつと、美女は首を傾げた。

「そうかい？ じゃあ、出来るかな……。でも、掃除洗濯は嫌いだよ。はつきり言って、あたしの方が嫁を貰いたいくらいだ」

「この変人が！ そういう事を言つとるから男が寄って来んのじゃ」

「師匠に言われたかないね。ねえ、エル」

同意を求められたエルは、きょとんと首を傾げた。

「老先生は知らないのねえ。ロジェリン姐さんはこんなだけモテるんですよ」

給仕の若い娘が口を挟んだ。

「本当かいな？」

「本当ですつて。ただ皆怖くて言い出せないだけで」

疑心暗鬼な表情の老人の背後、店の奥の方で男性客達が皆こちらに顔を向けて一斉にうんうんと頷いた。それに気付いたラドキースとエルは目を見合わせて笑い出した。

「何だい？ 若先生もエルも」

「いや．．、何でも無い、すまぬ」

謝りながらもラドキースはまだその肩を微かに震わせている。彼にしては珍しい。ロジェリンがそんなラドキースを、身を乗り出して眺めた。

「若先生、笑うとやっぱり男前が上がるねえ。ねえ、エル？」

「“おとこまえ” ってなあに？」

「美男子ってこ・と・よっ」

ロジェリンが人差し指を立てて教えると、父が美男子だと褒められて嬉しかったのか、エルは大きく頷いた。

「騎士団にはいなかったのか？ お前を怖がらぬ者は」

ロジェリンの褒め言葉など軽く聞き流してラドキースが尋ねた。

「騎士団かい？」

ロジェリンはたちまち美しい顔を嫌そうに歪めた。

「そうじゃ、そうじゃ、騎士団にならお前よりも強い奴はごまんとおつたろうに。何でそういう奴をつかまえて、ちゃっかり嫁に行かなかったんじゃあゝ？ 普段はあんなにちゃっかりしとるお前が？ わしがどれ程がっかりしたか分かるか？」

「何でがっかりするのさ、師匠があ？ 冗談じゃあ無いよ、騎士団の奴らなんて。あたしが女だからって、からかうか馬鹿にするか、



そんな奴ばかりだったんだよっ！」

「苛められたの？ ロジェリン」

過去を思い起こし憤慨するロジェリンに、エルが心配そうな顔で尋ねた。

「いいや、別に苛められはしなかったが。あたしを苛めたら、苛め返されるのがオチだったからね」

「じゃあ、何をされたんじゃ？」

「どいつもこいつも、あたしを女扱いしたのさっ！」

「だって、ロジェリンは女の人でしょ？」

エルの邪気の無い突っ込みに、ロジェリンはご丁寧にも人差し指を立てて横に動かしながら、チツチツチツと舌を鳴らした。

「違うんだ、エル。騎士の世界じゃあ、男も女も関係無いんだ。

同じ仕事をするんだからね。それをあの馬鹿どもはっ！」

「だからその馬鹿どもに何をされたんじゃ？」

「食事となると、これ見よがしにあたしに椅子を引いて見せるわ、剣を合わせりや手加減するわ、挙げ句の果てには手紙でこのあたしを愚弄する奴もいた！」

「……」

三人は返す言葉が見付からずに、沈黙する。

「あたしの手を取って口付ける嫌みな奴もいたし、花なんぞ送りつけて来る奴もおった。女物の衣装なんぞを送りつけて来る戯け者もおった。あの時は本当に切れたぞ。嫌がらせにも程があるだろうが！？」 思い出すとはらわたが煮えくり返るわっ！」

ロジェリンのドスのきいた低い声は、いつの間にか騎士言葉に変わっていた。ちょうどそんな時、どやどやと客が入って来た。「あれえ、エルちゃん！ 若先生！」、「何だ、何だ、じいちゃんも来てるって？」 などなどと、町の男達が彼等に陽気な声をかけながら、はたとロジェリンの拳を握りしめている様子に気付く。一瞬にしてやかましかった声が止む。

「あっ、あれ？ ロジェリン姐さん、もしかして、ご機嫌ななめ

？ 怒ってる？ とか？」

勇気ある誰かが、そうつとロジェリンの顔色を伺いながら尋ねた。

「怒っておるわ」

その低い声に客達は慌てふためいた。

「お、怒ってるって……」

「騎士みたいな話し方になっちゃってるよ。本気で怒ってるな」

「ど、どうするよ？」

客達がかそこそと小声で言い合っていると、ロジェリンがむくりと不機嫌な顔を上げた。「ひいっ！」という悲鳴が上がった。

ロジェリンがにつこりと、極上の笑みを浮かべたのだ。

「食べに来たのかい？ それとも飲みに来たのかい？ それとも……私の神経を逆撫でする為に来たのか？」

普段の口調で切り出したかと思えば、最後の一節だけは何故かやはりドスのきいた低い騎士言葉に変わった。男達はそれぞれ首を横に振りながら、仲間をどつく様にして店の奥へと逃げ去った。誰もが触らぬ神に祟り無しといった心境だったのであろう。

#### 第四章 風の盟約（４）

ロジェリンは、酷く真剣な時、酷く取り乱した時、そして激怒した時など、言葉遣いが騎士のそれになる。尤も騎士言葉になるというよりは、戻ると言った方が正しかったであろう。昂奮するとうしても子供の頃よりの言葉遣いに戻ってしまうのだ。

「誠に嫌がらせであつたのか？ 花にしろ衣装にしろ、それらは？」

ラドキースが少し不思議そうに尋ねた。

「嫌がらせ以外の何物でもないだろう？ じゃなきゃ何故騎士に女モンの衣装なんぞ贈る？ しかもひらひらのけったくそ悪いのを、いかにも舞踏会にでも行つてると言わんばかりにつ。頭にきたので其奴を殴り倒してやったらば、 “ 寸法が合わなかったなら作り直させるから私の寸法を知らせろ ” なんぞとぬかしよった。性的嫌がらせだぞっ！ 許せんっ！」

ロジェリンはまくしたてるとエールの杯を一気に呷った。

「それは嫌がらせとは違う様な気もしないでも無いが……」

「わしも……」

「エルも……」

ラドキースが率直な意見を述べれば、老師も同意しエルまでもが同意した。

「え！？ じゃ、何だつてんだい？」

ロジェリンは目を剥いた。

「女物の衣装は高価じゃろうが。高々お前に嫌がらせする為にそんな大枚はたく者が、どこにおるんじゃ？ どう考えても、そりやお前の気を引く為の贈りもんじゃろうが。何故素直に好意を受け取ってやらなんだったのじゃ？ 馬鹿者が」

「何であたしの気を引かなきゃいけなかったのよ？」

ロジェリンが女言葉に戻った。

「そいつは、お前に惚れとったのだらうが」

「ええっ！？」

「私もそう思う」

「エルも・・・」

今しがた出された魚介類のたっぷり入った煮込みを頬張りながら、三人はロジェリンの本気で驚愕している様をそれぞれの思いで眺めた。一人は呆れながら、一人はやや哀れみの瞳で、そして一人は不思議そうに。

「手紙つてのはどんなだったのじゃ？」

「中傷だ」

老師の問いに、驚愕していた美女の顔が再び顰められる。

「“ちゅーしょー” って何？ 父様」

「偽りを言つて人の名誉を傷付ける事だ」

「ふうん。ロジェリン、何て言われたの？」

「うゝゝ。君は僕の・・・太陽だ・・・とか。君の瞳は高価な緑石よりもうんたらかんたら、とか。貴女を想うと夜も眠れぬなんちやらかんちゃら、とか」

言いずらそうに口を開いたロジェリンにの言葉に、三人は再び言葉を失った。ウィスカードなどは嘆かわし気な表情を老いた掌で被った。そして短い沈黙の後に、あきれ果てた顔で口を開いた。

「それは世間では“付け文” と言うんじゃ、馬鹿者」

「騎士に本気で付け文などする奴がいるか！？」

「いるのではないか？」

ラドキースの即答に、ロジェリンは衝撃を隠せずに声を上げた。

「騎士であろうが何であろうが、惚れれば付け文くらいする者はいくらでもいるであろうよ」

「若先生がそんな事言うなんて、思わなかったよ」

ロジェリンが途端に気弱な声で呟く。

「父様、 “つけぶみ” ってなあに？」

「恋文を贈る事だ、エル」

「ふうん。ロジェリンは恋文を沢山もらったんだね？ 父様も書いた事ある？」

「そうだな、似た様な物ならあるな」

娘の興味津々な瞳に、父は微笑みながら答えてやる。

「誰に書いたの？」

「無論、お前の母にだ」

「へえ」

エルは素直に驚いている。そして老師はまた別の意味で驚いていた。

「お前でも付け文などするのか？ ラディよ？」

「子供の頃の話ですよ、老師」

ラドキースは少し遠い瞳をして答えた。

「へえ、若先生と恋文って、すごく違和感があるけど。若先生が貰う方なら分かるけどさ。でも、若先生の奥さんて騎士では無かったらう？」

「ああ、違ったが？」

「ふん、あたしに来たのは、やっぱり嫌がらせやからかいだね。」

だって可愛い女達なら、宮殿やその回りにいくらでもいたんだから」

「ロジェリンだって可愛いよ。すごく美人だし。ねえ、父様」

「ああ、そうだな」

「ええっ！？ やだよ、何言ってるんだい、若先生まで」

「誠の事だが」

ラドキースに切り返されて、ロジェリンはてれてれと照れ始める。美女でありながら、そういった言葉をあまり言われ慣れてはいない

らしい。頬が染まっているのは、エールのせいかどうかは分からない。

「師匠は、そんな事一回も言ってくれた事無いねえ？」

「わしだって、たまに褒めとろうが。お前は手と口を出さなきゃ良いと。言外に顔は悪く無いと言ってやっとなるだろうが」

「分かるかいそんなの。何でもっと素直な言い方しないんだい？ 全く」

呆れるウイスカードにロジェリンは逆切れである。

「それにしても哀れよの。それらの男どもは……。大方、皆お前に殴られてもしたんじやろうなあ……。」

反論しない様子を見ると、ウイスカードの言葉は凶星なのである。

「お前の鈍いのは分かつたが、そこまで鈍ちんだったとはなあ。救い様が無いのう。数々の求愛に気付かず、逆切れし続け早その歳か……。哀れよの。お前、今年二十六になるんじやろが？」

老師の口からは、深々と溜息が漏れる。

「それが愛弟子に言う言葉かい？」

「誰が愛弟子じゃい。一番の問題児がっ！」

それから長々と師匠の説教が始まったのであった。

「今日のロジェリンは面白かったね、父様」

「そうだな」

父娘は、仲良く手を繋ぎながら二人くすくすと楽しそうな笑いをこぼしながら家路についた。

「父様と母様は、どうやって知り合ったの？」

「ん？ 私とお前の母か？」

「はい」

「元々は家同士が決めた許嫁であつたのだ、お前の母と私はな。

初めて会った時、彼女は十二であつた。今のお前によく似ていたよ」

「ふうん」

夜道の暗がりの中、松明の灯りに照らされる父の横顔を、エルは興味津々の体で見上げている。

「お前の母は、良く笑って、良く話した。それこそ太陽の様に明るくて愛らしかったのだな、私は一遍に好きになった。初めて会ったその日に、私はお前の母に求婚したよ」

「母様、なんて言ったの？」

「嫁に行くと言ってくれた。その後間もなく婚約も結ばれ、彼女が十六で成人したら、私の元に嫁いで来る事になっていたのだが、それより前に家同士が不仲になったのだな、婚約は反故になった」

「それで、二人で逃げたの？」

「そういう事だ」

「ふうん」

エルは思わず両親の家が不仲になった理由を尋ねかけ、辛うじて口を噤んだ。いつだったかの様に、父が哀し気な顔をする様な気がしたのだ。

エデワの町を、鹿毛<sup>かけ</sup>の馬を連れた旅人らしき男が歩いていった。無精髭にぞんざいに括った伸び放題の髪。この小さな町では、一目でよそ者と知れるその薄汚れた風体に、すれ違う町人達は振り返った。しかし男の方は、そんな町の者達からの奇異の視線もてんで気にはならないらしく、気紛れに寄った北国の町を物珍し気に眺めていた。

「随分と小さな町だな・・・」

男は呟いた。こんなに小さな町に宿屋などあるのだろうか、男は少し心配になりながら、辺りを見回しつつ歩む。まあ、無ければ野宿をすれば良い事なのだが、この処、野宿続きであった為まともに湯も浴びていなければ、ろくな食事も摂っていなかった。たまに

は宿を取って湯を浴び寝台でゆつくりと休みたかった。

間もなくして市の立つ広場が見えて来た。人通りも多くなっていた。そこがこの小さな町の中心街なのだろうと旅人は見当を付けた。市場で買い物をする人々に目を向けながら、自分も食料を調達しておかなければなどと考えた時、彼の目はある一点を捉え、釘付けとなった。思わず凍り付くが如く足を止めたその先には、黒髪の長身の男の姿があった。



#### 第四章 風の盟約（5）

こちらに横顔を向けている男の、首の後ろできちんと結ばれた髪の毛の漆黒にまず目を奪われた。そして次に、長身ではあったがどちらかと言えば細身の姿の、それでいて隙の感じられぬさりげない身ごなしに。そして、彼の連れていた少女……。勇ましくも腰に剣を下げた少年剣士の様なりの金褐色の髪の毛の少女。

手を繋ぎ合う黒髪の毛の長身の男と金褐色の少女の姿に、旅人は瞬きも無しに目を奪われた。

彼らは赤毛の派手な女と何やら言葉を交わしていた。少女は男を見上げて何かしきりに話しかけ、それに対し男は静かに微笑み、時々たまに二言三言と口を開いている様子であった。赤毛の女が身を屈めて少女の顔を覗き込み言葉を紡いだようであった。遠目にも愛らしい少女の横顔が笑った。そしてやがて、黒髪の毛の男と少女の姿は赤毛の女の元を離れ去って行った。

夢と現実の狭間を漂っていた旅人は我に返り駆け出す。人の多い通りを、人を押しのけながら黒髪の毛の男と金褐色の髪の毛の少女を求め追う。しかし込み合った市場に馬を連れていた事が仇となった。彼等はすぐに人々の陰に隠れたかと思うと、その姿は見失われてしまった。旅人は焦燥に駆られながら、込み合った市場の中、愛馬の手綱を引きながら走り回った。

「くそっ」

旅人の口から罵声が洩れる。そんな時、旅人の視界の端に鮮やかな赤い髪の毛の女の姿が入った。先程、黒髪の毛の男達と言葉を交わしてい

た女だ。旅人は慌て駆け寄ると、思わずその腕を掴んでいた。

「っ!？」

いきなり腕を掴まれた女は、息を呑み振り返ったが悲鳴を上げたりはしなかった。

「すまぬ。無礼はお許し頂きたい、御婦人殿」

旅人は腕を放すと、流暢な北方語で咄嗟に詫びた。

「見かけない顔だね。何か用かい？」

鮮やかな巻き毛を背に垂らした大柄な女は、腕を組みながら旅人に不審気な目を向けた。

「暫し物を尋ねたいのだが。今しがた貴女が言葉を交わしていた黒髪のご仁は、お知り合いか？」

その問いに女の眉間が剣呑により合わさった。

「だったら何だい？」

「何処へ行けば彼に会えるだろうか？」

「あんた、誰なんだい？」

「私は、彼の知己の者だ」

「本当かねえ……？ 人違いじゃないのかい？」

女は胡散臭気に旅人を見上げている。

「いいや、私があの方を見紛う筈が無い」

「……」

自身に満ちた旅人の声音に、女は益々眉間を寄せながら考える体となった。

「頼む、教えてくれ。何処へ行けば彼に会えるのだ？」

「あんた、この国の者じゃないだろう？ 生まれてこの方、ここを出た事も無いあの人と、あんた、一体何処で会ったって言うんだい？」

「何？」

旅人の榛色の瞳にわずかな動揺が過る。

「あのご仁は、この国の生まれだと言うのか？」

「そうさ、このエデワの生まれだよ」

「そんな馬鹿な」

「馬鹿も何も本当の事さ。あんたの尋ね人とは別人だろう。他人のそら似って良くあるからね。分かつたらさっさと出て行きな」

「信じられるものか、そんな戯れ言。私がこの十年以上もの間、どんな思いであの方を探したか分かるか？ 会って確かめねば気がすまん」

旅人の剣幕に、女は一瞬気圧された様に口を噤む。だが次の瞬間には翠緑の瞳に冷たい光を滲ませていた。

「探しあてて、どうしようってんだい？」

女の、低く押し殺した様な声が旅人に詰め寄った。

「祖国<sup>くに</sup>へ、お戻り頂かねばならん」

その答えを聞いた途端、女は激しい怒りの形相で旅人に掴み掛かった。

「冗談じゃないよっ！」

「何をする！？」

「出て行けっ！」

女の罵声は、あっという間に町人達をその周囲に集めていた。逆上した女は側の屋台へと駆け寄ると、山積みになっていた売り物のタマネギを掴んで旅人に投げつけ始めた。旅人の馬が驚き、嘶きを上げながら竿立ちとなる。町人達が慌てて女を止めようとその腕を掴んだ隙に、閉口した旅人はその場を逃げ出した。

「やれやれ、何て気の荒い女だ．．．イテテ」

人の多かった市場から抜け出すと、旅人は一息つきつつ女からタマネギを投げつけられた額を擦った。

「北国の女は情に厚いと聞いていたが、あれではまるで山猫じゃないか。なあ、ユクラテ」

一頻りの間、先程の赤毛の女への苦情を愛馬に訴えると、彼は沈

黙する。そして、無くしていた希望を突如取り戻したかのような表情で目元を拭った。

「私を探っている者？」

「ああ。浮浪者みたいなよそ者だよ」

「でも、馬を連れてるぜ」

「それに、剣を下げてたよ。俺見た、若先生」

「喋り方も、何か騎士みたいだったな」

「でも、見てくれは無法者みたいだった」

道場に何人もの町人が集まりラドキースを取り囲んでいた。

「その者は一人だったのか？」

「うん、一人だった。若先生くらいの背丈で、髪は茶色だった。

歳の頃は、うーん、歳なんだか若いんだか、髭面でよく分からなかったよ。十年以上、若先生の事を探してたって言うてた」

ロジェリンの説明にラドキースは暫し沈黙する。敵の追っ手にしては浮浪者の様な風体というのが引かなかった。しかも一人で行動しているとは・・・。

「若先生を、故郷へ連れ戻しに来たらしいよ」

ロジェリンが憮然とした表情で言う。

「ねえ若先生、ここを出て行ったりしないだろう？」

その問いは、そのまま町人達の気持ちでもあった。ラドキースは皆の顔を見渡し、微笑み首肯した。

旅人は心底辟易していた。長年探し求め続けた人物をやつとの思いで見出したというのに、この辺鄙な田舎町の人間ときたら・・・。

。「彼」の居場所を尋ねても皆が皆、知らぬ存ぜぬの一点張りなのだ。それどころか敵意すら含む目を向けられる。

「随分と気に入られてるのだなあ、この町の人々から・・・」

木に寄りかかり、空の星を眺めながら旅人は呟く。どうやら町ぐるみで庇われるほど、彼はここでは重要な人物らしい。ユクラテは、主人の呟きもそんな主人の心の内もおかまい無しに静かに草を食んでいる。

「重要な人物か・・・。一体、何をなさってるのだろうか？　町長とか？　うむ、ありうるな・・・」

そんな能天気な事を一頻り考え、そして小さな吐息を漏らす。町人達に敵意を持たれている以上、自力で探し出すしかない。小さな町故、然程難しい事には思われなかったが、ただ気がかりであったのは、彼が姿をくらましてしまうのではという点であった。そう思うといても立つてもいられなくなる。取りあえず、今は夜更けであるので町の門も堅く閉じられている。壁を乗り越え堀を泳いで脱出する手もあるが、恐らく彼はそこまでしないであろう。旅人の脳裏に、長年探し求めていた人物に手を引かれた、金褐色の髪の子もいかぬ少女の姿が過った。

翌朝、未だ開けきらぬ内から旅人は動き出した。町の中心の広場には、まだ市さえも立っていない時刻である。昨日、ここで彼の姿を見かけたのだ。今日もここに姿を現すかもしれない。そんな一縷の望みを抱いて来てみたのだが、理由わけはもう一つある。広場から伸びるこの通りから、町の門が見て取れるのである。もしも彼等がこの町を後にするとなれば、防御壁を乗り越えない限りは、あの唯一の門から出て行くしかないのだ。日の出と共に門は開く。もう間もなくの事であった。

やがて空が明るみ門は開き、そして広場に市が立ち始める。朝の喧噪の増す中で、旅人はなるべく目立たぬ様に門を出入りする人間に目を向け、市の並び始めた広場へと目を向けていた。

「ちよつと」

突然、非友好的な声音が背後で起こった。その聞き覚えのある不機嫌な声に、旅人は内心舌打ちした。

「何か？ 御婦人殿」

旅人がゆつくりと振り返れば、果たして少し離れた処に、女にしては長身の赤毛の女が腕を組んで立っていた。

「まだ、いたのかい？ さつさと出て行つてれば良かったものを」

「そうはいかない。十二年目にして、やっとあの方を見出したんだ」

「あんた、一体何者なのさ？」

「私は彼の乳兄弟だ。又従兄弟でもある」

「乳兄弟？ 又従兄弟？ じゃあ、あんた、若先生の親類なのかい？」

「若先生？」

「あ……」

女が気まず気に口を噤むと、旅人はにやりと笑みを浮かべる。

「やはり、彼がここの生まれだというのは嘘だな？」

「……」

「で、若先生というのは？ 勉強でも教えておられるのか？ それとも剣か？」

旅人の問いに、女は鼻を鳴らしてつんと顎をそむけた。その表情は何かを葛藤している様にも見えた。

「いつから、この町に住んでおられたんだ？ 彼が連れていた少女は娘御であろう？ 恙無く暮らしておられたのか？」

しみみりとした声に、女は思わず旅人へと視線を戻した。

「頼む、会わせてくれ」

真摯な瞳に見詰められ、女は朱唇を噛む。するとその時、数人の

子供達が元気な声を上げながら駆けて来た。皆それぞれ、手に木剣を握っている。

「お早うつ！ ロジェリン！」

「今日は、道場に行かないの？」

「お早う、後で行くよ」

「分かった、待ってるよ！」

「ああ、早くお行き」

忙しなく言葉を交わすと、子供達はくたびれた風体の旅人には目もくれずに、再び飛ぶ様に駆け出して行った。

「道場か．．．。成る程、若先生はそこで剣を教えておられるわけか」

「あ．．．」

「ではな、ロジェリン殿」

旅人は急ぎ子供達の後を追おうとその場を去ろうとしたが、数歩進んだ処で一度振り返った。

「ちなみに私はフランギスと申す。よしなにな」

鹿毛馬を引きながら駆けて行く旅人の背を見送りながら、ロジェリンは小さく毒突いたのであった。

## 第四章 風の盟約（6）（前書き）

\* 文中の『』は、ユトレア語での会話とお考え下さい。



## 第四章 風の盟約（6）

指南所を探し当てたフアランギスは、手近な木にユクラテを繋ぐと、一つ大きな息をついてから建物へと歩を進めた。朝も早いのに、既に剣を打ち合う音が洩れ聞こえて来ていた。

道場の戸口に立ち中を覗けば、子供達に立ち交じる懐かしい姿がすぐに目につく。そして小さな姫君の姿も難無く見出す事が出来た。

『殿下．．．』

フアランギスが呟けば、まるでその呟きが届いたかの様にラドキースの視線がフアランギスに触れる。その表情がほんの微かに動いた様に見えた。ただそれだけの事でフアランギスは確信する。ラドキースが自分の姿を、見紛う事無く見分けてくれたのだという事を．．．。

「一手、お相手願いたいのですが、若先生？」

十二年の長い離別など、まるで無かったかの様にフアランギスは笑みを浮かべラドキースに声をかけていた。するとラドキースは苦笑と共に低い笑い声を零した。驚いた子供達が、わらわらとラドキースの回りに駆け寄って来たが、彼の穏やかな一声で壁際に散って行った。その様子を見届けると、ラドキースは懐かし気な瞳を乳兄弟へと据えたまま、すらりと剣を抜き放ち進み出た。

フアランギスは然程大きくも無い荷を下ろしマントを脱ぎ捨てるのと、道場へと足を踏み入れた。そしてラドキースに倣い自身も剣を引き抜いた。

子供達は皆、固唾を呑みながら成り行きを見詰めた。エルもまた他の子供達に交じって、父と見知らぬ男の姿に目を向けていた。

エルは考える。父はウイスカード老やロジェリン以外の大人と剣を合わせる時は、刃の無い練習用の剣を使うのだが、今の父は己の真剣を抜き放っている。ひよつとして、父はあの旅人を知っているのではないだろうか．．．と。エルは、何故かそんな気がしたのだ。

次の瞬間、剣の打ち合う鋭い音が道場内に響き渡った。

今朝も清々しい気分で東国渡りの植木の世話を始めたウイスカード老は、道場から聞こえて来た打ち合いの音に鉄を持つ手を止めた。初めは師範代と一番弟子の剣稽古であろうと思ったのだが、すぐに考えを改める事となった。

「はて、誰と打ち合っておるんじゃ．．．？」

老人は呟いた。打ち合いの音が早く激しく、そして重く響く。女のロジェリン相手では、ああも打ち合いの音は重く激しくは響かない。恐らくは彼女以上に力のある者が相手なのである。そして驚く事に、打ち合いの音はいつかな止む気配が無い。鉄を手にしたまま、打ち合いの音に耳を澄ましていた老人の眉間には、いつしか普段よりも深い皺が刻まれていた。

「はて．．．？」

ラデイとこれ程に打ち合える者など、このエデワにいたであろうか．．．？ ウイスカードは強く興味を惹かれ、植木鉄を手にしたまま道場へと近付いて行った。

開け放たれた戸口から中を覗けば、案に違わず、師範代は見知らぬ男と激しく打ち合っている最中さなかであった。

「ほう、道場破りか．．．」

ウイスカードは、何やら感心した様に呟いた。

「違うよ、師匠」

後ろから一番弟子の不機嫌な声が答えた。

「何じゃ？ お前は今日はその格好で稽古か？」

ロジェリンの胸元の開いた胴衣と長いスカート姿に、ウィスカードは眉を顰めた。

「んなわけ無いだろう。今日は休みさ」

「じゃあ、何しに来たんじゃ？」

「ちよつと心配でさ」

「道場破りがか？ わしゃあ、お前の行く末の方が心配じゃわい」  
「だから、あいつは違うって」

「ふむ、良い腕をしておるな、あのよそ者」

老人の耳には最早弟子の言葉など届いてはいない。そんな師匠の様子に苦虫を噛み潰しながら、ロジェリンも一拍置いて同意する。

「本当だ．．．。若先生と互角にやり合うなんて．．．。信じられないね」

「大したものだな、あの道場破り」

「だから違うってば、師匠」

どこまでも勝手な思い込みを貫き通そうとする老師に、ロジェリンは苛立ちよりもむしろ呆れながら両肩をがっくりと落とす。

「何が違うんじやい？」

この指南所の師範代の事を探るよそ者の話は、昨日の時点で既に町の殆どの人々の耳に行き渡っていたのだが、この老師の耳には未だ入っていないかったであろう事を思い、ロジェリンは気を取り直す。

「まあ、しょうが無いか．．．」

「なあにが、しょうが無いんじや？ さては何かわしに隠しとるな？ 何を隠しとる？ さつさと説明せい！」

「はいはい。別に隠したつもりは無いんだけどね。あのよそ者は若先生の親類らしいよ。乳兄弟にして又従兄弟なんだってさ。でもって．．．、でもって、十二年目にしてやっと若先生を見付けたって．．．。ずっと若先生の事探してたんだってさ．．．。」

そのよそ者を見据えるロジェリンは忌々し気に下唇を突き出していたが、その声には何故か力が無かった。

「ほう、そんなに長い事か……。ラディが、かみさんと駆け落ちしてからずっとかのう？」

ウィスカードは驚きに目を見張る。

ラドキースとフアランギスの剣は、相変わらめぐるしい勢いで打ち合っている。まるで剣舞を見ているかの錯覚を覚える程であった。

エルにとって、父と剣を合わせてこれ程長く勝負を続ける者を見るのは初めてであった。この見知らぬ旅人が、父と同じ程に強い事は疑い様も無い。一体誰なのだろう……。エルは胸を高鳴らせながら、その勝負に目を奪われていた。

父が負けたらどうしよう……。少女は少し心配になる。いや、父が負けるわけが無い。でも……と少女が思った時、父の剣が相手の剣を強く跳ね上げた。そして次の刹那、それらの神速の剣は、それぞれがそれぞれの反動を利用して互いを貫くかに見えた。エルは息を呑み肩を竦ませた。誰もが息を呑み身体を震わせ、声を上げる者さえもあった。

旅人の剣が父の心の臓の前でぴたりと静止していた。そして……父の剣先がその旅人の喉元で一分の揺れも無くぴたりと静止していた。

誰もが安堵に大きく息を吐いた。漸く、片は付いていた。

「ほう、五分か」

「五分だね」

老師と弟子が、溜息混じりの言葉を紡いだ。

「大したもんじゃ、いや、あっぱれ」

「ああ。ただ心の臓に悪かったよ、今は……」

額に浮かんだ冷や汗を拭いながら、ロジェリンは再度大きく息を

吐いた。

フアランギスは、喉元に剣を突き付けられながらも、にやりと嬉しそうな笑みを浮かべた。

『五分ですね、殿下』

『そうだな』

回りに届かない程の細やかな声で、懐かしい祖国の言葉を紡いだ乳兄弟に、ラドキースも又、長らく使う事の無かった祖国の言葉を返した。

『やれやれ、負けるかと思いましたよ』

『お前、腕が落ちたのではないか？ フアランギス』

ゆるりとお互い剣を引きながら互いに短い笑い声を立てる。十二年の空白など、まるで嘘の様に。

『致し方ありませんよ。ずっと貴方の様な相手に恵まれなかったんですから』

これ見よがしに肩を竦めて見せる乳兄弟にラドキースは微笑み、そして安堵の息を吐いた。

『お前が無事で良かった。誠、良かった』

昔と変わらぬ静かな口調で言葉を紡ぐ主君の、その微妙に何かを耐えるかの様な微笑に、フアランギスは咄嗟に込み上げるものを押さえて目をそらした。それでも耐えきれずに息を呑み口を押さえた。噛み締めた唇が裂けたのか鉄の味が舌を刺す。

『．．．それは、私の台詞ですよ』

やっとの事で言葉を返せば、からかいの音を帯びた様な笑いが起こる。

『泣くな、フアランギス』

『なっ、泣いてなどいませんよっ』

向きになって顔を上げれば、やはり昔と変わらぬ静かな微笑がそ

こにあった。

剣を納めた父に名を呼ばれ、エルは駆け寄った。すると、今しがた父と剣を合わせた見知らぬ男が跪いた。

「我が名はファランギスと申します。どうか、以後お見知りおきを、エル様」

「エルと申します。どうぞよしなに、ファランギス様」

恭しく頭を下げる目の前の男に、エルはどぎまぎと戸惑いながら自身も名乗って頭を下げてみた。すると、目の前の髭面の男が嬉しそうに顔を綻ばせるのが分かった。

「お母君に、よく似ておられる」

ファランギスと名乗った男の、優しい口調と表情にエルの緊張は即座に解けた。

ラドキースは扉口に立つ老師の姿に気付くと、エルの手を取り乳兄弟を軽く目で促し、そちらへと歩み寄った。

「分かつとるよ、今日はわしが稽古をつけるとしよう」

ウイスカード老は、ラドキースが口を開く前に一つ頷くと、言った。

「で、そちらは、お前の知り合いか？」

ウイスカードは、ラドキースの後ろのよそ者に目を向ける。

「はい、私の親類の者で、ファランギスと申します」

「ほう、そうか。わしはウイスカードじゃ。一応この道場主じや。よしなにな、ファランギス殿」

「こちらこそ、老師殿」

ファランギスは礼儀正しく頭を下げた。そして老師の傍らで腕を組み立っていたロジェリンの姿に目を留めると、わざとらしく片眉を上げた。

「これは、御婦人殿。いらしたんですか？」

「ふんっ！ 悪いかい？」

ロジェリンは鼻息も荒くつかつかとファランギスの前まで詰め寄ると、腰に手をあて挑発的に顎を上げた。

「ちよつと、あんた。若先生の乳兄弟殿とやら。変な気を起こしたら唯じゃおかないからねっ！」

「“変な気” とは、どんな気だ？ ロジェリン殿」

「どんな気もこんな気も、色んな意味で変な気を起こしたら許さないって言っただ！ このうすらとんかちっ！」

未だに敵意を剥き出しにしてくるロジェリンに、ファランギスはやや面食らっている。

「私は別に、彼等に危害を加えたりする者では無いのだが？」

「でも、若先生を連れ戻しに来たんだろうが！？」

「．．．町ぐるみで私の邪魔をしたのは、それが理由か？」

「ああ、そうさ」

微笑みを浮かべるファランギスの、はしはみいろ榛色の瞳が細まった。

「可愛く無いな．．．」

「そんなの百も承知だ」

ずいっと一歩踏み出すファランギスを、ロジェリンがさらに顎を上げて睨みつける。

「止めんか、ロジェリン。客人に向かって無礼を働くでない」

老師が呆れながらロジェリンの後頭部をべしつと叩けば、「いてっ！」 という声上がる。

「痛いじゃないか、師匠っ！」

後頭部を押さえて噛み付く弟子にはおかまい無しに、ウィスカードはラドキース達をうながした。すると、子供達がわらわらと駆け寄ってくる。

「ラディ先生、帰っちゃうの？」

一人が口を開くと、回りからも次々と落胆の問いかけが起こった。「すまぬな、皆。今日は老師に稽古を付けてもらってくれぬか」

ラドキースが子供達に微笑みながら言うと、一斉に「え〜っ！？」　っという不満げな声が上がった。

「何じゃ、お前達は、わしじゃ不満か？　ほれ、鍛錬せぬか、皆ではな、ラデイ、エル、フランギス殿も、又な」

「はい、老師様」

エルがにこりと屈託の無い笑顔を向けると、老人はエルの頭を一撫でして道場へと入って行った。

「ついて来いフランギス。ではな、ロジェリン」

「ああ、若先生。エルも、又ね」

「うん」

ロジェリンはラドキースとエルに愛想良く笑いかけ手を振る。かと思えば、フランギスに目を向けた時には、その笑みは綺麗さっぱりと拭われていた。しかも去り掛けのフランギスに向かつて、鼻に皺を寄せ舌まで突き出して見せる始末。フランギスは呆氣にとられ、吐息を漏らした。

「私は、あの御婦人に随分と嫌われてしまった様です」

困惑気味なフランギスに、ラドキースはふっと笑う。

「嫌われたのか？」

「どう見ても嫌われているでしょう？」

「一体、何をしたんだ？」

「いや、これといって悪い事をした覚えは無いのですが・・・」  
しかし、正直なところ彼には分かっていた。何故、彼女があれ程自分に敵意を剥き出しにしていたのか。

「随分と、慕われておられるようですね」

「ん？」

「町じゅうの人々を味方につけておられるとは、感銘しましたよ、  
“若先生”」

乳兄弟の言葉の意図をはかりかね、ラドキースは娘と目を見合わせた。





## 第四章 風の盟約（7）（前書き）

\* 文中の『』は、ユトレア語での会話とお考え下さい。

## 第四章 風の盟約（7）

亡国の皇太子親子の約しい住居をフランギスは複雑な思いで眺めつつ、かつてのユトレア王城内の厩でさえ、ここよりは広かった事を思い起こす。調度も必要最低限の物しか置かれていないと見えた。実にささやかな住居であったが、掃除は行き届いておりこざっぱりと整っていた。

この世に生を受けてより故国を出奔するまで、常に従者達や侍女達にかしずかれる立場にあった王子が、これまでどの様な生活を送って来たのか。フランギス自身にとってでさえ、市井の生活に慣れるまでには様々な苦労があったのだ。ましてやラドキースならば、尚更の事であつただろうとフランギスは思う。そんな胸の内に過る思いに、彼は暫し捕われた。

「エル、茶でも入れてくれぬか？」

「はい、父様」

「火を起こす時、気を付けるのだぞ」

エルは、につこり笑って頷くと、ぱたぱたと軽い足取りで奥へと駆けて行った。フランギスは我に返る。

『そんな事は、私が』

慌て、小さな姫君の後を追おうとするフランギスを、ラドキースは静かに制し座る様に促した。

『良いのだ。あれは何でも良くこなす。そうやって生きて来た。あれには何も話してはおらぬ。何も知らぬのだ。己の国も、言葉も、己の立場も。知らずにすむなら、その方が良い』

『殿下．．．．．』

短い沈黙が流れる。ファランギスは、己と同様に十二年分の歳を経た主君の顔を見詰め、痛ましきで一杯になる。ともすれば表情に出そうになるそんな思いをごまかすかの様に、彼はマントを脱ぐと主君の向かい側の椅子に腰を下ろした。そして服の中から銀鎖を引っ張り出して、それを外した。

『これを貴方にお返しせねば．．．．』

言いながら、鎖に通された指輪をラドキースの前に置いた。ラドキースは懐かし気な瞳でその指輪を手にとった。王冠に蔦の絡んだ剣の紋章。彼自ら捨て去った地位。彼自ら裏切った祖国。その祖国もとうに失われている。

『ハイデルとカリナに会ったのだな？』

『はい』

『ウルゲイルとエヴェレットは？』

『トーラン將軍は戦を生き延びました。ですがフォンデルギーズ卿は、敵に放たれた火矢に焼かれ討ち死にされたと．．．．』

『そうか．．．．』

指輪を見詰めるラドキースの漆黒の双眸が、微かに揺れた。

『お前とウルゲイルだけでも．．．．、無事で良かった．．．．』

『

消え入りそうな声で呟くと、ラドキースは指輪をファランギスの前に置いた。

『殿下？』

『処分してくれ。私は総てを捨てた身だ。それは最早私の持つべき物では無い』

『何を戲けた事を、殿下。ユトレアの民達は、貴方が立ち上がるのを今か今かと待っているのですよ』

『ユトレアは滅びたのだ、ファランギス』

『殿下！』

『そして、私は裏切り者だ。忘れたか？』

乳兄弟を真つすぐに見据えたまま紡がれたラドキースの言葉は、酷な物であった。ファランギスは、胸を強く突かれたかの様に顔色を失った。

「はい、どうぞ。ファランギス様」

言葉を失っていたファランギスの前に、良い香りの立ち上る器が置かれた。気付けば、傍らに微笑む少女の姿があった。

「あ．．．、かたじけな、忝く、エル様」

愛らしい主君の娘の笑顔に、ファランギスも微笑みを返した。

「ですが、エル様。私の事は、どうぞファランギスと呼び捨て下さい。“様” は、不要です」

少女は不思議そうに首を傾げたが、少しはにかんだ様子で「いいわ」と、答えた。そして父の前にも、茶の器を置く。

「良い香りだ。お前は茶を入れるのが上手いな、エル」

「父様よりはね」

娘のこまっしゃくれた言葉に、ラドキースは静かな笑いを零しながらその頭を撫でた。

「エル様の誠の名は、何とおおせになるのです？」

ファランギスに尋ねられたエルは父を見上げた。物心付いた頃から、誠の名を人に告げる事を禁じられていたのだ。

「告げても良いぞ、エル。ファランギスはお前からすれば伯父の様なものだ」

「伯父様？」

「うむ。我らは生まれた時からの付き合いなのだ。実際彼は、私の大叔母の孫にあたる」

エルは驚きに目を丸くした。何せ、縁戚に会うなど初めての事であるのだ。

父ゆずりの黒い瞳を見開いて驚く少女のあまりの愛らしさに、ファランギス思わず目を細めて微笑む。

「父君のお許しを頂けました故、誠の名をお聞かせ下さいましよ  
うか？ エル様」

「あ」

少女は我に返ると、ぽかんと開いていた口を閉じて頷く。

「エルディアラと申します」

「エルディアラ．．．」

礼儀正しく名乗る小さな姫君の名を、ファランギスはゆっくりと  
口に乗せてみた。

「美しい響きだ」

名を褒められた少女は、無邪気な笑みを満面に乗せた。

「母様が、北方神話からつけてくれたのです」

嬉しそうに話す少女に、ファランギスはふと昔を思い起こした。

「そういえば昔、貴方はセレーディア様に北方神話集を贈られた  
事がありましたね、ラドキース様？」

「良く覚えているな、そんな他愛も無い事を」

確認をとるかの様に尋ねられたラドキースは苦笑する。

「お前は、神話の中のエルディアラがどんな娘か知っているか？」

「いや、私は、神話の類いはあまり．．」

「父を裏切る娘の名だ」

「え．．．！？」

ファランギスは面食らう。

「大丈夫よ、父様。エルは父様を裏切ったりしないから。エルは、  
ずっと父様の側にいるもの」

縋り付いて来る娘の肩を抱きながら、ラドキースは可笑しそうに  
肩を竦めて見せる。

「何故、セレーディア様はまた、そんな．．．」  
なにゆえ

普通なら娘に付ける様な縁起の良い名では無い。

「母様はわたしが大きくなったら、母様のように本当に好きな人  
のお嫁さんになれるようにって、この名前をつけてくれたのです。  
ねえ、父様」

娘に同意を求められたラドキースは笑いながら頷いてやると、娘をひよいと膝の上に抱き上げた。そして、乳兄弟の為に神の娘エルディアラの話を簡単に語ってやる。

「はあ、成る程．．．」

ファランギスは複雑な心境のまま頷いた。恋した青年の為に父を裏切った娘と、ラドキースの為に祖国を捨てたセレーディアの姿が重なる。我が子にそんな名を付けたハーグシュの姫君は、恐らく後悔など微塵もしなかったのだろう。

（成る程．．．）

ファランギスは、再度心の内でそう呟いた。

「妃殿下がお隠れになられた事、人づてに聞きました。御遺体が三年程前にハーグシュに運ばれ、手厚い葬送の儀が執り行われたという事も」

姫君を気遣いファランギスは母国語で告げる。

「そうか．．．では彼女は祖国に帰る事が出来たのだな。レワルデンのあの丘の上で独り寂しく眠るよりは良いであろう．．．」

ラドキースもまた微笑したまま母国語で答えた。

「お隠れになられたのは、いつ頃だったんです？」

「五年前だ。病を得てな」

「そうでしたか。もう、そんなになるんですか．．．」

突如理解の出来ない言葉で話し始めた大人達に、エルは目を瞬いたが、父の膝の上に大人しく収まりながら茶を飲んでいた。その娘の頭をラドキースは撫で、そっと引き寄せ頬を寄せる。

「これがいなかったら、私も今、ここいたか分からぬ」

「殿下．．．」

表情も変えずにさらりと恐ろしい事を吐露するラドキースに、ファランギスは胸を詰まらせる。

「エル姫がおられて、本当に良かった」

ファランギスの呟きに、エルが顔を上げた。父とファランギスの交わす言葉は理解出来なかったものの、自分の名前くらいは分かる。

エルは自分の事を話されているのかと、父を見上げた。

仲睦まじい主君親子の様子に、ファランギスは瞳を曇らせ、とうとう目を被った。

『どうした、ファランギス？』

『殿下と小さな姫君が、不憫でなりません』

『馬鹿な．．．』

涙を零す乳兄弟にラドキースは低い笑いを零す。

『私達は幸せだ。なあ、エル？』

ラドキースが北方語で娘に尋ねれば、娘は大きく頷く。

『国を捨ててからのこの十二年間、私はずっと幸せであった。セレーデイラを失った時は絶望したが、それでも彼女の残してくれたこの娘がいたから私は救われた。不憫がってくれる必要など無い、ファランギス．．．。尤も、国を裏切り捨てた私が幸せだなどと祖国を憶えばそれはきつと罪な事なのであるうが．．．』

『何をおっしゃいますか！ 貴方が妃殿下と共に王城から出奔された時、どれ程の同胞達が胸を撫で下ろしたと思うんです！？ 貴方の出奔は、多くのユトレアの民達に希望を与えた。今も尚、多くの者達が貴方の生存を信じて希望を持ち続けているんですよ』

ファランギスの言葉の内の底知れぬ苦悩を理解しながらも、ラドキースはそれには答えずに、ただ瞳を伏せた。



## 第四章 風の盟約（8）（前書き）

\* 文中の『』は、ユトレニア語での会話とお考え下さい。

#### 第四章 風の盟約（8）

『酷い格好だぞ。尤も、その姿なら誰にもエトラ・ファーガス家の当主だと見破られる心配は無さそうだが』

『はい。仰せの通りです、殿下。まあこれは言わば変装というやつですよ』

『どうだか．．．、とにかく湯を使つてさっぱりしろ』

乳兄弟の軽口を苦笑と共にあしらい、ラドキースは彼の為に湯の仕度をしてやった。

ファランギスは主君自ら用意してくれた湯を浴び、無精髭を綺麗に剃り、伸び放題であった髪を切り整えた。そして主君の衣服を借りて身に着けると、台所にいた主君と姫君の姿を見出した。主君はいえ、椅子に座り長い足を組みながら愛娘と共に楽しそうに芋などを剥いていた。

「何だ？ いちいち驚くな。私にだって芋の皮くらい剥けるぞ」  
戸口で固まつて榛色の瞳を見張る乳兄弟に、顔を上げたラドキースはさらりと言う。

「よもや．．．、貴方のそんなお姿を目にする日が来ようとは夢にも思いませんでしたよ、全く．．．」

困惑顔を横に振りながらファランギスが父娘の元へ歩み寄ろうとすると、不思議そうにこちらを見上げている愛らしい黒の双眸とぶつかる。

「エル様？ 如何なされましたか？」

「ファランギス伯父様なの？」

「は．．．？」

「別の人かと思っちゃった」

目を丸くしている娘の一言に、ラドキースが肩を震わせて笑い出した。先程までの髭面とは打って変わったたつるりとした頬に、背に垂らされた洗い髪も短くなっている。粗末ではあったが、清潔な衣服に着替えたファランギスは、先程よりも数十歳程若返っている。

「誠、別人だな。お前の変装とやっても大したものだ、ファランギス」

「若先生．．．、そんなにお気に召して頂けましたが、私の変身が．．．？」

ファランギスの、年の割にはつぶらな瞳が据わった。

「ああ。見事だ。なあ、エル？」

ファランギスの不満気な表情に気付いているのかいないのか、否、間違いなく気付いているラドキースは、さりげなく素直な娘に意見を求める。

「はい、とつても、父様」

父親の期待を裏切らずに、エルは黒い瞳を丸くしたまま大きく頷いた。

心底驚いているらしい小さな姫君と、心底面白がっているらしい主君の様子に、ファランギスは複雑な思いを抱いた。心から喜んで良いものかどうか。しかし、主君が声を上げて笑う事など珍しい事であった。少なくともファランギスの知るラドキースは、滅多な事では声を上げて笑う様な真似はしなかった。それが十二年の時を経た今、彼が楽しそうに笑っている。

「実に、貴重なものを見せて頂いている気がします」

「ん？ 私が芋を剥いているところか？」

笑いを納めたラドキースが尋ねると、ファランギスは歩み寄りな

がら意味ありげな笑みを主君へと向けた。

「まあ、それも含めて……。さて、私もお手伝いしましょうか」  
フアランギスはバケツから芋を掴んで軽く放ると、手近な椅子に腰をかけて自身の小刀を抜いた。

「お客様なのに、手伝ってくれるの？ フアランギス伯父様」

「私は、客ではありませんよ、エル様」

「違うの？」

首を傾げる少女に、フアランギスは笑顔のままきっぱりと否定する。

「それから、貴女に “伯父様” と呼んで頂くのは、大変心躍る事なのですが……」

そこでフアランギスは、何やらうつとりとした表情で言葉を切る。

「しかし “様” は不要です」

「でも、フアランギス伯父様も、私の事を “エル様” って呼ぶでしょう？」

「それは、私が貴女の臣だからです」

「 “しん” ？ 家来の事？」

「そうです」

「本当？ 父様？」

エルは答えを求めて父を見上げた。しかしラドキースは、娘には答えずに乳兄弟へと恨めし気な目を向ける。

『余計な事は言ってくれるな、フアランギス』

『余計な事だとは思いません、殿下』

『私は最早、お前を臣だなどとは思っていない』

『ですが、私は思っています』

にやりと笑ってみせるフアランギスに、ラドキースは溜息を零す。  
そんな大人達の様子をエルは不思議そうに見上げている。

「エル様、本当ですよ。私は生まれた時から、乳兄弟として父君のお傍近くに仕えて参りました」

「昔の話だ、エル」

「いいえ、今でも変わりません、エル様。父君が何と仰ろつと、私は父君と貴女の臣です」

エルは大人達の板挟みになり、何と答えて良いか分からなくなる。

『忘れる、ファランギス』

『ご冗談を』

『お前は独り身なのか？』

『はい』

『ならば、所帯を持つて己の幸せを考えろ』

依然激する事も無いラドキースの言葉は、静かに相手を突き放そうとする。

『．．．．．私の幸せなど』

ファランギスが真剣な表情を露にする。

『祖国再建が適うまではありえませんが、殿下』

苦し気に紡ぎ出された真摯な言葉がラドキースの胸を突き刺した。榛色の眼差しに揺れる苦悩と哀しみがファランギス一人の物ではありえない事くらい、ラドキースにも分かっていた。そして彼等が己に望んでいる事も、無論分からぬ筈など無かった。

『戦．．．か？ 一体どれ程の者達がそれを望み、どれ程の者達がそれを望まぬであろう．．．？』

『分かりません。ですが苦しむ民達が、解放を願う民達がいる事。貴方の生存を信じ、いつか祖国は取り戻されると信じている者達がいる事だけは確かです。』

ファランギスは目を伏せた。

張りつめた空気にエルは居心地が悪く、大人しく芋の皮を剥きながらも大人達の様子を伺っていた。言葉は分からずとも、雰囲気のおかしい事くらいは分かる。

エルは場の空気に敏感で、やたらと周囲に気を使う子供であった。

幼い頃に母が病に倒れた事が原因していたのかもしれない。

憂いを帯びた父とその乳兄弟の表情へと、エルは時たま盗み見る様に目を向けた。そして幾度盗み見た時であったか、鋭い痛みにはエルは思わず小さな声を洩らし、手から剥きかけの芋を取り落としていた。

「どうした、エル？ 切ったのか？」

赤い血の吹き出た親指に咄嗟に口を寄せる娘に、父も彼の乳兄弟もすぐに反応した。

「大丈夫ですか、エル様？ 傷口を洗いましょう」

惨めな思いで頷くエルに、フアランギスは優しく微笑んだ。

あつという間に傷を洗われ薬を塗られ、包帯を巻かれた。

「痛むか？」

父の優しい声に、エルは笑顔で首を横に振る。

「いいえ、父様。ほんのちよつと切っただけだもの」

大人達の間張りつめていたものが霧散し、楽に呼吸が出来る様になった事に、エルはほつとしていた。

夕食の後、エルが寝てしまうとラドキースとフアランギスは、二人静かに葡萄酒の杯を傾けていた。

『ハーグシュとスラグの仲が思わしく無い事をご存知ですか、殿下？』

『いや。そんな話はここまでは届いて来ない』

フアランギスの切り出した話題に、ラドキースは表情を変えもせずに応えた。

『条約の不実行、分割後のユトレアの領地争いと、理由は複数ある様です』

『人とは、どこまでも貪欲になれるものだからな』

ラドキースは皮肉な笑みを洩らした。

『仰せの通りです。近々、また戦になるやもしれませんが、殿下。戦が起これば戦地はユトレアになる可能性も大きい。ユトレアの民も征服者達の戦に駆り出されるでしょう。今でさえ彼等は重税に喘いでいる。スラグ領に至っては、奴隷として過酷な労働に使役されていると。生きて行けずに死ぬる者も多いと聞いています』

ラドキースは聞いているのかいないのか、何も言わない。

『トーラン將軍やハイデル始め、ユトレアの残党は、決起に向けてずっと活動を続けて来ています。皆、ユトレア再建の為に涙を飲んで耐えています。皆、貴方を待っているのです、殿下』

『何が言いたい？』

『立ち上がって下さい』

押し殺した様な声と共に、ファランギスが恐ろしく真剣な眼差しで懇願した。

『貴方が立ち上がって下されば、同胞は更に集まります』

『断る』

『貴方だけが我々の唯一の希望なんですよ、殿下！』

『私は、国を捨てた身だ、忘れたか？』

ラドキースは鋭くファランギスを見た。

『私は国を裏切った身だ。忘れたわけではなからう？』

『ユトレアの民を見捨てるんですか？ 虐げられている者達を？』

貴方はエル姫の心配をしておられるのでしょうか？ エル姫は、ユトレアとハーグシュ両国の正統なる王位を継ぐべき血筋の姫だ。だから貴方は姫の為に逃げたいとお考えなのでしょう、殿下？ ですがハーグシュがエル姫の存在を知らぬともお思いか？ 姫の存在はとつくに知られています。ハーグシュは血眼になってエル姫の方を追っている。貴方にお分かりにならないわけが無い。姫は、もうとつくに巻き込まれておいでなのですよっ』

ファランギスのその内に押さえ込んだ叫びに、ラドキースは無言のまま瞑目した。

フアランギスの言う事は痛い程に分かっていた。彼の指摘通り、エルを巻き込みたく無かった。娘の幸せだけが彼の願いであった。責められ様が罵られ様が、それまでのラドキースにとっては娘が総てであつたのだ。それを、一体誰が責められよう。

一体誰が責められよう……。否、それが甘い考えである事など、ラドキースは無論心の奥深くより知っているのだ。王家に生まれた事を覆す事など所詮は出来ないのだと。その事により己にかけられた枷から逃げる事も、所詮は出来ないのだと……。どれ程に目を背け逃げ回ろうとも……。



#### 第四章 風の盟約（9）

ファランギスは、主君とその姫君が出掛けるといそいそと家の掃除をし、洗濯などをし、夕食の仕度の為に市場へ買い物に出掛けるという生活を繰り返す事となった。

やれやれ名門貴族であつた筈の自分が、これではまるで市井の主婦の様だと内心苦笑しながらも、ファランギスの心は軽かつた。この長年に渡り抱え続けて来た屈託が消えたのだ。乳兄弟であり彼の唯一の主君と、健やかに成長しているその姫君の無事な姿をとうとう見出した。彼等の安否を気遣い、それまでどれ程の眠れぬ夜を過ごした事か……。しかし本当の問題はこれからなのである。

その日もそんな思いを胸に歩いていると、突如殺気立つた視線が背中に突き刺さるのを感じた。視線を廻らせれば予想を裏切られる事無く、もの凄い眼光でファランギスを睨む、目の醒める様な翠緑の瞳にぶつかつた。

（やれやれ、又か・・・）

ファランギスは心の内ではやきながら、先日の昼下がりの出来事を思い起こした。思わず苦笑が沸き起こる。

先日も、こんな風に背中に殺気を感じ身を翻すと、ものすごい目つきでこちらを睨む美女が立っていた。しかし・・・、目が合ったと同時に美女の眼光が何故か緩んだ。途端に戸惑う様な不思議そう

な表情で首を傾げた美女は、数度瞬きをした。そして又、ファランギスの方でもそれまでとは打って変わった赤毛の美女の意外な姿に、榛色の瞳を丸く見開いた。

「これは、ロジェリン殿……。今日は随分と勇ましい姿だな」

驚きながらもファランギスは努めて笑顔を見せたが、相手からの反応は無い。

「……………」

見事な巻き毛を後頭部の高い位置で一つに括った男装姿のロジェリンは、言葉を失っている。無理も無い。昨日の無法者の様な髭面のファランギスと、身なりを整え騎士然とした今のファランギス、どうひいき目に見ても同一人物には見えないのだ。

「……………若先生の、乳兄弟殿か？」

「ああ、如何にも」

「本当に？」

「ああ」

ファランギスの肯定と共に、訝し気であったロジェリンの翠緑の瞳が据わった。

「大した変装だな」

「それはどうも。貴女こそ、大した変わり様だ」

「悪いか？」

喧嘩腰の答えが跳ね返って来る。

「その姿……。貴女も道場に通う身か？」

「悪いか？」

「悪いとは言っていない」

そんなやり取りが、延々と続いたのだ。

「ちよいと、何ニヤついてるんだい？ 気持ち悪いね」

今日もチュニツクに長剣を下げた男装姿のロジェリンが、腕を組みながら刺々しい声をかけて来る。あれから毎日の様に、ロジェリ

ンはフアランギスの姿を見付けては突っかかって来る。

「今日も可愛く無いな。そんなんじゃ男が寄って来ないぞ」

しかしフアランギスもフアランギスで、何か言われれば軽い調子で皮肉を返すものだから始末に負えないのだ。案の定、美女の目が吊り上がった。

「可愛く無くて結構！ 男が寄って来なくて結構！ とつくにとうが立つてるよっ！ ふんっ！」

「そこまで言っていないだろうが・・・」

フアランギスは呆れながら再び歩き始める。すると何故かロジェリンも後から付いて来る。

「それで、一体いつまでエデワにいるつもりなんだい？」

「さあ・・・？ 若先生に聞いてくれ。私にも分からない」

フアランギスは屋台に山と積まれた様々な野菜を物色しつつ答える。

「若先生とエルは渡さないよ。連れ出そうなんて、絶対に許さないからね」

美女のドスのきいた低い声に、フアランギスはやりと意地悪く笑った。

「成る程、それで貴女は私にきつくあたるのか？ 成る程」

「何さっ、にやにやするな、気持ち悪いって言ってるだろうが」

「若先生に惚れてるのだろう？」

フアランギスはロジェリンの耳元に囁いた。

「なっ！？ 何を言うかつ！ ど阿呆っ！！」

「顔が赤いぞ。そうか、そうか。男やもめの若先生は、顔も性格も良いもんなあ。だが、貴女のその性格は絶望的だな。若先生は、もつと優しく媚やかな女が好みだぞ。まあ、せいぜい頑張れ、無理だとは思うが。ではな」

フアランギスはくるりと踵を返した。

「ちよつと、待てっ！」

ロジェリンの怒りの声にフアランギスが振り返ると、拳が飛んで

来た。遠巻きに様子を伺っていた恐いもの見たさの見物人達が一斉に目を覆った。しかし案に反して、当然響くかと思われた音は聞こえて来なかった。人々が恐る恐る目を開けてみると、そこには猛烈に怒っているロジェリンと、その手首をがっちり掴んでいるファランギスの姿があった。

「放せ、放さんかつ！この、ど阿呆！」

「だめだめ、暴力を振るう女も若先生の好みじゃない。私もごめんだ。ではな」

ファランギスは実に意地悪い笑みを残してさっさと行ってしまった。

「くそっ！覚えてろっ……！何、見てんだいっ！」

ロジェリンに怒鳴られ、見物人はさっとちりぢりに散った。

『私は諦めません。貴方が決心なさるまで、私もここにおります』

その宣言通り、乳兄弟は再会を果たしたその日からラドキース父娘と共に暮らし始めた。ラドキースの方も、それをごく自然の事と受け止めていた。物心付く以前からラドキースの遊び相手を務めていたファランギスは、昔から実の親兄弟以上にラドキースの近くにいたのだ。十二年の空白があろうとも、この小さな家に共に暮らす事に何ら違和感など湧かない。

ラドキースの乳母を務めたファランギスの母は、元々はラドキースの母の側仕えであった。それが、たまたま王妃と同じ時期に身籠った。彼女は臨月も近くなった頃に城を辞し、ファランギスを産んだが、王妃の信任の厚かった彼女は、その後間もなく城へと呼び戻される事となった。そしてほんの数ヶ月の後に誕生した皇太子の乳母の役目を任される事となった。尤も、一国の王子の乳母ともなれ

ば一人とは限らず、複数の女達がその役を仰せつかった。乳を与え  
る者、身の世話をする者、そして養育役の筆頭となる乳母．．．そ  
れが当時のエトラ・ファーガス家当主の奥方であった。そして、エ  
トラ・ファーガス家の跡取りである乳母の息子を、王妃は好んで息  
子の遊び相手にさせ、共に学ばせたのである。

ファランギスがラドキースに対し誠実で無かった事などない。だ  
が己はどうだ？ ラドキースは自問する。

『ユトレアの民を見捨てるんですか？ 虐げられている者達を？』

胸を突かれる様なファランギスの言葉が、繰り返し木霊していた。  
ラドキースの瞳は娘の姿を追う。他の子供達に雑じり素振りをして  
いる娘には、何の屈託も無い。

「どうした、ラディよ？」

突如、物思いを打ち破られた。途端に道場内の喧噪が耳に飛び込  
んで来る。

「老師．．．」

いつの間に道場に入って来ていたのか、ラドキースのすぐ傍らに  
はウイスカード老の姿があった。

「この処、心ここにあらずだな。お前らしくも無い。あのファラ  
ンギス殿とやらのせいかな？」

ウイスカードの気遣いに、ラドキースは否定しかけて思いとどま  
る。この老師には、ごまかしなど通用しない。

「稽古は代わろう。少し表で考えて来るがいい」

「しかし．．．」

「良いから、行け、行け」

「はあ．．．。忝い、老師」

しっしと手を振られ、ラドキースは素直に頭を下げると表へと出

た。庭の木の根元に座り寄りかかると、涼しい木陰から夏の終わりの青空を見上げた。

『立ち上がって下さい』

再びファランギスの言葉が甦る。

「私に．．．戦を起こせと言うのか．．．？」

ラドキースは呟き目を閉じる。

『貴方だけが我々の唯一の希望なんですよ！』

ラドキースは迷う。どうすべきなのか．．．。

自身が呪わしくなる。この出生が呪わしくなる。何故娘と二人、静かに暮らす事が許されないのか．．．。

「父様？ 寝ているのですか？」

娘の声にラドキースは目を開いた。心配そうな瞳がこちらを見ていた。

「おいで、エル」

手招くと、娘は駆けて来て父親の隣にちょこんと腰を下ろした。

「どうしたの？ 父様？ 具合が悪いの？」

「いや、物思いに耽っていただけだ」

ラドキースは娘を安心させる様に、微笑みその小さな肩を抱き寄せた。

「どんな考え事をしていたの？ 父様？」

「お前といつまでも静かに暮らしたいと．．．」

少女はくすつと笑って父親の胸に抱きついた。

「エルはずうっと父様の側にいます。だから安心して」

そうか．．．とだけ呟き、ラドキースは口を噤んだ。時折吹く穏やかな風につて道場の喧噪が届く。

エルは思う。父の様子がいつもと違うのは、あの父の乳兄弟であるフアランギスのせいに違いないと。

父の家は騎士の家であつたのだとエルは信じていた。その様なものだったと父が嘗て語つたからだ。だが父が過去をあまり語りたがらない事を、エルは幼い頃より知っていた。そこへ父の家臣だというフアランギスが現れた。父の物思いの種は、きっとフアランギスのせいに違いない。

「エル．．．」

父がエルの頭を撫でながら口を開いた。

「例え話をしよう」

「例え話？」

「ああ」

父の腕の中でエルが顔を上げると、父は遠い瞳をして青空を見上げていた。

「お前が、さる国の王女であつたでしょう。ある日、戦が起きてお前の祖国は滅ぼされてしまう。王であるお前の父は殺されるが、嫡子であるお前は幸い逃げ延びるのだ」

父は、そこで一旦言葉を切った。だが、その漆黒の瞳はどこか遠くへと馳せられたままエルへと向けられる気配は無かったので、エルは再び父の胸にぽてんと頭を預けた。

「そしてお前は総てを捨てて、新たな土地で穏やかな生活を手に入れる」

父の静かな声は続く。

「今の様な？ 父様」

「．．．ああ．．．、今の様な．．な」

父の返答には、暫し間があつた。

「だが．．他国に滅ぼされたお前の祖国の民達は、虐げられ重税に苦しんでいる．．．。お前なら、どうする？ エルよ．．．」

。そのまま見過ごすか？ それとも戦を起こして、祖国を取り戻すか？」

父の、まるで寝物語を語るかの様な口調にエルは素直に考え込む。「お前の国の民達は、どちらにしろ苦しむのだ。お前が国を取り戻さねば、民達は敵国からの仕打ちに苦しみ、お前が戦を起こせば、やはり一番苦しむのはお前の民達であろう。敵国は更に重い税をお前の民達に課すであろうし、男達は更に重い労働を課せられる事になるであろう。兵に徴収されるやもしれぬ。お前はどうする？」

「うーんと……。」

エルは少しの間考え込むと、父の腕の中で顔を上げた。

「国を取り戻す為に戦を起こせば、祖国の民は苦しむけれど、何もしなければ民は敵国からの重い税金にずっと苦しむのでしょうか？ それなら、民の為に国を取り戻してあげる」

「平穏な生活を捨ててもか？」

ラドキースはエルの頭を撫でながら尋ね、エルは迷いも見せずに頷いた。



第四章 風の盟約（10）（前書き）

## 第四章 風の盟約（10）

ラドキースは無言のまま再び娘を胸に抱き寄せると、総てを語るべき時が来たのだと悟った。

「いつかはお前に語らねばならぬ時が来るのである」と覚悟はしていた。どうやら今こそがその時であるらしい……」

「父様？」

エルは不思議そうに父親を見上げた。そんな娘に対し、ラドキースは静かに口を開いた。

「西のユトレアという国を知っておろう？ エル」

「はい、父様。三つに分かれている国でしょう？」

エルが答えれば、父は低く肯定した。

「そのユトレアが、私の祖国なのだ」

エルは驚きの表情を隠せず瞳を見開いた。父の祖国がユトレアだという事よりも、父の口から祖国の事が語られ始めた事にエルは驚いたのだ。

「お前が生まれる前の事だ。西のユトレアは、現在の様に三分割されてはおらず一つの王国であった……。私は、そのユトレア国王の次男として生を受けた。だが兄は私が生まれる前に幼くして毒害されたのでな、私は事実上、王の嫡子として生まれた事になる」

「王の嫡子？」

頭から降って来た静かな父の言葉を理解するのに、エルは暫しかる。

「私は、嘗てユトレアの皇太子であつた。そして、お前の母はハーグシュの王女であつたのだ」

俄には信じられない両親のその出自に、エルは言葉も無く父の遠い目をそつと見上げた。

「お前の母が十二、私が十五の時、ユトレアとハーグシュは私達の婚約を正式に結んだ。お前の母は十六で成人した折りに、両国の政の一環の為ユトレア皇太子妃として私の元に輿入れする予定であつた。だが、それより前に両国間で戦が起こつた。当然婚約は反故となつた。そしてお前の父は皇太子であつた故、国軍を率いて戦に行った。私は、私の元に嫁いで来てくれる事を心待ちにしていたハーグシュの姫君の敵となつた。お前の母の敵となつたのだ」

淡々と続く話に、エルは息を詰めたまま聞き入つた。

「戦が起こつてより五年、お前の父の率いた王国軍はハーグシュ王都を陥落せしめ、そこにお前の母の祖国は滅びた。ユトレアはお前の母の父も五人の兄達も、その他のハーグシュ王家の男達も皆、命を奪つた。そしてお前の母は戦利の証として敵であつた私の元に嫁がされたのだ。その時、彼女は十九であつた。哀れであつた。自害しようとした事さえあつた。皇太子妃となりながら、その実、自室の外へは一步たりとも出る事を許されぬ囚人であつた。国を滅ぼされ、父王や兄王子達の命を奪われ、母妃は自害へと追いやられ、自身は敵の王子に無理矢理嫁がされたセレーディラが哀れでな．．．、私はハーグシュの残党が動きを見せ始めた折りにファランギスの助けを借りて、セレーディラをユトレアから逃がしたのだ。それが何を意味したか分かるか、エル？ 裏切りだ」

「父様．．．」

「一国の皇太子という身でありながら、私は祖国を裏切つたのだ。そして大罪人として捕われた。無論廃嫡されてな。そして王女を取

り戻したハーグシュの残党は、その後間もなくユトレアに対し決起した。お前の母の名の元に散り散りになっていたハーグシュの民は集まり、又、スラグ王国とエドミナ王国がハーグシュと同盟を結び参戦した。私が幽閉されている間に、あまりにも呆気無くユトレアは落とされた。お前の母は国を取り戻し、そこにユトレアは滅びた」

エルはいつしか父に縋り付いて泣いていた。ラドキースは娘の背を撫でてやりつつも、黒曜石の様な瞳は依然空に向いていた。その口調も穏やかに流れる清水の如くであり、激する事も無かった。

「王都が落とされたその日の夜更けに、お前の母は獄中の私の元を訪れた。そして私の剣を差し出しながら共に逃げると言った。折角国を取り戻し、これからそれを治めて行かねばならぬ身であったというのに、お前の母はそんな事を言ったのだ。私はとうに死の覚悟など出来ていた故、一度はそれを拒んだ。セレーデイラの将来を奪う事など出来よう筈も無かった故な。だがお前の母は．．．私が死ねば後を追うと言ったのだ．．．。ハーグシュは取り戻したから、もう良いのだと．．．。治める者なら他にもいると．．．。総てを捨てて私と共にいたいのだと言ってくれた。私さえ側にいれば他の事などどうでも良いと、お前の母は私にそうまで言ってくれたのだ。だから共に逃げた。私が嘗て、お前の母の為に国を裏切った様に、お前の母も私の為に国を裏切り総てを捨てたのだ．．．。祖国への裏切りを憶えば心苦しい。だが、あの時王城からセレーデイラを脱出させた事も、ユトレア滅亡の折り彼女と共に身を眩ませた事も、そしてエル、お前を得た事も、私は何一つ悔やんだ事は無いのだ」

ラドキースの言葉はそこで途切れ、後にはエルのしゃくり上げる小さな声だけが流れた。

程近い処に、いつの間にかファランギスが立っていた。その頬には涙が伝っていた。

『やはり、戦を起こさねばならぬのか．．．私は．．．』  
どれ程の沈黙の後であったのか、泣きじゃくるエルを片手に抱きながら、ラドキースは乳兄弟へ目を向ける事も無く、独り言の様に母国語で呟いた。フアランギスは足早に近付くと、ラドキースの傍らに跪いた。

『命ある限りお伴します、殿下』

ラドキースは哀し気な瞳を、傍らで頭を垂れる乳兄弟へと向けた。

ロジェリンは激怒していた。ものすごい剣幕でフアランギスに掴み掛かかり、責め立てた。

「許さないよっ！ 若先生とエルを連れ出そうだなんて、絶対にあんたを許さないっ！ この疫病神っ！」

「これ、よさぬか、ロジェリン」

見かねたウイスカードが止めに入る。

「師匠は良いのかい？ エルも若先生も、いなくなっちまって良いのかい！？」

「良くは無いが仕方が無いじやろうが．．．。ラディにも都合があるのじゃ」

「若先生っ！ 皆、若先生が必要なんだ！ エルがいなくなったら寂しいよ！ 何故行かなけりやならないんだよ！？」

「すまぬ、ロジェリン。退っ引きならぬ理由<sup>わけ</sup>が出来たのだ」

ラドキースは理由は語らず、ただ忍耐強く詫びるばかりであった。酷く責められながら神妙な表情を保ったままのフアランギスは言葉を返す事もせず、その隣ではエルが今にも泣き出しそうな表情で頂垂れていた。

「あんたを心の底から恨んでやるからっ！」

ロジェリンは翠緑の瞳に涙を溜めながらフアランギスに捨て台詞

を吐くと、長いスカートを翻して駆け去った。

「やれやれ、聞き分けの無い奴じゃ。許してやってくれ、ファランギス殿。あれの気持ちも痛い程分かる」

「はい、老師殿」

ファランギスは心做しか申し訳無さそうに頷いた。

「誠に明日一番で発つのか？ ラディよ」

「はい」

「何とも急な事じゃな．．．」

老師は淋し気に呟いた。

「引き止めたいが、それでも行くのじやろう？ お前達は」

「すみません、老師」

頭を下げるラドキースに、ウィスカードは分かっているとばかりに頷いた。

## 第四章 風の盟約（１１）

翌朝、まだ薄暗い内だというのに、町中の人々がラドキースとエルの見送りに集まっていた。

「どうして行っちゃうの？」

「いつ帰って来るの？ ラディ先生」

「行かないでっ！」

ラドキースとエルを取り囲む子供達の中には、泣き出している子の姿もある。ラドキースは一人一人の頭を撫でながら言葉をかけてやっていた。

「ロジェリンは？ 老師様？」

エルが落ち着かなげに尋ねた。

「それがなあ、先程呼びに人をやったんじゃが拗ねとるのか出て来んのじゃよ。良い年をしてしょうの無い奴じゃ、ロジェリンは．．。別れが悲しくて泣いておるのかもしれん。許してやれ、エルや」  
ウイスカードは俯くエルの肩に手を置いた。町の人々も淋し気である。

「老師、色々と世話になりました」

頭を下げるラドキースに、ウイスカードは、うんうんと頷いて見せた。

「いつでも戻って来い。お前達の家はきちんと手入れしておくからな、ラディよ」

老師の言葉に、回りの町人達も一斉に頷く。ラドキースは微笑み礼を言う。ファランギスは少し離れた処で傍観している。

「達者でなあ。道中気を付けるのだぞ」

「はい、老師も達者で。ロジェリンによしなに伝えて下さい」

「うむ、うむ、伝えよう。エルや元気でああ」

エルは涙を浮かべながら老師の頬に別れの口付けをした。

エデワの人々に別れを惜しまれながら、ラドキースとエルはファランギスと共に彼等に背を向け旅立った。エルは幾度も幾度も振り返っては手を振った。ロジェリンはとうとう姿を現さず、エルはがつくりと肩を落としながら父に手を引かれエデワを去った。

「行ってしまったか・・・」

ウイスカードは大きな溜息を吐いた。人々は皆、朝靄の中にラドキース達の姿が見えなくなっても、その場から動こうとしなかった。

「行っちゃったなあ・・・、じいさん・・・」

「がっかりだなあ・・・。淋しいよ・・・」

「そうだねえ・・・」

人々が溜息雑じりに言葉を交わし、子供達が皆むつつりと口を閉ざしたそんな時であった。

「あれっ？」

誰かが呟き、町の方を振り返ると目を凝らす素振りを見せた。つられたかの様に他の者達も口を閉じてそちらを振り返れば、朝靄の向こうから軽い足音と共に駆けて来る者がある。しんみりとした雰囲気が一瞬崩れる。

「あれえっ！？ ロジェリン姐さんっ！」

「遅いよお、今頃っっ！」

駆けて来たロジェリンを、あっという間に町の者達を取り囲んだ。「何をやっとなんじゃ、お前は？ ラデイもエルも、もう発つてしまったぞ」



ウイスカードは眉間を寄せながら、遅れて現れた弟子を残念そうな表情で叱る。

「いや、それよりもお前、その出で立ちは．．」

見れば男装姿のロジェリンはマントを纏い旅支度をしている。

「師匠、あたしは若先生とエルに付いて行くよ」

「何じゃと!？」

ウイスカードは素つ頓狂な声を上げた。

「正気か!？ 店はどうするのじゃ？」

「師匠にやるよつ。売るなり何なり好きにしておくれ。せめても  
の孝行だよ」

ロジェリンは晴れ晴れとした笑顔で言うと、店の権利書をウイスカード老に押し付けた。町人達は皆、呆氣にとられている。

「何を言うか馬鹿者が。大体、親には何と言うのじゃ？」

「あたしはとづくに親子の縁を切られてるんだよ、師匠」

言うやロジェリンは、けらけらと声を上げて笑う。

「でも、そうだね。もしも親父が何か言ってきたら、よしなに伝えておくれよ」

「本気か？」

「勿論」

ロジェリンは迷いも見せずに頷くと、俄に表情を改め姿勢を正した。

「師匠、お世話になりました。お体、お厭い下さいますよう」

騎士らしい口調で言うと、ロジェリンはウイスカードに頭を下げた。周囲からは困惑の声が飛ぶ。

「皆も元気でね!」

明るく言い放つロジェリンに、ウイスカードは再び溜息を零す。

「頑固なお前の事だ。止めても聞く耳持たなのであるうな．．．

。この権利書は、お前が戻るまで預かっておこう。それ故、いつか必ず戻って来い、ロジェリンよ」

その言葉に、しかしロジェリンは頷きはせず、いきなりウイスカ

ードに抱きつくつと頬に別れの口付けを降らせた。

「じゃあね、師匠！ 皆！ 又会う日まで！」

ロジェリンは笑顔でエデワの人々の顔を一人一人見渡すと、潔く背を向け一度も振り返る事無くエデワから颯爽と駆け去った。

「やれやれ、慌ただしい奴じゃ」

後には、力無い声で毒突く寂し気なウイスカードと、町の人々が取り残されたかの様に佇んでいた。

「貴方があれ程、子供に好かれる質だとは知りませんでした、殿下」

フランギスの言葉に、ラドキースはただフツと笑いを洩らしたのみであった。心を決めたラドキースの行動は速かった。季節が既に秋へと移り変わろうとしている事も原因していた。大陸中原から北方地域にかけての冬の訪れは速い。馬での早駆けで行くならまだしも、馬はフランギスのユクラテ一頭のみ。新たに乗馬を手に入れようにも高額である馬を買う程の金子などある筈も無い。徒歩で、しかも子連れの旅ともなればその旅足も遅くなるう事は必然的であり、途中大きな山脈を越えて行かねばならない長旅を冬將軍の訪れ前に終える事を目的とすれば、一日たりとも無駄には出来なかったのである。その為、あの様に慌ただしくエデワを後にせざるを得なかった。

ラドキースはしょんぼりと肩を落としている娘を見下ろした。エデワに滞在した四年近くもの間、毎日の様に顔を合わせていたロジェリンに、エルは実に良く懐いていた。そのロジェリンに別れを告げる事もせずに旅立って来た。娘の心の内を思うとラドキースの胸も痛んだが、この先の事を思えば致し方も無かった。

「エル、元気を出せ。生きておれば再び会う機会もあるう。ロジ

エリンにも事情があったのだ」

エルは父を見上げ、力無くこくりと頷いた。だが大好きなロジェリンに見送ってもらえなかった事が、少女には酷く悲しかった。俯きながらラドキースに手を引かれて歩く少女の萎れた姿に、ファランギスも後ろめたさを禁じ得ず、気がかりそうな瞳を向けていた。

そんなファランギスに、ラドキースは気にするなどとも言わずに目で合図を送り、そして、ふと何かを感じたのか後ろを振り返った。  
「……………」

ラドキースは足を止めた。釣られて足を止めたエルとファランギスも、ラドキースに倣って後ろを振り返る。朝靄のなかに薄らと、こちらへ駆けて来る人影が見えた。

「あつ！」

一目散に駆けて来る何者かの、宙に躍る髪が紅葉したハゼノキの如き鮮やかさである事が見て取れた時、エルは声を上げ一瞬にして顔を綻ばせていた。

「ロジェリンっ！！」

エルは父親の手を離れると駆け出した。目も覚める様な赤毛の美女は、あつという間に追いつくと満面の笑みで両手を広げて駆け寄る少女を抱きとめた。荒い息で膝を付きながらも、ロジェリンは笑顔のままエルをぎゅっと抱き締めた。

「もう、もう会えないかと思った、ロジェリンっ！」

言うやエルは、とうとう泣き出した。

「泣かないで、エル。あたしも一緒に行く事にしたから」

ロジェリンの優しい口調にエルは、小さくしゃくり上げながら顔を上げた。濡れた瞳は見開かれている。

歩み寄って来るラドキースに、ロジェリンは立ち上がった。

「そのなりは？ ロジェリン……………」

明らかに旅支度であるロジェリンの出で立ちに、ラドキースは内心戸惑う。

「あたしも連れてっておくれ、若先生」

間髪入れぬロジェリンの言葉にラドキースは小さな息を吐き、後方で愛馬と共に立ち止まったフアランギスは片眉を上げた。

「すまぬが、断る」

ラドキースは静かに拒絶した。

「何故さ？ あたしが足手まといになるとでも思うのかい？」

「そういう分けではない」

「じゃあ何故さ？ 若先生」

「お前こそがエデワの人々にとっては必要な者であろうに」

「もう決めたんだ。若先生達に付いて行くって」

「祖国を捨ててか？ 戯けたことを．．．。お前を連れて行く事は出来ない。帰れ、ロジェリン。行くぞエル、フアランギス」

ラドキースはロジェリンに背を向け歩き出す。

「若先生が何て言っただって、あたしは付いて行くよ」

ロジェリンも後に付いて歩きながら、頑として考えを曲げるつもりが無い旨を訴えた。

「迷惑だ。聞き分けろ、ロジェリン」

「嫌だね。迷惑だっけ言うなら、その理由を言ったらどうだい？」

若先生

「長旅だ。危険も伴おう。それが理由だ」

「そんな事、承知の上だよ」

「こちらは迷惑だと言っている」

それまでのラドキースらしからぬ厳しい拒絶の態度に、ロジェリンは我知らず歩を止めていた。エルはどうして良いかも分からず、濡れた瞳を拭う事も忘れてその場に立ち尽くしている。

「ならば尋ねるが、お前は何故共になにゆえに行きたいと望む？」

ラドキースは歩みを止め、背後のロジェリンを振り返る。しかしロジェリンは唇を噛み俯いて答えようとしない。そんなロジェリンの様子に、傍観していたフアランギスは俄に哀れみを覚えて密かに溜息を洩らした。

（そんなの、貴方に惚れてるからでしょうに、殿下．．．）

そんな思いを危うく口に出しそうになりながら、ファランギスは密かに口元を押さえた。何と酷な事を尋ねるのかなどと内心思いながら、ファランギスはすぐに考えを改める。あの堅物な王子の事、恐らくはあの美女の気持ちになどてんで気付いてはいないのであるうと。

「確たる理由も無しに祖国を捨てたりするな。ではな、ロジェリン、達者で」

ラドキースは酷な程に、きつぱりとロジェリンを切り捨てると、再び背を向け歩き出した。ロジェリンが弾かれた様に顔を上げる。

「待つて！」

ロジェリンが意を決したかの様に口を開いた。

「あたしが若先生達に付いて行こうと決心したのは、若先生になら仕えてもいいと思ったからだ！」

「仕える？」

ラドキースは訝し気に呟くと、数歩進んだ処で再び足を止める。

「若先生があたしを迷惑だつて言う理由は、若先生の正体のせいなんだろう？　だからあたしを連れて行けないつて言うんだろう？」

ロジェリンは、思い詰めた様な表情で言葉を吐き出していた。

## 第四章 風の盟約（１２）

「あたしは以前、公都でユトレアの黒將軍殿下とハーグシュの王女殿下の姿絵を見た事がある。初めて若先生に会った時、あの黒將軍の姿絵に似ていると思った」

ロジェリンの声は人目を憚るかの様に低かった。立ち尽くすエルの上に歩み寄ったファランギスの目元が険しくなる。そして皆に背を向けるラドキースからは、低い笑い声が零れた。

「髪の色のせいでその様に見えただけであろう・・・」

「あたしは、ハーグシュ王女の姿絵も良く覚えてる。姿絵の王女は微笑んでいた。エルはよくあんな顔をして笑う」

「・・・・・・・・・・」

「浮ついた、いい加減な気持ちなんかじゃないんだ。今まで誰かに仕えたいなんて考えた事は一度だって無かった。アルメーレ公だつて、仕えるに値する奴だなんて思った事は無かったんだ。でも、貴方は違う」

ロジェリンは素早くラドキースの前へ躍り出ると、彼の沈黙の前に跪いた。

「私を臣にお加え下さい、ラドキース殿下。剣に誓って貴方とエル姫に我が忠誠を捧げます」

それまでとは打って変わったロジェリンの口調と素振りに、厳しい表情のまま傍から様子を見守っていたファランギスは驚いた。

「馬鹿な事を・・・」

ラドキースは目の前に跪く赤毛の女騎士を見下ろし呟いた。

「馬鹿な事だとは思いません。貴方は我が命をかけるに相応しい」  
ロジェリンの翠緑の瞳は、強い光をたたえながら射る様にラドキースを仰ぐ。

「私は貴方に何かを期待し望んでいるわけではありません。貴方は主君と仰ぐに相応しい人物だと思っただけの事。どうか私を貴方の臣に、ラドキース殿下」

己の正体を否定も肯定もせぬまま、ラドキースは翠緑の双眸を見詰めた。暫しの沈黙が流れ行くと、やがて小さな溜息がロジェリンの耳に届く。

「私は、戦を起こす事になるやもしれぬ」

「元より承知の上にて」

諭す様な音を帯びるラドキースの言葉に、ロジェリンは引き締まった騎士の表情で頷く。

「私は、お前に何の保証も約束もしてはやれぬ」

「かまいませんっ！」

「私に．．．、お前を巻き込めと言うのか．．．？」

ロジェリンを見下ろすラドキースの黒の双眸には苦悩の色があった。

「私はそれを望んでいます、殿下」

ロジェリンは微笑み静かに答えた。

「馬鹿な事を、ロジェリン．．．」

哀し気に目を細めラドキースが低く呟く。ロジェリンは半ば縋る様な表情でラドキースを見上げている。

「みすみす平穏な生活を捨てる事も無かるうに．．．」

ロジェリンを見詰めていたラドキースは、やがて目を伏せた。

「好きにするがいい．．．」

その言葉にたちまちロジェリンは破顔一笑し、深く頭を下げた。

意外な成り行きにフアランギスは目を丸くしていた。ラドキース

がまさかロジェリンを受け入れようとは思わなかったのだ。だがフ  
アランギスは主君に対し異を唱えはしなかった。これからの長旅に、  
見るからに北方系の顔立ちをしているロジェリンを伴う事は恐らく  
負の要素にはならないと考えたのだ。

「エルツ！ お許しが出たよっ！」

ロジェリンがファランギスの傍らにいたエルに向かって両手を広  
げると、エルは心底嬉しそうに駆けより、その腕の中に飛び込んだ。  
ファランギスは苦笑を浮かべながら頭を振った。

「一体、お前は何者なんだ、ロジェリン？」

ファランギスが尋ねると、美女はフンつと鼻を鳴らした。

「何者かだつて？ あたしはロジェリンだよ。他の何者でもない  
さ」

その可愛くも無い返答にファランギスは、肩を竦めながら訴える  
様な表情をラドキースへと向けた。

「元公国騎士だ」

ラドキースが腕を組みながら教えてやると、ファランギスは素っ  
頓狂な声を上げた。

「まさかっ！？」

「はいはい、まさかで結構。あんたなんか信じてもらわなくな  
って結構さ。若先生とエルが信じてくれるから、それで充分だね」

そのロジェリンの非友好的な態度に、ファランギスの眉間にも皺  
が寄る。

「可愛くないぞ」

「可愛くしている年でも無いんでね」

ファランギスとロジェリンの言い合いに、エルはくすくすと楽し  
そくに笑い始めた。もう泣いてなどいなかった。

ロジェリンは旅支度に加え、小振りな弓と矢筒を背負っていた。



「実は、剣よりこいつの方が得意なのさ」

そう言って、勇んで夕食の為の狩りに出て来た。辺りは、既に薄暗い。鳥は無理であろうとも、兎位は見付かるかもしれないと期待しつつ、ロジェリンは弓を片手に息を潜めながら木々の間で獲物の気配を伺っていた。

「いつ頃気付いたんだ？ 殿下と姫の正体に？」

突然潜めた声をかけられ、ロジェリンははっと顔を上げた。いつの間に近付いたのか、そこにはユトレア皇太子の乳兄弟の姿があった。ロジェリンの表情がたちまち不機嫌なものに変わる。

「会って程なくだよ」

「それで私にあんな嘘を言ったのか？」

「あんな、嘘って？」

ロジェリンは不機嫌を隠しもせずに問い返した。

「殿下がエデワ生まれで、おまけに生まれてこの方エデワを出た事も無いなどと」

「だったら何さ？」

「そうか・・・」

「文句あるのかい？」

「いや、その件に関しては無い。だが、この先殿下と姫に対し害なす事などあれば私の剣は容赦無くお前を斬り捨てよう。その事、ゆめゆめ忘れるな」

ファランギスの射る様な瞳にロジェリンは唇を噛み締めた。

「何て嫌な奴なんだ、あんたは」

「嫌な奴で結構だ。主君をお守りするが私の使命故な。黒將軍無くして、ユトレア再建などありえない」

「・・・分かってるよ。あたしだって、若先生とエルを守りたいんだ。でも、そんなのおこがましい事だって分かってる。だからせめて、二人の助けになりたいんだ。二人に害なすなんて、そんな事するもんかっ」

吐き捨てる様に言ったロジェリンは、悔しさの為か拳を握りしめていた。

「それなら良さ。まあ、機嫌を直して狩りを続行してくれ。期待してるぞ」

表情を緩めたフアランギスは、ロジェリンの肩をぽんと軽く叩いてその場を離れて行った。

「くうううっ！ 何だってあんな嫌な奴が若先生の乳兄弟なんだっ！？」

後には、一人地団駄を踏みながら悔しがるロジェリンが残された。

フアランギスへの怒りが功を奏したのかどうなのか、ロジェリンは夕食の為に見事な鹿を射止めて来た。

「大したものだな……。ただの商売女じゃ無かったんだな……」

「そつ！ ただの“商売女”じゃ無かったのさ。お生憎様だね。見直したかい？」

素直に感嘆するフアランギスに、ロジェリンは皮肉のこもった言葉を投げ返す。

「雀の涙程は、な」

フアランギスも又、意地の悪い言葉をさらりと返す。

「むかつ！」

ロジェリンは美しい面に青筋を立てながら、短剣をすぱつと抜くと、まるで八つ当たりでもするかのように凄じ勢いで獲物を捌き始めた。どうもこの二人は決定的に性格が合わないに見える。

「ねえ、父様。ロジェリンとフアランギスは、何だかお似合いですね」

肉を焼く為に火を起していたラドキースは、娘の言葉に、まるで余興の様に皮肉の応酬を続けるフアランギスとロジェリンの姿へ

と目を走らせる。

「ふむ、そういった見方もあるわけか。成る程・・・」

ラドキースは娘の指摘に感心しつつ、おもしろそうに二人の様子に目を向けていた。

「何ですか、殿下？ その意味ありげな笑みは？ エル姫まで・・・」

枝に刺した鹿肉を火で焙りながら、ファランギスはたまりかねて尋ねた。

「いや、別に。おまえとロジェリンを見ていると退屈せぬと思つてな」

その言葉に、ファランギスとロジェリンは揃って目を剥く。

「どういう意味ですか？」

「そうだよ。どういう意味だい、若先生？」

「そのままの意味だ。なあエル」

「はい、父様」

意味ありげに微笑みあう主君父娘に、ファランギスとロジェリンは目を見合わせ、何となく不機嫌になり顔を顰め、互いにそっぽを向いたのであった。

#### 第四章 終

## 第五章 再会と兆し（1）

\* 「今も尚、多くの者達が貴方の生存を信じて希望を持ち続けているんですよ」

### ファランギス

南のイスヴァイク、ワーゲニン自由市は、完全なる自治権を持つ活気ある商人の町として大陸でも知られている。そのワーゲニン自由市のスレイガ家といえば、その辺りでは知らぬ者として無いと言われる程の豪商であつた。様々な品を商つてはいるのだが、殊に有名であるのは武器商としてであつた。

その日、高齢である一家の長に代わつて商いを一手に取り仕切るイザ・スレイガの元を、一人の青年が訪れた。商人と思しい姿のその青年を、イザは私室へと通させた。

「無事で何よりだ」

イザ・スレイガの声は低かった。それに対し青年は、ただ恭しく頭を下げる事のみで答えた。社交辞令も挨拶の口上さえも無しに、彼はただ告げるべき事を告げる為だけに口を開いた。

「スラグがエドミナへ密使を送りました、イザ様」

「ほう．．．成る程」

「はい。スラグがハーグシュと事を構えるのも、もう僅かの内と思われます」

室内には二人の他には誰もいなかったにも拘らず、彼等は声を落として会話を交わす。

「今回の密使は、エドミナに対する同盟の働きかけと見て間違いないでしょう」

「さもあるうな．．．」

普段は商人らしく穏和な眼差しが、鋭さと共に細められる。

「商いの相手はスラグとなるか、それともハーグシュとなるかはたまたエドミナとなるか．．．」

イザは口元に笑みを浮かべるも、その目は笑ってはいなかった。

「エドミナの動向は？」

「以前からエドミナ領の総督府に、こちらの手の者が潜伏しております」

イザは満足げに頷く。

「あの方に関しての連絡は、何かありましたか？ イザ様」

青年の問いに、イザは皺の刻まれた表情を翳らせ首を横に振る。

「ウォーデンからの便りを最後に、未だ芳しい便りは何も．．．」

「そうですか．．．」

青年は小さな溜息を零した。

「だが案ずるな。あの方はきつと戻られる。信じて待とう、ハイデル」

「はい、イザ様」

大商人の言葉に、青年．．．ハイデルは力強く頷いた。

レワルデン．．．．．。

王都からへだたる然る町の、その又はずれの小高い丘に一行は立っていた。風が冷たい。

「ちょうど、この辺りであつた。セレーディラを葬つたのは．．．

」

ラドキースは跪くと手を伸ばし、枯れかかった雑草に被われた地に触れた。エルもその傍らに座りこみ、ラドキース同様、手を伸ばして地を撫でる。ファランギスとロジェリンが、後ろからその様子を見守っていた。

「母様は、もうここにはいないのですか？ 父様？」

「ああ．．．。お前の母はハーグシュで眠っているそうだ。ここよりも恐らく、寂しくは無いであろうから案ずるな、エル」

エルは寂し気に頷くと立ち上がった。ロジェリンが劣る様に小さな肩を抱いてやる。

「父様、シュナの家に行つて来てもいい？」

「ああ。ロジェリンについて行つてもらうがいい」

「はい！」

とたんに嬉しそうな表情を見せると、エルはロジェリンの手を引っ張りながら丘を駆け下りて行つた。その二人の姿が見えなくなるとラドキースは、嘗て最愛の妻が眠っていた土地の辺りへと再び目を落とした。無言のままその土を見詰めるラドキースの姿に、ファランギスは辛抱強く付き合つた。

「セレーディラが逝つた時．．．、私は泣いた．．．。」

こちらに背を向けたまま、突如ラドキースは話し出した。

「人並みに涙など持ち合わせていた事に驚いたものだ」

「殿下．．．．．」

「今でも、思い起こすと涙が流れそうになる」

「・・・貴方が？」

「ああ・・・」

以前の皇太子なら、“涙が流れそうになる”などと、そんな事は間違つても口にはしなかったであろうとファランギスは思う。ラドキースは変わった。主君を変えたのはやはり、亡きセレーディア姫であり、エルディアラ姫なのであるとファランギスと思う。

「女々しい事と、笑ってくれても良いぞ」

「まさか・・・。それでしたら私なんか、女々しいどころの騒ぎではないじゃないですか」

ファランギスが慌て反論すると、ラドキースは振り返り苦笑する。そしてそのまま丘を下り始めた。後についてファランギスも丘を下る。

ふもとにぽつりと建つ小さな家の前でラドキースは足を止め、朽ちかけた扉を開く。嘗てラドキース一家が暮らした家は、随分と荒れてはいたが原型はきちんと留めていた。

「今宵は、ここで休もう、ファランギス。屋根がある分、風をしのげよう」

「ええ、そうですね、殿下」

懐かし気な瞳で小さな家の内部を見回すラドキースの様子に、ファランギスは複雑な気持ちを抱きながらも同意した。

シュナの家が見えると、エルは逸る心を抑えきれずに駆け出していた。

「こら、エルっ！ 気をお付けよっ！」

「ロジェリンも早くっ！」

「シュナン家は逃げやしないって！」

苦笑しながらも仕方無しにロジェリンも歩を早める。

ここ数日、ロジェリンはエルから件の“シュナ”の話を嫌と言う程聞かされていた。余程に仲が良かったのであるう。無邪気にはしゃぐ少女の様子がロジェリンには微笑ましく映る。だがしかし．．．、家の前に辿り着いたエルは、そこに立ち尽くしていた。後から辿り着いたロジェリンは、静かに息を呑んだ。

「ロジェリン．．．」

エルが不安気な眼差しでロジェリンのマントを掴みながら彼女を見上げた。その顔からは、ゆっくりと笑顔が失われていった。

破れかけた扉が半開きになっていた。窓の木戸は失われていた。

ロジェリンは少女の手を取り、家の中を覗いてみた。どう見ても、それは人が住んでいる様には見えなかった。

「シュナっ！」

ロジェリンの後から家に足を踏み入れると、エルは幼馴染みの名を呼んだ。

「シュナっ！ おばちゃんっ！ シュナっ!？」

小さな荒れ果てた小さな家の中で、エルは幼馴染みの少年とその母親の姿を探しながら、その名を幾度も幾度も呼んだ。だが、二人の姿は何処にも無く、答える声も無く．．．．。

「シュナ．．．．」

エルは大きな黒い瞳に涙を溜めて俯いた。

「エル．．．、おいで」

ロジェリンが背をかがめて抱き寄せると、エルは縋り付いてしゃくり上げ始めた。ロジェリンには、エルを抱き締めながら空虚な慰めの言葉をかけてやる意外に成す術も無く、ただただ途方に暮れた。

翌朝、出発前にフアランギスが旅の糧を仕入れる為に町へ出向く



と言うので、ロジェリンも付いて来た。

「シュナとやらいう少年の行方でも尋ねて回るつもりか？」

問われたロジェリンは、眉を上げて傍らを歩く連れへと目を向ける。

「良く分かったね」

「それでもなければ、お前が私に付いて来るとは思えん」

「そりゃ、そうだ」

美女はからからと笑う。そんな悪びれた様子の無い美女に、ファランギスは小さな溜息を吐いた。

市場で乾酪かんらくと干し肉、そして堅焼きパンなどを手早く買い求めると、二人は店の主人に件の少年の消息を尋ねてみた。

「シュナ？」

「母親と共に町外れに住んでいた筈なのだが……。生きておれば十一歳になる」

ファランギスが説明すると、パン屋の主人は声を上げた。

「ああ、町外れの農婦の子か。あのシュナなら三年くらい前に母親を亡くしてな、孤児院に捕まった筈だ」

「孤児院に、捕まった？」

パン屋の含みある物言いにロジェリンは柳眉を顰めた。

「今頃こき使われてんじゃねえかなあ……、可哀想に」

嘆かわし気に呟かれた言葉の前に、ファランギスとロジェリンは言葉も無く目を見交わした。取りあえず、その孤児院の場所を聞き出すと、二人は言葉少なにそちらへと足を向けた。

「……これが、孤児院だったのかい？」

「その様だな……」

窓という窓に鉄格子の嵌った建物は、孤児院と呼ぶにはあまりに剣呑に見える。一頻りその建物を眺めた後ファランギスが歩み寄って扉を叩けば、随分の間を置いて目つきの悪い中年の男が不機嫌そ

うに現れた。

「何か用かい？」

男は、出っ張った腹をさらに突き出しながらぶつきらばうに尋ねた。

「ここにシュナという名の子供が預けられていると聞いて来たのだが」

「シュナ？ あのくそチビか？」

シュナの名を聞くと男は露骨に顔を顰めて見せた。

「会いたいのだが」

「もういねえよ」

「いない？ 何処にいるのさ？」

「俺が知るもんか。逃げやがったんだよ。恩知らずなガキさ、つたく。今頃どつかで野垂れ死んでんだろうよ」

ロジェリンが当惑の瞳をファランギスへ向ければ、ファランギスも又難しい表情をしていた。

「逃げ出したのはいつ頃だ？」

「一年くらい前だよ。あんたらあのガキの何だい？ 親類か何か？ そんなら謝礼位は置いてって貰いたいもんだがね」

「いいや、赤の他人だ。邪魔をしたな。行くぞ、ロジェリン」

ファランギスは背を向けさっさと歩き出した。ロジェリンも気落ちしながら後に続いた。暫くの間言葉を交わす事も無く、二人は無言のまま歩を進めていたが、やがてファランギスはロジェリンに一瞥を投げた。

## 第五章 再会と兆し（2）

「お前が沈み込んでどうする？」

フランギスの声に、重い溜息をつきながら歩いていたロジェリンは顔を上げた。

「別に沈み込みはしないけどさ、エルがあんなにシュナに会えるのを楽しみにしてたつてのに会えないなんて、可哀想じゃないか．．．」

「仕方が無いだろう、行方が分からないんだ。彼を搜索している暇などこちらには無い」

素っ気無いフランギスの言葉にロジェリンは形の良い唇をむつと歪め、数歩先に行く背を睨みつけた。

「冷たいねえ、あんた」

「そうか？ 私はお二人の為に出来る事なら何でもする。だが、どうにもならぬ事は仕方無い」

フランギスは、ロジェリンを見もせずに言う。

「そりゃあ．．．、そうだけどさ。もっと優しい言い方は出来ないのかい？ つとにもう．．．」

「率直さの塊の様な “若先生” よりは、優しい言い方だったと思うがな」

「何ふざけた事言ってんだいつ！ 若先生は、あんたみたいな冷たい物言いはしないよっ！」

ロジェリンは肩を怒らせて憤慨した。

「．．．そうなのか？」

フランギスが、ロジェリンを振り返った。榛色<sup>はしばみ</sup>の瞳が、心做し

か微かに見張られている。ロジェリンは呆れ返り、フアランギスへと詰め寄った。

「そうなのかって、あんた若先生の乳兄弟なんだろう？ 付き合い長いんじゃないのかい？」

「まあ、確かに長いが．．．、私の知る殿下は、物言いが率直過ぎて冷たいと誤解されがちな人物だったぞ」

「そうなの？ 確かに若先生は口数の多いほうじゃあ無いだろうが．．．、でも冷たい物の言い方はしない人だよ。じゃなきゃエデワでだってあんなに好かれやしなかっただろ？ 良く考えなつて」

「そうだな、確かに．．．」

ロジェリンの言葉にフアランギスは珍しく素直に頷いた。

「正直驚いた。殊、子供達にあんなに好かれていたのにはな．．．。以前はあまり人を寄せ付ける方では無かつたんだが、殿下は変わられた様だ。大体、以前は笑う事も稀だったし．．．」

「そんなに暗かつたのかい？ 若先生つて」

「そうだな．．．、声を上げて笑う様な事は殆ど無かつた。まあ仕方が無い、決して幸福な方では無かつた故な．．．」

町からは遠ざかり、辺りに人通りは無かつた。フアランギスはふと足を止めた。つられてロジェリンも立ち止まる。

「その殿下が、故国を出奔してからの十二年間は幸福だったと仰つたんだ。不便であろう逃亡生活であつたにも拘らず．．．。あの殿下の口から“幸福”なんて言葉を聞いたのは、初めてだった。何とも言えない思いをした。それなのに、故国再建の為に私は、殿下の犠牲を望んだんだ．．．。残酷だな、私は．．．。お前に罵られたとて仕方が無い．．．」

「フアランギス．．．」

前を向いたまま、瞳を細めて自嘲するフアランギスの表情が陰を帯びた。ロジェリンにはかけける言葉も見付からず、ただフアランギスの横顔を見詰める事しか出来ないでいた。

やがてフアランギスが溜息と共に困惑顔のロジェリンへと目を向

けると、その横顔を見詰めていたロジェリンは、何故か内心慌てる。

「急ぐぞ。出立が遅れる」

言っやファランギスはさっさと歩き出した。

「あ、ちよつと」

ロジェリンも足早に後を追う。

「ファランギス」

「何だ？」

「うん、あのさ・・・」

目を逸らしながら、らしくも無く口ごもるロジェリンを、ファランギスが不思議そうに振り返った。

「どうした？」

「罵ったりしないよ」

「ん？」

「だから、あんたを罵ったりしないって言っただよっ」

「ほお？ 珍しく殊勝な事を言っな」

ファランギスは片眉を上げて見せると、ロジェリンへ向けていた瞳を細めた。

「何やら怖いな」

「なつ、何が怖いってのさ？」

「どんな裏があるのかと思って」

「何だっけそうひねくれた受け止め方するんだいっ？ ったく可愛く無いねえ」

「そんな年頃でもないからな」

今しがたのしんみりした空気など嘘の様に、ロジェリンがいきいきと罵り声をあげながら拳を振り上げれば、ファランギスはファランギスで笑い声を上げながら駆け出した。

二人が戻ると、皇太子父娘は朽ちかけた小さな家の前の丸太の上に仲睦まじそうに座っていた。家の横手には、木に繋がれたユクラ

テがのんびりと草を食んでいるのが見えた。平和な光景であった。どうやら小さな姫君はラドキースからユトレア語を習っていたらしく、地面にはいくつかの単語が書き散らされていた。ユトレア語を知らぬエルとロジェリンは、暇を見てはラドキースに言葉を習っている。だが人前では決してユトレア語を口にはしない。四人の間で交わされる会話は、大方が北方語であった。

「只今戻りました、殿下」

「ああ」

「お帰りなさいっ！」

エルは、素早く立ち上がると駆け寄ってロジェリンに抱きついた。何か分かった？ ロジェリン？

期待のこもった瞳で見上げてくる少女の髪を、ロジェリンは優しく撫でた。その期待を打ち碎かなければならない心苦しさに、ロジェリンの柳眉は曇る。だが隠し様も無く、意を決して口を開く。

「シユナは、三年程前にお母さんを亡くしたんだそうだ。それで孤児院に引き取られたんだけど、一年程前にそこを逃げ出したそうだ」

「母親を亡くしたのか・・・」

呟いたのはラドキースであった。ロジェリンは頷く。

「行方は分からないのか？」

「残念ながらね」

ロジェリンの腰に抱きついたまま、エルは黙りこくった。

「どこかで達者になっていると良いが・・・」

「孤児院を逃げ出す程の根性の持ち主だよ。きっと達者でいるさ、若先生」

「そうだな」

ロジェリンは微笑み、両手でエルの頬を挟み込んで上向かせる。

「エル、元気をお出しよ。シユナはきっと元気だよ」

「うん・・・」

エルは寂しそうに頷いた。

「いい子だ。そうだ、髪を編んであげようか、エル」

ロジェリンが艶やかな笑顔で少女の顔を覗き込むと、少女もにこりと微笑み頷き返した。

結局一行は、嘗てハーグシュの姫君が息を引き取ったその朽ちかけた小さな家に、ラドキース父娘の思いの詰まったその家に、もう一晚留まる事となった。あの後、一行はシュナの母親の墓に花を手向けに出掛けたのだ。

町外れの共同墓地に葬られていたシュナの母親の墓を見出すのは、そう容易い事では無かった。墓石も無い様な、削られた板が突き立てられているだけの貧しい墓が処狭しと並ぶ墓地である。その板に彫り込まれた名も、朽ちて判読出来ないものの多かった中で、シュナの母の墓を見つけ出した事は、幸運であつたと言えよう。

「父様、シュナのおばちゃんは、どうして死んじゃったの？」

野で摘んだ秋の花々を手向け祈りを捧げると、エルは傍らの父を見上げて尋ねた。

「事故であつたらしい。詳しい事は分からぬ」

「シュナ、可哀想……。独りぼっちになっちゃったんだ……」

ラドキースは片膝をついたまま手を伸ばし、泣き出しそうな表情の娘の肩を抱き寄せた。

「シュナは賢い子だ。今頃何処かで強く生きている筈だ。仲間を得て、きつと独りでは無かるう」

「そうかな……?」

「そう願おう、エル。シュナの為に……」

「うん、父様」

エルは、父親の胸に顔を埋めながら頷いた。そんな様子を、ファランギスとロジェリンは背後から静かに見守っていた。

エデワを發つてからより、一処に二泊するのも初めての事であった。先を急ぐ旅ではあったが、旅足は決して早くは無かった。仕方無い。健気に不平一つ零さなかったものの、年端もいかないエルには、それが精一杯であつただろう。

ファランギスの愛馬ユクラテの背に乗るのは、専らエルであつた。尤も、ファランギスが必ず手綱を握つてはいたのだが、お陰でエルもすっかり乗馬に慣れた。

「姫は、馬がお好きですね」

ファランギスが話しかけると、エルはユクラテのたてがみを撫でながら嬉しそうに頷いた。

「うん、大好き。だって、とっても可愛くて、とってもお利口なんだもん」

「そうですね。馬は、実に美しくて賢い。殊、このユクラテは、どうやら姫を甚く気に入っている様ですよ。姫が可愛がつて下さっている事を、良く理解しているのですよう」

ファランギスの言葉に、馬上の少女は実に嬉しそうな笑顔を晒した。

「ああ、ほら国境だよ。トラジエクだ」

ロジェリンが前方を指差し嬉々として言った。皆が一斉に前方の標識に目を向けた。

その日、一行はトラジエク王国へと入った。



## 第五章 再会と兆し（3）

トラジエクへの国境を跨いだ時、ラドキースは娘に言った。

「お前が生まれた国だ、エル」

「樵のおじいちゃんとおばあちゃんがいる国ね？」

「ああ」

父の懐かし気な眼差しに、自分の生まれた経緯を思い出してエルはくすつと笑う。母は旅の途中で産気づき、自分は危うく森の木の根元で生まれる処だったのだとエルは聞かされていた。『それはそれは、焦ったものだ』と、父は苦笑したものだ。『それは、焦ったものだ』と、父は苦笑したものだ。

「会いに行く？ 父様？」

「いや、彼等がいるのはもっと西だ。立ち寄るとすれば遠回りになってしまう」

「ふうん、残念ね、父様」

「そうだな。だが、いつか会いに行ける日もあるう」

「はい、父様」

静かに微笑む父に、エルは素直に頷いた。

トラジエクも、もうすっかり秋の彩りであった。アルメーレ公国から南下して来たとはいえ、トラジエク王国も大陸の北部に位置する。もう間も無く野宿には向かない季節に入るのであるう、陽射しも日に弱くなる。

王都に大分近付いたある日の事。黄葉した木々の葉を見上げながら小川のほとりで一休みした時、ファランギスがラドキースに言った。

「殿下、ちよつと王都に寄つて路銀稼ぎをして行きたいのですが。三日の猶予を頂けますまいか？」

その問いにエルとロジェリンは、きょとんと首を傾げる。

「何をする気だ、一体？」

ラドキースが尋ねれば、ファランギスはふふんつと意味ありげな笑いを見せる。

「折よく明日から王都では、年に一度の武闘大会が開かれるのですよ。こんな好機を逃す手はありません。勝ち抜けば賞金がたんまりです」

「へえ〜っ！ あたしも出たいよっ！」

ロジェリンが翠緑の瞳を輝かせた。

「別に止めはしないが、ロジェリン。お前の腕が私よりも立つと  
いうのならな」

「むっ！」

ファランギスの冷笑に、ロジェリンは途端に機嫌をそこねながらも、何も言い返せない。

「貴方もダメですよ、殿下」

「まだ何も言っていないが」

すかさず釘を打って来る乳兄弟を、ラドキースは片眉を上げて斜に見た。

「目立つ事はなさらないで下さい」

「変装してもだめか？」

「どう変装するって仰るんです？」

「顔に色でも塗るとか？」

「ああ、成る程……」

「冗談だ」

ラドキースの軽口にファランギスは瞳を瞬かせると、苦い顔でわざとらしい咳払いを零す。

「兎に角、何をしたって、どうせ貴方はその顔と腕前で目立ってしまうんですからダメですよ、殿下。貴方なんか出てった日には、

女どもが騒がない筈は無いんだ。顔が良いのも考えものですよ、全く。くれぐれも目立つ事はなさらないで下さいよ」

嘆かわし気な溜息を洩らしながら念を押してくる乳兄弟に、心做しか恨めしそうな色を黒曜石の瞳に上せたラドキースは、馬上の娘と目を見合わせ苦笑しながら軽く肩を竦めた。

「勝算はあるのか？」

「無論です」

ラドキースの問いにフアランギスはさも当然とばかりに頷いた。

「へええゝ。すごい自身」

ロジェリンが横目に皮肉を投げかければ、フアランギスは真面目な表情をそちらへ向ける。

「当たり前だ。さもなければこんな処で三日も費やそうなどとは考えない」

「じゃあ、絶対に勝つ自信があるんだ？」

「ああ、勝つとも」

あまりに潔く言われ、ロジェリンは半ば呆れながらも感心する。

「では、良い機会だ。王都で宿を求めてゆっくり休むとしよう」

ラドキースが言えば、「わーいっ！」という歓声が重なり上がった。エルとロジェリンが二人揃って嬉しそうに両手を上げていた。エデワを出てより宿を取った事など、数える程でしかなかったのだ。

「よしっ、エル、着替えようっ！」

「うんっ！」

「着替え？」

嬉々として立ち上がる女達に、フアランギスが尋ねた。

「王都に寄って行くんだ、ちよっとは綺麗にしてかなくっちゃだろうが。ねえ、エル？」

「うんっ！」

エルは荷物からスカートを引っ張り出しながら頷いた。

「何故だ？」

フアランギスが不思議そうに尋ねると、ロジェリンが呆れた様に大きな息をつく。

「ああ、もうっ！ 女心の分かんない奴だねえ。あんた、絶対女にモテないだろ？」

「お前に言われたく無いぞ、ロジェリン」

溜息混じりに言い返すフアランギスに、ラドキースがさらりと口を挟む。

「ロジェリンはアルメーレ公都の騎士達に随分とモテたのだぞ。フアランギス」

「嫌だ、若先生つてば、努めて思い出さない様にしてる事をつ」

ロジェリンが顔色を変えて声を上げた。

「そうだったのか？」

「そうさ、だって・・・」

急に口ごもるロジェリンの不貞腐れた様子に、ラドキースは笑いを零す。

「何ですか？ 面白い話ですか？」

フアランギスが目を丸くする。

「あのねフアランギス、ロジェリンは公国騎士団にいた時、  
付け文”を沢山もらったの”

ロジェリンの “努めて思い出さない様にしている事” を、エ  
ルがぺろりと暴露した。

「こらっ、エルっ！」

ロジェリンが叫ぶや慌ててエルの口を塞ごうと飛びかかれば、エ  
ルははしゃぎ声と共に逃げ出した。

「付け文・・・？」

「気になるか？」

呟くフアランギスに、ラドキースが意味ありげな目を向ける。

「何故私がそんな事を気にせねばなんのです？ 殿下？」

フアランギスは憮然とした顔を見せる。

「気にならないのか？」

「なりません」

「そうか、なら良い」

「.....」

エルはロジェリンに捉えられ、くすぐりの刑罰を与えられ、高い笑い声を上げながら身体を振っている。男達は、暫しその様子に目を向けた。そして、少しの後にフアランギスがこほんと咳払いを零す。

「で？ 何なのです？ その “付け文って？”」

「ん？ 付け文は付け文だ。恋文の事だが」

「そんな事は分かっています」

「やはり気になるのか？」

「別にそういうわけでは。ただ、私だけ知らぬでは、何となく疎外感を感じるだけです」

ラドキースは、ふと笑みを零す。

「エルの言ったままなのだが。公国騎士団の多くの男達が、彼女の気を引こうと贈り物やら付け文をしたのだ」

「何故、ロジェリンはそれを思い出さたくないんですか？」

「不幸な勘違い故であろうな.....」

故意になのかどうなのか、ラドキースは遠い目をして空を見上げた。

「勘違い？」

「お前も勘違いされぬ様、少しは素直になった方が良いぞ」

「は？ 仰る意味がわかりませんが、殿下？」

榛色の目を丸くして身を乗り出す乳兄弟に、ラドキースは悪戯つけない笑みを向けた。そこへ、はしやぎ疲れたのかエルとロジェリンが息を切らしながら戻って来た為に、フアランギスはラドキースからの答えを聞き出す事は出来なかった。

「若先生、あたし達は着替えて来るからね」

「ああ、分かった」

着替えを出しながら断りを入れるロジェリンに、ラドキースは頷く。

「二人とも、のぞきに来ちゃいけませんよ」

エルが菜の花色のスカートを抱えながら、こまっしゃくれた口調で父親とその乳兄弟に釘を刺した。

「それは残念」

ラドキースが涼し気な笑顔で娘をからかえば、娘は、「父様のえっちーっ！」などと叫んで木陰へと駆けて行った。その後をロジェリンが笑いながら追って行った。

「貴方も、そんな冗談を仰る様になっただんですね、殿下」

「ん？」

「昔の貴方なら、仰らなかつたでしょう？」

ラドキースは一瞬眉を上げ、その場にごろりと寝転んだ。

「昔は、そんな冗談を言う相手に事欠いた」

「．．．．．そうですね」

ファランギスは昔に思いを馳せ、ラドキースに同意した。そして、ラドキースに倣って隣に寝転ぶ。

「このトラジェクで樵の夫婦に厄介になっていた間、セレーディラも私も良く笑った」

ラドキースは瞳を閉じて語る。

「私は、あそこで笑う事を覚えたと言うべきなのかもしれない．．．  
。暖かい人々であつた。あの暖かみは、お前の母の様であつたな．．．  
」

「会つてみたいものです。貴方にとつての恩人なら、私にとつても同じ事だ。是非とも会つて、一言礼を言いたい」

「事が成つたら会いに行こう」

「ええ、きつと、殿下」

事が成つたら．．．。いつになるかなど分からない事であつた。そう簡単に成せる事などでは無い事であつた。そして、成せるかどうかさえも、分からない事であつた。そして仮令成せたとしても、その時生き延びているかさえも分からない事であつた。それでも今は、悲觀的になるわけにはいかなかった。一度決心した事である。ユトレア王家の人間として、成さぬわけにはいかない。ラドキースの胸の内には、そんな思いが渦巻いていた。

## 第五章 再会と兆し（４）

目にも鮮やかな赤毛を背に垂らした長身の美女を、すれ違う者達が皆振り返り見て行く。物々しい男達の行き交う中で、唯でさえ目立つ容貌の彼女は、殊更人目をひいた。

「皆がロジェリンを見て行くよ」

美女と手を繋いで歩くエルが、傍らのロジェリンを見上げた。

「あたしがデカいから、珍しいんだろっ」

美女は、肩を竦めた。

「違うよ。ロジェリンが美人だからだよ」

「ええっ！ 全く口が上手いねえ、この子は」

わははっと、美女は照れ笑う。

「フアランギスも、ロジェリンは美人だって思うでしょ？」

突如後ろを振り返った年端もいかぬ少女に話を振られ、フアランギスは微かに狼狽えた。だが幸いな事にマントのフードを被っていた為、顔の表情も見えず、その微妙な狼狽を気取られる事は無かったであろう。唯一、傍らを歩いていたラドキース以外には……。

「まあ、そうですね、確かに人並み以上ではありますが、エル様」

その歯切れの悪いながらも一応は少女に同意する返答に、ロジェリンは意外な言葉を聞いたとしても言いたげな顔で振り返り、フアランギスの横を歩いていたラドキースは、深く被ったマントのフードの中で苦笑していた。

「素直じゃないな」

「はい？」

「何でも無い。気にするな」



「気にするなと仰られてもですねえ……。貴方の言葉には、近頃頼に引っかけりを感じる事があるんですがねえ、“若先生”？

一体、何を仰りたいんですかねえ……。？」

「分からないのか？」

「まあ、分かる様な分からない様な……。？」

溜息と共にぼやく乳兄弟に、ラドキースはまた、低く短い笑い声を零した。

「それにしても、すごい人だねえ」

ロジェリンが辺りを見回しながら、誰へとも無く話しかける。王都は、実際に随分な人出であつた。それも、傭兵風の剣を下げている物騒な輩が目につく。

「皆、大会に集まつて来た者らか……。？」

「まずそうでしょう」

後ろを歩く男達も、それとなく辺りに視線を配っていた。

「傭兵らしき者達が多いのだな」

「ええ、以前来た時も傭兵が多かつたですね」

「以前にも来たのか？」

「はい。ちなみに、勿論優勝しましたよ」

何でも無い事のようにフランクは打ち明けた。初めから自信満々な分けである。男達がそんなやり取りをしていると、横手から寄つて来た傭兵風の男が、前に行くロジェリンの肩に馴れ馴れしく腕を置いた。

「よお、いい女じゃねえか、子連れの姉ちゃん！」

「馴れ馴れしくすんじゃないよ、この酔っぱらいがつ！」

途端に柳眉を逆立てたロジェリンは、その腕を邪険に振り払つた。「そんなつれない事言つなよ。一晚付き合えつて、可愛がつてやつから」

言つや男は酒臭い息をまき散らしながら、再びロジェリンの肩を抱き寄せようとす。ロジェリンはすかさずエルを後ろに庇いなが

ら身を引くや、マントを振り払って腰の剣に手を掛けた。

「血を見たいなら、付き合っても良いが？」

口調をがらりと変えたロジェリンは、殺気の隠った瞳で相手を睨みつけた。

「何だい、勇ましいんだな」

男は、馬鹿にしたかの様に笑い出す。

「血を見たいのなら、私も付き合おうか」

「面白そうだな。私も付き合おう」

突然起こった声に、酔漢は笑いを納めた。

「何だと？」

一瞬いきり立った酔漢も、赤毛の美女の両脇にすいっと立った長身の男達に気圧されたのか、惚けた表情となる。

二人ともフードで顔は見えなかったものの、その口元に浮かぶ冷笑と、これ見よがしに見せつける腰の長剣は、不埒者を怯ませるには充分であつた様である。

「何だよ、連れがいんのかよ、ちえっ」

どうやら形勢不利と見たのであろう、その不埒な酔漢はふらりとその場を離れて行った。

「ったくっ！」

ロジェリンは毒突くと、剣から手を離した。胸元の開いた、長いスカート姿でありながら、腰にはしっかりと長剣を帯び、背にはしっかりと弓と矢筒を背負っている。見るからに勇ましい美女である。

「武器を背負っていても、けしからぬ輩が寄って来るとは、お前も難儀だな、ロジェリン」

「全くさ、若先生。やれやれだよ」

ロジェリンは、口をへの字に曲げながら、エルの手を再び取る。

「まあ、物好きは何処にでもいるものだ」

「何となくむかつく物言いだね、ファランギス」

顚かみをひくつかせながら口角を上げるロジェリンは、中々に迫力があつた。そんなロジェリンの手を、エルが突然嬉々として引張った。

「何だい！？ エル！？」

「見てっ！ ロジェリンっ！」

瞳を輝かせる少女に示された方へと目を向けると、ロジェリンも年甲斐無く一緒になって瞳を輝かせた。ラドキースとファランギスが不思議に思い二人の視線の先へと目を向けてみれば、女達の好みそうな装飾品を並べた露天があつた。無邪気に駆けて行く女達に、二人はちらと目くばせを交わしながら苦笑いを零した。

「姫を見ていると、始めてお目にかかった頃のセレーディラ様を思い出しますよ、殿下。誠に良く似ておられる」

露天で商われる品々を、傍らのロジェリンと共に楽しそうに手に取ったりしている幼い少女の姿を眺めながら、ファランギスがしみじみと言った。

「ああ．．．、そうだな」

ラドキースはファランギスに相槌をうつてやり、ふいにくすりと笑いを零した。

「殿下？」

「いや、あれが生まれた時の経緯を思い出したら、可笑しくてな．

．．．」

「それは、又、何故に？」  
なにゆえ

「ちと難儀したのだ」

「難儀とは．．．？」

「セレーディラが産気づいた時、旅の途中でな、人気の無い森の中であつたのだ」

「．．．そうだったんですか！？」

初めて聞かされる話に、ファランギスは榛色の瞳を丸くして驚い

た。

「あの時は心底焦った。私が子を取り出さねばならぬかと思つてな」

そう言つてラドキースは再び軽く笑う。内心の衝撃を押し隠しながらファランギスも笑った。

「いかな殿下でも、子の取り出し方など、ご存知無かつたでしようね？」

「当たり前だ」

「それで見付けたのが樵の家だつたというわけですか」

「ああ。樵に女房がいて助かつた」

「はははっ。貴方の焦る姿というのを拝見したかつたものだ」

「人事だと思つて」

男達は、一頻り笑う。が、しかしファランギスは笑いながらも、分かつていた。この王子は仮令焦ろうとも、それを面に出す事など無いのだという事を、ファランギスは長い付き合いから知つていたのだ。

トラジエクの王都で年に一度に開かれるという武闘大会は、無礼講に近いものではあつたのだが、武器はといえば、そこはやはり剣を使う者が大半であつた。出場者の出自は殆ど問われない。それ故に国内からだけでは無く、近隣諸国からも職を求める下級騎士や傭兵等が集まつて来るのである。仮令優勝出来なかつたとしても、ある程度勝ち抜く事が出来れば、どこぞの領主の目に留まり取り立てられるかもしれない。そんな望みを胸に、求職中の者達がこれに参加する。また、賞金を目当てに集う血気に逸る腕自慢達も勿論いる。そんな内の一人である筈のファランギスは、大会参加申し込みが締め切られる時刻ぎりぎりの処で辛うじて登録を済ませ、後は飄々と

していた。そして・・・、大会二日目、いともあっさりと勝ち抜いたのであった。

## 第五章 再会と兆し（5）

「手応えが無さ過ぎましたね」

その日の対戦を総て終えラドキース達の元へ戻って来た時、ファランギスはやや不満げな表情であった。

「まあ、そうばやくな。また明日があるであろうに」

「そうですね。明日の対戦相手に期待するとします」

「一度も負けなかったのに、嬉しくないの？ ファランギス？」

不思議そうに見上げてくるエルに、ファランギスは困った様な笑みを向ける。

「いいえ、そんな事はありませんよ、エル様。勿論嬉しいですとも。ただ、呆気無く終わってしまったというだけの事です」

「ふうん」

少女は、依然不思議そうに首を傾げた。そこへすかさずロジェリンが口を挟む。

「ファランギスは、相手があんまり弱かったんで不満なのさ。ども、被虐趣味があるみたいだよ、ファランギスには」

「ひぎやくしゅみ？」

「こらこら、ロジェリン」

ファランギスは、顫かみを押さえながら、内心うんざりと溜息を吐く。

「父様、 “ひぎやくしゅみ” ってなあに？」

「うむ．．、人に苛まれる事に喜びを見出す嗜好の事だ」

「苛まれるって？ 苛められる事？」

「ああ、そうだ」

少女は円な瞳を更に見開いて、驚きの表情を隠しもしない。ファランギスは、嘆かわしいと言わんばかりに目を覆った。

「殿下、貴方まで姫に何を真面目に解説なさってるんですか？私にそんな趣味はありませんよ」

「無いのか？」

「当たり前です！」

「誠にか？」

「疑っておられるんですか！？ 一体何を根拠に？」

半ば向きになりながら抗議する乳兄弟に、ラドキースは悪戯っけな瞳でさざりと言つ。

「冗談だ」

「貴方のは、冗談に聞こえないんですよ」

途端に脱力したファランギスに、ロジェリンは腹を抱えて笑い出した。

王城前の広場では、本日最後の対戦が行われていた。観衆等のどよめきに、ラドキース一行も気を引かれ、そちらへと歩み寄つてゆく。

「父様、見えません」

訴える娘に、ラドキースは屈んで見せる。するとエルは嬉々として父親の肩に乗った。長身の父親に肩車されたエルからは、試合の様子が誰よりも良く見えた。双方、傭兵然としたなりの男達の対戦であつた。一人は大柄であつたが、片や相手は革製の胴衣を着け傭兵然としてはいたものの、割に細身の男であつた。動く度に、後ろで括った肩よりも長い明るい金色の髪が刎ねる。剣同士の鳴り響く音の間隔は早い。

「へえ、中々面白い試合ですね」

暫く成り行きを眺めていたファランギスが、やがて口を開くとラ

ドキースも同意した。確かに見応えのある試合だと思いながら、ラドキースはその金髪の男の姿に何かを呼び覚まされた様な気がした。そんな時、肩の上のエルが父を呼んだ。

「あの人、何だかどこかで見た事がある様な気がします、父様」

「やはり、そう思うか？ エル？」

「父様も？」

「うむ．．．」

娘の意味するのがどちらの人物かなど、問い質すまでも無かった。ラドキースは、遠目から金髪の男の剣遣いを注視する。確かに見覚えがあった。

「何だか、お魚のおじちゃんに似てる．．．」

「良く覚えていたな、エル」

「うん、父様」

見覚えのある容姿とその剣遣いに、ラドキースも微笑んだ。

「何だい？ 知り合いなのかい？」

ロジェリンが驚いた様に尋ねれば、ラドキースは苦笑を返す。

「どうもその様だ。他人のそら似でなければな」

「へえ、どっちだい？ 大きい方？ それとも金髪頭の方？」

「金髪頭の方だ」

「一体どなたなんですか？」

「お魚のおじちゃん！」

フアランギスの問いに、エルが満面の笑みで答えると、ロジェリンの口からは間の抜けた声が上がった。

思わぬ処で見かける事となった “お魚のおじちゃん” こと、ユールスに会いに行きたがるエルを諭し、一行は宿へと戻っていた。あまり深く人と接触するのは得策では無いと父に諭されると、エル



は少し肩を落としたが、素直に頷いた。

そして今、一行は宿の食堂の奥まった席で夕食を摂っている最中であつた。

「美味しいっ」

エルは、トラジエク名物の牛の煮込みを頬張り無邪気な笑顔を見せた。

「たんとお食べ、エル。今度いつ又真つ当な食事にあつつけるか分からないんだから」

ロジェリンが横目でファランギスを見ながら傍らのエルに囁く。

「今、何か棘を感じたが、気のせいか？　ロジェリン？」

ファランギスもエールの杯を片手に横目でロジェリンに視線を返す。

「気のせい、気のせいっ！　被害妄想甚だしいよ、ファランギス」

ロジェリンが左掌をひらひらと振つて、わざとらしい笑顔をファランギスに向けた。

この旅で、事実上財布の紐を握っていたのはファランギスであつた。尤も、路銀を作るのも彼が担っていたわけではあるが……。

「ひよつとして、笑いを堪えてるんですか？　若先生？」

ファランギスは、傍らで顔を背けているラドキースに気付いて尋ねた。

「いや、別に……。エル、沢山食べて大きくなるのだぞ」

ラドキースがごまかすかの様にエルに話しかけると、少女は嬉しそうに頷く。

「しかし、あまり大きくなり過ぎても困りますよ、エル様」

すかさず言葉を引き続けるファランギスにロジェリンがむつとする。

「悪かつたね、大き過ぎて」

「別にお前の事を言つたわけでは無いが、ロジェリン。被害妄想甚だしいぞ」

ファランギスがにやりと笑つと、ロジェリンはあからさまな怒り

顔を主君の乳兄弟に向かって突き出した。

「やれやれ．．．」

ラドキースは苦笑を浮かべながら、エルはにこにこ笑顔のまま、同時に煮込みを口に運んだ。

「ねえ父様、お魚のおじちゃん、もう漁師を辞めちゃったのでしょうか？」

「さあな。本人に尋ねてみぬ事には何とも言えぬな」

ひよんな出会いから短い間、共に旅をした陽気な青年は、別れ際『漁師になる！』と言っていた筈であつたが、この分ではそれも適わなかつたのであろうか．．．、それともただ単に飽きただけなのか．．．。幼い頃より剣を下げて生きて来た者にとって、剣を捨てる事は、精神的にもそう容易い事では無いという事をラドキースも知っている。自分達父子に追いはぎを働こうとしたにも拘らず、何故か憎めなかつた男の悪びれぬ愛嬌のある笑顔をラドキースは思い出した。

「あの金髪頭つて、どんな知り合いなんだい？ 若先生」

ロジェリンが思い出した様に尋ねると、フアランギスも興味を示した。

「以前、ほんの短い期間、共に旅をした事があつたのだ」

「信頼に足る人物だつたんですか？」

フアランギスが思わず尋ねると、ラドキースは小さな笑いを洩らし、「さあ．．．」と答えた。

「何だつて、“お魚のおじちゃん” なんだい、エル？」

ロジェリンは不思議そうに尋ねた。

「あのね、お魚を獲るのがとっても上手だつたの」

「へえ、魚獲りがね」

エルは何を思い出したのか、くすくすつと可憐な笑い声を零しながら頷いた。

フアランギスは今一つ納得が出来なかつた。本当にこの王子は、

信頼に足るとも分からぬ人物を簡単に寄せ付けたのであろうかと。昔のラドキースならば、そんな事は決して無かったであろうにと。

試合が進むにつれ大会は白熱して行つた。王都のあちらこちらの酒場では盛んに賭け事が行われ、男達は夢中になっていた。ファランギスに賭ける者がどれ程いたかは定かな処ではないが、前大会の優勝者の名を知る者は少なからずあった。尤も、前回に引き続き今回も、ファランギスは偽名を使ってこの大会に参加している。彼とて嘗てはユトレア王家とも縁続きの大貴族であり、皇太子であつたラドキースの乳兄弟にして側近であつたのだ。そのファランギスの生存の事実が明るみに出れば、ハーグシュやスラグがどのような手段に出ようかなど想像には難く無い。ならば、この様な場で本名を曝して危険を冒す必要など無い。

秋晴れの青空の下、尾を引く様な金属音と共に大きな歓声が沸き起こつた。観衆に混じり、その対戦を見学していたエルとロジェリンも、興奮して声を上げていた。

「勝つた！ 又、勝つたよ！！」

ロジェリンが辺りも憚らずにはしゃげば、父親の肩の上でエルも無邪気に両手を振り上げてはしゃぐ。そんな二人の様子に、ラドキースは微笑んだ。

「誰もファランギスに齒が立たないよ、若先生！ でっかい口叩いてただけあるね、ファランギスの奴つてば」

「見直したか？ あれの事を？」

「うん、まあね。でもよく考えたら、ファランギスって若先生と互角の腕してたんだっけね。普段、憎ったらしいから忘れてたよ」  
年甲斐も無く興奮に頬を紅潮させながら、そんな事をぺろりと言うロジェリン。

「あ、見てっ！ 父様もロジェリンもっ！」

ラドキースの肩の上で、エルが突然叫んだ。エルの指差す方向へと二人が目を向ければ、試合を終えた後のファランギスが、数名の女達に囲まれている様子が見て取れた。その光景に、はしゃいでいたロジェリンは数度瞬きを繰り返した。

「ファランギスが女の人達に囲まれちゃった」

「あらま．．．．．」

「引く手数多な様だな」

「その様だね．．．．」

今しがたの上機嫌とは裏腹に、眉を顰めながらファランギスへと目を向けているロジェリンの背を、ラドキースがポンと叩いた。

「お前も、ねぎらいに行ってやったらどうだ、ロジェリン？」

「ななっ、何であたしが!？」

「良いから、行ってやれ。私達は、この辺りで待っている」

「で、でも、きつとお邪魔だよ。若先生」

「らしくも無く弱気な事を言うのだな。良いから、行って助け出してやってくれ」

再度ラドキースに背を押されたロジェリンは、髪を掻きむしりながら渋々とその場を離れた。気の進まぬ足取りで十歩程歩いた処で、ふとラドキースの不自然な言葉に気付く。

「助け出してやってくれ．．．？ って、何を??」

ロジェリンは、訝しみ振り返る。ラドキースとエルがこちらを見送っていた。エルが手を振っている。ロジェリンはエルに手を振り返してやると、その言葉の意味に首を傾げながら再び歩き始めた。

## 第五章 再会と兆し（6）

大きな板に記された対戦表に、新たな対戦者達の名が書き連ねられる。勝ち抜き戦である為、当然回を追うごとに名は少なくなつてゆく。初日と二日目は、王都の幾つかの場で次々と試合が行われたが、三日目に入り出場者が絞られると、都の中心に立つ神殿前の広場で試合が行われるのが定例であった。時に国王がお忍びで観戦に訪れる事もあるのだという。そしてまた時に、大会が長引き数日ずれ込む事もある。

「ちよつと、何なのさ!？」

ファランギスに手首を引っぱられながら、ロジェリンは分けも分からずに尋ねた。

「良い処に来たな」

「へ？」

「ここの女達は、しつこいので参る」

「...」

ロジェリンが後ろをちらりと振り返れば、今しがたまでファランギスを取り囲んでいた女達が、落胆の声と共に恨めし気にこちらを見送っていた。

ラドキースに促されロジェリンがファランギスの元まで来てみれば、五、六人の女達にまわりつかれ、辟易した態のファランギスがいた。

『あらま、だらしく鼻の下でも伸ばしてるかと思いきや』

『ロジェリン!』

目が合うやフアランギスは、素早く己の腕に絡み付いていた女達の腕を解いて、これ見よがしにロジェリンの肩を抱き寄せた。背に下ろされた豪華な巻き毛の長身のロジェリンの出現に、フアランギスに纏わり付いていたトラジェクの女達には、悔し気な表情を浮かべる者もあれば、きょとんと目を丸くする者もあった。

『すまぬな、連れがいるんだ』

言うやフアランギスは、ロジェリンの腕を掴んで女達から文字通り逃げ出したという分けであった。

「助け出せって、そういう事か・・・」

先程のラドキースの言葉に納得しながらロジェリンは呟いた。

「何だ？」

「いいや別に。あんなに引く手数多になる事なんて、滅多に無いだろうに、勿体無いと思っただけさ」

「引く手なぞ無くて結構。しつこい女は好かん」

「やれやれ、そんな事言つてると一生嫁の来手が無いよ」

「馬鹿にするな。そういうお前こそ、その口の悪さを何とかせねば一生嫁の貰い手がつかぬぞ」

「そりゃ結構。あたしは生涯独り身を通すつもりだからね」

「ほう？ 若先生の後添えになりたいとは思わんのか？」

「へ!？」

「惚れてるのだろうに？」

「何言ってんだい？」

ロジェリンは声を尖らせ思わず立ち止まった。その手首を掴んでいたフアランギスも、おのずと歩を止める。

「違うのか？ エデワで私にあれ程邪険にあたったのは、若先生を取られたく無かったからでは無いのか？」

フアランギスは不思議そうに眉を上げる。わざとらしさを隠しも

しない。

「何か誤解してやしないか？ 確か、前にもそんな事を言っただろう？ 全く嫌な奴だね、あんたは。ああ、そうだよ。若先生もエルも取られたく無かったよ。でも、だからって何で惚れた腫れたなんて話になるのさ？ まあ確かに、若先生の人間性には惚れてるけどさ」

「人間性にか・・・」

「ああ、そうさ。あの人になら仕えてもいいと思ったんだ。仕えるならあの人以外にいないって、心から思ったんだ。だから追いかけて来たんだ。店を切り盛りするのも結構楽しかったけど、やつぱりあたしは剣を手放せない。物心付いた頃には木剣を振り回してた。それからずつと腰に剣があるのが当たり前だった、公国騎士団を辞めるまではね。四年ちよつとの間、町の女になつてみたけど、やつぱりあたしは、騎士として生きたいんだ。悪いかな？」

ロジェリンのきつぱりとした物言いとその潔さは、フアランギスに嫌悪の情を誘うものでは無かった。ラドキースに仕えんが為ロジェリンは、一夜にして故国への、そして平穏な生活への決別を決心したのである。その一種の清々しさに、フアランギスが心の奥底で感銘を受けた事は確かであった。

「いや・・・、全く悪くなど無い」

「そうか。だったら、いい加減手を放したらどうだい？」

未だロジェリンの腕を掴んだままであった事に気付いたフアランギスは、ぱつとその腕を放し、取り繕うかの様に咳払いを零した。そんなフアランギスに、ロジェリンはずいつと踏み込んでその顔を睨みつける。

「それから金輪際、惚れただ腫れただなんて事は口にするな。若先生に失礼だ。本来なら不敬罪にあたるぞ」

囁く程に低い声は、騎士の口調であった。どうやら本気で憤慨しているらしい。

「別段、不敬罪にあたるとは思わぬが？」

「しつこいな」

「すまぬ」

素直に詫びの言葉を口にしたファランギスに、ロジェリンはふい  
つと瞳を和らげた。

「さてと、次の対戦相手は誰なんだい？」

口調を戻したロジェリンは、身を翻しファランギスの前を歩き出  
す。

「知らん」

「なら確かめに行くよ」

「別に誰でも良いが」

「つべこべ言わずに、さっさと来たらどうだい？」

対戦表の方へと、すたすたと歩いて行くロジェリンの後を、ファ  
ランギスは一人肩をすくめながら素直に付いて行った。

神殿の石段に腰を下ろし、柱に凭れつつラドキースは、傍らで片  
足飛びに石段を飛びながら無邪気に独り遊びに興ずる娘を眺めてい  
た。エルが刎ねる度に、金褐色の柔らく波打つ髪と背に流したマ  
ントが刎ねる。マントの下の菜の花色のスカートは少女らしく愛ら  
しかったのだが、腰に下げた小振りな剣が違和感を醸し出していた。  
ふと、エルの姿に亡き妻の姿が重なる。出会った頃の、まだ、ほん  
の少女であった頃の妻。背に垂らされた金褐色の髪は、やはり柔ら  
かそうに波打っていた。思わず手を伸ばしてその髪に触れると、彼  
女は少しはにかみ頬を染めたものであった。

「父様？」

気が付けば、あの頃の妻かと思紛う程に良く似た娘が、すぐ横に  
立っていた。ラドキースは、目を細めその幼い顔を見詰めた。黒目



がちな瞳の色だけが妻とは異なる。ラドキース譲りの黒曜石の如き瞳だけが、血を分けた父娘の証の様にも思えた。

「父様、どうしたの？」

エルは、しゃがみこみフードの中のラドキースの顔を覗き込んだ。

「お前は、日に日に母に似て来ると思ってたな」

「母様に？」

「ああ」

「そんなに似ている？」

「そっくりだ」

ラドキースは微笑み、手を伸ばしてエルの頭を撫でる。

「母が恋しくなったら、お前は己が顔を見れば良い」

「私の顔を見ていたら父様も寂しく無い？」

「ああ、寂しく無いとも」

「じゃあ、エルはずっと父様の傍にいてあげます」

「嫁にも行かぬつもりか？」

「はい」

一瞬の逡巡も無しに大きく頷く娘に、ラドキースは微かな笑いを零した。

「それも困るな、エル。孫の顔が見られないではないか」

「孫？」

可愛らしいうなり声を上げながら真剣に悩み始める娘の小さな肩を、ラドキースは笑いながら抱き寄せた。

「ここにいたのかい。何だい、エル？ 難しい顔して」

フアランギスと別れて戻って来たロジェリンは、ラドキースの腕の中で悩んでいるエルの表情に目を丸くした。

「エルには、ちょっとした難題が持ち上がったのだ」

「難題って？」

「あのね、私はお嫁に行かないですつと父様の傍にいてあげたい

のに、父様がそれだと孫の顔が見られないから困るって．．．」

ラドキースは笑いながら、膨れっ面のエルをあやす様に幾度も撫でた。

「なあんだ、そんな事かい？」

ロジェリンは豪快に笑い飛ばす。

「そんなの婿を取れば良いだけの話じゃないか、エル」

「お婿さん？」

「そうさ。婿を取れば、ずっと若先生の傍にいられるさ」

「そうかあ」

途端に顔を綻ばしたエルは、嬉しそうに父親の胸に抱き付いた。

「父様！ 私、お婿さんを取ってずうっと父様の傍にいてあげます！」

「それは、良い考えだな、エル」

「はい！」

まだまだ当分、父離れなど出来そうも無いエルの様子に、ラドキースはロジェリンと目を見交わし苦笑した。

「ところでフアランギスは？」

「ああ、ちゃんと助け出してやったよ。今、控えのテントで休んでいる」

「そうか」

「次の試合に勝ったら準決勝だよ、若先生、エル」

ロジェリンは瞳を輝かせている。

「この二つ後がフアランギスの試合だって。ユールス＝アゼリアルドってのが次の対戦相手さ」

広場で行われている試合を親指で示しながらロジェリンが言えば、エルがぱつと顔を上げた。

「ユールス？ お魚のおじちゃんだ！」

エルが嬉しそうに叫んだ。

「えっ？ そうなのかい？ ああ金髪頭！？」

「ああ。無事勝ち進んでいたのだな」

「お魚のおじちゃん、すごいね、父様」

「そうだな」

嬉しそくに言葉を交わす父娘の様子に、ロジェリンは複雑な思いで指を食んだ。

「でも、フアランギスには勝って貰わないとねえ」

控えめに口を挟んでみれば、即座にラドキースからの言葉が返る。

「それは案ずるに及ばぬであろうよ、ロジェリン」

その言葉に、ロジェリンは満面の笑みと共に頷いた。

新たな対戦者達の名が呼び上げられると、一斉に観衆達の鼓舞の声上がる。広場を囲む観客の数は多い。その中をフアランギスは進み出た。方や前方から進み出て来た対戦相手の姿に、フアランギスは方眉を微かに上げた。ラドキース父娘が嘗て共に旅をしたという、あの金髪の男であったのだ。相手が剣を抜くのに合わせて、フアランギスもすらりと剣を抜く。そして、審判のかけ声に合わせて双方構えた。

## 第五章 再会と兆し（7）

多くの観客が見守る中、打ち合いは続いていた。賭け事に手を染める男達などは、目の色を変えて声を張り上げる。それらの声援を聞けば、どうやらフアランギスに賭ける者は少なく無いどころか、かなりに及ぶ模様であった。

フアランギスの剣が、激しく打って来る相手の剣を鋭く押し返した。数歩飛ぶ様に後退した金髪頭のユールスは、へへっと不敵に笑った。しかしその顔立ちには、何やら愛嬌がある。

「あんた、強えな」

「そこもとも、なかなかやるな」

「何の防具も付けて無いと見ると、よっぽど自信もあるんだろ  
うな？」

「さあ、どうかな」

剣を構えたまま、フアランギスはやりと口角を上げる。確かにある程度の自信はあった。しかし旅の途上、己の防具などに路銀を費やすくらいなら主従父娘に少しでも楽な旅をさせてやりたいというのがフアランギスの本音であった。

「前に、すんげえ腕の立つ奴に会った事があるんだけどさ、あんな、そいつの次くらいに強えかもな」

「ほう？ それは褒め言葉と受け取っても良いのか？」

「おうよ。最高の褒め言葉！」

「それは、痛み入る」

「でも、だからって俺様が負けるとは決まってねえけどなっ！」  
言い捨てるや、ユールスの足が地を蹴った。激しい打ち合いが再び始まる。

ラドキース達は、熱狂的に騒ぐ群集のそのやや後方から試合を見物していた。エルなどは、ラドキースに肩車されながら喰い入る様な目をして見入っている。

「やっとファランギスとともに打ち合えるのが出て来たよ」

「ああ。実際、あのユールスの腕は悪く無い」

ロジェリンの感嘆の声に、ラドキースは二人の剣さばきを目で追いながら答える。

「ファランギスの奴、大丈夫かな」

ロジェリンが心配そうに傍らのラドキースを見上げ尋ねれば、ラドキースは静かに頷いて見せた。

「それでも、ファランギスの剣の方が巧みだ。案ずる必要など無い」

「そう？ 若先生が言うんなら、そうなんだろうけど」  
試合へと戻されたラドキースの黒曜石の瞳には、何の憂えの色も無い。普段と変わらぬ静かで落ち着いた佇まいに、ロジェリンも肩の力を抜いた。エルはといえば、依然声も出さずに打ち合う剣の早い動きを夢中で追っている。

それから刃を交える事何合目かに、ユールスの剣が大きく跳ね上げられた。その瞬間、ファランギスの剣は信じ難い動きを見せた。まさしくそれは神速と呼べる程の早さであつたやもしれない。辛うじて片手は剣を離さなかったものの体勢を正す事もままならず、後ろへと倒れ込むユールスの胸を、その剣先は、方向を変えたかと思

う間も与えずに襲いかかったのだ。

一斉に息を呑む観衆のどよめきに続く沈黙。ファランギスの剣がユールスの胸を貫いたのだと、大概の者達がそう信じた。

「やだ．．．」

ロジェリンが弱々しく呟いた。エルも息を呑み込んだまま身体を堅くしていた。そして数瞬間の後に、二人揃って深々と息を吐き出し脱力していた。ファランギスの剣は、多くの人々の案に反しユールスの心の臓に埋まる事無く、その前でぴたりと揺るぎ無く留まっていた。

尻餅をついたまま蒼い目を見開き硬直していたユールスは、全身から嫌な汗が噴き出していた事にも、己が呼吸を止めていた事にも気付かぬ程であった。審判によって勝者の名が叫ばれ、一斉に沸き起こった喚声で、初めて我に返った。勝負はついていた。

「しっ、死ぬかと思った．．．」

何とも情け無い声が荒い呼吸と共に絞り出された。そんなユールスに、剣を引いたファランギスは手を差し伸べた。

「すまなかつたな」

「いや、いいんだって。へへへっ」

ユールスは、頭を掻きながら体裁悪そうに笑ってみせる。

「やつぱ、強えや。俺、こんな目にあつたのこれで二度目だぜ。本気で斬られるかと思った。心の臓に悪いぜ」

言いながら差し出された手を取り、ユールスは身軽に立ち上がった。

「あんたの試合幾つか観たけどさ、強えなあと思ってたんだ。あの剣の返し、普通じゃねえだろ!? あんたの剣で、そんなに軽いか? それともよっぽど肩や手首が強えのか?」

「さあな」

「なあ、さつき俺、すんげん腕の立つ奴に会った事があるって言つたろ？」

やたらに人懐こく話しかけて来る相手に、フアランギスは相槌を打ってやる。普段の彼ならば適当にあしらひ、さつさと逃げ出す処であるのだが、あのラドキースが一時でも旅の道連れにしたという人物に、少なからずの興味があつたのだ。

「あんたの剣使いは、ちよつとその人に似てた」

「そうか。どんなご仁だったのだ？ その腕の立つご仁というのは？」

「うん、それがなあ、子持ちの根無し草だったんだよなあ。ちっちゃなガキ連れた旅人だったんだ。でも、雰囲気は騎士然としてた。無法者とかそんなんじゃない。無く……」

「ほう」

「そのガキがな、又こまっしやくれてて、かわゆくてなあ。まだたったの六歳だったのに、既に母ちゃん亡くしててなあ。今頃、どうしてんのかなあ……。あの二人は、俺のいわば恩人ってやつなんだ」

「恩人？」

「ああ。あの時、あの二人に会わなかったら、俺はとんでもねえ無法者のまま、今頃はトツ捕まって首吊りの刑にでもあつてたかもしれねえんだ」

ユールスは、しみじみとそう語った。

大会は、結局フアランギスの宣言通りの結果に終わった。結構な賞金を手に入れたその翌日、一行はまだ日の出前の薄暗い中王都を

発った。

「あのユールスという者は、なかなか愛嬌のある人物でしたよ、殿下」

「ん？」

「人懐こいというのか、馴れ馴れしいというのか」

ラドキースと並んで歩きながら、ファランギスは昨日の対戦を思い起こしつつ口を開いた。

今朝はすっかりいつもの男装姿に戻った眠気まなこのロジェリンは、やはり少年姿に戻った眠気まなこのエルを抱えながら共にユクラテの背に乗りその手綱を握っていた。

「貴方と姫の事を話していましたよ」

ファランギスは言葉を続ける。

「ほう？」

「貴方と姫は、あの者にとって恩人なのだそうですよ」

「大げさな事を」

ラドキースは、懐かしそうに微笑んだ。

「私の剣使いが貴方のものに似ているとも。まあ、師が同じなんですから、そりゃあ似てはいるでしょうけれどね。それできつと貴方の事を私に話したのでしょうか」

「ねえ二人の師匠って、どんな人だったのさ？」

ロジェリンが興味津々な態で尋ねて来た。厳めしい表情の中の思慮深い眼差しが、ラドキースの脳裏を過った。

「そうだな．．．、厳しい人物だった。他人にも己自身にもな。

稽古となると相手が誰であろうと容赦は無かった」

ラドキースの言葉に、ファランギスも昔を想う。

「ふうん。よっぽどの使い手だったんだろうね？ 名のあるご仁

かい？」

「ウルゲイル・ワイズ・トールン、我らが祖国の名将と呼ばれた人物であつた」



「あ、五年戦争の折に若先生の補佐に立った將軍だね？」

「良く知っているな」

「うん、ファランギスに聞いたんだ」

「そうか」

エデワの町を出てから間も無くの間、ファランギスはエルとロジエリンにせがまれる度に、ユトレアの歴史や文化などを語ってやっていた。そして中でも彼女達がそろって興味を示したのが五年戦争の話であった為、ファランギスも、その件を寝物語代わりに語ってやったのだ。今ではエルもロジエリンも、その辺りの歴史は事細かに知っている。

「子供の時分には、よく叱られたものでしたね、貴方も私も。將軍は、相手が一国の皇太子だろうが何だろうが、全く容赦無かったからなあ」

懐かしそうに昔話へと誘う乳兄弟の言葉は、ラドキースに幼かった日々を思い起こさせた。

「そんなに怖かったの？ そのお師匠様」

父とその乳兄弟の興味深い思い出話に、眠気も吹き飛んだらしいエルは、瞳を丸くしている。

「ええ、怖かったですも。將軍の小言の後には、決まってきた仕置が待っていましたから、ねえ殿下」

「全く、幾度お前のとばっちりを受けて共に叱られた事か」

「また、そんな事を。同罪だったでしょう？ 私が実行した事柄は、大抵において貴方の作戦だったわけですから」

恨めし気な瞳のラドキースに、ファランギスが目を見開いて抗議する。

「私のその作戦とやらを、実行しろと言わぬ間にお前はいつも実行に移していなかったか？」

「いや、それは・・・」

「ちよっと待った。作戦で何だい？ 稽古で叱られたんじゃない

のかい？」

ロジェリンが不思議そうに尋ねれば、ラドキースは思わず声をたてて笑った。

「稽古でも叱られたがな、大半は悪戯が露顕しての事だ。しかも尻尾を出すのは、決まってこのフアランギスだったのだ」

「まあまあ殿下、細かい事は気になさらずに、もう三十年も昔の事なんですから」

体裁悪気なフアランギスの様子に、他の三人が揃って楽し気な笑い声をたてた。

朝日が射して来たかという頃合いに、トラジエクからウォーデン王国へと続く街道を、ぶらぶらと南下して行く一人の旅人の姿があった。何やら不貞腐れたかの様子で、時折ぶつくさと毒突き、道端の小石を蹴り転がしながら歩いていた。

「ちえっ！　たく、ついてねえなあ。武闘会に勝つてりやあなあ。今頃は、あの賞金で馬の一頭でも手に入れて、夜は宿場町で可愛い姉ちゃんの胸でも枕にして寝れたのによう」

旅人は、そこでがっくりと肩を落として大仰な溜息を洩らした。

「文無しは辛いぜ．．．。今日のメシにも事欠く様だぜ、と．．．。おっ？」

突然、目を見開いた旅人は、道端の木々へ向かって駆け出した。

「おおっ！」

木々を見上げた旅人は、蒼い瞳を輝かせながら歓喜の声を上げた。葉の落ちかけた木々には、赤い果実が申し訳程度になっていたのだ。

「やったぜ！　食いもんだぜ！」

低い枝の実は、恐らく狩られてしまったのであろう。また鳥達に啄まれたのであろう、その名残が枝の処どころで干涸びている。陽

の光を避ける様に額に手をあて高い位置に僅かに残った果実を見上げていた旅人は、背の僅かな荷を降ろすや、掌につばを吐きかけこすりつけると、いとも身軽に木に這い上がって赤く熟れた実に手を伸ばした。

「お、うめえ！」

齧<sup>かぶ</sup>り付いた果実の瑞々しい甘さに旅人は大喜びで、あつという間に三つ程を平らげた。四つ目に手を伸ばそうとした時、街道を南下してくる一行のある事に気付いた。大柄な男二人に騎乗の人物の組み合わせであった。目を凝らせば、どうやら馬は二人の人物を乗せており、一人は子供の様である。

「子連れか．．．」

旅人は、四つ目の果実を頬張りながら、こちらへと向かって来る一行に興味も無げな目を向けていた。しかし、その一行が近付いて来るにつれ、旅人の瞳が除々に見開かれて行つた。いつの間にか食べる手が止まり、齧りかけの果実が手から落ちた。その一行の中の一人の姿をはつきりと認めた時、旅人は素っ頓狂な叫びを上げていた。

## 第五章 再会と兆し（8）

「ラディッ!? あんた、ラディじゃねえかつ!!」

ラドキース一行の和やかな笑い声を遮った突然の叫び声に、一行は思わず足を止めた。ラドキースはその口元に苦笑を浮かべた。何者かなど、改めて誰何するまでも無かった。その次の瞬間、行く手の木々の高みからひらりと細身の人影が飛び降りた。朝日に照らされ、その金色の髪が白く瞬いた。

「お魚のおじちゃんっ!」

ファランギスとロジェリンが口を開くよりも早く、エルが満面の笑みと共に叫べば、“お魚のおじちゃん” こと、金髪頭のユールスも又、満面の笑みと共に再び素っ頓狂な叫びを上げていた。

「お前、エルかつ!? あの小生意気な俺のお姫ちゃんかつ!? でっかくなつたなあ」

「もう十歳だもん! それに私は、おじちゃんのお姫様じゃなくって、父様のお姫様なのっ!」

ロジェリンの止める間も無く、エルはユクラテからトンッと飛び降りると、ユールスの元へ駆け寄っていた。

「なあに相変わらず乳臭い事言っただあ? 父ちゃんなんかと結婚出来ねえんだぞ、嬢ちゃん」

大喜びではしゃぐユールスは、相変わらずの軽々しさである。

「父様は、“とうちゃん” じゃなくて “と・う・さ・ま”」

！ 私は、“嬢ちゃん” じゃなくて “エ・ル” ！

「はいはい。ちなみに俺様は、“おじちゃん” じゃなくて、“ユールス” だつつうのっ！」

二人は、顔を付き合わせながら、そんな昔同様のやり取りをしながら、嬉しそうに笑い声を上げる。そんな二人の様子にロジェリンは呆氣にとられながらも馬を降り、やはり呆氣にとられているらしきフアランギスと目を見合わせた。

「久しいな、ユールス。達者であつたか？」

「おうよっ！ 達者も達者！ こんな処でエルとあんたに会えるとは思わなかつたぜ、ラデイ！ しかも何だあ！？ 昨日俺が負けちまつた奴までいるじゃねえの。あんたの知り合いだったのか？」

「まあな」

ラドキースが答えてやると、フアランギスの姿に目を丸くしていたユールスは途端に脱力した。

「強えわけだぜ。何となく納得。お陰で俺は、賞金取り損ねてすっからかん」

「それは気の毒だったな」

「ああ、いいの、いいの。しょうがねえ、俺が弱かつたんだから。それよか、あの乳でけえ美人な姉ちゃんもお仲間なのか？」

ユールスの言葉に、ロジェリンは弾かれた様に己の胸を両手で隠し、見る見る内に顔を真っ赤に染めて目を見開いた。あけすけなユールスの物言いに、ラドキースは小さな溜息を吐いた。

「そういつた婦人を辱める様な言動は控えぬか、ユールス」

「そうだ、そうだーっ！ おじちゃんのえっちい！」

父親の隣で、エルも少女らしい抗議の声を上げた。

「辱めるう？ 冗談っ！ 最高の褒め言葉だぜえ、今のはよお」

ユールスは心外とばかりに反論するや、ああっ！ と叫び、意味ありげな笑いと共にラドキースを指差す。

「ひよっとしてあんたの新しいかみさんか？ 良く見付けたな、

あんないい女<sup>スケ</sup>。うらやましいぜ、このっ」

「残念ながら、そういうわけでは無い」

ユールスに肘で突つかれながら、ラドキースは再び苦笑を浮かべる。

「え？　じゃあ俺に勝ったあんたのかみさんか？」

ラドキース父娘から数歩離れた処に立っていたフアランギスは、尋ねられ首を横に振る。

「えっ、まじかよ！？　なら俺が口説いてもいいか？」

ユールスの軟派な言動に、とうとう堪忍袋の緒が切れたらしいロジェリンが、ずかずかと進み出て荒々しくユールスの胸ぐらを掴んだ。

「若先生、こいつを一発殴らせてくれ」

「おいおい、何だよ、暴力反対！　エルの教育上、良くねえぞ」

「貴様の方が、余程良く無いだろうが！」

ロジェリンは怒り心頭に発したらしく、低く抑えられた声音は騎士の口調に変わっていた。気圧されたユールスは降参のつもりでもあるのか、両手を上げ愛想笑いを浮かべている。ロジェリンの怒りの表情は、その美貌だけに中々に迫力があるのだ。

「何とかしてくれよ、ラディ」

「さて、どうしたものかな、エル？」

久々に再会したユールスに気弱な声で縋られたラドキースが、静かな笑顔を娘に向けると娘は、「うゝん」と愛らしいうなり声を洩らした。

「おじちゃんは、ロジェリンに謝らなくちゃいけません！」

「分かった、分かった。悪かった、俺が悪かったって。だから暴力反対！　なっ、なっ」

ユールスは即座に謝るも、笑いを浮かべたその表情が軟派な事は否めない。ロジェリンは忌々し気な溜息を吐きながら腕を緩めた。

「何だってこんな軽々しいのと知り合いなんだい！？　若先生とエルは」

言葉遣いは戻ったものの、腹立ちの収まろう筈もないロジェリンはぶつくさと毒突いた。

「同感だな・・・」

ロジェリンの憤慨の言葉に、ファランギスは人知れずぽつりと呟いた。

「なあなあ、“若先生” って、一体何の先生様だよ、ラディ？」  
ロジェリンの怒りなど、数瞬の後には忘れ去ったかの様に、ユールスは興味津々な瞳をラドキースへと向けていた。

「剣だ」

エルの手を取りながら歩いていたラドキースは、短く答えた。

「へえ〜。成る程なあ。あんた、すげえ強かったもんな」

ユールスは大仰すぎる程の態で納得して見せると、へへツと笑って少し遠い目をする。恐らく、出会った時の事を思い起こしたのであろう。

一行は、立ち話も何だからと街道を共に南下していた。どちらにしろ、行く方向は同じである。ならば時を無駄に使う術も無い。もう、この時期ともなると日も大分短いのだ。

「ユールスよ。お前は漁師にはならなかったのか？」

エルが気にしてい疑問を、ラドキースが口にした。

「へ？ なったぜ」

「なつたの!？」

エルが問い返した。

「おお、なつたよ、エルに言われた通り。それも、ちつちえ〜川でちまちま摂るんじゃないかってよ、船で海に出てな、でつけえ網をばつと投げて、いっぺんに山程魚を捕る漁師になったんだぜ、俺様はよっ!」

「海に行つたの？」

まだ一度も海を見た事の無いエルは、瞳を輝かせた。

「行つた、行つた！ 海を見た事あるか、エル？」

少女は首を横に振る。海に面するアルメーレ公国にいた時も、結局、海沿いまで出掛けた事は一度も無かつたのである。

「でっけえぞ、海は。感動する位、でっけえぞ。お前に見せてやりてえなあ、エル。あんたもねえのか？ ラディ？」

「昔、幾度か見た」

「そつか。でっかくて、あんたも感動しただろう？」

「ああ」

ラドキースは、微笑み首肯する。

「懐かしいな、ファランギス」

振り返る主君に、背後でユクラテを引きながら歩いていたファランギスも、微笑み「そうですね」と、相槌を打った。

ラドキースが、生まれて初めて海を見た時、この乳兄弟も共にいた。二人がまだ、エルよりも大分幼かつた日の事である。二人ともあまりの水の量と、その止まる事無く引いては寄せる波の動きに目を見張り、駆け寄り逃げ惑つては、はしゃいだものであつた。ファランギスの一族、エトラ・ファーガス家の領土であつたユトレア南岸、ファーガスの地を訪れた時の事であつた。その地も今では、ハーグシュの領土となっている。



## 第五章 再会と兆し（9）

「それにしても、漁師になったお前が何故なにゆえ今時分内陸にいる？  
ズウォルデに住み着いたのではなかったのか？ ユールス」

「うん、そうなんだけどさ。漁師は暫く休業したんだ」

ユールスはけろつとした表情で答えるも次の瞬間には意味ありげににやりと笑い、さも重大な秘密でも打ち明けるかの態でエルの中越しにラドキースへと身を寄せて来た。

「何せ、あの黒將軍がいよいよ立ち上がるって貴重な情報を手に入れたんでな」

その瞬間、背後を歩いていたファランギスの榛色の瞳には、嶮しい色が浮かんで消えた。

「黒將軍が立ち上がる？」

尋ね返すラドキースの表情には、別段これといった変化も無い。

「そうよっ！ 西から来た商人に聞いたんだ。ユトレアの残党が動き出してるらしいって。黒將軍がいよいよ立ち上がるに違い無いってな。だから出て来たんだ。剣と無縁な生活もいって思ってた漁師になったけどさ、黒將軍が立ち上がるとなりやあ話は別だ。俺は、もう一度あの人の元で戦ってみてえ」

「単なる噂では無いのか？」

「そんな事ねえって！ 黒將軍は、きつと立ち上がるさ。あの人が、今のユトレアを見放すわけねえ。今のユトレアは酷い有様だっ  
て言うじゃねえの。スラグじゃあ、ユトレア人達を完全に奴隷扱いしてるって聞いたぜ。知ってるか？ スラグ領のユトレア人達は皆、

手の甲に奴隷の刻印を押されてんだ。基本的な人権さえ与えられてねえ。それに黒將軍の妹姫が捕われてる。哀れな姫君は、うら若い時分から以来、あのくそつたれ国王の妾にされてるって話だぞ。あの人が、そんな仕打ちをほっとく筈ねえ。このまま大人しく隠れてる筈ねえって」

力説してみせるユールスに一瞥をくれる事も無く、ラドキースはただ無言のまま歩を進めた。その件はファランギスに聞かされていた。スラグ王国のユトレア国民に対する扱いは、目に余るものがある。ユトレア分割後スラグ領に留まっていたユトレアの民達は、当然の如く私財は没収され使役に駆り出された。逃げ出す者は、捕えられ次第処刑されるだけならまだしも、その家族ないし親しくしていた人物までもが処刑の憂き目へと追いやられた。ラドキースは、密やかに苦悩の溜息を洩らす。

「おじちゃんは、どうして “黒將軍” と一緒に戦いたいの？」  
不意に、エルが無邪気な表情でユールスに尋ねた。その問いにユールスは満面の笑みと共に膝を打った。

「よくぞ聞いてくれましたっ！」

「そんなに聞いて欲しかったの？」

「まあまああ」

ユールスは、両掌を地に向け軽く上下させながら少女を宥める。

「聞きてえんだろ、エル？ 大人しく聞けって。あのな黒將軍つつうのはな、將軍の中の將軍なんだ。お子ちゃまなエルは知らねえだろうけどな、黒將軍は大陸一の軍略家なんだぜ。お前が生まれる前に、西じゃあ大きな戦が起こったんだけどな、あの人がユトレアの総大將になって軍を率いた時、まだたったの十七歳だったんだ、エル。十七で、軍師もおったまげる様な知略を発揮したんだ。こいつあ、すげえ事なんだぜ？」

ユールスの話に、エルは溜息に似た感嘆の声を洩らした。だが俄に引き締められたユールスの表情に、エルもつられて表情を改めた。

「それに、あの人は人格者だ。一国の王たるにそりゃあ相應しい人だ」

そのユールスの真剣な表情に、短い沈黙が流れる。

「まるで、“黒將軍”を良く知っているような口振りだな、ユールス」

暫しの後に、呆れとも自嘲的とも取れる笑みを口元に上せたラドキースが口を開くと、ユールスもぱつと顔を上げた。

「そりゃあ俺様は五年戦争の時、黒將軍の元で戦ったからな」  
ユールスは、得意気に胸を張った。

「って、あんたユトレア人なのかい？」

先程の怒りを、ようやく納めたのか、ロジェリンが驚き尋ねた。

「うんにゃ違うけど」

「なあんだ、じゃあ傭兵か？」

「悪かったな傭兵で」

肩を竦めるユールスに、ロジェリンは、ぷいとそっぽを向く。

「別に。でも雇われ兵だったあんたが、黒將軍の姿を拝める機会なんてあったのかい？」

「それが、あったんだよなあ。しかも目の前で！」

益々得意気に胸を反らせるユールスに、ロジェリンは冷たい視線を向ける。

「へえ〜？　じゃ、どんな顔してたんだい？」

「黒い眼だったぜ」

「それから？」

「でつかかったぜ。あ、つうか、俺もまだ成長途中の十五のガキだったから、でかく見えたんだろうな」

「あのねえ．．．、あたしは顔を聞いてるんだよ」

ロジェリンは呆れたとばかりに、荒々しい溜息を吐く。

「どんな顔って聞かれても、戦場いくさばだぜ。分かるわけねえじゃん。

甲冑姿だったんだからさ。眼しか見えねえつつうの」

「何だい、顔も見えてないのに知ったかぶってんのかい？」

「うるせえやい。あの黒眼を拝んだっただけで充分だろうか？  
しかも俺様は、お声まで頂戴したんだぞ！」

「へええゝ、どんな？」

「その眼、信じてねえだろ？」

疑いの白い眼差しを微塵も隠そうとしないロジェリンに、ユールスは慥然とする。

「信じるわけ無いだろうが、あんたの話なんか、このドスケベっ  
！」

「まだ怒ってんのか？ あれは褒め言葉だったのに・・・」

「それで、どのように声をかけられたのだ？ ユールス」

ラドキースが、二人の険悪になりつつあったやり取りを遮った。  
途端にユールスの表情が緩む。

「さすがラディだぜっ！ あんたは信じてくれるだろ？ 俺の話  
！」

「いささか興味はある」

「だろ？ だろ？」

さり気なく問いを躲されながらも、ユールスの方はてんで気にも  
留めずに語り始める。

「あれは、ハーグシュ王都が落ちるちょっと前の事だ。黒將軍の  
本隊と、俺のいた隊が合流した事があったんだ。俺は黒將軍が馬で  
通るのを眼の前で見たんだぜ。その時なんだ。黒將軍が、急に俺の  
傍で馬を止めて話しかけて来たんだ。俺は、あの時の黒將軍の言葉を  
一言一句覚えてる。何て言ったか聞きたいか？」

「何と言ったのだ？」

ユールスは、へへつと照れ笑いを零すと、わざとらしく厳めしい  
表情を作って見せた。

「そなた、歳は幾つだ？」 って、聞かれたんだ」

ユールスは、黒將軍の口調を真似ているつもりなのであろう、厳  
かに言葉を続ける。

「傷は痛むか？ 無理はするな」・・・って、俺、そんな時

ちょこつと手負いだっただよな。その前の戦役で、ちょこつとやられちまってさ。で、俺は、こんなの大した事ねえって答えたんだ。そうしたら黒將軍は、“そうか、ならば良い。そなた、その歳で死ぬなよ” って、お言葉を下されたのさあ。すげえだろ!?”

ユールスの嬉しそうな声を複雑な思いで聞いていたラドキースの脳裏に、荒くれた傭兵達の間立つてこちらを見上げていた、あどけない少年の姿が甦った。申し分程度の武具をしか付けておらず、頭には血の滲む包帯を巻き付けていた。何故こんな子供がと、思わず足を止めたのだ。顔立ちも髪の色も、何も記憶には残っていない。ただ大柄な傭兵達の中で一人だけ、ひよろりと細く頼り無げな印象であつた事だけが思い起こされた。

「なあ、あんたは信じてくれるだろ? ラデイ?」

「ああ、信じよう」

ラドキースは、頷いた。

「なあ、考えてみりゃ、あんたも黒眼黒髪なんだよな」

「別段、珍しくも無かろう?」

「まあ、この辺りじゃなあ。でも西じゃあ結構珍しいんだぜ。何でも、黒將軍のお袋さんが内陸の出だったらしい」

そこでユールスは、俄に口を噤んだ。何かを考えるかの様な態度でラドキースをじっと見詰めたかと思うと、背後で聞いていたファラングスがひやりとする様な事を口走った。

「あんた、何か、黒將軍みてえだな」

「彼の顔を知らぬのに、何故そう思えるのだ?」

ラドキースが一笑にふせば、ユールスも笑いながら頭を掻いた。  
「そうだよな。大体、天下の黒將軍が子持ちの根無し草なんて、あんまりだよなあ」

秋晴れの空に、ユールスの陽気な笑い声が響き渡っていった。

その後ユールスは、ラドキース一行と共に街道を進み、日暮れ頃に辿り着いた町の城門の前で一行と別れた。

「俺様、路銀稼ぎそこなつちたからな、くそ真面目に通行税なんか払ってらんねえの。今夜は路銀稼ぎしなくっちゃだぜ。じゃあな」

陽気に笑いながら軽く手を振り、行ってしまった。誰も別段別れの言葉などは口にしなかった。近々、再び顔を合わせる事が容易に予想出来たからである。

ユールスは、大陸南部に位置するイスヴァイクのワージェニン自由市へ行くのだと言う。そこでなら、きっと欲しい情報が手に入る筈だと言う。

「いささか厄介ですね」

ファランギスは、ラドキースに洩らした。何故なら、ラドキース一行が向かう先もワージェニン自由市であつたからである。目的地が同じとなれば、嫌でも同じ行路を取る事になるだろう。黒將軍に心酔している模様ではあつたが、信用に足る者がどうかは分からない。敵の者で無いとは言いきれないと、ファランギスは主張した。現に彼は、ユトレアとは長年にわたり敵対していたスラグ王国の出身である。

ファランギスは、今朝方ユールスがぼつりと洩らした言葉を思い起こした。

『あんた、何か、黒將軍みてえだな』

主君の正体が人知れる処となるのは、当然の如く得策では無いとファランギスは考える。それ故にユールスの鋭い勘を、ファランギ

スは怖れた。

「いざという時は・・・」

つぶやくフランギスの左手は、腰の得物に置かれていた。

## 第五章 再会と兆し（10）

その夜、ユールスはこっそりと城壁を超えて町へと潜り込む事に成功すると、賭博場へと足を運んだ。この男にも、こんな真剣な表情が作れるのかと思わせる程、真剣な面持ちで得意のカードゲームに挑んでいた。一文無しでここへやって来たユールスは、勝負に負ければ剣を失う。真剣にもなろうというものであった。碌な路銀稼ぎの方法では無いが、追い剥ぎなどを働くよりも何万百倍も正しい方法だと、本人は至って真面目に考えている。そして大抵の場合、ユールスは賭け事に強かった。その晩も、命の次に大切な剣を失う事も無くほどほどに儲けると、後は大人しくその場を後にして飲み屋へと足を向けた。幸運の女神が傍らで微笑んでいる晩であろうとも、賭博場でのユールスは度を過ぐす事は無い。調子に乗って儲け過ぎれば、当然厄介事が伴って来るものなのだ。

古びたカウンターに座り強いエールを注文すると、傍らから先客が声をかけて来た。そのなりからして同業者であろうと内心想いながら、ユールスは愛想良く言葉を交わす。

「凡そ騎士には見えないが」

男は、ユールスのマントの下から覗く革製の胴衣と腰の剣をちらりと見て尋ねた。

「あんたも騎士様には見えねえな」

「同業か？」

「の様だな」



二人は意気投合し、杯を軽く上げて乾杯する。

職を求めて旅をする傭兵稼業の者は多い。一言に傭兵とは言えど、ユールスの様な一匹狼な傭兵もいれば、騎士団を引き連れ傭兵稼業に出掛ける貧乏領主などもいる。そして職を求めて旅をする傭兵というのは、個人で動いている者達である。そういった者達は、同業者に出会って、互いに情報交換をするのが常であった。

「求職中かい？」

「まあな。あんたもか？」

「ああ」

相手はにやりと笑う。

「最近、西がきな臭いからな。隊商か何かの用心棒でもしながら、あの辺りへ行ってみようと思ってるんだが、」

「へえ。俺も西に行こうと思ってんだ。旧ユトレアの残党が動き出してるって噂を聞いたんでな」

「ユトレアか。どうだろうな？ それよりも先にスラグとハーグシュがドンパチ起こしそうだけだな」

そう言う男は、エールをぐびりと喉に流し込んだ。

「ユトレアって言いやあ、あの黒將軍は、レワルデンに潜ってた事があつたらしいな」

「えっ、そうなのか？」

「ああ。ハーグシュ王女は、レワルデンで死んだはずだ。何年か前にハーグシュが、王女の遺骸を掘り返して国に連れ帰ったって噂を聞いた事がある」

「レワルデンの、何処にいたんだ！？」

ユールスは、好奇心に蒼い目を輝かせた。

「王都から大分離れた何処その僻地だとは聞いたが、具体的には分からんな。聞いた処によると、その村だか町だかで学問やら剣やらを教えていたらしい。それに娘がいるって噂は、ありやあどうや

ら間違い無いらしいぜ。ハーグシュ王女との間の子だって話だ。ハーグシュは血眼だろうよ。何せユトレアとハーグシュの直系の姫君だ」

その言葉にユールスは突如、無性にむずがゆい様なもどかしい思いに襲われた。まるでバラバラに引き裂かれ散らばった絵画の破片を一つ一つ拾い集めてゆく様に、ユールスは記憶の破片を組み合わせてゆく。すると、脳裏に今朝方再会を大喜びした、あのこまっしやくれた愛らしい少女の笑顔が浮かんだ。

「その姫君って、幾つくらいなんだ？」

「十歳かそこらだ。ええと、何て名前だったかな？ エリだったかエレンだったか、えらく簡単な名前だったんだよな。まあ本名じゃないんだろうが、きっと。おい、怖い顔してどうしたんだ？」

顔を覗き込まれ、ユールスははつとする。

「あ、いや別に。んで、黒將軍の方は何て名乗ってたんだ？ まさか本名じゃないだろ？」

ユールスの様子に何の不審も抱かなかった男は、すんなりとその問いに答えた。

翌朝の空は暗く、霧の様な雨が舞っていた。宿を一番に飛び出したエルは、どんよりと沈んでいる空を仰ぎ見た。

「お天気悪いね、ロジェリン」

「本降りにならなきゃ良いけどね・・・」

エルに続いて宿を出口ジェリンは、心配そうに空の厚い雲を見上げると、何が楽しいのか霧雨を顔に浴びてはしゃぐエルの頭にマントのフードを被せてやった。その後から出て来たラドキースは、不運な空模様を一瞥すると、何も言わずにただ片眉を上げた。そこへフランギスがユクラテの手綱を引きながら現れ、一行は出立した。

エルはロジェリンと手を繋ぎながら、しきりと辺りを見回していた。

「どうしたんだい？ エル、さっきからきよろきよろして」

「えっ？ ええと．．．」

ロジェリンに尋ねられ、エルは口ごもった。落ち着かない娘の様子にとくに気付いていたラドキースは、微笑みを浮かべた。

「ユールスを探しているのか？」

父親に尋ねられ、エルはおずおずと頷いた。

「お前は、ユールスを気に入っただな」

「ええっ！？ あのスケベ野郎をかい？ エル！？」

過剰に反応したロジェリンが眼を見開い憤慨し出す。昨日の事を思い出したのであろう。

「あんなろくで無しは、忘れな、エル。あれは女の敵だよ」

「でも、お魚のおじちゃんは、そんなに悪い人じゃないよ、ロジェリン。初めは、ちょっと悪い人だったけど、でも、もう悪い人じゃないよ」

「初めは、悪かったって、何だいそれ？」

「ええとね、追い剥ぎだったんだけど、もうしないって誓ったの」

「何だつてえゝ！？ 追い剥ぎゝ！？」

ロジェリンの剣幕に、後ずさり口ごもりながらも、ユールスを庇おうとするエルは健気であった。

「追い剥ぎ．．．ですか？」

エルの言葉にフアランギスがラドキースへと眼を向ければ、ラドキースは苦笑を浮かべながら肯定した。

「何と．．．．．」

フアランギスは言葉に詰まる。主君父子が、一時でも追い剥ぎ風情と共に旅をしていた事を知り啞然とする。

「怒るなよ、フアランギス」

「呆れて、怒る気も起きません、殿下」

笑いを零す主君を尻目に、ファランギスは眉間に皺を寄せながら溜息を吐いた。

「貴方を置い剥ごうとしたんですか？ あの者は」

「ああ」

「無謀な事を．．．。それが何故にまた、共に旅などを？」

「成り行き上だな」

「お心が広いのにも限度つてものがあるでしょう？」

「私の心が広いなどと、本気で思っているわけでもあるまい？」

ユールスは、あの様な事は二度とせぬと剣に誓ったのだ

「剣の誓いなど、簡単に破るならず者も中にはおりましよう」

「剣の誓いを破る者は、剣の制裁を受けても文句は言えぬ。違うか？」

さらりと、そんな剣呑な事を口にする主君の腕を知るファランギスは、それ以上の諫言を躊躇する。

「まあ、仰る通りですが．．．」

「心根は、そう悪い者では無い。エルもあの通り懐いた」

「やれやれ、貴方の人を見る眼の確かな事は、私も信用していますよ、殿下。おまけに貴方の心は広いと、私は本気で思っていますよ」

「気のせいかな、褒め言葉に聞こえないのだが」

「ええ、褒め言葉ではありませんから．．．。って、笑い事じゃありませんよ、殿下」

ファランギスの皮肉をラドキースは軽く笑って受け流した。

城門を後にしてからどれ程の距離を経た頃であつたか、依然厚い雲に覆われた空からは、さらさらと細かな雨が降り注いでいた。その行く手の木の根元に、所在無げに座り込む人影があつた。

「あつ、お魚のおじちゃん！」

逸早く歓喜の声を上げて駆け寄つたのはエルであつた。

「よつ、俺のお姫ちゃん。元気にしてたか？」

「うん。って、昨日会ったばかりだよ、変なおじちゃん」

そう言いながら、エルは嬉しそうにくすぐすと笑う。ラドキース達が近付くと、ユールスは腰を上げ立ち上がった。

「昨晚は路銀を稼げたか、ユールス？」

「まあな」

ラドキースの微笑に、ユールスは戸惑いがちな笑みを返す。明らかに今朝のユールスは様子が異なった。ラドキースは訝しむ。

「どうしたのだ？ 元気が無い様だが．．．？ お前らしく無いな」

「うん、おじちゃんらしく無い。どこか痛いの？」

父娘は、揃って案ずる様な瞳を向けた。そんな瞳を向けられて、ユールスはへへへと力無く笑う。

「いや、そんな事無いさ。元気だよ、俺は。ただ、ちょっと吃驚しちまってさ．．．」

ラドキースの黒い瞳が心做しか細められた。

「何に吃驚したの？」

無邪気に尋ねるエルにユールスは、うん．．．その．．．などと口ごもる。だがやがておずおずと言葉を紡ぐ。

「あんたさ、ラディ。その、何て言うか、．．．人が悪いぜ」

ユールスは、俯きながら金髪頭をもどかし気に掻いた。そんな様子を、エルは不思議そうに見上げ、ラドキースは静かに見詰める。

彼等から数歩下がった処で、ファランギスとロジェリンが眼を見交わした。

「俺も、間が抜けてらあ」

「ユールス．．．」

「あんたが．．．、あんたが黒將軍なんだろ？ なあ、そうなんだろ？ ラディ？」

ユールスは、何かを吹っ切るかの様に顔を上げ、その問いをぶつけた。



## 第五章 再会と兆し（11）

「何を言い出すかと思えば」

ラドキースは溜息混じりに苦笑する。

「ごまかしたって無駄だね。もう、分かっちゃまったよ、俺．．．．  
。黒將軍に十歳頃の娘がいる事も、その娘の名前も、かみさん．  
．ハーグシュの王女がレワルデンで死んだ事も聞いた。俺が初めて  
あんたとエルに会ったのって、レワルデンから続いていた街道でだ  
ったよな。それに、あんた黒眼黒髪だし、黒將軍が名乗ってるらし  
い名前と同じだ。これが皆、偶然の一致にしちゃあ、あんた腕が立  
ち過ぎるよ」

ラドキースは、途中遮る事もせず無言で聞いていた。その傍らに  
ファランギスが並んだ。彼の心の内を悟ったのである。ユールスは、  
神妙な表情で口を開く。

「ラディとエルがここにいる事、俺は誰にも言っていないぜ。だか  
ら安心しろって。俺は二人が困る様な事はしねえ。何たって恩人だ  
からな」

ユールスは、ファランギスに向かって肩を竦めて見せると、再び  
表情の読み難いラドキースへと眼を向ける。エルは不安そうな表情  
で父親のマントを掴んでいた。霧雨は、緩やかな雨脚となっていた。

「俺は、面と向かってあんたの事をべた褒めしてたわけだよな。  
ったく、こっぴどくしなかったら無いぜ。人が悪いかったら無いよ、あ  
んたは」

拗ねた表情のユールスは、どうやら照れているらしかった。照れ隠しなのであろう、雨に濡れるに任せていた頭を再び無造作に掻く。一言も発さぬままユールスを見詰めていたラドキースが、やがて瞳を伏せた。

「すまぬ．．．」

静かな詫びの言葉が、その口から零れた。主君の詫びの言葉にフアランギスは内心驚き、その横顔へと視線を走らせた。

「わざわざ人に告げる事でも無かった故な」

そう言つてラドキースは、不安そうに縋り付いていた娘を見下ろし小さな肩を抱く。

「だが、こつぱずかしいのは、何もお前だけでは無い。あの様到手放して褒められた方だつて同じだ。しかも私は、お前に称讃されるに値する人間では無いというのに、ユールス」

「あんたは、称讃に値するよ、ラデイー!!」

ユールスは、酷く真剣な表情で叫んだ。

「あ、いや．．．、ラドキース殿下」

しかし、次の瞬間には気弱な表情でラドキースの名を言い直すユールスに、ラドキースは小さな笑いを零す。

「ラデイで良いぞ」

「ラデイ．．．」

呟くユールスにラドキースは小さく頷く。そして何かを思い起こすかの様に、ふと遠い瞳をした。

「あの時．．．」

黒曜石の瞳は、眼の前のユールスに向けられてはいたが、その実ラドキースは彼を見てはいない。

「大柄な兵達に囲まれ立っていた、手負いの細く頼り無げな兵士に気付いて思わず馬を止めた」

「あ．．．」

「あの時のお前は、すまぬが十五には見えなかった。酷く幼く見えただけでな、何故この様な子供がと、思わず馬を止めたのだ」



「覚えて．．．」

驚きに眼を見開くユールスに、ラドキースは言葉を続ける。

「あのお前のお前の顔立ちは記憶に残ってはいないが、あのお前が頭に巻いていた包帯に滲む血の色は、今でも覚えている。生き延びていたのだな」

感慨深げに瞳を細めたラドキースに、ユールスは数度首を縦に振り、拳で己の胸を叩いて見せた。

「おう、この通りよ。十四で故郷を捨ててから、幾度か殺されかけたりしたけどよ、この通りまだ生きてる。俺は、運も強けりゃ、生命力も強いぜ。だから頼む！　一緒に連れてってくれ。元々、あんなの元で戦いたくて旅に出た。ここであなたに逢えたのも、神の導きってやつに違いない。俺を家来にしてくれ、頼むっ！」

言うやユールスは、雨に泥濘む地に勢い良く跪き頭を下げた。ユクラテの手綱を握りながら様子を伺っていたロジェリンは、その姿に嘗ての己の姿を重ねた。

「すまぬが、私は、お前に何の約束もしてはやれないのだ、ユールス」

「かまうもんか。俺があなたに付いて行きたいんだ、ラディ！　それじゃ、だめか？」

ユールスは、揺るがぬ意志の宿った瞳でラドキースを見上げた。

「四年前、あの街道で別れてから今まで、俺はあなたとエルを忘れた事が無かった。俺、あなたが黒將軍その人で嬉しいよ。あの時は、別れちまつたけど、今度は付いて行きたい。あなたが何て言うとか、俺はとことんあなたに付いて行きたいんだ」

「そうか．．．」

ラドキースは視線を落しながら呟く様に言った。期待の隠った瞳で見上げていた娘は、父親の満たされた表情に、にこりと笑顔を見せる。その娘の柔らかな髪を撫でてやると、ラドキースは再びユールスへと眼を向けた。

「ならば根無し草同士、共に来るが良い」

その言葉にユールスは、ぱつと破顔し、ラドキースからエルへ、そして又ラドキースへとその笑顔を向けた。

「お待ち下さい」

その成り行きに堪り兼ねたフアランギスは、鋭い声と共に突如その間に割って入った。

「この者をお連れになると仰るなら、条件があります」

「何だ？」

ラドキースの問いに、厳しい表情のフアランギスは軽く頭を下げると、跪いたままのユールスを振り返る。

「剣に忠誠を誓え、ユールス殿とやら。さもなくば、私は納得致しかねる」

「誓うとも！ 当たり前だ！」

不満も露なフアランギスに即座に言い返したユールスは、そのまま腰の剣を引き抜くと、剣先を泣き続ける灰色の天空へと向けたまま、左胸の前に構えた。

「俺は、我が剣と我が名にかけて、貴方とエルに生涯の忠誠を誓う！」

その強く一途な瞳に、フアランギスも最早何も言わなかった。否、釘を刺そうと口を開きかけたのだが、微かな溜息と共に取りあえずは思い止まったのだ。

ラドキースは娘の身を離すと、彼もまた腰の剣を引き抜き左胸の前に構えた。剣先は天空、誓いの構えである。ユールスは碧眼を見開き啞然とした。

「私も誓おう。ロジェリン、お前にもだ」

軽く振り返ったラドキースの思わぬ言葉に、ロジェリンも驚く。

「私は、お前達に何の約束もしてはやれぬが、だが、お前達の身の上には責任を持つと誓おう。友として、お前達を裏切らぬと、この剣と名にかけて誓おう」

優しく降り注ぐ雨の中で、自然とロジェリンも跪いた。頬を濡ら

す水滴が雨によるものか、それとも心打たれた為に流れ出した涙であつたのかは、分からなかった。

「エルは、ホントにお姫様だったんだよなあ。俺様は、エルの騎士になったんだから、エルは真正正銘、俺のお姫様ってわけだよな」  
ユールスが上機嫌で言えば、エルは首を傾げ唇を少し突き出した。  
「私、おじちゃんのお姫様なの？」

「何だよ、不満そうだな」

「そんな事ないけど・・・」

「ならいいけどな。ところで、いい加減 “おじちゃん” は止めような、エル。俺様には “ユールス” ってえ、れっきとした名前があるんだからな。いい加減覚えような。もう十歳なんだからな」

「うん、分かった！ お魚のユールス！」

「お魚は付けないでいいっての、ったく」

自称騎士と小さな姫君は、四年前と同じ様なやり取りを繰り返している。

「不満か？」

ラドキースは、傍らを歩く乳兄弟に尋ねた。

「いいえ。取りあえず、剣に誓ったのですから良しとしましょう。」

“剣の誓いを破る者は、剣の制裁を受けても文句は言えぬ” わけですから」

「思いつきり不満そうなんだけど」

フアランギスが横目に睨むと、ロジェリンは素知らぬ顔でそっぽを向いた。

「僅かでも怪しい素振りを見せれば、私はあのスラグ人を斬りま

す、殿下」

そんな剣呑な言葉を口にしながら、しかしフランギスは思い惑うかの様な溜息を洩らす。

「ですが正直な処、あの者を信じてやりたい気持ちも無きにしも非ずです」

「そうか」

前を行くエルとユールスは、実に楽し気である。ユールスのちゃらけに、エルは引つ切り無しに笑い声を上げている。自然、後ろを歩く者達の表情も苦笑から笑顔へと変わって行く。

雨脚は既に遠のき、空は明るんでいた。旅の道連れが、又一人増えた。

## 第五章 終

## 第六章 黒將軍の密使（１）

\* 冬將軍にその背を追われながら、密使は日夜駆け続けた。そして冬將軍に捕らえられて尚、真白い吹雪の中を密使は命がけで進んだのである。

### ユトレア年代記

第五十五章其の六より抜粋

「伯父さん！ 伯父さん！ これをつ！」

イスヴァイク、ワーゲニン自由市の豪商スレイガ家のやり手であるイザの許に、甥のシーバが駆け込んで来た。普段はどちらかという物静かで大人しい質の彼が珍しい事であった。

「たつた今、さる傭兵が早駆けでこれを。北国で、ある男に雇われたのだと言っていました」

興奮した面持ちでシーバ・スレイガは一通の書状を伯父に差し出した。イザはそれを受け取り、何の押し印も無い封鑑を剥がした。

文面は、これと言って何の変哲も無い機嫌伺いの挨拶状であるかに思えた。イザはその書状に記された最後の一文に息を呑んだ。

「北方アルメーレにて貴重なる宝玉を二粒入手、土産として持参する心づもりにて……」

イザは、その一文を今一度声を出して読み上げた。その瞳には歓喜の色が宿っている。知人からの機嫌伺いの書状。知らぬ者が読めば、ただそれだけの物であった。だがイザ・スレイガにとって、それは違った。

「イザ伯父さん、それでは……」

シーバは半信半疑で眼を見張っている。その年若い甥に、イザは力強く頷いた。

「いよいよだ。いよいよ立ち上がるべき時が到来する、シーバ」

イザは拳を強く握り締め、祈るかの様にその拳を胸に置いて瞑目した。

雪が散らつき、野宿には凍死の危険が伴う季節に突入していた。

その為に旅足も遅くなり、宿代もかかる。これで雪が本格的に降り出せば、足止めを喰らう事となる。屈強の男だけならまだしも、幼い子供連れでの真冬の山脈超えはあまりに危険だ。今はまだ、雪の散らつく程度で旅は続行可能ではあるが、足止めを喰らうのも間も無くの事と思われた。このウォーデン王国で冬越えをせねばならぬか、それともティルブル王国まで進めるか、といった処である。

「ユールス、お前、今宵あたり路銀稼ぎをしてくれぬか？ 恐らく賭博場はあるだろう」

「ああ、いいぜ。でも摩っちまっても文句無しだぜ」

「摩るな、勝て」

「無茶言っないっ！ 俺様は、全能じゃねえぞっ！」

ファランギスの非情な言葉に、ユールスは威勢良く抗議する。だがファランギスの方は、それが耳に入っているのかいないのか、歯牙にもかけない。

「路銀稼ぎって難しそうね、フェイ」

「なあに、貴女が心配なさる程ではありませんよ。お嬢様」

細い首を傾げるエルにフェイと呼ばれたファランギスは、ユールスに対する態度とは打って変わった優しい表情でそう答えた。

ラドキースとエルは、ユールスに正体を知られたあの日から名を変えていた。二人の名が少しでも広まっている以上、危険を冒す分にはいかなかった。

ラドキースはアランという偽名を、そしてエルはミーナという、内陸では然程珍しくも無い偽名を名乗った。そしてユトレアの有力貴族であったファランギスも又、フェイと名を変えていた。加えるならば、それらの名を付けたのはロジェリンであった。

ファランギスへ抗議の声を上げていたユールスが、ふと傍らを歩いていたロジェリンに眼を向ける。

「大体、俺の博打なんかより確実に稼げる奴がいるじゃねえの、この中に。なあロジェリン」

ユールスがぽんつと、ロジェリンの肩を叩く。

「あたしかい？ あたしに何か出来るかい？」

「出来る、出来るっ。あんた自身が売りもんだって！ 金持ちでも引っ掛けりゃ一晩でたんまり稼げるって」

「なっ、なななっ！」

ロジェリンが舌を纏れさせながら、たちまち顔を真っ赤に染めた。へらへらと笑うユールスにロジェリンの拳が飛んだ。否、飛ぶかに見えたのだが、それよりも早くファランギスの拳が飛んでいた。ゴキツという音と共に、哀れなユールスは後ろにひっくり返っていた。

「あーにすんだよっ！ 冗談も通じねえのかよ、あんたはっ！  
痛えなあ、もうっ」

ユールスは顎を押さえながら叫んだ。ロジェリンはユールスへの怒りを一瞬忘れ、目を丸くしてファランギスを見詰めた。ラドキースとエルも思わず足を止めている。ファランギスはロジェリンのきよとした視線に曝され、何かを取り繕うかの様に軽く鼻を鳴らした。

「くだらぬ事を。そんな粹狂な人間などいるものか」  
「何だって？」

ロジェリンの目が据わった。その顔が再び怒りの形相に変わる。但しユールスには無く、ファランギスに対してであつたが……

「どういう意味だい？」

ロジェリンが低くドスの利いた声で尋ねれば、ファランギスは榛色の瞳を細めてにやりと口角を上げる。

「その通りの意味だが。お前の様な男女おこいおんなを好む者がいるなら、その顔を拝みたいものだ」

「あんたに、そんな事言われたく無いよ、この性格破綻者」  
ファランギスとロジェリンの嫌みの応酬が始まった。

「フェイは、素直じゃないですね、父様」

「全くだな、娘よ」

父娘は共に小さな溜息を零しながら苦笑した。

「あゝ、痛かったぜ」

ぼやきながら顎を擦るユールスの姿に、エルはたちまち頬を膨らませた。

「ユールスなんか嫌いっ！」

「え！？」

少女は、両手を腰に当ててユールスを睨んでいる。

「お前も、あれは冗談が過ぎるぞ。婦人を貶める様な事を言うものでは無いと、以前注意した筈だが、ユールス」



「違うつてえ。あれは一種の褒め言葉だつて。美しく魅力的だつて褒めてやっただつてば」

「ユールスのえっち！」

「えっち？ 男なんて皆えっちだぞ、嬢ちゃん」

エルの冷たい瞳がユールスを見据えている。

「ユールスなんか嫌いっ！」

「そんな事言っつて」

エルはぶいと顔を背けた。

「嬢ちゃん？ ミーナお嬢様？」

ユールスが顔を覗き込もうとすると、エルはすかさずぷいっと顔を背ける。ラドキースは、くすつと笑いを零した。

「嫌われたな、ユールス」

「ええっ！ ちょっと待て。分かった、悪かった。俺様が悪かったつて、嬢ちゃん」

すたすたと歩き出すエルの後ろを、ユールスが背を屈めながら追いかける。

「もうあんな事言わないから許して。ゴメンナサイ、この通り」

エルは、ちらりと冷たい一瞥をユールスへと投げる。

「反省するから許してっ。お前にしかとされんの、俺、一番応えるんだつて」

大の男が十歳の少女に頭の上がらぬ図というのも、なかなかに情けない物があった。

そんな時、ファランギスが突如口を噤んだ。日課の様になつていた毎度の口論を中断され、ロジェリンは訝しむも、ファランギスの目？ せに表情を引き締めた。

「招かれざる客の様だな．．．」

ラドキースが、エルとユールスに囁いた。

「お嬢様、ユクラテにお乗り下さい」

ファランギスが素早くエルを馬に乗せた。

「ロジェリンお前も乗れ。すぐにこの場を離れろ」

「分かった」

ロジェリンはエルの後ろに飛び乗ると、勢い良く馬の腹を蹴った。まるでそれが合図にでもなったかの様に、周囲から奇声が沸き起った。街道脇の林から飛び出して来た人影に、三人はあつという間に取り囲まれた。その数、十数人。長剣を握る者、短剣を握る者、湾曲した禍々しい半月刀を握る者、様々であつたが皆一様に目つきが剣呑であつた。

「ちえっ、女を逃がしやがったか。まあいい、有り金を出して貰おうか」

半月刀の髭面の男が荒々しい声で言つた。

「さて、どうするか？」

ラドキースが穏やかに連れの二人へと問いかけると、まずユールスが剣を引き抜いた。

「この処、剣を振るつて無かつたからちようどいいぜ。若先生さんよっ」

「私も同感です」

ファランギスもにこりと楽し気に笑いながら剣を抜いた。

「やれやれ、無闇に殺すのでは無いぞ」

ラドキースは念を押すと、最後に剣を抜いた。それを合図に三対十五の戦いが始まつた。

## 第六章 黒將軍の密使（2）

「やってる、やってる」

ロジェリンが額に掌を翳して道の先で起きている乱闘を眺めた。一旦逃げたと見せかけたエルとロジェリンは、途中で引き返して来たのだ。

「招かれざる客があんなに沢山いるけれど、大丈夫かな．．．？」

エルが不安そうに呟くと、ロジェリンは一笑する。

「大丈夫さ！ 若先生とフアランギスだよ。それにあのユールスだって、結構良い腕をしてる。おまけにあたしが加勢するんだ。やられるわけが無いだろう？」

ロジェリンは、ゆつくりとユクラテを歩ませると、やがて斜<sup>はす</sup>に止めた。そして手綱をエルに握らせると、襷掛けに背負っていた弓を外して背の矢筒から矢を二本引き抜いた。薬指と小指で器用に一本の矢をぶら下げながらもう一本を番<sup>つか</sup>えると、ロジェリンは弓を引き絞る。きりきりとしなる弓の音を耳にしながら、エルは息を潜めて見守った。

幾人もの盗賊達を一遍に相手にするラドキースの動きは、普段の物静かな佇まいからは想像し難い程に激しい。研ぎ澄まされた感覚のその奥底で、ラドキースはふと思う。そういえば、こんな戦いは久々であつたなと．．．。そう、あの時はまだセレーディラが傍らにいたのだと．．．。

数人の敵と交互に斬り結びつつ、己に向かって来た別の敵が突然つんのめる様に倒れるのをラドキースは目の端に捉えた。その太ももを貫く矢にほくそ笑んだラドキースは、「全く良い腕をしている」と呟いた。

盗賊達は、暫しの後には、地をのたうち回る姿となり、最後の一人となった半月刀の男も、間もなくしてラドキースの剣に背をしたたかに平打たれ、地に倒れ臥した。その嫌な音から、恐らくは骨の一本でも折れていたであろう。然程の時間を要せずに勝負はついていた。

「見事だったよ、三人とも」

戻って来たロジェリンが馬上から声をかけた。

「お前の腕も見事だったぞ。礼を言う、ロジェリン」

「どういたしまして」

「さて、どうしましょうか、若先生？」

呻き声を上げる盗賊達を見回しながらファランギスが尋ねた。

「このまま捨て置くわけにはゆくまいな？」

「そうですねえ……。一応応急処置だけして、縛り付けて捨て置くというのは如何でしょうか？」

「縛り付けるっても、縄なんかねえじゃん？」

用心深く敵の得物を取り上げていたユールスが二人に尋ねた。

「其奴らの衣服でも引き裂いて縛り付けておけ。運が良ければ今日中に誰かに発見されるだろう」

「ああ、成る程……。でも発見されなかったらどうすんだよ？いくらなんでも、この時期裸で夜なんか越したら、凍え死んだりしねえか？」

「知るか、そんな事。自業自得だ」

「鬼畜……」

ぼそつ呟くユールスの頭を、ファランギスは無言でべしっと叩いた。

「誰か来る様だ」

ふいのラドキースの言葉に皆が押し黙ると、遠くから蹄の音が届く。

「厄介ですね。随分と数が多い様だ」

ファランギスが顔を曇らせた。ラドキースはフードを深々と被り顔を隠した。そうせねば乳兄弟がうるさいのである。

蹄の音はみるみる大きくなり、その一行が土煙を上げながらこちらに向かって来る様子が見て取れた。そして先頭を駆ける人物にもこちらの惨状が見て取れたのであるう、片手を上げて、後に続く騎馬と馬車を止めた。どうやらどこぞの貴人とその護衛の様である。

その内先頭にいた騎馬がもう一騎を連れてラドキース達の方へと向かって来た。

「一体、何があつたのだ？」

鎖帷子の上に揃いの紋章入りのチュニツクを付けた二人の騎士達の内、年嵩な方が馬上から尋ねた。

「ごらんの通り、盗賊に襲われ応戦したまで」

ファランギスが応えようと、その中年の騎士はすんなりと納得したらしく、頷き馬車の元へと戻って行つた。それと入れ替わりに他の五騎が駆けて来る。やはり同じ紋章入りの揃いのチュニツク姿の騎士達は馬を降りるとときばきと後処理を始めた。馬車と残りの騎士達もこちらへと進んで来た。

数人の騎馬と共に馬車が緩やかに止まつた。地味ではあるが造りの良い馬車である。その扉には騎士達のチュニツクと同じ紋章が目立たない様に嵌め込まれている。騎士等が下乗すると、馬車の扉が開かれた。中から降り立つたのは、白髪とあご髭を短く刈つた老人であつた。老人は真つすぐにファランギスを凝視し、そしてかくしゃく豊饒とした足取りで歩み寄つた。

「領主殿？」

素性の知れぬ者達へ近付いて行く主を止めようと口を開いた先程の中年の騎士を、老人は片手を上げて制する。ファランギスは無言

のまま、目の前の老人に頭を下げた。

「そこもとは、確か．．．．」

老人は記憶をたぐり寄せようと目を細める。

「そう．．．．、確かファランギス殿と申されたな？」

押さえた声音で老人は尋ねた。

「ご記憶なさっておられましたか、ルモンド・フェビアン卿」

ファランギスの微笑と応えにルモンド卿は一つ頷き、視線の中に捉えたフードを深々と被った長身の人物と、円な瞳でこちらを見詰める少女へと目を向けた。その黒曜石の様な瞳に、ルモンド卿は胸を熱くした。

「団長」

突如呼ばれた騎士は、我に振り返りファランギスへと向けていた視線を振りほどいた。嘗て、酒場で意気投合した旅人の事を思い出したのかもしれない。だが、そんな事はおくびにも出さずに、ルトの騎士団長は、武人らしい短い返答と共にルトの領主、ルモンド・フェビアンへと向き直る。

「これだけの数の盗賊を捕縛出来た事は、喜ばしい事だ。この英雄方にそれ相応の礼をせねばならぬ。鄭重に屋敷へご案内するよう」

「はっ、畏まりました」

今しがたまで警戒していた団長も、彼等が領主とは顔見知りである事を知り警戒を解いたのか、存外人なつこい笑顔で頷いた。

ラドキース一行は、ルトの領主の招きを受ける事になった。

ルトの領主館へ戻ると、ルモンド・フェビアンは一行を私室へと招き入れ、それとなく人払いをした。領主のそういった行いは別段珍しい事でも無かったので、召使い達もこれといって不審に思う物

も無かった。

「無事で何よりだ……」

ルモンドの口から、まるで独り言の様な声が洩れた。その瞳は、フードに隠されたラドキースの顔へと揺るぎなく向けられていた。

「初めて貴殿にお会いしたのも、あの街道沿いでありましたな。あの時も、盗賊を退治して頂いた。何とも奇しき偶然であろうか……」

他に言葉を発する者の無い中、ラドキースはゆつくりとフードを下ろした。

「誠、奇しき偶然にて、ルモンド卿」

「ラディ……いや、ラドキース殿下」

ラドキースは穏やかな笑みと共に、首を横に振った。

「以前通り、ラディとお呼び下さい」

ルモンドは感極まったかの様な表情で、数度頷いた。

「久方ぶりです、卿。息災でおられましたか？」

「うむ、年は重ねたがこの通り」

己の身体を示す様に、ルモンドは軽く両手を上げて微笑んだ。

「貴殿も達者であられたか？」

ルモンドのラドキースに対する言葉は、昔とは異なり敬語であったが、ラドキースは何も言わずにただ首肯した。ルモンドの目がラドキースの影に隠れる様にして立っていた小さな少女へと注がれた。ルモンドは慈愛に満ちた瞳で少女を見詰め、ゆつくりと近寄ると、その前に跪いた。

「お母君に、良く似ておられるな、エル姫。だが、眼はお父君譲りであられるか？」

目の前で柔和に微笑む見知らぬ老人が、自分の名を知っている事に、エルは少し驚いた。

「このルトの御領主、ルモンド・フェビアン卿だ。お前の母と私が、嘗てひとかたならぬ恩を受けたお方だ、エル」

父は、娘の背を押しながら静かに言った。エルは父から再び、目の前に跪く老人へと目を向けた。

「エルディアラと申します。どうぞよしなにお願い致します。ルモンド・フェビアン様」

幼い少女が、礼儀正しく挨拶の言葉を口にする、その愛らしい笑顔にルモンドは相好を崩した。

「エルディアラ姫と申されるか。何と美しい名だ。この命ある内に、姫にお目通り適うとは、思いもせなんだった。何と喜ばしい事か……。ファランギス卿よ、貴殿が貴殿の主君たる父娘を見出す事の適いし事、誠に良かった……。」

溜息にも似たルモンドの声には、深い実感がこもっていた。



## 第六章 黒將軍の密使（3）

エルとロジェリンは、招かれたルトの領主館の一室で清潔な寢間に身を包み就寝の為の身繕いをしている処であった。香油入りの湯を浴びてさっぱりとし、豊富な料理で領主に持て成され、派手では無いが趣味の良いこの客間に通された。エルは父であるラドキースの隣室へと通されたのだが、独り寝を厭うエルをロジェリンが己にあてがわれた部屋に連れて来たのである。

「本当に綺麗な髪だね、エルの髪は」

ロジェリンはエルを鏡台の前に座らせて、その髪を丁寧に梳ってやっていた。ロジェリンが毎日欠かさず梳いてやるエルの髪は、緩く波打ち艶やかである。

「セレーディラ姫も、さぞ美しい髪をしていたんだろうね。エルの髪は母様譲りなんだろう？ エル？」

浮かない顔をした少女は、髪を褒められ鏡ごしににこりと微笑む。だがその笑顔はすぐにゆがみ、少女は哀しそうに俯いた。

「エル．．．」

少女の胸の痛みの理由をロジェリンは知っていた。

ルモンド卿の心尽しの晩餐の席での事であった。

『セリーの事は残念でしたな、ラディ』

寂し気に言うルモンドにラドキースは微笑んだ。微笑んでいながら酷く悲し気であった。

『あれ程早くに私達を置いて逝ってしまうとは、正直思いもしませんでした。あの時程、深く絶望した事は他にありません。もしも娘がいてくれなかったなら私は、恐らく彼女の後を追っていたでしょう』

淡淡とした口調で語られたラドキースの心情に、ルモンドは嘗てのラドキースとセレーディアの仲睦まじい様子を思い起こし痛ましさにも重々しい溜息を吐いた。他の誰もが言葉を失っていた。幼い娘一人が泣きそうな表情で隣に座る父の衣服を掴んでいた。

『すまぬ、エル。あの頃の私には、お前とお前の母が総てであったのだ。お前がいてくれたお陰で私はこうして生きながらえている』  
ラドキースはエルの頭を愛し気に撫でた。

『今では大切なものが増えたが、それでもお前は私の命そのものだ』

エルは父の大きな手で頭を撫でられながら必死に涙を堪えていた。

先程のラドキースの言葉を思い起こすとロジェリンは居たたまれない。幼いエルの胸の痛みを思うと、ロジェリンの胸も酷く痛んだ。

「父様、可哀想・・・」

か細い声で呟くエルの瞳は涙をたたえている。それでも少女は、頑に涙を堪えようとしているらしかった。

「うん、そうだね。若先生、可哀想だ」

ロジェリンも瞳を潤ませた。

「エルも、可哀想だ」

ロジェリンはブラシを置くと、エルの座る椅子の隙間に腰を落と

し、そつとエルを抱き寄せた。

「泣いていいんだよ、エル。我慢しないでいいんだよ、今は」

ロジェリンの優しい声に促され少女は堰を切ったかの様に泣き出した。

ルモンド・フェビアン卿は、旅の途上であつたラドキース一行にある申し出をした。このルトで越冬して行く様に勧めたのである。今日も今朝から雪が散らつている。いつ本格的に降り出したとしてもおかしくはない時期に入っているのだ。雪深くなれば足止めを喰らう。なればいつその事、卿の所有する狩猟の館でこの冬を越して行つてはどうかというのがルモンド卿の勧めであつた。

「万に一つ、貴方が我々を匿つた事が王国に知れば貴方が困つた立場に立たされましょう、ルモンド卿」

そう言つてラドキースはやんわりとその申し出を辞退しようと思つたのだが、ルモンド・フェビアンは静かな笑い声をたて、そんな心配は無用だと答えた。

「人目に付かぬ様、配慮致しましょう。私には、そんな事位しか貴殿方の力になれる事が無い。だからせめて・・・」

ルモンド卿の申し出にラドキースは即答しかねた。出来うる限りの処まで旅を進めたかつた。だが既に雪の季節に入っている今、幼い娘の事を思うとそれも躊躇われる。

「殿下」

ファランギスが口を切つた。

夕餉を饗されて後エルはロジェリンに付き添われ部屋に引き取り、

三人の男達はラドキースにあてがわれた部屋に集っていた。

「このまま先を急いだとて、エレミヤ山脈を越えるのは無理でしょう。雪の山脈越えは、大の大人でも危険が伴う。ましてや姫には」

ラドキースは無言のままであつた。

「姫にはもう限界でしょう。泣き言も仰らずに良く耐えて下さつてはおられるが．．．。それにロジェリンも、強がつてはいますが」

．．．

ファランギスの言は尤もであつた。暫しの沈黙が流れた。

「致し方あるまいか．．．」

布ばりの長椅子に背を預けていたラドキースがやがて溜息混じりに呟いた。

「卿の申し出を有り難く受けよう」

ラドキースはそう決断した。嘗てひとかたならぬ恩を受けたこのルトの領主に、ラドキースは信頼を置いていた。そして又、過去に一度しか面識の無かつたファランギスにしても、それに異を唱える事はしなかつた。どちらにしろ何処かで冬を越さなければならぬのなら、ルモンド卿の申し出はこの上ない程に有り難い事であつた。

「私が早駆けに出ましょう。ご指示を、殿下」

指示．．．、それが何を意味するかなど尋ねるまでも無かつた。真剣な眼差しを向けてくるファランギスに、ラドキースは頷いた。

「今から馬を飛ばしたつて、エレミヤ山脈を超える頃には結構な雪だと思つぜえ。大丈夫かよ？」

それまで床に座り込んで大人しく剣の手入れをしていたユールスが突然口を開いた。

「大体、ユトレア育ちのあんたに、雪山越えの経験なんてあんのか？ 雪山を甘く見ると、いっくらあんたでも死ぬぜ、ファランギス」

声に幾らかの呆れを滲ませるユールスに、フアランギスは片眉を上げた。

「お前にはあるのか？ 雪山越えの経験が」

ラドキースが尋ねると、ユールスは当然とばかりに鼻を擦って見せる。

「へっ！ 俺はスラグ育ちだぜ。スラグの冬の雪深さは、この辺りの比じゃねえっての。」

ちなみに、俺は真冬のエレミヤ越えの経験もあるぜ。何なら俺が行ってやるうか？ そのお使いってやつ」

「行けるか？」

「おうっ。雪山の知識なら、フアランギスには負けないね」

ラドキースの問いに、ユールスは自信たっぷりに笑って答えた。

ユールスが部屋に引き取った後、フアランギスも欠伸を噛み締めながら己にあてがわれた部屋へと足を向けた。

扉の把手に手をかけた時、壁の慎ましやかな明かりの向こうで扉が密やかに開く気配がした。小さな燭台を手にしたロジェリンが音も無く滑り出て来ると、扉は再び密やかに閉まる。そしてそのままロジェリンはその場に佇み目を拭った。

「こんな時刻に、そんな格好で部屋を出て来る奴があるか」

ロジェリンがはっとしたかの態で振り返った。その手の炎が揺れる。

「何だ、フアランギスか。廁へ行こうと思ったんだ」

寝間着姿にショールを巻き付けただけのロジェリンは肩を竦めた。

「お前は・・・、もう少し、慎みを持ってないのか？ それでも一応は女だろう？」

貴婦人ならば凡そ口にはしないであろう応えに呆れて見せるフア

ランギスに、ロジェリンはむつと口を尖らせる。

「女である前に私は騎士だ」

「騎士である前に女だろうが・・・」

「あんたとくだらない言い合いする気分じゃないよ。じゃあね、お休み」

「待て」

背を向けようとするロジェリンの腕を、フアランギスの手が掴んだ。

「何だい？ しつこいね」

「・・・どうしたんだ？」

「え？」

フアランギスは少し屈み、ロジェリンの顔を覗き込む様に見た。

「泣いていただろう？」

「泣いてなんかないよ」

ロジェリンは目を逸らした。頬に朱が走る。

「何があった？」

心做しか、低く抑えられたその声音は優しくかった。フアランギスが手を放すと、ロジェリンは居心地悪そうに肩からずり落ちかけたシヨールを片手で首元まで巻き直す。そして小さな溜息と共に、傍らのフアランギスへと目を向けた。

「エルがね、ずっと泣いてたんだ」

「姫が？」

ロジェリンは、先程の事をフアランギスにかいつまんで話した。

「あの子は母親を早くに亡くして、若先生と一緒に逃亡しながら育って、幼い頃から苦勞して我侭一つ言わない、いや言えない子に育って・・・、だからたまには思い切り泣かせてやらなきゃならないんだよ。あの子はいつも我慢してる。胸を痛めても若先生の前ではいつも我慢してる」

ロジェリンの瞳が再び濡れた。

「さっきまでさんざん泣いて泣き疲れて眠った。エル、若先生の

言葉が悲しかったんだよ。あの子の胸の内を思ったら哀れでさ、つい．．．」

「そうだったか．．．」

ロジェリンの言う “若先生の言葉” というのが何を指すのかは、ファランギスにも分かった。ファランギスとて衝撃を受けた言葉であつたのだ。主君が命がけで祖国を裏切り、そして又その祖国を捨てる程に愛した女性だ。彼女を失つた時の主君の絶望は、ファランギスにとて想像はついた。彼女の忘れ形見がいなかったなら、主君は生きる意味を失つていたのであるうと。

「あの頃のあの方の生きる意味は、妃殿下と姫の存在以外には見出せなかったのだらう．．．。姫がいて下さつて誠に良かったと思う．．．」

ファランギスの言葉にロジェリンの翠緑の瞳が雫を落とした。蜜蠟の炎に照らされたその目元に、ファランギスは思わず手を伸ばしてそつと涙を拭つていた。

「な、何するんだ!？」

ロジェリンが慌ててその手を払い飛び退いた。頬が染まっている。

「何を意識してるんだ、お前は？」

「なつ、いつ、意識っ!？」

目を白黒させてのロジェリンの慌てように、ファランギスはふと笑みを零す。

「きつ、氣つ、気持ちよゝい勘違いだね、全くっ! 私を女扱いするなっ! 氣色悪い」

言うやロジェリンは、「ふんっ!」と鼻息も荒く踵を返すと薄暗い回廊をもの凄い勢いで歩いて行つてしまった。全身に怒りを発しながら遠ざかるその背を見送りながらファランギスは声を殺して笑う。

「女扱いするなつたつて、女だろうがお前は．．．」  
その呟きは、無論ロジェリンに届く事は無かった。





## 第六章 黒將軍の密使（4）

大陸の北西から南東へと広がるエレミヤ山脈。真夏でさえも氷河に覆われる交通の難所の数多い大山脈であった。旅人の為に引かれた街道でさえも、雪の季節に超える者は無きに等しい。春夏には何者をも受け入れてくれる比較的なだらかな峠であるうとも、一旦冬將軍が訪れれば、そこは厚い雪に閉ざされし難所となる。

山脈越えの為にユールスが所望した品々を、ルモンド・フェビア卿はその日の内に都合して見せた。そしてユールスは、その日の内に出立する運びとなったのである。

「ねえ、ねえ、ユールス」

エルが、旅支度を整えたユールスを見上げながら両手を差し伸べた。

「何だ？ 俺様に内緒話か？」

言いながらユールスが屈んでやると、エルはすかさず背伸びをして、ユールスの頬にちゅつと愛らしい口付けをした。

「気を付けてね、ユールス」

「うをおおっ！ エルっ！」

ユールスは涙を流さんばかりに感激した。

「何か百人力だぜ、俺様。乙女の口付けは身を守ってくれるって言うからな」

「何だ、そうなのかい？ 何で早く言わないんだ？」

言うやロジェリンはユールスの胸ぐらを掴み引き寄せると、反対側の頬にぶちゆりと口付けを落としてやる。

「旅人を加護するのは乙女の口付けだけだぞ、ロジェリン」

「何が言いたいんだい、ファランギス？」

「乙女の定義を知らんのか？」

「妬くなつて、ファランギス」

ユールスにからかわれ、ファランギスはあからさまに嫌そうな顔をする。

「殴りたいのか、お前は？」

「暴力反対！ お姫ちゃんの教育上良く無いだろ！？」

ユールスは両手で頬を押さえつつ道化の様に後ずさる。その仕草が可笑しくて、エルは可憐な笑い声を上げた。ロジェリンも“やれやれ、全くだよ”という言葉と共に苦笑すれば、つられたのかファランギスも鼻を鳴らして笑みを見せた。

「ユールス」

ラドキースがいつもの静かな佇まいでその名を呼んだ。

「これを頼む」

そう言つて差し出された一通の書簡を、ユールスは受け取り頷いた。宛て名も差出人の名も無論記されてはいない書簡。ただ、その封鑑に押された印だけで充分であった。ユールスは、それを油紙に包むと着衣の奥へと大切に仕舞い込んだ。そして俄に真面目な面持ちを作る。

「必ず届ける。あんたの期待を裏切つたりしねえ、ラディ。何たって、あんたはスラグ人の俺を信用してくれたんだもん」

「何を今更・・・」

「だつてさ、俺は」

「お前には以外に繊細な処もあるのだな、ユールスよ」

「けっ！ 何だよそれ」

「お前らしくないという事だ」

そう言つてラドキースが笑えば、横からファランギスも口を挟む。

「途中で凍え死んだりしてみろ、決して許さんぞ」

「縁起でもねえ事言っくなよっ！」

ファランギスはふと笑みを見せた。

ユールスは照れたのか、顔を紅潮させながら金髪頭を掻いた。

「くれぐれも気を付けて行け、良いな」

ラドキースの言葉に、ユールスは再び笑顔を見せて頷く。

「ああ、分かった。向こうで待ってるぜ。でもさ俺、これ届けたらまたここに帰って来てもいいんだぜ」

「そんな危険は犯さなくて良い。向こうで大人しく待て」

「路銀の稼ぎ手がいなくなっちまうんだぜ、大丈夫かよ」

「何を言うか、私にだって路銀くらい稼げる。まあ、お前のは方法は違うが」

そのラドキースの言葉に、ファランギスが目を剥いた。

「何を仰いますか！？ 殿下はダメに決まっているでしょう！？

路銀など私が何とかします」

そんなファランギスの様子にロジェリンが突然笑い出す。

「若先生を叱りつける奴なんて、あんた位のもんじゃないのかい

？ ファランギス」

その言葉にラドキースも苦笑しながら同意する。

「確かに、王を除いてはお前位なものであったな、昔から・・・」

ファランギスは少しわざとらしい咳払いを零す。

「乳兄弟としての特権だと思っています」

ファランギスの苦々し気な表情に皆が笑い声を上げた。

「お前には感謝している、ファランギス」

突然のしみじみとした主君の言葉に、ファランギスは今度はきまり悪気な表情となる。

「へえ、あんたでも照れるんだな、ファランギス。おもしれえ」

ユールスが言わなくても良い事をあえて口にする。

「うるさい、さっさと行け」

「分かってらあ。ラディ、皆、言って来るぜ」

ユールスは最後まで明るい表情で部屋を出て行った。そして、人目につかぬ様にフアランギスの愛馬であるユクラテと共に、領主館を後にしたのであった。

残された一行は、その翌日にルトの領主の所有する郊外の狩猟館へひっそりと移った。領主館から馬車で半日程のそこは、人里離れたこじんまりとした館であった。

彼等がその館の客人となった翌々日から、ウォーデンは本格的な雪となった。

## 第六章 黒將軍の密使（5）

「わあ、弓がいつぱいっ！」

その部屋へ足を踏み入れるなり、エルは歓声を上げた。桃色の少女らしい衣装の裾を翻して壁へと駆け寄る少女の後を追って、深緑色の衣装を纏ったロジェリンも現れた。

「そういえば、狩猟用の館だつて言つてたっけね」

呟きながらロジェリンも興味深そうに辺りを見回した。広々とした部屋の壁には大小の弓が処狭しと掛かっていた。無論、矢と矢筒もきちんと揃っている。剣よりも弓の方が得意だと言っただけあり、時たま感嘆の声と共にロジェリンはそれらの弓に触れる。

館は好きに使う様にとのルモンド・フェビアン卿よりの申し出を、一行は有り難く受けていた。そこで暇に任せ、二人は館内を隅無く探検して回っている最中なのである。エルにとって、この様な貴族の館に滞在するのは生まれて初めての経験である。王族の血を引きながらも、生まれてこの方質素な庶民の暮らしをしか知らなかったエルには、この館の様々が物珍しかった。そして卿が急ぎ都合してくれた仕立ての良い衣装もまた、エルには初めて身に着ける上質の品であった。布地はてらりと輝く絹のベルベットであり、それに毛皮で縁取りされた上着。今までエルが身に纏うどころか、手で触れた事も無い様な衣装である。ロジェリンの衣装も卿の心尽しであり、鮮やかな赤毛が良く映える色合いであった。

「どうやら、この部屋は練武室も兼ねてる様だね。有り難い。身

体が鈍らないですみそうだよ、エル」

ロジェリンが目敏く練武用の剣に目を留め、板張りの床へと目を馳せつつ嬉々と言う。

「ねえ、ロジェリンっ！ あれ取って」

「ん？」

少女が壁の一点を指差していた。多くの弓の中からエルのせがむ弓に手を伸ばしつつ、ロジェリンは思わず声を上げる。

「へえ、可愛い弓だね。エルにぴったりな大きさだ」

ロジェリンが弓を取ってやると、エルは嬉しそうに弦を引っ張った。

その頃、ラドキースとフアランギスはというと、居間の暖炉の前に敷かれた獣の毛皮の上に広げた大陸地図を挟んで座り込み、互いに厳しい表情をしていた。羊皮紙に描かれたその大陸地図は、この館の書斎らしき部屋からフアランギスが拝借してきた物であった。彼等の故国ユトレアは、地図上でも無惨に三分割されている。

どれ程の間、沈黙が流れていたであろうか……。ラドキースは、その大陸地図を凝視したまま微動だにしなかった。そしてフアランギスも又、そんな主君の様子に声を発する事も無く見守っていた。

事を起こすには兵力に問題があるう事は口にするまでも無かった。そして、その大半が傭兵に頼らざるを得ない事になるであろう事も……。運が好ければ職を求めどこかの貧乏領主が騎士団をまとめる率いて参戦する可能性もあるであろうが、その可能性は低い。領民達の生活に責任のある領主達が、亡国に付く様な危うい賭けに出るとは考えられなかった。なれば、せいぜい一匹狼的な傭兵達が

集まってくれば良い方であろう。そういった傭兵達ならば腕自慢も多い。だが軍としての統制を取るとなればどうか……。訓練された国軍には適うまい……。余程の出方で無ければ、一発で潰される事になるう。ラドキースは微かな溜息を洩らした。

「父様っ！ ファランギスっ！」

重苦しい空気を、少女の明るい声がふいに破った。少女が弓を片手に元気よく駆け込んで来たのだ。

「これを見てっ！」

エルは、手にしていた可愛い弓を二人に示した。

「ほう、これはこれは愛らしい弓をお持ちですね、姫」

ファランギスが即座に笑顔で答える。

「エルにぴったりの大きさだろうっ？」

後から入って来たロジェリンが言葉を続ける。

「誠だな」

ラドキースも微笑みながら娘の差し出す弓を手にとって眺める。

「これでロジェリンに弓を習うの」

「ふむ、それは良い考えだ、エル」

年相応の表情ではしゃぐ娘に弓を返しながら、ラドキースは頷く。スカート姿のまま早速ロジェリンに弓の引き方を教わり始めるエルの真剣な様子に、大人達は互いに目を見交わしながら微笑んだ。その様に元気一杯に見えたエルであったのだが、その日の晩には寝込む事となった。

夕食の折り、無口なエルの様子を真っ先に気に留めたのは少女の真向かいに座っていたロジェリンであった。

「エル、どうしたんだい？ 大人しいけど……」

ロジェリンは、心配そうに身を乗り出す様にして少女の顔を覗き

込んだ。

「それにちつとも食べて無いじゃないか？」

「お腹がすいていないの……」

ほんの心持ち手を付けただけの皿の前でエルは力無く呟いた。

「具合が悪いのか、エル？」

傍らでラドキースが問うと、娘は顔を上げた。

「何だか、とても寒いです、父様……」

おずおずと訴えながら毛織りの肩掛けごと己の両腕を抱えるエルに、ラドキースは手を伸ばすとその額に触れた。顔色の悪いのは乏しい燭台の灯りのせいでは無いのであろう。

「熱があるな」

ラドキースの呟きに応えるかの様にファランギスは立ち上がると、エルの傍らへ歩み寄った。

「姫、失礼を」

そう断ると、ファランギスもエルの額に触れる。

「結構熱が高そうですね……」

言いながらファランギスは燭台を手にとると、それを翳しながら少女の目を調べ、喉を調べた。

「この分では喉も痛むでしょう、姫？」

ファランギスの問いかけに、少女はまるで酷くいけない事をしでかしてしまったかの表情で頷いた。

「身体も痛いのに……あつちこつち全部……。頭も痛いのに……」

少女は消え入りそうな声で答えた。今にも泣き出しそうな顔である。

「我慢をしていたのか？　今、急に悪くなったわけでも無かろう？」

ラドキースは立ち上がり娘を抱き上げる。

「ごめんなさい、父様……」

エルは父の首に抱きつき、ぐったりと顔を伏せた。寒いのである



う、小さな身体の小刻みな震えがラドキースにも伝わる。

「謝る事など無い。何故言わなかったのだ、エル？」

「だって皆が心配したらいけないと思って……」

「馬鹿な事を……エル」

頭を撫でる父の手と微かな笑いを含んだ父の優しい声に、エルはくすんと鼻をすすり上げた。

「恐らく風邪を召されたのでしょう。薬が無いか尋ねて来ます、殿下」

そう言い残すと、ファランギスは足早に部屋を出て行った。この屋敷の管理を任されている老夫婦の元へ行ったのである。彼等二人とその息子夫婦が、この一行の世話をしてくれているのである。ラドキース一行の事情を知るルモンド・フェビアン卿は、不用意に使用人等を付ける事はしなかった。長年の付き合いから揺るぎない信頼をおいているその老夫婦一家のみに一行の世話を任せただのである。

エルは、薬湯を飲まされるとそのまま静かに寝かされたのだが、その夜更けに具合は酷く悪化する事となった。

時は既に深夜であつた。表は酷く吹雪いていた。荒々しい風の神の暴れる音が室内にまで聞こえて来る。そんな中、水が密やかな音を立てて桶に落ちた。ロジェリンは雪混じりの水で絞った手巾を広げると、しきりと寝返りを打とうとする少女の額の上に乘せてやった。呼吸もままならないのである。苦し気な息づかいも痛々しく、ロジェリンはやるせなく少女の頬をそつと撫でた。酷く熱い。

「若先生」

炉に薪を足すラドキースの背にロジェリンが呼びかける。

「やっぱり医者と呼んだ方がいいんじゃないか？　こんなに苦しそうだよ。可哀想で見えてもらえないよ、若先生」

訴えるロジェリンの声は、今にも泣き出しそうに弱々しかった。

「町まで行かねば医者はいない。この時刻にあの吹雪の中を出れば、辿り着く前に凍え死ぬのが落ちだ」

ロジェリンとは対照的に、ラドキースの声は冷静すぎる程に冷静であった。愛娘がこれ程苦しんでいるというのに何故……。ロジェリンは思わず非難の声を上げそうになる。ラドキースは立ち上がると、そんなロジェリンを慰めるかの様に肩に手を置いた。

「案ずるな。ファランギスがいる」

「ファランギスがいるからって……」

「あれは多少医療に通じている」

「えっ……?」

驚くロジェリンに微笑むと、ラドキースは娘の伏せる寝台へと歩み寄った。そしてその傍らへと腰を下ろし、娘の顔を覗き込む様にして頭を優しく撫でた。ロジェリンは問い返そうと口を開いたが、扉を軽く叩く音にそれを阻まれ結局思いとどまり扉へと歩み寄った。ロジェリンが扉を開くと片手に盆を、もう片手に麻布と油紙の束を持ったファランギスが入って来た。たちまちに涼やかな香りが室内を満たす。

「如何ですか? 姫の御様子は?」

ファランギスは、手にしていた盆と麻布の束を壁際の小卓に置きながら尋ねた。

「先程よりも熱が上がっている様だ」

「そうですか、熱冷ましの薬湯は効きませんでしたか」

ファランギスは寝台に歩み寄り、エルの額に触れその苦しそうな息づかいを確かめる。

「それにしても熱が高い……」

夕食の途中で具合が悪くなったエルが、解熱と滋養の薬湯を飲まされ寝かされてから既にかかなりの刻が過ぎていた。その間、熱の下がる様子は無かった処か、むしろ悪化している。

ファランギスは、袖を捲りながら盆を置いた卓の元へ戻ると、手慣れた手付きで何やら始めた。ロジェリンは興味を惹かれて近寄ると、

ファランギスの手元の一連の動作を見守った。

その手は、掌大の麻布に深緑色の泥状の何かを塗り付けていた。どうやら湿布薬の様である。

「それ．．．、何だい？」

ロジェリンは、辺りを憚るかの様に小声で尋ねた。

「メグサと朝露花とアカ芋を混ぜた物だ。姫の胸に湿布してくれ。呼吸が楽になる筈だ」

ファランギスも又密やかに答えたと湿布役を油紙と共にロジェリンに手渡す。湿布薬は暖かった。

「これ、あんたが作ったのか？」

「ああ」

「ひよっとして、あの熱冷ましの薬湯も？」

「姫の口に入る物だ、人任せには出来ん」

ファランギスは素っ気無く答える。

「そうか．．．、そうだよな．．．」

ロジェリンは言われた通りにエルスの胸を開けて湿布をし、その上から油紙で被って寝間着を整えてやった。

「楽になると良いけど．．．」

「ファランギスの薬学の知識は馬鹿に出来無い。私も幾度か助けられた事がある」

「そうなのかい？」

心持ち目を見張るロジェリンに、ラドキースは微笑み頷く。ファランギスは依然壁際で何やら手を動かしている。ロジェリンは興味を惹かれてそちらへ戻ると、ファランギスの手元を覗き込んだ。彼は小さなすり鉢で何やら小さな粒を砕いているところであった。

「それ、芥子の実？」

「ああ」

ファランギスは手際よく芥子の実を砕くと、傍らの小さな薬壺の軟膏を少量混ぜ込んだ。

「それ、どうするんだい？」

「これで熱を吸い取ろうと思う」

不思議そうに尋ねるロジェリンに尋ねると、ファランギスはエルの寝台へと歩み寄った。

「姫のおみ足を、殿下」

「ああ」

ラドキースが羽毛の詰まった掛布をそつと剥ぐつた。エルの可愛い小さい両足が露になる。

「水ぶくれが出来るとは思いますが、これで幾らかは熱が下がる筈です」

そう断ると、ファランギスはエルの足の裏に芥子の軟膏を薄く延ばした。

「忝い、ファランギス。お前がいてくれて助かった」

「幸いここには薬草が揃っていましたので」

「あんた、お貴族様のくせに良くそんな事知ってたね、ファランギス」

「“お貴族様” は、余計だろうが・・・」

ファランギスが片眉を上げてロジェリンを見た。

「褒めたんだけど」

「それは光栄だ。褒められた気は全くしないが・・・。ところで殿下、不寝の番なら私が致します故、お休みになられては？」

「いや、お前達こそ私にかまわず休め、何かあれば呼びに行く故」

ラドキースがエルを見つめたまま穏やかに言えば、ロジェリンは心配そうに眉を曇らせた。そんなロジェリンの腕を取って、ファランギスは扉まで引つ張った。

「ロジェリン、お前は休め。私が朝までお傍に付くから、明日の朝に替わってくれ」

「でも・・・」

「頼む」

ファランギスに背を押されたロジェリンは、渋りながらも素直に自室へと引き取った。

「かあさま．．．」

荒い息使いを繰り返していたエルがふと細く掠れた声で母を呼んだ。

「かあさま．．．ふえっ．．．」

寝返りを打っては母を呼び、ついには泣き出した。ラドキースは掛布の中に手を差し入れると、娘の手を探り当てて握り締めた。

「これが母を呼んで泣くのは久しく無かった．．．」

ラドキースはエルの目尻から零れ落ちた涙を拭いながら呟く様に言った。ファランギスは痛々し気な瞳を父娘へと向けた。

「夢でも、見ておられるのでしょうか」

「そうかもしれない。だが楽しい夢ならまだしも、涙を零さねばならぬ様な夢を見ているのかと思えば胸が痛む．．．」

エルはえぐえぐと細い声を洩らしながら涙を零し続けている。

「これには、物心付いた頃より苦勞をさせて来た。セレーデイラが病に倒れてからは殊更に．．．。エデワに住み着くきっかけとなったのは、旅の途上でこれがはしかにかかった事であったのだが、あの時も、これは泣き言を言おうとはしなかった」

「そうでしたか．．．」

エルが再び母を呼びながら、愛らしい顔を歪めて弱々しい泣き声を洩らした。

「母を呼ぶばかりで父を呼ばぬか．．．。少し妬けるな．．．」

ラドキースは微苦笑を浮かべた。

## 第六章 黒將軍の密使（6）

それから後、胸の湿布が効いたのかエルの呼吸も静かな物に落ちていた。明け方までには頻繁に打っていた寝返りも止み、エルはぐっすりと眠っていた。小さな額にそっと手を当てたフアランギスに安堵の表情が浮かび、夜通し我が子の小さな手を握っていたラドキースの表情にも同様の色が伺えた。

目を覚ました時、エルはこちらを覗き込む三人の大人達の顔に小首を傾げた。

「具合はどうだ、エル？」

父にそう尋ねられて初めてエルは昨夜の事を思い出す。具合はあまり良く無い。

「頭と喉が痛いです、父様」

少し思案し正直に答えるが、声を出すのが酷く辛かった。

「痛々しい声だな」

「喉に良い薬湯を作って参りましょう」

フアランギスが、そう言い残して部屋を出て行った。ロジェリンも又、エルの湿った寝間着を着替えさせる為に湯を取りに飛び出して行った。ラドキースは咳き込む娘をそっと抱え起こすと白湯を飲ませる。エルは大人しく白湯を飲み干すと、ほっと小さな息を吐いて父親を見上げた。ラドキースはそんな娘の頭を優しく撫で、その

額に口付けを落とした。

「まだ熱がある様だな、エル。長旅で疲れもたまっていたのであろう。暫くはゆっくり養生する事だ」

父親の腕の中でエルは大人しく頷く。

「お前にはいつも不憫な思いをさせているな」

しみりとした声に、エルは小さく身じろいて再び父親を見上げた。

「すまぬと思っている」

影のある父親の黒い瞳に、エルは慌てて首を横に振った。

「エルは全然不憫じゃないわ、父様」

酷い掠れ声で訴える娘に、ラドキースは胸を突かれながらも微笑む。

「お前は健気な子だ」

「本当です、父様」

「話さなくて良いぞ。声を出すのも辛かろうに」

「本当なのに・・・」

「分かっている。お前は強い子だ」

ラドキースは苦笑しながら娘を宥めると、再び抱きしめた。

「何だか足の裏がひりひりする・・・」

ロジェリンに汗ばむ身体を拭って新しい寝間着を着せてもらいながら、エルは幼い表情に訝し気な色を乗せて呟いた。ロジェリンがその分けを説明してやると、エルは黒い瞳を丸くした。

「さあエル、薬湯をお飲み。もう冷めてるよ」

エルの肩にシヨールを巻き付けると、ロジェリンは先程ファランギスが煎じて来た薬湯の杯を少女に手渡した。エルは臭いを嗅ぐと、昨夜飲まれた薬湯の不味さを思い出しながら恐々と杯を傾けた。

「・・・甘い。昨日のより不味くない」

不思議そうに瞬くエルに、ロジェリンはふふつと笑いを零す。

「蜂蜜を多めに入れたってフアランギスが言ってたよ。それからアニス果とラベンデュラの乾花と薄荷だったかな、喉に良いそうだよ」

ロジェリンは寝台に腰掛けながら、薬湯を飲むエルの様子を見守った。男達はいえ、つい先程ロジェリンに有無を言わず部屋から追い出されていた。今頃はそれぞれ部屋に引き取り休んでいる筈である。

「思い出すよ、エルと若先生に初めて会った時の事」

薬湯を飲み終わったエルを再び横たえてやると、ロジェリンは言った。

「わたしが麻疹になった時の事？」

「ああ。あの時も、エルは顔を真っ赤にして苦しそうでやきもきしたもんだったよ」

ロジェリンはエルの頬にかかる髪を整えてやりながら静かに微笑む。

「早いもんだね。あれからもう四年か・・・」

ロジェリンはしみじみと呟きながら桶の中の手巾を堅く絞ると、エルの額にのせてやった。

その後ロジェリンはエルに粥を食べさせ、眠りに就いたのを見計らってから、ぬるまった桶の水を換える為に部屋をそっと出た。幸い外は一面の雪景色である。ロジェリンは雪を取る為に階下へと降りて行った。

「おお、寒っ。相変わらず良く降るな。アルメーレとそう変わらないじゃないか」

祖国を憶い出しつつ外気の冷たさに身を震わせながら、ロジェリンは灰色の空を見上げた。最早吹雪いてはいなかったものの、依然雪は降り続けている。ロジェリンは手早く純白の新雪を手桶に掬い入れると、屋内に駆け戻った。



「おや？」

居間を通り過ぎようとした時、扉がわずかに開いている事に気付いてロジェリンは足を止めた。覗き込んでみれば休んでいる物とばかり思っていたファランギスが独り、長椅子で肘掛けに頬杖を付いていた。そろそろ午を回ろうかという頃合いである。

「何を惚<sup>ほう</sup>けてるんだい？」

突然起こった声に思考を遮られファランギスは我に返った。振り返れば扉からロジェリンがこちらを覗き込んでいた。

「きちんと休んだのかい？」

「ああ」

「まさかここでじゃないだろうね？」

「いや、寝台できちんと休んだぞ」

「そうかい？ もっとゆっくり寝てて良かったのに」

ロジェリンはつかつかと歩み寄ると、ファランギスの向かい側に腰を下ろした。

「エルは食事を摂ったよ。粥と林檎をほんの少しだったけど・・・さつき眠ったところさ」

「そうか」

ファランギスは安堵の表情で微笑む。

「ねえ、ところで何であんな事に詳しいのさ？」

ファランギスは片眉を上げた。

「貴族のあんたが、まさか薬師だったわけじゃないだろう？」

「まあ、違うが・・・昔、何と無しに覚えてただけだ」

「何と無しにねえ・・・」

ロジェリンがこれ見よがしに呟いて見せれば、ファランギスは物憂げな溜息を吐いた。

「古今東西、王族というのは命の危険に晒される事も多いだろう。あの方もそうだ。物心つく以前より命を狙われた事など数知れない。

殿下の兄君も我らが生まれ出る以前、幼少の折りに毒害され、母君もまた殿下の為に供された杯を口にして命を落とされた」

おさえた声で語り始めるフアランギスの瞳は閉ざされていた。

「私も殿下の側近くに仕えていた事もあってか身の危険を感じる事もあったしな、それでそういった類の事に多少明るくなったというだけの事だ。殊、毒の種類と解毒にはな」

自嘲気味な笑みを浮かべるフアランギスに、ロジェリンは痛まし気に眉根を寄せた。

「生き延びる為の知恵だったわけかい？」

「そういう事だ」

「全く、やんごとない人達ってのは難儀だ」

「仕方あるまい」

さらりと受け流すフアランギスの瞳が、ふと翳る。

「この先、殿下のお命は再び危険に晒される事になる。今はまだ我々だけのこの人数だ、追っ手をまく事もそう難しくは無いだろう。だがこの先殿下の周囲に人が集えば、それだけ危険も増す事になる。そして姫の身もしかりだ。殊に姫は、ユトレア、ハーグシュ両王家直径の血筋故、その利用価値は高い。狙われるのは目に見えている。お前はいざという時、己が命を盾に出来るか、ロジェリン？ 己が命を捨てる覚悟はあるか？」

フアランギスの真剣な表情に、ロジェリンも又、憮然としながらも真剣な騎士の面持ちで頷いた。

「無論だ、私は忠誠を剣に誓った騎士だぞ。剣の誓いは絶対だ」

騎士の口調であり声音であった。その言葉にフアランギスは表情を和らげた。

「お前なら、必ずそう答えると思った、ロジェリン」

「なら聞くな、信用されてないのかと思うじゃないか」

鼻白んだ様子のロジェリンに、フアランギスは小さく笑う。

「まあ、怒るな。お前の事は信用している」

「怒らせてんのはどこの誰だったの」

ロジェリンは、眉間を険しくゆがめながら立ち上がった。

「そんな顔をするな。皺が増えるぞ」

「余計なお世話だよっ！」

毒突きながら出て行くロジェリンの背を、ファランギスは満足げな表情で見送っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4934e/>

---

ユトレア年代記

2011年6月6日07時15分発行